新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集

国道１１６号

埋蔵文化財調査報告書

三島郡出雲崎町番場（ばんば）遺跡

１９８７

新潟県教育委員会

国道１１６号

埋蔵文化財調査報告書

三島郡出雲崎町番場遺跡

１９８７

新潟県教育委員会

序

新潟県教育委員会では、高速道路や国道バイパスの建設に伴う埋蔵文化財—遺跡の発掘調査を、ここ10数年実施してきている。地域社会の発展に貢献する開発事業と発掘調査とを円滑に調整しながら、調査を実施することは難しい面も多いが、調査で明らかにされた成果は、その地域の、あるいは新潟県の歴史について多くの事実を物語る。そして、発掘調査がその地域社会の歴史や文化を見直す契機になることも少なくない。

本書は、国道116号の出雲崎バイパス建設に伴う、出雲崎町番場遺跡の発掘調査報告書である。番場遺跡は従来その存在すら全く知られていなかったものであるが、調査の結果、平安時代の鉄製品を製作する作業場である鍛冶工房と、鎌倉・南北朝期を中心とした豪族の屋敷が確認された。遺跡の所在する出雲崎町小木には、中世の山城・塚群として著名な小木ノ城跡や百塚があり、地域の人々の歴史に対する関心は大きい。調査で明らかにされた豪族屋敷は、小木ノ城主といわれる小木氏の屋敷とも考えられ、中世の小木をとりまく歴史がいっそう明らかにされた。本書が新潟県の古代・中世史研究に資するとともに、この遺跡が地域社会に根ざした文化財として活用されることを望むものである。

調査にあたって、建設省北陸地方建設局長岡国道工事事務所には格別の御配慮を賜り、出雲崎町教育委員会には多大な御協力と御援助をいただいた。ここに深謝なる謝意を表するものである。

昭和62年 6 月

新潟県教育委員会

教育長　田　中　邦　正

例　　言

1．本書は新潟県三島郡出雲崎町大字小木字番場326・327番地他に所在する番場遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は一般国道116号線のバイパス建設に伴い、新潟県が建設省から受託して実施した。調査主体は新潟県教育委員会であり、昭和60年度に発掘調査を、昭和61年度に報告書作成にかかる整理作業、昭和62年度に報告書刊行を行った。調査体制は第Ⅰ章に記した。

3．出土遺物と調査にかかる資料はすべて新潟県教育委員会が保管している。遺物の註記は「番」と出土地点を併記した。

4．本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。掲載した図面のうち、既製の地図等を使用したものについてはそれぞれの原図の出典を記した。

5．遺構・遺物の実測図、写真は原則として巻末に一括した。遺物番号は土器・陶磁器、木製品、石製品、鉄製品ごとに一連の通し番号を付し、写真図版を含めて、すべてこの番号を使用した。

6．文中の註は脚註とした。引用文献は著者と発行年を〔　〕で文中に示し、巻末に一括して掲げた。

7．土器・陶磁器の胎土分析は奈良教育大学・三辻利一氏、鉄滓の分析は大澤正己氏に依頼し、その結果についてそれぞれ玉稿をいただいた(第Ⅵ章)。

8．本書の作成は坂井秀弥(教育庁文化行政課文化財専門員)、金沢道篤(同)、田辺早苗(同課文化財調査員)が担当した。作業の分担は第Ⅰ章2に記した。執筆は第Ⅵ章(自然科学の分析・調査)を除いて、坂井・金沢・田辺が行った。分担は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅳ章2、第Ⅴ章1・5、第Ⅶ章が坂井、第Ⅲ章2、第Ⅳ章1、第Ⅴ章2・3・4・6が金沢、第Ⅲ章1が坂井・金沢、第Ⅳ章3が坂井・金沢・田辺である。木簡については竹田和夫(同課文化財専門員)の協力を得た。

9．出土遺物については吉岡康暢氏(珠洲焼・中国陶磁器)・藤沢良祐氏(瀬戸・美濃焼)・大橋康二氏(近世陶磁器・中国陶磁器)・小野正敏氏(中国陶磁器)・伊藤正義氏(中国陶磁器)・田中照久氏(越前焼)・中野豈任氏(木簡)にそれぞれ御教示いただいた。

10．発掘調査から本書の作成に至る迄、下記の方々から多大な御教示、御協力を得た。厚く御礼を申し上げる。(敬称略、五十音順)

安達宗夫・阿部洋輔・伊藤正義・江崎　武・大澤正己・大橋康二・小野正敏・金子拓男・川上貞雄・木村宗文・田中照久・田中宥暢・中野豈任・藤沢良祐・三辻利一・吉岡康暢・渡辺モト

目　　次

第 I 章　序　　言……1

1．調査に至る経緯……1

2．調査体制と整理作業……3

第 II 章　遺跡の位置と環境……4

1．位置と地理的環境……4

2．文献からみた古代・中世の西古志……6

3．島崎川流域の古代・中世遺跡……7
A．古　　代……7
B．中　　世……9

第 III 章　調 査 の 概 要……13

1．調査地の状況と試掘調査……13

2．調査の方法と経過……14

第 IV 章　遺　　跡……17

1．層　　序……17

2．概　　観……19

3．遺 構 各 説……22

第 V 章　出 土 遺 物……36

1．土器・陶磁器……36
A．平 安 時 代……36
B．中　　世……42
C．近　　世……56

2．木 製 品……58
A．日常生活用品……58
B．木札・木簡……63
C．建築用部材……64
D．杭・用途不明木製品……66

3．石　製　品……67
4．鉄　製　品……68
5．鍛冶関連遺物……69
6．銭　　貨……70
7．胎土分析資料の考古学的所見……70
第 Ⅵ 章　自然科学の分析・調査……71
1．番場遺跡出土土器の胎土分析……71
A．はじめに……71
B．分析方法……72
C．分析結果……72
2．出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物
及び内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の金属学的調査……81
A．出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物の調査結果……81
B．内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の調査結果……85
第 Ⅶ 章　ま　と　め……88
1．平安時代……88
A．土器……88
B．鍛冶工房……90
2．中　　世……94
A．土器・陶磁器……94
B．中世遺構と遺跡の性格…… 101
3．結　　語…… 104
引用・参考文献…… 106

図　　版

図　面

1．番場遺跡周辺地形図(1：6000)
2．試掘調査トレンチとグリッド設定図(1：1000)
3．北半部遺構実測図(1：300)
4．南半部遺構実測図(1：300)
5．遺構実測図1(1：100)
6．遺構実測図2(1：100)
7．遺構実測図3(1：100)
8．遺構実測図4(1：100)
9．遺構実測図5(1：100)
10．遺構実測図6(1：100)
11．遺構実測図7(1：100)
12．遺構実測図8(1：100)
13．遺構実測図9(1：100)
14．水田跡実測図(1：150)
15．出土遺物実測図1　須恵器
16．出土遺物実測図2　土師器
17．出土遺物実測図3　土師器
18．出土遺物実測図4　須恵器
19．出土遺物実測図5　須恵器
20．出土遺物実測図6　須恵器・土師器
21．出土遺物実測図7　中国陶磁器
22．出土遺物実測図8　瀬戸・美濃焼　土師質土器
23．出土遺物実測図9　珠洲焼
24．出土遺物実測図10　珠洲焼
25．出土遺物実測図11　珠洲焼
26．出土遺物実測図12　珠洲焼・越前焼
27．出土遺物実測図13　近世陶磁器・越前焼
28．出土遺物実測図14　木製品

29. 出土遺物実測図15　木製品

30. 出土遺物実測図16　木製品

31. 出土遺物実測図17　木製品

32. 出土遺物実測図18　木製品

33. 出土遺物実測図19　石製品・鉄製品

写　真

34. 1.遺跡遠景　2.遺跡近景

35. 小木周辺空中写真

36. 遺跡全体空中写真

37. A・B7・8区付近空中写真

38. B・C5・6区空中写真

39. 1.遺跡と島崎川の谷　2.試掘調査(59年度)　3.小木ノ城遠景

40. 遺構　1.遺跡南半部　2.遺跡全景　3.C3区付近

41. 遺構　1.SB17付近　2.SB17　3.SB17

42. 遺構　1.SB46付近　2.A・B8区付近　3.SB93・SB94

43. 遺構　1.SB11・SB14　2.SB88付近　3.B7区付近

44. 遺構　1.C5・6区付近　2.SX2　3.SX2土層断面

45. 遺構　1.水田跡　2.水田跡アゼ1　3.水田跡(A4区付近)

46. 遺構　1.SD57　2.SD57土層断面　3.SD10・SD12土層断面　4.SD57杭列　5.SD57杭列断面

47. 遺構　1.B9・10区界線土層断面　2.C9・10区界線土層断面　3.A5区南北土層断面　4.A6・7区界線土層断面　5.SK49・SD52　6.SD54

48. 遺構　1.SE3土層断面　2.SE53編物出土状況　3.SE4完掘　4.SE15腐植層　5.SE16土層断面　6.SE18土層断面　7.SK23　8.SK24土層断面　9.SK24鉄滓出土状況　10.SK24完掘

49. 遺構　1.SK28土層断面　2.SK29土層断面　3.SK30炭化物　4.SK33土層断面　5.SE60土層断面　6.SE62土層断面　7.SE63土層断面　8.SK66土層断面　9.SK68土層断面　10.SE69土層断面

50. 遺構　1.SB17—17柱根　2.SB17—20礎板　3.SB17—17柱根　4.SB17—17柱根　5.SB17—22柱根・礎板　6.SB17—22柱根・礎板　7.SB93—4柱根　8.SB93—8柱根　9.SB94—1柱根　10.SB91—10柱根

51. 遺物　1.須恵器　杯蓋(20・21)　有台杯(14～16・19)　有台椀(17・18)　2.須恵器　無台杯(1～10)　有台杯(11・12)　有台椀(13)　3.須恵器　長頸瓶(22～28)　横瓶(29)

52. 遺物　1.須恵器　甕体部外面　2.同上内面

53. 遺物　1.須恵器　甕体部外面　2.同上内面　3.須恵器　甕外面

54. 遺物　1.土師器　無台椀(30)　2.土師器　無台椀(35)　3.土師器　無台椀(50)　4.土師器　外面　筒形土製品(74)　鉢(73)　5.同上内面　6.土師器　無台椀

55. 遺物　1.土師器　甕　2.土師器　甕　鍋　3.土師器　甕体部外面　4.同上内面

56. 遺物　1.中国陶磁器　青磁外面　2.同上内面

57. 遺物　1.中国陶磁器　青白磁(120～123)　白磁(125～130)　染付(131～133)　緑釉(124)　2.同上内面　3.中国陶磁器　青磁

58. 遺物　1.瀬戸・美濃焼　天目茶碗(134～136・138)　鉄釉小壺(137)　灰釉平碗(139～141)　灰釉おろし皿(142・143)　灰釉小皿(145・146)　灰釉丸皿(144)　鉄釉壺(147)　2.同上内面　3.瀬戸・美濃焼灰釉　平碗(148)　水注(150)　四耳壺(149)　折縁深皿(151)

59. 遺物　1.珠洲焼　壺　2.珠洲焼　片口鉢

60. 遺物　1.珠洲焼　片口鉢　2.珠洲焼　片口鉢　3.珠洲焼　片口鉢

61. 遺物　1.珠洲焼　壺(170・171・179)　こね鉢(172～178)　2.珠洲焼　片口鉢　3.珠洲焼　片口鉢

62. 遺物　1.珠洲焼　片口鉢　2.珠洲焼　甕(226)　3.珠洲焼　壺　4.珠洲焼　片口鉢(180)刻文　5.珠洲焼　片口鉢(185)刻文　6.珠洲焼　片口鉢(211)漆つぎ痕跡

63. 遺物　1.越前焼　大甕(256)　2.同上押印　3.同上底部内面

64. 遺物　1.土師質土器　皿　2.土師質土器　皿(158)タール付着状況　3.越前焼・その他　すり鉢(227・228)　壺(229)　4.銭貨　5.越前焼(系)陶器

65. 遺物　1.唐津焼　2.近世陶磁器　唐津焼・その他

66. 遺物　1.漆器椀　2.箱物・板材　3.曲物・蓋

67. 遺物　1.板杓子・箸・雲形肘木　2.下駄　3.農工具・用途不明木製品　4.木簡・木札

68. 遺物　SB17柱根・礎板

69. 遺物　1.鉄製品　2.木杭(SX2)　3.石製品

70. 遺物　1.鉄滓　2.鉄滓　3.珠洲焼　片口鉢(210)　海綿骨針

71. 鉄滓・ガラス質鉱物の顕微鏡組織

72. 鉄滓の顕微鏡組織

73. 小鉄塊・鉄滓の顕微鏡組織

74. 鉄滓(Z—856)精錬鍛冶滓の特性X線像

75. 砂鉄製錬滓(Z—857)の特性X線像
76. 小鉄塊(W—863)中非金属介在物の特性X線像と定量分析結果(その1)チタン系
77. 小鉄塊(W—863)中非金属介在物の特性X線像と定量分析結果(その2)硫化物系

挿　　図

1. 番場遺跡の位置と周辺の概要図……2
2. 島崎川流域の遺跡分布図……5
3. 小木ノ城……10
4. タテ城空堀・土塁……10
5. 出雲崎百塚配置模式図……11
6. 小木・タテ周辺の地割と地名・屋号……12
7. 調査風景……16
8. 基本層序……18
9. 土師器・鉄滓分布図……20
10. 番場遺跡遺構配置模式図……21
11. SD57土層断面図……34
12. 土師器無台椀回転糸切り痕……40
13. 珠洲焼片口鉢類口径分布……49
14. 片口鉢類口縁部の形態分類……49
15. 越前焼押印……55
16. 越前焼(系)甕……55
17. 羽口実測図……69
18. 銭貨拓影……70
19. 番場遺跡出土土師器のK・Ca・Rb・Srのクラスター分析……75
20. 番場遺跡出土土師器のRb—Sr分布図……75
21. 番場遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図……75
22. 番場遺跡出土須恵器のK量……75
23. 番場遺跡出土須恵器のCa量……75
24. 背中炙窯出土陶器のRb—Sr分布図……76
25. 番場遺跡出土陶器のRb—Sr分布図……76
26. 番場遺跡出土陶器のK量……76

27. 番場遺跡出土陶器の Ca 量……77
28. 番場遺跡出土陶器の Fe 量……77
29. 越前産と推定された陶器の Rb—Sr 分布図……77
30. 馬場屋敷遺跡出土陶器の Rb—Sr 分布図……78
31. 馬場屋敷遺跡出土陶器の K 量……79
32. 馬場屋敷遺跡出土陶器の Ca 量……79
33. 馬場屋敷遺跡出土陶器の Fe 量……79
34. 県内のおもな須恵器窯と中世陶器窯の分布……80
35. 佐渡出土の土師器……89
36. 製鉄関連遺跡分布図……91
37. 越後における中世土師質土器皿の変遷……96
38. 関野遺跡出土の土師質土器皿……96
39. 珠洲焼片口鉢の口縁部変遷模式図……98
40. 中世の陶磁器類の構成…… 100
41. 番場遺跡の消長と周辺の動向…… 104
42. 小木遠望…… 105

表

1. 出雲崎の冬期気象状況…… 6
2. 小木村延宝5年(1677)検地帳地名一覧……11
3. 番場遺跡出土土器の分析値……73
4. 馬場屋敷遺跡出土中世陶器の分析値……80
5. 供試材の履歴と調査項目……82
6. 粉末X線回折結果……82
7. 鉄滓・炉材ガラス鉱物・小鉄塊・砂鉄の化学組成……84
8. 小鉄塊の分析結果……87
9. 新潟県の製鉄関連遺跡……92
10. 珠洲焼の時期別個体数……98
11. 建物一覧表…… 102

第I章 序　　言

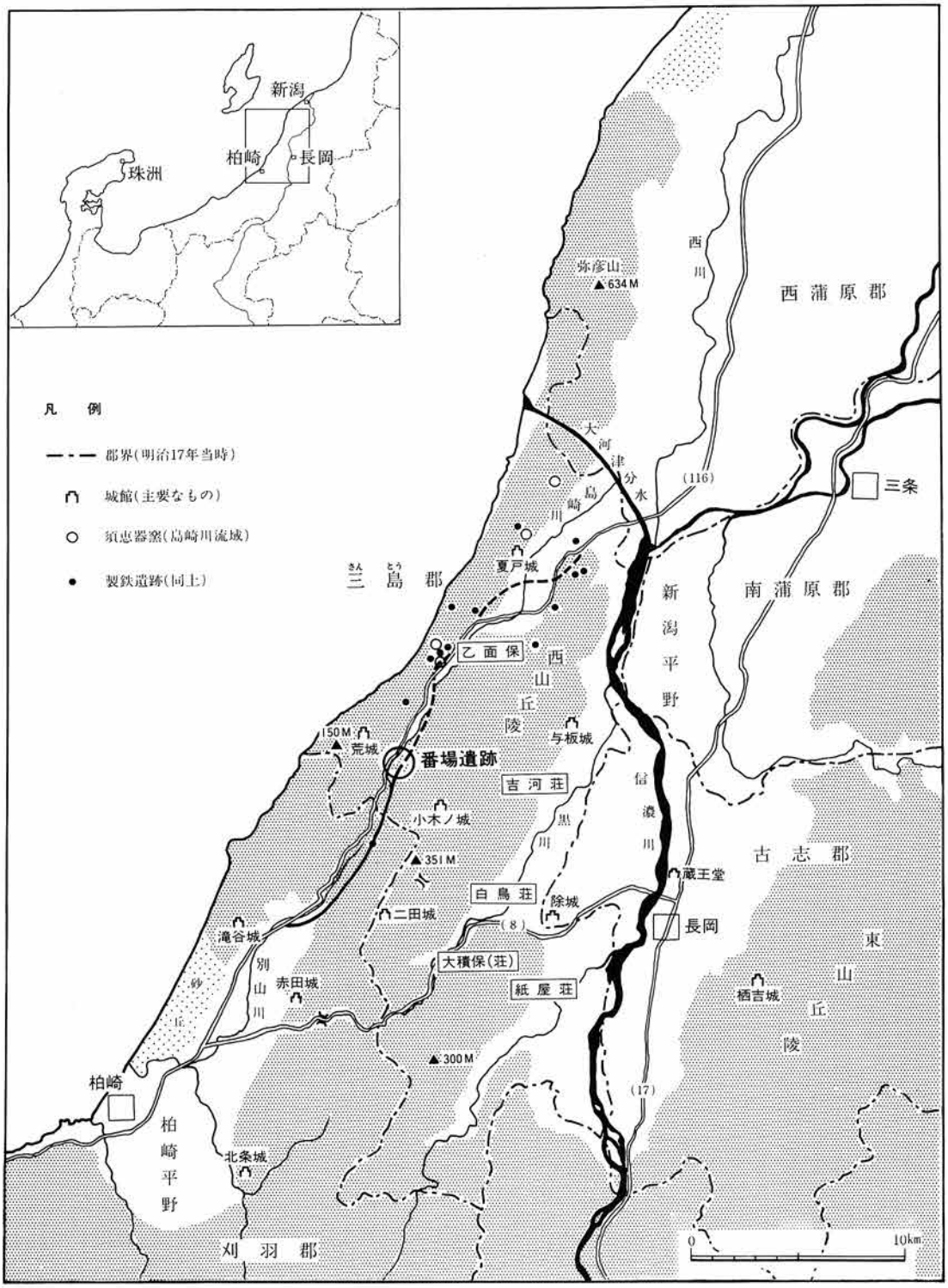
1．調査に至る経緯

一般国道116号線は新潟県柏崎市を起点に、海岸線より内陸側を北上し新潟市に至る、総延長77.5kmの国道である。当路線は、新潟市～長岡市～柏崎市を通過する国道8号線の代替路線として、近年交通量が増加し、新潟県はもとより日本海沿岸の重要路線として、文化・産業・経済の広域的展開に大きな役割を果すとともに、沿線2市7町3村の重要路線として、地域住民の生活活動を支えている。しかしながら、現路線は西山丘陵間の狭い谷間を縫いながら、集落内を通過するうえ、道路幅が狭くかつカーブがきつく、交通混雑と事故の多発を招き、冬期の除雪作業と交通確保に大きな障害となっている。このため、建設省では当路線を改善することになった。今回の対象地である三島郡出雲崎町と、その前後の刈羽郡西山町・三島郡和島村では現道から離れたバイパスとなり、それぞれ出雲崎バイパス・西山バイパス・和島バイパスと呼称している。バイパスは4車線の道路敷幅をもつ。

事業の調査着手は昭和46年度で、西山バイパスは昭和49年度に事業化、昭和60年11月に全線供用開始された。出雲崎バイパスは昭和53年度に事業化、工事着手し、現在に至っている。西山バイパスでは西山町狐山塚群(昭和53年度)、同尾野内遺跡(56年度)、同内越遺跡(57年度)、出雲崎バイパスでは出雲崎町百塚(58年度)、同タテ遺跡(59年度)が調査され、それぞれ報告書が刊行されている。

番場遺跡は59年度に調査されたタテ遺跡と近接しており、遺跡の発見の経緯もこれと関係している。建設省北陸地方建設局長岡国道工事事務所(以下長岡国道)は昭和58年1月12日付け建北長調第25号で、出雲崎バイパスの当該部分についての遺跡の有無について照会した。これに対し県教育委員会(以下県教委)は同年1月27日付け教文第20号で、「タテ」などの小字名(地名)から中世城館跡の可能性のある地点が存在するため、58年度に分布調査を実施する旨回答し、10月26日に町道小木・相田線から国道352号線までの間を踏査した。その結果、大字小木字タテで縄文時代・中世のタテ遺跡(縄文土器散布、空堀・土塁)が発見されるとともに、これに隣接する同字「番場」は遺物等の顕著な散布は認められないが、城館に関連する「馬場」と同じ地名であり、一部畑地でそれに関係する遺構の存在が予想されることから、試掘調査が必要と判断された。これについて県教委は11月2日付け教文第20号で回答した。

翌昭和59年4月、字「番場」の地点で試掘調査を実施したところ、遺物包含層が確認され、平安時代と中世の遺物が検出された。この時点ではじめて、この地点に遺跡が存在することが



第１図　番場遺跡の位置と周辺の概要図

確認され、発掘調査が必要となり、その旨59年4月27日付け教文第301号で、長岡国道に通知した。これに対し、長岡国道は59年度内の調査を希望したが、県教委では人的に対応することが不可能なため、60年度以降に実施したいとし、59年9月の協議で60年度当初に実施することで合意した。具体的な調査日程等は60年にはいってから協議し、4月から9月まで調査することとした。その際、発掘区内の排水工事と排土の搬出については発掘調査とは別に建設省側で実施することにした。新年度になって、出雲崎町教育委員会の協力のもと作業員募集などの準備を行ったが、国会での予算成立が大幅に遅れ、建設省側で予算の執行ができなくなり、調査開始は結果的に5月中旬になった。

2．調査体制と整理作業

調査体制　調査は新潟県教育委員会(教育長、有磯邦男)が主体となり、以下の体制で実施した。

総　括	高橋　安	(県教育庁文化行政課長)
管　理	田中　浩一	(同　課長補佐)
調査指導	中島　栄一	(同　埋蔵文化財係長)
庶　務	高橋　幸治	(同　主事)
調査担当	坂井　秀弥	(同　文化財専門員)
調査職員	金沢　道篤	(同　同)
	田辺　早苗	(同　文化財調査員)
作業員	出雲崎町老人クラブ、ほか地元有志	
協　力	出雲崎町教育委員会	

整理作業　60年度には発掘調査を実施したほか、出土遺物の洗浄と註記を行った。報告書作成にかかる主要な整理作業は調査に参加した坂井・金沢・田辺の3名があたり、61年度の11月から3月に実施した。報告書は62年度に印刷した。

整理作業の分担は、おもに遺構図面が田辺・坂井、遺物図面(土器・陶磁器)が坂井、遺物図面(その他)・遺物写真が金沢で、全体を坂井が総括した。原稿の執筆分担は例言に記したとおりで、坂井が編集を担当した。整理作業と執筆の過程で、文化行政課職員の協力を得た。

第II章　遺跡の位置と環境

1．位置と地理的環境

番場遺跡は新潟県三島郡出雲崎町大字小木字番場326・327番地他に所在する。出雲崎町は新潟県のほぼ中央、海岸部に位置する、面積44.79㎢、人口6,780人(いずれも昭和60年10月1日現在)の町である。町域は日本海に面した地域(旧出雲崎町)と内陸部の地域(旧西越村)からなり、それぞれ漁業・農業を主要な産業とし、歴史的にも個有の地域文化を形成する。番場遺跡はこのうち内陸部にある。

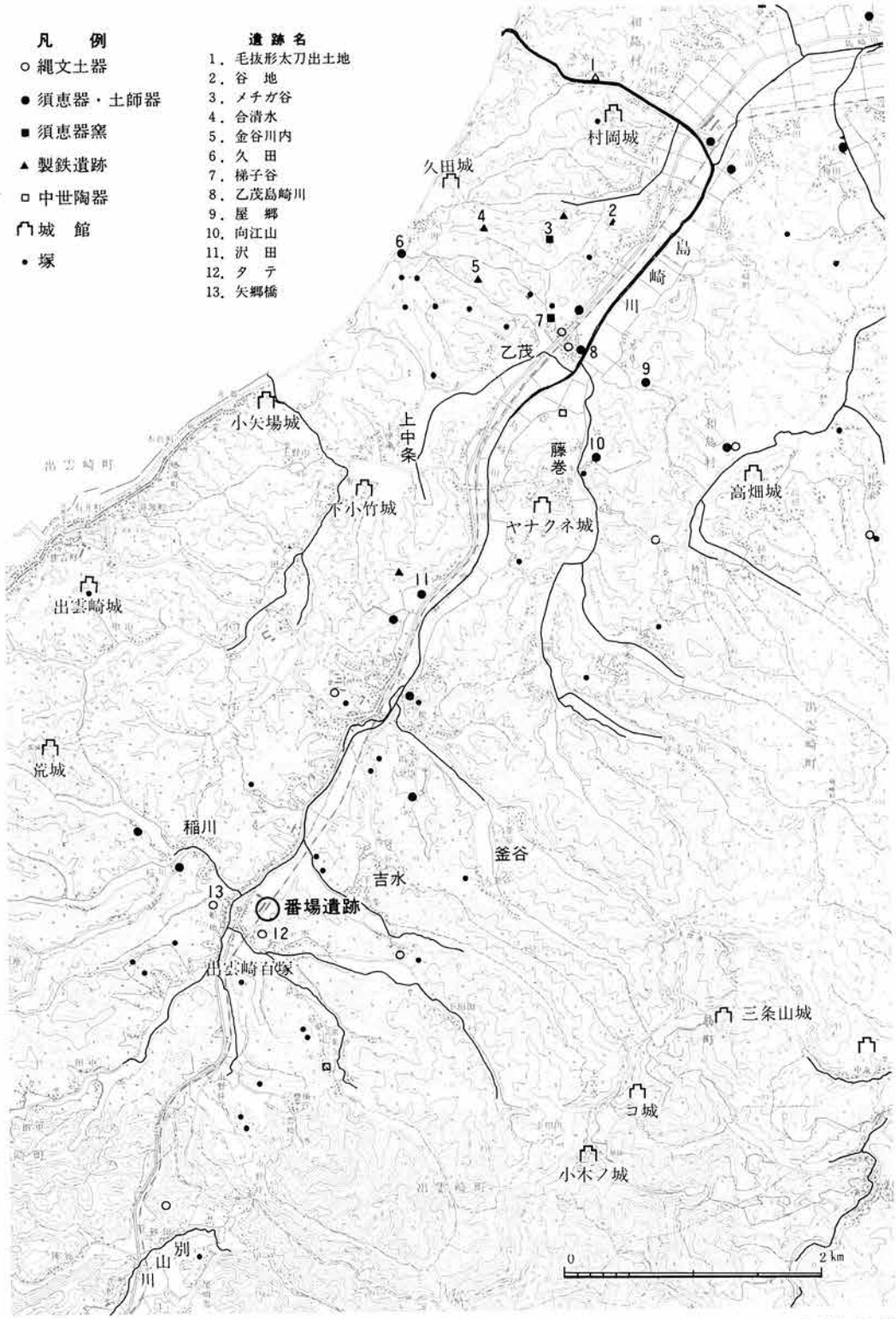
出雲崎町周辺の丘陵は西山丘陵と呼称される。西山丘陵は日本海に面して南西から北東方向にのびる低丘陵で、柏崎平野や日本海側と新潟平野周辺とを分けている。地質的には新第三系からなり、北北東―南南西方向の背斜構造が卓越しており、丘陵の主要な起伏はほとんどこの方向に沿っている[1)]。このうち信濃川支流の島崎川と鯖石川支流の別山川の二河川が形成する谷はほぼ一直線で、丘陵を縦断する。この谷を縫って国道116号線と国鉄越後線が通っており、南方の柏崎平野と北方の新潟平野をつなぐ主要な交通路となっている。この谷は島崎川と別山川の分水嶺をひとつの境とするが、これは標高約60mほどで、交通上の大きな障壁とはならない。

この谷の東側は標高200～350mの丘陵で、西山丘陵自体の主稜部となるのに対し、一方谷の西側は標高100m内外の低い丘陵をなす。

島崎川の谷は出雲崎町付近では幅500m以下と狭いが、下流の和島村島崎付近から幅を広げ、新潟平野につらなる。島崎川流域には出雲崎町のほか和島村・寺泊町が所在し、歴史的に「西古志」と呼ばれている。この谷の両側の丘陵には細い谷が発達する。島崎川の東側の丘陵の谷は、主稜部の方向と直交し格子状のパターンをなすのに対して、西側はそうした傾向はなく、樹枝状のパターンを示す。これは丘陵の傾斜や岩質の相違によるものであるが、これらの谷は比較的低平な谷である。特に西側の谷は標高差が小さくて、奥行きが深い。おそらく排水不良の湿地と考えられる。谷はすべて水田として利用されており、谷の最奥部に溜池もいくつか存在する。現在の集落は島崎川に沿った谷ではなく、これから派生する小さな谷の丘陵裾に立地するものが多い。この付近には、新田村は全くみられない。小木ノ城駅周辺の家屋は昭和30年代以降、水害のためにあらたに建てられたものである。

気象条件　新潟県は日本海気候で、冬は降雪による降水量が多く、夏はフェーン現象を伴い高温となる。出雲崎周辺は海岸部にあるため、降雪量は県内でも多くはない(第1表)。12月か

1）柳恒雄1983参照。この周辺は油田地帯・地すべり地帯でも有名である。



第２図　島崎川流域の遺跡分布図

国土地理院 1：25,000　出雲崎・与　板
昭和56・57年発行　西　山・長　岡

ら３月まで積雪をみるが、１月・２月でも１ｍを越えることは少ない。気温は真冬日のこともままあるが、だいたい最高気温は０度を越える。このため、降雪量より積雪量がかなり下回っている。夏季の気温は東京周辺とあまり差はない。

第１表　出雲崎の冬期気象状況（1975～1981平均値 北陸地建長岡国道観測）

	11月	12月	1月	2月	3月
最高気温(℃)	7.2	6.4	4.2	4.0	7.8
最低気温(℃)	2.4	0.3	−1.6	−1.7	0
降雪量(cm)	—	51.8	170.2	113.9	24.8
最高積雪(cm)	—	27.2	71.2	77.9	42.4

2．文献からみた古代・中世の西古志

出雲崎町を含む現在の三島(さんとう)郡は古代律令制下の三島(みしま)郡とは異なる地域である。三島(みしま)郡は弘仁式以後、貞観式までの間に古志郡から分立した郡〔米沢康1980〕で、現在の柏崎市と刈羽郡の周辺を含むと考えられる。この地域は室町時代以降、刈羽郡と私称される。一方、三島(さんとう)郡は、律令制の古志郡のうち信濃川より西の地域を指し、山東(さんとう)郡と呼ばれていたのが、近世初頭に三島(さんとう)郡となった〔井上慶隆1976〕。古代律令制下の古志郡と三島(みしま)郡の境界は不分明ではあるが、三島(さんとう)郡と刈羽郡の境がほぼこれに相当するものと類推され、西山丘陵のうち出雲崎町より北の島崎川流域は古志郡、刈羽郡西山町より南の別山川流域は三島郡にあたると考えられる。したがって、番場遺跡は古志郡に含まれていたと考えられる。

古代　古志郡には『和名抄』・『延喜式』によれば、大家・栗家・文原・夜麻の四郷、大家・伊神・渡戸の三駅、三宅(二座)・桐原石部・都野・小丹生・宇奈具志の五社六座の式内社が知られている。これらの現地比定は地名等からは困難なものが多い。そのなかで駅の所在する大家郷は北陸道の大局的な位置からみて、出雲崎町周辺に比定される可能性が強い。式内社五社六座のうち三宅神社は長岡市、桐原石部神社は寺泊町あるいは和島村の桐原石部神社、宇奈具志神社は出雲崎町乙茂宇奈具志神社にそれぞれ比定されるとする説がある〔木村宗文1986参照〕。古代の北陸道は近世と同じで海岸線を通るという説〔小林健太郎1978〕と別山川と島崎川に沿うとする説〔足利健亮1975など〕があるが、奈良・平安期の遺跡分布から後者の説をとる立場が多い。

中世　古代末から中世の三島(さんとう)郡には乙面保・吉河荘・白鳥荘・大積保(荘)・紙屋荘などが存在した(第１図)〔井上慶隆1976〕。紙屋荘は長岡市深沢周辺で、一部越路町・小千谷市を含む地域、大積保(荘)は長岡市大積周辺の黒川流域に比定される。乙面保・吉河荘・白鳥荘は出雲崎町を含む島崎川流域に関係する。乙面保は永享２年(1430)２月27日付菊大路文書(『新潟県史』資料編中世4218、以下県史4218と略す)に「越後国乙面保内山俣上中下条并中条藤牧」とみえ、出雲崎町乙茂周辺に比定される。同文書の「上中下条」・「藤牧」の地名は乙茂に近接する「上中条」・「藤

巻」と考えられる。吉河荘は出雲崎町の吉川を含むものと考えられるが、「越後国吉河庄内中条北方」と記した応永24年(1417)11月9日付室町将軍家御教書写(県史4002)の「中条」は三島町中条と考えられることから、荘域は西山丘陵東麓の三島町から与板町を含むものと推定される。

白鳥荘[1)]は長岡市白鳥町に地名を残すが、応永31年(1424)10月26日付随心院文書(県史4230)に「山東郡白鳥庄内於木方持分、除・稲川・吉水・釜屋事」とみえ、出雲崎町小木近辺の稲川・吉水・釜谷(大釜谷・小釜谷)も白鳥荘に含まれていたことが知られ、番場遺跡の所在する小木もその可能性が強い。建武3年(1336)2月7日、同年12月3日付の色部高長軍忠状案(県史1051)には、小木(荻)氏がみえ、小木氏が小国・河内・池・風間氏らとともに南朝方についていたことが知られる。これより、小木氏が南北朝初期にはこの周辺に存在し、この地を支配していたことが知られる。小木氏は鎌倉期からの在地領主と考えてよいであろう。

以上のような荘保のあり方からすると、出雲崎町付近の島崎川流域は、北西部が乙面保、南半部が白鳥荘、東部が吉河荘という支配関係が看取される。そして、島崎川流域がひとつの地域として孤立するのではなく、吉河荘と白鳥荘のように、西山丘陵東麓地域とも密接な関係をもっていたことが知られる。

一方、小木周辺では中世の時衆の存在が注目される。「往古(時宗)過去帳」には江戸初期までの往生人が書かれているが、越後関係者は約130人を数え、中世越後は時衆教団にとって特別の地域であったことが知られる〔阿部洋輔1987〕。これによれば往生者の多い所は越後府中・関山・柏崎・佐橋・蔵王堂・三条などであるが、小木にも7名が記されており、小木が時衆の拠点であったことがうかがえる。現在、小木周辺の吉水に教念寺という時宗の寺が存在し、その痕跡をとどめている。時衆の盛んな地域は、その信仰の中心でもあると同時に当時の経済・交通の拠点であり、小木もそうした性格を有していたことが推測される。

3．島崎川流域の古代・中世遺跡

A．古　　代

出雲崎町を中心とした島崎川流域の遺跡分布は第2図のとおりである。これは主に『昭和54年度新潟県遺跡地図』〔新潟県教育委員会1980〕をもとに示したものである。

奈良・平安期より古い時期では、縄文時代の遺跡がいくつか存在するだけで、弥生・古墳時代の遺跡はほとんど確認されていない。番場遺跡近辺では番場遺跡の背後の丘陵上に立地する縄文時代中期初頭のタテ遺跡(昭和59年県教委調査)〔高橋保1985〕、島崎川対岸の矢郷橋遺跡

1) 白鳥荘は安元2年(1175)八条院領として初出し、文治2年(1186)にも八条院領とみえるが、のち随心院門跡領となった。天授6年(1380)には左衛門権少慰資明が同荘上野郷の領所職となり、応永31年(1424)には太田刑部少重が代官となった。

（中期・後期初頭）がある。

奈良・平安期の遺跡は比較的多く分布している。これらは丘陵の裾や先端などに立地するものが多いが、乙茂島崎川遺跡のように沖積面下に没しているものもいくつかあるものと考えられる。海岸部に遺跡が少ないのは、沖積地がほとんどなく生産基盤となる水田適地がなかったことに起因するものと考えられる。出土遺物が報告されている遺跡〔金子拓男ほか1977〕のうち、向江山・屋郷・沢田・乙茂島崎川の各遺跡はいずれも平安期の９世紀から10世紀にかけての遺跡である。海岸の砂丘上に立地する久田遺跡では製塩土器と焼けた砂が検出されており、製塩遺跡と考えられる。時期は９世紀代と推定される。このほかの遺跡の詳細な時期については不明であるが、県内の古代遺跡のあり方〔坂井秀弥1985・1986ａ〕から類推して、多くは平安期の遺跡と考えられる。なお島崎川の下流・右岸の台地上に立地する寺泊町横滝山廃寺では金堂と推定される厚板外装基壇の構造をもつ遺構１基と白鳳様式の軒瓦が出土しており注目される〔寺村光晴ほか1985〕。この周辺は奈良・平安期の遺構が多く分布しており、付近が古志郡の中枢とする見方もされている〔金子拓男ほか1977〕。また和島村落水から平安末期とみられる毛抜形太刀が、落水川改修の際、人骨２体と鋏とともに地下２ｍから出土している〔坂井秀弥1986ｄ〕。出土地は墳墓の可能性が考えられるが、毛抜形太刀は県内唯一の貴重なもので、この周辺にこれを所有する有力な人物がいたことが知られる。

須恵器窯　周辺ではいくつかの須恵器の窯跡が存在する。出雲崎町には梯子（はしご）谷窯跡・メチガ谷窯跡が、寺泊町には夏戸窯跡・弁財天窯跡がある。梯子谷窯跡は昭和62年度に出雲崎バイパス関連で調査される予定である。大甕や横瓶の破片のほかにかえりのある杯蓋も採集されている。メチガ谷窯跡はゴルフ場建設時に、乙茂の渡辺一三氏によって確認されたもので、かえりのある杯蓋が出土しており、梯子谷窯とともに越後における須恵器生産の開始期である７世紀末から８世紀初頭〔坂井秀弥1983〕に遡ると考えられる。この時期の窯は越後ではほかに上越市下馬場窯跡群が確認されているのみで、きわめて注目される。今後、この周辺でさらに須恵器窯が確認されるものと予想され、寺泊町から出雲崎町にかけての島崎川流域に「西古志窯跡群」ともいうべきまとまりを設定することが可能かもしれない。

製鉄遺跡　出雲崎町から寺泊町にかけての丘陵には多くの製鉄遺跡が分布する。現在、12地点が確認されており、県内では笹神村から豊浦町にかけての笹神丘陵（約30地点）に次ぐ規模をもつ（第37図）〔坂井秀弥1986ｃ〕。こうした遺跡は島崎川の本流から離れた狭い沢筋の急斜面に立地するものが多い。遺跡の立地からみて、今後さらに多くの遺跡が発見される可能性は強い。62年度以降に調査が予定されている谷地（やち）遺跡も今回のバイパス関連の分布調査で試掘した結果、発見されたものである。調査された合清水（ごうしみず）・金谷川内（かなやごうち）遺跡〔中村孝三郎ほか1977〕では製錬炉と推定される遺構と製錬滓が検出されており、製鉄の第１次工程である製錬（原料は砂鉄）を行っていたことが知られる。若干の須恵器が伴出しており、これより８世紀後半から９世紀前半の時

期と推定される。未調査のものは時期不明であるが、北陸地方の製鉄遺跡のあり方〔たたら研究会1986〕から類推すれば、奈良・平安期のものとみて大過ないであろう。製鉄遺跡は須恵器窯と分布が重複することが多いが、ここも須恵器窯が少ないながら、その傾向はうかがえる。

こうした製鉄遺跡は当遺跡の平安期の鍛冶工房と密接な関連をもっていたことが推定され、今後の解明が期待される(第Ⅶ章１Ｂ)。

また、59年度にバイパス関連で調査された西山町内越遺跡〔山本肇ほか1983〕では、近世とされる製鉄炉１基と登り窯タイプの木炭窯３基が検出されているが、木炭窯の構造や周辺の出土遺物からみて、平安期の９世紀後半頃に比定されよう。出土した鉄滓は製錬滓である(第Ⅵ章２参照)。従来、別山川流域ではほとんど製鉄遺跡は確認されていなかったが、今後さらに検出される可能性がある。

Ｂ．中　　世

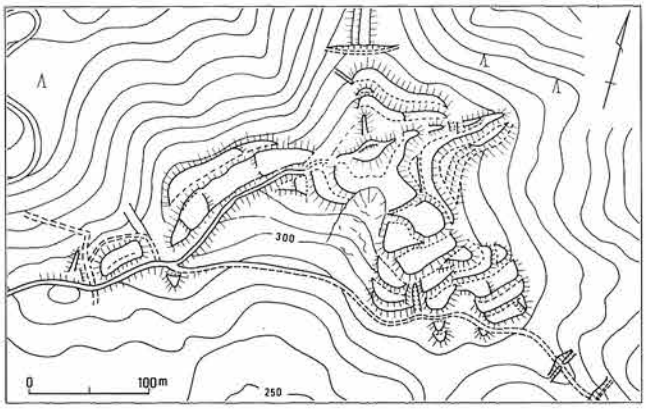
集落　中世遺跡は城館跡と時期不明の塚を除けば、ほとんど確認されていない。しかし、この周辺では全く新田村がみられず、中世から多くの村が存在したことが容易に推察され、現在の集落が中世まで遡り、中世遺跡と重複していることが予想される。この周辺は小さな谷が著しく発達し、谷水田を中心とした開発が、中世までに活発に行われた結果と考えられよう。島崎川の本流よりも、これから派生する谷に大半の集落が分布することも、これを傍証しているのかもしれない。また、番場遺跡のように埋没していて不明なものもかなりあるであろう。

城館　城館跡のうち、山城はかなりの数が確認されている〔金子拓男ほか1980・新潟県教育委員会1987、以下城館においてはこれらによる〕。西山丘陵の主稜部には出雲崎町小木ノ城・三条山城・コ城、西山町二田城があり、日本海から柏崎方面、長岡方面から信濃川流域の広い範囲が一望できる(第42図、Ｐ105)。

別山川と島崎川の西岸には刈羽村滝谷城、西山町鎌田城・大崎城、出雲崎町荒城・下小竹城が、ほぼ一直線上に等間隔にならぶ。これらは日本海から別山川と島崎川の谷に対する眺望はひらけるが、長岡方面は丘陵主稜部にさえぎられ、平野部は望めない。島崎川流域にはこのほか出雲崎町ヤナクネ城、和島村高畑城・村岡城・小島谷城がある。また、海岸側には出雲崎町出雲崎城・小矢場城・久田城がある。

西山丘陵主稜部西麓には与板町与板城・三島町鳥越城・長岡市三丁田城などがある。黒川の谷においては北側に数多くの山城が集中している。

番場遺跡周辺には小木ノ城・荒城がある。小木ノ城は番場遺跡の南東約３㎞、西山丘陵主稜部、標高345ｍに立地する。四方に派生した尾根の東西400ｍ、南北300ｍにわたる範囲に多数の郭群と大規模な堀切・土塁などの遺構が残る。主郭は10ｍ余の切崖をめぐらした25×17ｍのやぐら台状の城台とこの南側を半周する幅20～30ｍの大郭からなる。この南東側の一段低い郭が



第３図　小木ノ城(県教委1987原図)

第４図　タテ城空堀・土塁
(県教委1985調査)

昭和51年に出雲崎町教育委員会により発掘調査され、16世紀代を中心とする陶磁器類と柱穴などの遺構が検出された。この城は南北朝に南朝方として活躍した荻(小木)氏の居城とも伝えられるが、この時期に築城されたかどうかは考古資料からは確認できていない。「文禄三年(1594)定納員数目録」によれば、上杉景勝の地方在番衆として、「越後荻」がみえ、荻城将である松本大炊助は信濃出身で、知行高1,580石、番衆９人ということが知られる〔藤木久志1963〕。松本氏は古く信州から帰属し、謙信の姻族となる大名家であるとされるが、どの時点まで遡るかは定かではない。『温古栞』は小木城主としてほかに上杉の一将、雲上寺入道忠経(天文年間、1532～1555)・松本左馬介忠範(天正８年～慶長３年、1580～1598)の名を伝える。松本左馬助はさきの定納員数目録によれば、越後侍中で、知行高1,225石、軍役高143人である。なお、小木ノ城の同一尾根上の北東方向にはコ城と三条山城の二つの城がある。

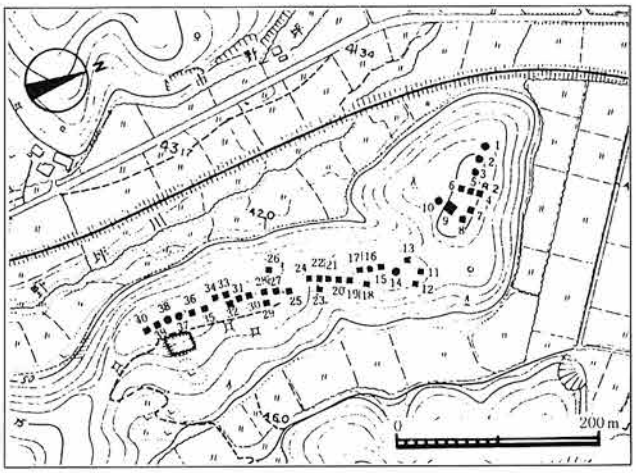
一方、番場遺跡の東方背後の低い丘陵尾根上に三本の空堀がある(図版１)。このうち南側(１号空堀)については昭和59年のタテ遺跡の調査で一部を発掘した(第４図)。空堀は長さ約35ｍで、幅１ｍ余り、深さ１ｍ、断面は箱薬研状を呈する。空堀の南側に沿って幅2.5～３ｍ、高さ0.5ｍほどの土塁がある。建物等の遺構はなく、出土遺物は16世紀前後の越前焼とみられるすり鉢片だけで、土塁・空堀の時期は不明である。中央の空堀(２号空堀)も１号空堀とほぼ同じ規模で南側に土塁を伴う。北側の３号空堀はごく小規模なもので、土塁はみられない。この尾根上にはこの他に郭などの遺構は明確ではなく、これらの空堀・土塁の機能もまた明確ではないが、小木の集落内に存在したとみられる館や町屋(後述Ｐ11･101)との関連が考えられよう。ここでは地名からかりに「タテ城」と呼称する。

荒城は番場遺跡の北西約２㎞、島崎川右岸の丘陵頂部、標高113ｍに立地する。海岸から小木方向へ通じる要路にある。頂部の主郭をかなめとし、東と南にのびる尾根及び山腹にかけて遺構がよく残る。

館跡は島崎川の谷では全く確認されていない。しかし大字「小木」には字「タテ」の地名があり、

小木ノ城と関連した館の存在が推定される(第６図)。実際、薬師寺の周辺には比較的広い方形の区画があり、これが館の可能性をひめている。また、小木の集落には「鍛冶屋敷」・「紺屋」・「中茶や」・「蔵屋敷」などの屋号があること、集落周辺の道は幹線から支線が平行して出るかたちであり、町屋の形態をとることなどから、小木の集落の周辺が小木ノ城の城下としての機能を果していたのではないかと考えられる(第Ⅶ章２Ｂ)。荒城に近接した東方の谷にも「古屋敷」・「町屋敷」という地名があり、それとの関連が想定される。

塚　島崎川流域における塚の分布は県内でも集中する傾向がある。調査されたものは、出雲崎町出雲崎百塚のうち１基(第５図１)〔北村亮ほか1984〕、同越巻の塚(昭和61年度県教委調査、未報告)の計２基にすぎない。出雲崎百塚はタテ遺跡の南側の小尾根上にある。塚は南北にのびる細い尾根上とその先端の屈曲部の約400ｍの間に約40基が分布する。その大半は方形塚で、円形塚は７基だけである。屈曲部では配置に規則性はみられないが、それ以外では直線的に配置される。また屈曲部の周辺には大小11ヶ所の削平された平坦部があり、一辺26ｍの土塁を方形にめぐらした箇所もある。性格は不明であるが、『小木の城山』〔西越郷土史編纂会1926〕は、現在出雲崎町の海岸部勝見にある法持寺の旧地であり、かつては七堂伽藍を具備していたと伝えられていることを記している。

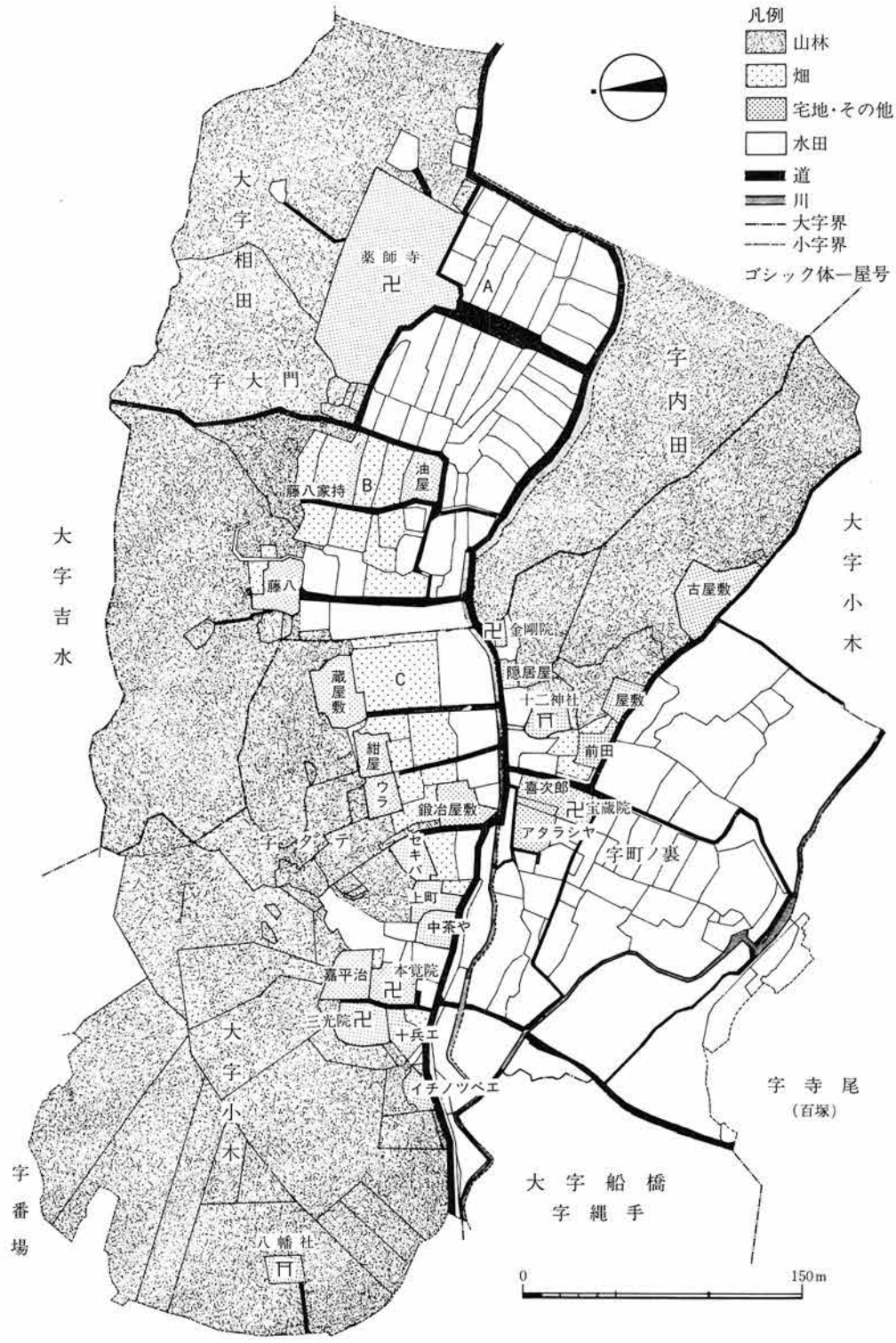


第５図　出雲崎百塚配置模式図(北村ほか1984原図)

寺院　現在、小木には真言宗三光院があり、小木の集落に近接して相田の真言宗薬師寺がある。このほか小木にはかつて前記の法持寺(曹洞宗)・本覚院・宝蔵院・徳正院・圓照坊(以上真言宗)などの寺院が存在したという(『小木の城山』)。小木周辺の寺院の宗派は真言宗のものが特に多いことが注目される。旧西越村内でも同様の傾向がうかがえ、県内で最も多い浄土真宗は現存する154寺(大正15年時)にはなく、23ケ寺の廃寺に４ケ寺みられるにすぎない。

第２表　小木村延宝５年(1677)検地帳地名一覧

田地	大谷地　谷地　川窪　川はた　大地屋　沢田　山ノ木　屋敷下　長谷町　稲場崎　窪田　白山田　つきさき　ばんば　寺尾　壱枚田　三角田　住吉田　切石　かいの木　大西　町裏　こしまき　せき上　たて　落合　ちんしゅ田　屋敷裏
畑地	寺尾　こしまき　かいの木　せき上　屋敷脇　屋敷上　たて　屋敷裏　町うら　大西　十条　番場　いなはさき　落合　しも　せき田　屋敷前　川はた　家上　八っ坂



摸：明治27年作成 大字小木・相田更正図（1：600）

第6図　小木・タテ周辺の地割と地名・屋号

第Ⅲ章　調査の概要

1．調査地の状況と試掘調査

調査地の状況（図版１・２）　当遺跡は島崎川右岸(東岸)の丘陵裾、標高約40ｍに立地する。この丘陵は西山丘陵から西側に派生したもので、南北には島崎川の支流である小木川と吉水川が流れる。島崎川に面した丘陵先端には小さな尾根と谷がいくつか存在し、調査地はこの小さな尾根によって南北が画される。島崎川とは約８ｍ、背後の丘陵頂部とは約40ｍの比高差を測る。調査地西側約400ｍの地点を、西山丘陵を縦断する島崎川が北流し、それと平行して国鉄越後線、国道116号線が南北に走る。調査地西側の島崎川右岸及び、常楽寺川・吉水川両岸には、圃場整備のなされていない水田が広がり、旧地形を比較的良好にとどめていると考えられる。越後線をはさんだ調査地西側には約3,000㎡の敷地をもつ工場がある。調査地の三方を取り囲む丘陵斜面は約20度の急勾配をもち、調査地南東斜面には地滑りの痕跡を明瞭にとどめる地点もある(図版40－１)。丘陵裾に位置するため湧水や斜面からの流水が多く、国鉄越後線の線路敷によって、これらの水がせき止められ、調査地は湿地となっている。

調査地内には越後線に平行する方向で数10cmから１ｍほどの段差があり、これによって二つの平坦面が形成されている。現在上位平坦面は畑、下位平坦面は水田として利用されている。しかし、調査地東側の斜面には幅30ｍほどの谷があり、南側の谷の上部には溜め池跡がある。これらの谷には現在杉が植林されているが、以前は上位平坦面を含めた谷のかなり上部まで水田として利用されていたことがわかる。発掘調査の結果、地山面は調査区北半が南西から北東に向かって緩やかに下る斜面で、南半に上・下二段の平坦面が形成されていたことが判明したが、これと現地表面の段差は無関係であり、段差と上・下の平坦面は近世以降の水田の造成に伴うものであることが判明した。

試掘調査（図版２）　現地は表面観察からは全く遺跡の存在は確認できなかったが、「番場」という中世城館に関連する地名であり丘陵裾で遺構の存在が必らずしも否定できない地形であることから試掘調査の必要性があった。そのため昭和59年４月に試掘調査を実施した。調査はバック・ホーを使って任意の地点に試掘坑(溝)を設定し、薄く土を除去しながら、遺物包含層の有無を確認した。遺物包含層が確認された場合は、人力を使ってこれを発掘し、遺構を検出した。試掘坑(溝)は発掘順にＡ～Ｅとした(図版２)。まず、上段の畑の部分から開始し、Ａ～Ｃのトレンチで、いずれも遺物包含層が確認され、平安時代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼・青磁、近世の唐津焼などが検出された。Ｂトレンチでは特に鉄滓が多く出土したため、トレンチを拡

張した。Cトレンチからは「急々如律令」と墨書された木簡が出土し、柱穴から柱根が検出された。一方、遺跡の範囲が水田部までのびていることが予想されたため、CトレンチからDトレンチをのばし、さらに北側にEトレンチを設定した。遺物包含層は遺物量が少ないながら連続して水田部にものびていることが確認されたが、包含層が地表面よりかなり深いうえに、かなりの湧水によって、そのひろがりは明確にできなかった。これらのことから、対象地には平安時代と中世の2時期を主体とした遺跡が存在し、法線内のほぼ全域にわたって本調査が必要と判断された。その後建設省と調査の時期や方法について協議にはいった。

この時点で、遺跡の性格は不明であったが、平安時代は鉄滓の存在から9～10世紀の鍛冶遺跡が考えられ、中世は珠洲焼すり鉢、青磁碗(104)や瀬戸焼水注(150)、呪符木簡などから、13・14世紀を中心とした有力者の屋敷と推定された。呪符木簡については『木簡研究』8号に紹介した〔坂井秀弥1986ｂ〕。

2．調査の方法と経過

グリッドの設定（図版2）　グリッドは地形に合わせるためバイパスのセンター杭No.345(167.940・6192、18.440・9652)とNo.351(168.038・5584、18.510・3043)を結んだ線を主軸として15m方眼の大グリッドを組むことにした。その結果グリッド主軸は国土地理院の座標系に対し約36度東偏することになった。グリッドの呼称は東西をアルファベット、南北を数字として、両者の組み合わせによって「Ｂ6」のごとく表示した。大グリッドはさらに3m方眼の小グリッドに区別けし、1～25の番号を付した(右図)。グリッド設定にかかる杭の打設とその杭頂標高表示作業は業者に委託し、5月上旬には完了した。

1	2	3	4	5
6				
11				
16				
21	22	23	24	25

小グリッド割付図

調査方法　調査地は丘陵斜面と国鉄越後線に囲まれており、器材搬入や排土搬出が困難なため、調査に先行して北側丘陵斜面を削平し、仮設道路を敷設した。また、湧水や斜面からの流水を防ぎ調査地を乾燥させるために、調査地全域の周囲に幅約1m、深さ1～1.5mの排水溝を掘削し、暗渠を設置した。調査地北西隅に集水マスを掘削し、ポンプを常時運転して排水した。その結果調査地は大雨の後でもすぐに作業に着手でき、調査期間の短縮につながった。

トレンチでの土層観察後、表土(耕作土)、水田床土を重機で排除し、さらにベルトコンベアーを使い、人力によって層ごとにⅤ層(中世遺物包含層)まで掘り下げ、地山上面及びⅥ層上面で主に中世の遺構検出を行った。その後Ⅵ層・Ⅶ層(平安時代遺物包含層)を掘り下げた後、平安時代の遺構検出を行った。調査区南東側の地山面が高い部分ではⅥ層が存在しないが、北及び西側の低い部分ではそれが存在するため、Ⅴ～Ⅶ層を掘り下げる際には遺物の取り上げについて特に配慮した。遺構確認では、確認面の状況が場所によって異なっていたため、遺構の見落

しがないよう注意するとともに、試掘調査で数基のピットが検出されていたことにより、掘立柱建物の見落しがないように柱穴の関連に注意した。柱根が良好な状態で遺存することが確認されたため、柱穴の発掘は断面観察に重点をおいて調査を進めた。遺構平面図は調査開始当初1/20で遣り方実測をしたが、検出される遺構の数が非常に多く、実測できる作業員が少ないことにより、空中測量を採用することにした。空中測量はヘリコプターによる空中撮影のほか、断面が傾斜した柱穴や柱根などのために現地で補測し、1/20で素図を作成した。

遺構番号は、建物・井戸・土坑・溝等の種別で分けず検出順に一連番号を付し、その頭にSA・SB・SE・SK・SD・SXの種別記号を付して表わした。記号はそれぞれ柵・掘立柱建物・井戸・土坑・溝・その他を示す。ピットについては大グリッドごとに検出順に一連番号を付し、「Ｂ９・Ｐ32」のごとく表示し、整理作業の際に建物柱穴として確認できたものについて、「SB５－３」のごとく名称を変更した。報告書作成に当って、遺構番号は調査時の一連番号をそのまま使用した。Ⅰ～Ⅶ層の遺物はグリッドごとに、遺構の遺物はそれごとに取り上げ、それぞれ「番場・Ｂ９・Ⅴ層」、「番場・SK２」のごとくラベルを付けた。遺物の註記は調査時のラベルを生かし、「番Ｂ９Ⅴ層」・「番SK２」のごとく行った。現場では調査区の1/100縮尺の略図を作成し、現場で遺構の位置・切り合い・柱穴の関係等を主とした所見を記入した。現場では発掘作業のほか、遺物の洗浄・註記作業を併行して行った。

調査経過　当初４月中旬より本格的な発掘調査を開始する予定であったが、先述のごとく(第Ⅰ章１)予算執行が遅れ、５月中旬より本格的な発掘調査に入った。

５月11日に業者に委託したグリッド設定に関する杭の打設・杭頂標高表示作業が完了し、13日に器材を搬入した。15日に仮設道路の敷設が終了し、翌16日調査区北側から暗渠工事が開始された。グリッド杭打設の終了した区域より土層観察用アゼ・草刈り等の準備作業を進めた。土層観察用アゼに沿って幅約１ｍほどで設定したトレンチを掘り下げ、土層観察を行い、基本層序を把握し、15日より発掘調査に着手した。

発掘は調査区南東部の上位平坦面から開始した。表土(耕作土)、水田床土等をⅤ層(遺物包含層)上面まで重機を使って削除した後、人力によって遺構確認面までⅤ～Ⅶ層を掘り下げた。当初、遺物包含層はⅤ層のみと考えられたが、調査区北部ではⅤ層が二つに分かれ、間にⅥ層が存在する。下位のⅤ層(Ⅶ層)には中世の遺物はまったく含まれない。23日Ａ６区で暗渠工事中に径約85cmほどの円形素掘り井戸(SE１)が検出され、珠洲焼すり鉢片が出土した。28日にベルトコンベアーを搬入し、作業の効率が高まった。29日に暗渠工事が完了した。

調査開始当初よりピット・井戸・溝等が検出されていたが、６月13日に至ってようやく調査区南半部上位平坦面で掘立柱建物２棟(SB11・14)を確認することができた。19日Ｂ９区下位平坦面東側で、段差に沿って検出されていた２条の溝(SD10・12)の覆土より珠洲焼片が出土した。これより溝の掘削及び調査区南部で検出された約１ｍの段差と二つの平坦面の削平は中世に

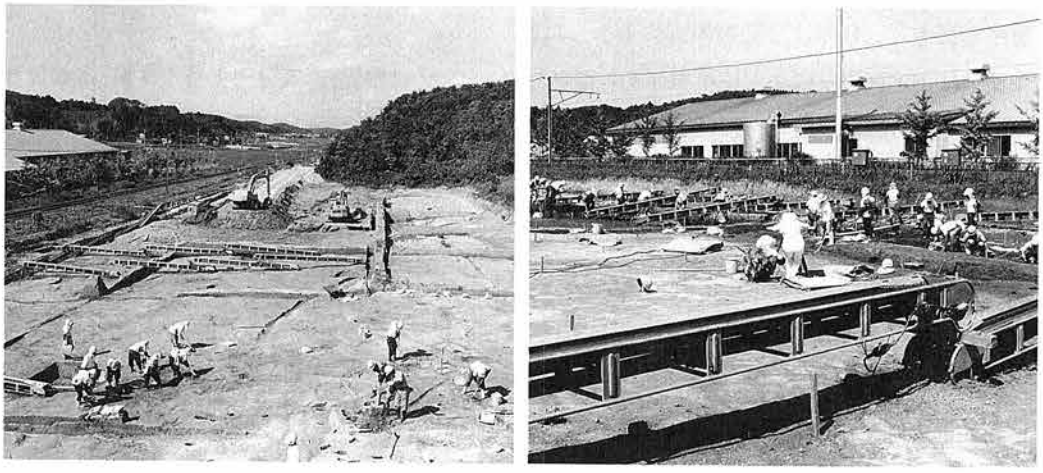
行われたものと推定された。同様に下位平坦面の西側に倒れた状態で遺存する柱根を持つ柱穴群も同時期の所産であろうと考えられた。翌20日、これらの柱穴が当遺跡最大の掘立柱建物(SB17)のものであることが確認された。検出されるピットの数が非常に多く、掘立柱建物の確認は非常に苦慮した。

Ｃ５区南側で検出されていた土坑(SX２)が横井戸であると判明し、さらに調査区北西部において水田に関連すると考えられる遺構(畦畔状高まり・足跡状窪み)が検出された。水田遺構は当初全く予想していなかったが、断面観察により、その可能性を考慮し、調査した。調査区北西部を地山等高線に沿って北東―南西方向に走る溝(SD57)は水田に伴う用水路と推定されたが、その後の土層断面観察の結果、水田より新しい時期に掘削されたことが確認された。なお、この溝のつながりを追求するために、調査区外にトレンチ(図版２―SD57確認トレンチ)を設定し、つながりを確認した。

試掘調査時のトレンチＢより鉄滓が多く出土しており、出土する土師器などから平安時代の鍛冶工房の存在が推定されていたが、Ａ６区、Ｂ６・７区を中心に調査区のほぼ全体から鉄滓が出土し、Ｃ８区北西部において鉄滓・炭化物・フイゴ羽口片・土師器片の出土した土坑(SK24)が検出されたほか、炭化物が多量に入った土坑３基が検出された。前者は鍛冶工房に関連する遺構と推定された。

遺構の発掘がほぼ終了した８月１日に空中写真撮影を行い、その後柱穴を半截し1/10の断面図を作成し、柱根・礎板などを取り上げてすべての発掘調査を終了し、10日に器材を搬出した。

発掘調査によって検出された建物跡や出土遺物を多くの町民に見てもらうため、８月４日に町教育委員会の協力のもと現地説明会を開催した。当日は厳しい暑さの中、出雲崎を中心に約80人の参加者があった。このほか調査中に出雲崎中学校生徒などの見学があった。



第７図　調査風景

第Ⅳ章　遺　　跡

1．層　　序

番場遺跡の発掘範囲は東西約35m、南北約120mで、標高38.5～42.5mを測る。地形はおおむね南東から北西へ緩く傾斜するが、耕作地として利用されていたためいくつかの平坦面が存在する。土層は基本的に旧地形の傾きに沿って堆積している。基本層序はⅠ～Ⅶ層であるが、南部と北部ではそのあり方が若干異なる。南部(9・10区)では北部に存在しない地滑りの痕跡を示す土層(Ⅳ層)が存在する。一方北部西側の低い部分では遺物包含層が間層(Ⅵ層)によって上下に分かれる。土層をⅤ層、下層をⅦ層として理解した。Ⅴ層は平安・中世の遺物を含むが、Ⅶ層は中世の遺物を含まない。西側の低い部分では、黒褐色粘質土・腐植土・青灰色粘土・シルト等が水平に縞状を呈して堆積している。これはこの部分の標高が低く、過去において水が澱んだ状態にあったことを推定させる。必要に応じて基本層序を細分した。調査地全体を通じて細分したものについてはアルファベットを付した。以下表土・耕作土であるⅠ層を除いたⅡ～Ⅶ層について説明する。

Ⅱ層　暗黄褐色～茶褐色土で、粘性・しまりともに弱く乾燥するともろい。水田耕作のため酸化している部分もある。砂、礫、粘土ブロックの混入、色調の差異で細分した。

Ⅲ層　褐色～暗褐色土で、若干粘性を帯びる。基本的に遺物包含層の上に堆積する土層である。Ⅱ層同様細分した。

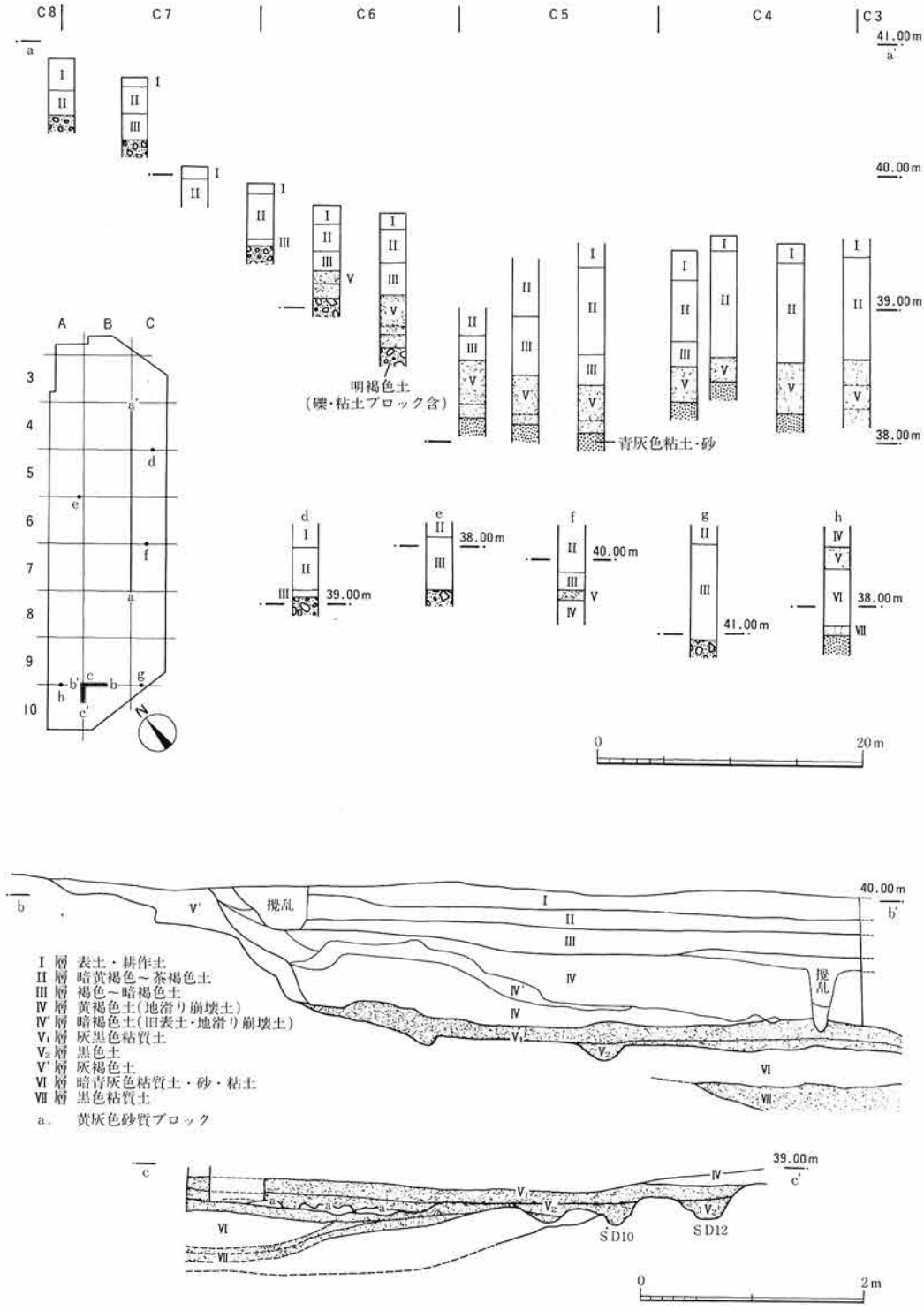
Ⅳ層　地滑りによって形成された土層で部分的に存在する。黄褐色～明茶褐色を呈し、灰色粘土ブロック、礫などを多量に含む。酸化の強さにより若干色調の異なる部分もある。基本的にⅤ層と同一の旧表土もⅣ層の一部として理解した(第8図)。A10区Ⅴ層直上で16世紀末～17世紀初頭の唐津焼片が出土しており、少なくともこれ以降に地滑りが発生したと考えられるが詳細は不明である。

Ⅴ層　平安・中世の遺物包含層である。おおむね黒褐色を呈する粘質土でしまりも良い。後世の削平・撹乱を受け発掘区全域に存在してはいない。この土層からは陶磁器だけでなく、木器なども相当量出土している。

Ⅵ層　青灰色を呈し、粘土・シルト・砂からなる土層で、発掘区北部西側緩斜面には明確に堆積しているが、他の部分ではそれが認められない。

Ⅶ層　中世以降の遺物を全く含まない平安時代の遺物包含層である。遺物の包含量は非常に少ない。Ⅵ層によってⅤ層と区別される層で、基本的にⅤ層と同質の黒褐色土であるが、Ⅴ層

1．層　　序


C8
C7
C6
C5
C4
C3
41.00m
40.00m
39.00m
38.00m
明褐色土
（礫・粘土ブロック含）
青灰色粘土・砂
A
B
C
N
0
20m
40.00m
攪乱
I 層 表土・耕作土
II 層 暗黄褐色～茶褐色土
III 層 褐色～暗褐色土
IV 層 黄褐色土（地滑り崩壊土）
IV' 層 暗褐色土（旧表土・地滑り崩壊土）
V1 層 灰黒色粘質土
V2 層 黒色土
V' 層 灰褐色土
VI 層 暗青灰色粘質土・砂・粘土
VII 層 黒色粘質土
a. 黄灰色砂質ブロック
39.00m
SD10
SD12
0
2m

第８図　基本層序

と比較して若干淡い色調である。粘性があり、しまりも良い。本層は西側の低い部分でのみ分布範囲が明確に認められた。B・C7・8区付近において、平安時代の遺物を包含する若干汚れた褐色土層が確認されたが、本層との関連は不明である。

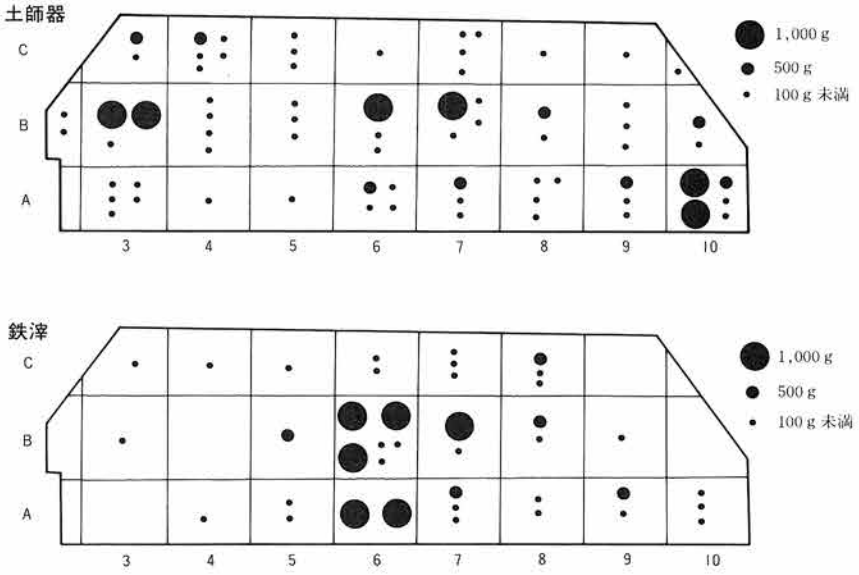
地山層　調査地東側の丘陵に近い部分では、礫・粘土ブロック等を含む明褐色土を地山層として把握し、西側の低い部分ではおおむね青灰色を呈する粘土・砂を地山層として把握した。

2．概　　観

遺跡の時期は出土遺物からみて、平安時代と中世・近世に大別される。このうち近世については遺構が明確ではない。検出された遺構は掘立柱建物・井戸・土坑・溝のほか水田跡がある。発掘区内の地形は南半部から北半部の丘陵側(東側)が相対的に高く、この部分に掘立柱建物とこれに伴うと考えられる井戸が分布し、標高38m以下の低い北半部の谷側(西側)に水田跡が存在する。掘立柱建物は南半部のA・B8・9区付近にもっとも集中し、その北側6・7区にいくつか散在する。これより北側の4・5区には建物はなく、C3区にもうひとつの遺構のまとまりがある。

平安時代と中世の遺構は一部で層位を異にして存在していたが、大部分では同一層位に混在していた。また、一般的に遺構出土の遺物は少なく、これによって遺構の時期を決定できるものは少ない。しかしながら、包含層を含めて遺物の出土状況などを考慮すると、おおよその時期別の遺構のあり方が推定できる。平安時代は出土遺物からみて9世紀後半から10世紀前半を中心とし、中世は13・14世紀を主体とする。したがって、両者の間には大きな空白期間が存在しており、連続するものではない。

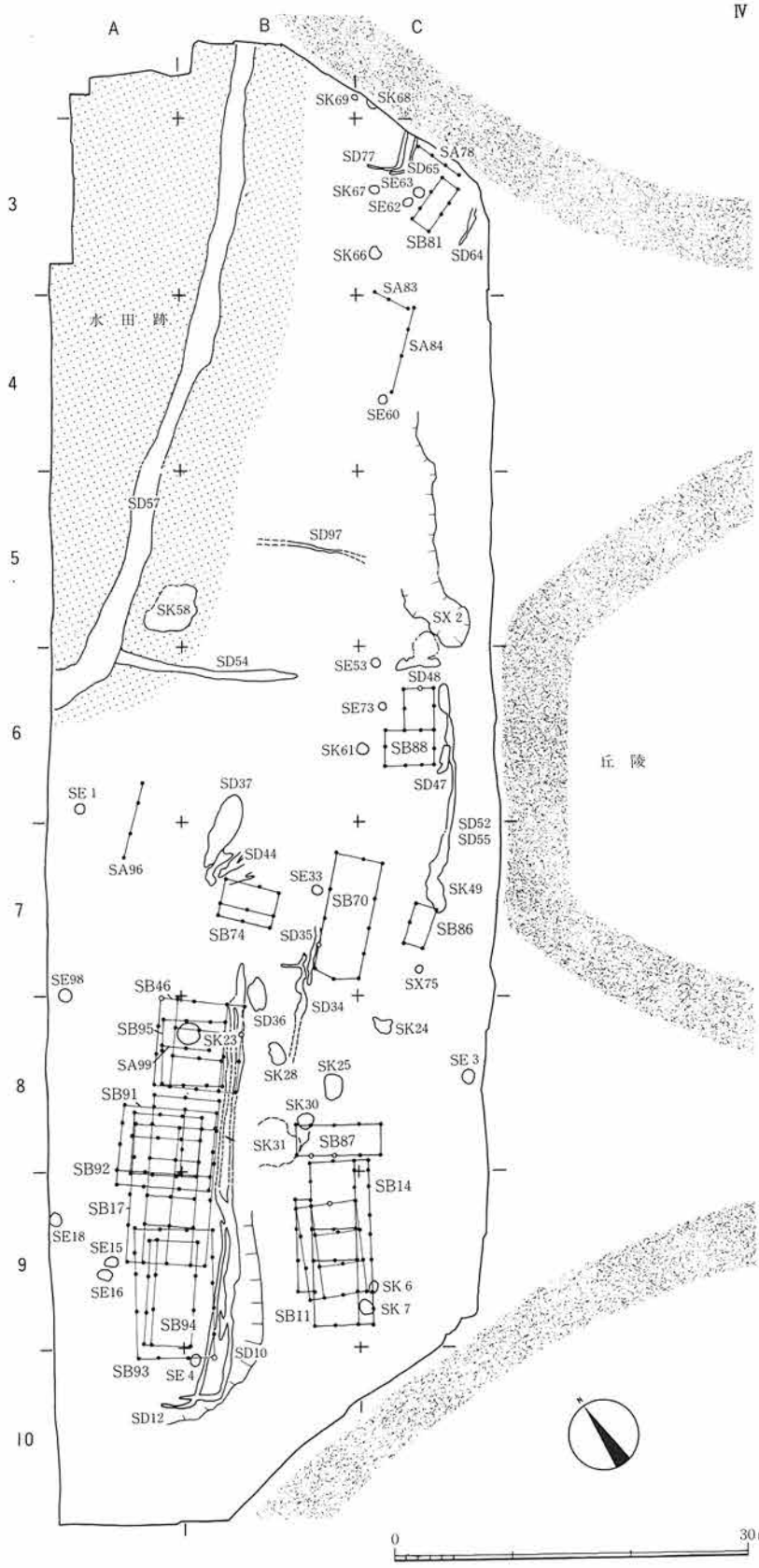
平安時代　平安時代の単純な包含層が存在していたのはC6～8、B7・8区の一部である。この時期の主体をなす包含層の土師器の分布状況は第10図のとおりである。全域から出土しているものの、いくつかの集中地点がみられる。すなわち、①B・C3区付近、②A・B6・7区付近、③A10区付近である。①の付近は中世の遺物がほとんど出土していないことから、BC区の遺構はほぼ平安時代と考えられる。小規模な掘立柱建物SB81と井戸・土坑・小さな溝などがある。B3区に土師器が多く分布するのはC3区からの流れ込みと考えられる。②の付近は平安時代・中世とも遺物の出土がみられるが、平安時代の所産と考えられる鉄滓が集中的に分布している。鉄滓はC8区の土坑SK24で、平安時代の土器(34、45)と共伴しており、平安時代に比定され、当時期に鍛冶工房が存在したことが推察される。鉄滓はSK24以外では遺構からほとんど出土しておらず、鍛冶関連の遺構の存在も明確ではないが、SK24の北側周辺のB・C7区付近に平安時代の鍛冶関連の遺構の存在が想定される。掘立柱建物SB86・SB74などは当期のものであろう。また、B8区の土坑SK31も出土遺物からみて、当期のものである。③の付近は当



第９図　土師器・鉄滓分布図

期の遺物が多く出土したにもかかわらず、遺構は明確ではない。この部分は中世において斜面が削平されており、その際平安時代の遺構が破壊された可能性が強い。

中世　南半部８・９区に集中する掘立柱建物とＣ５区のSX２が主体をなす。８・９区では東側から西側へ傾斜する緩斜面を２段に削平して、それぞれに掘立柱建物を配している。下段の平坦面には柱穴が著しく多く集中し、建物が重複して、長期にわたってここが居住区の中心をなしていたことがうかがえる。これらの建物のうち、調査現場で把握したものはSB17やSB46などごく少なく、整理の過程で復元したものが多い。したがって、建物の把握に問題を残すものも多く、把握しえていない建物も多いと予測される。掘立柱建物の規模はさまざまで、廂か縁をもつものが多く、身舎は総柱のものもある。建物群は低い丘陵の裾に立地し、島崎川の谷に面しており、平入りの形式をとるものが多い。SB17は角柱の柱根が遺存しており、規模も大きく、床張りの立派な建物である。この建物群の東側には溝があり、上の斜面からの水を切っている。Ｃ５区にあるSX２は斜面に大きな浅い穴を穿ったもので、一般的な井戸とは異なる湧水施設である。この西側の低地に存在する水田跡は明確な時期は不明であるが、中世の溝SD57によって切られており、下限は中世である。水田耕作土中には、ほとんど遺物が包含されておらず、上限は平安時代と考えられるにすぎない。この水田跡とSX2は位置関係からみて、相互に関連したものと推定され、SX２が水田の用水源であったことも考えられる。



第10図　番場遺跡遺構配置模式図

3．遺構各説

SB81[1]（図版５・40—３）

Ｃ３区にある１間(1.7ｍ)×３間(4.45ｍ)の掘立柱建物(Ｎ—70°—Ｅ)である。柱間寸法は不揃いで、北側柱筋が東から1.6・1.65・1.2ｍ、南側柱筋が東から1.4・1.2・1.85ｍを測る。柱穴掘形は径20～28㎝の円形で、深さ13～25㎝であり、埋土は灰褐色土である。整理作業の時点で確認したものであるが、空中写真で柱列が看取される。柱穴からの出土遺物はないが、周辺から土師器等が多く出土しており、平安時代の建物であろう。

SA78　付SK79（図版５・40—３）

Ｃ３(２・８)区にある３間(4.3ｍ)の柵(Ｎ—20°—Ｗ)である。柱間寸法は北から1.55・1.3・1.45ｍを測る。柱穴掘形は径18～30㎝の円～楕円形で、深さ16～19㎝を測る。埋土は灰褐色土である。本柵列は調査区外へのびて掘立柱建物になる可能性がある。遺物は出土していないが、SB81同様平安時代のものであろう。

SA78と重なってSK79がある。これは径250㎝位の浅いすり鉢状の落ち込みで、調査区外へ広がる。覆土は特に粘性の強い灰色土で、SA78より新しいものである。

SE63（図版５・40・49—７）

Ｃ３(12)区、SE62の東30㎝にある円形の素掘り井戸である。径90～95㎝、深さ66㎝を測る。底面は湾曲し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁中位に段をもつ。覆土は大別すると二層に分かれ、上層(１～３)は灰色土・下層(４・５)は黒色～暗灰色土で、下層中からは横になった自然木のほか、炭化した木片も出土している。

SE62（図版５・40・49—６）

Ｃ３(12)区にある瓢形の素掘り井戸で、径95～100㎝、深さ70㎝を測る。底面は北へ傾斜し、側壁は下から中位までほぼ垂直に、上方へは外傾して立ち上がる。西壁中位には段がある。覆土は大別すると二層に分かれ、上層(１～４)は暗灰褐色土、下層(５・６)は黒褐色土である。下層中からは自然木が横になって出土したほか、腐植物も検出された。土師器杯、甕片が出土しており、平安時代の井戸である。西側には本井戸覆土を掘り込んだピットがあった。

SK67（図版５・40）

Ｃ３(６・11)区にある長径80㎝・短径65㎝の楕円形の土坑である。確認面は東が高く、西が低い段になっており、深さは上段から60㎝を測る。覆土は黒灰色シルト質土で、土師器片が出土しており、平安時代のものである。

SK66（図版５・40・49—８）

1）建物模式図の記号は次のとおりである。
縮尺＝1：500、■＝角柱、●＝丸柱、・＝柱根のないもの、○＝柱穴の検出されなかったもの、／＝礎板

C 3(16)区にある径100cmの不整円形の土坑である。SK67同様確認面が段になる位置にあり、深さは上段から63cmを測る。側壁は底面からやや外傾して立ち上がる。覆土は二層に分かれ、上層は暗灰褐色土と灰白褐色土ブロックの混土、下層は黒褐色土で、下層中から土師器杯・甕・黒色土器片等が出土しており、平安時代のものである。

SK68（図版5・40・49—9）

C 2(21)区にある円形と思われる土坑である。径約100cmで、東半部は調査区外へのびる。深さは35cmを測り、底面からすり鉢状に緩く立ち上がる。覆土上層は炭化層の上に焼土層と暗褐色腐植土層が入り組んで堆積する。この上層中、特に炭化層からフイゴの羽口や須恵器甕片が出土しており、平安時代の土坑である。

SE69（図版5・40・49—10）

B 2(25)・C 2(21)区にある径48～55cmの円形の素掘り井戸である。深さは約50cmを測り、底面は平坦で、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒色土中にワラ状の腐植物を含んでいた。遺物は出土していない。

SD64・SD80（図版5・40）

C 3(14・19)区にある2本並行に東西にのびる溝である。西側は徐々に浅くなり消滅し、東側へののびは確認面を下げ過ぎたため確認できなかった。SD64は幅25～28cm、最深6cmを測り、重複するピットより新しい。SD80は幅12～17cm、最深5cmである。ともに覆土は暗灰褐色土であるが、SD80は底面に厚さ1cm以下の薄い炭化粒層を有する。遺物は出土していない。

SD65・SD77（図版5・40）

C 3(2・6・7)区にある2本並行にL字にのびる溝である。東側は調査区外へ続き、西側は先細りになり消滅する。ともに幅15～30cm、深さは深い部分で15cmを測り、覆土は暗灰褐色土である。SD77は東部で2本の溝が重複しており、南へ若干のびる方が新しい。また、重複する2つのピットはともに本溝より新しい。SD65からは須恵器杯・黒色土器片が出土しており、平安時代の溝かと思われる。

SA83・SA84（図版3・5・36）

C 4区に位置し、直角よりやや開く角度で近接する柵である。SA83は2間(3.2m)の柵(N—29°—W)で、柱間寸法は北から1.4・1.8mを測り、南が長い。柱穴掘形は約22cmの円形で、深さ約10cmである。SA84は3間(7.5m)の柵(N—50°—E)で、柱間寸法は東から2.1・2.4・3.0mと西が長い。柱穴掘形は径18～25cmの円形で、深さ15～18cmを測る。両柵とも埋土は黒褐色土で共通しており、同時に存在した可能性が強い。SA84の両柱間の途中に浅い小ピットがあり、これも関連するかもしれない。両柵とも遺物は出土していない。

SE60（図版3・36・49—5）

C 4(11・16)区にある不整方形の素掘り井戸である。一辺60～75cm、深さ約1.1mを測り、現

在も湧水がある。底面は円形で、ほぼ平坦であり、側壁は垂直に立ち上がり、上方で少し外傾する。覆土は三層に分かれる。上層は灰色土で、レンズ状に厚さ約60cm堆積している。中層は黒褐色腐植層で、自然木・木片にまじって土師器杯１片が出土している。下層は暗黒灰色土で、粘性が強く、混入物はほとんどなく、約30cm堆積している。出土遺物から平安時代の井戸の可能性が強い。

SX 2（図版６・44）

Ｃ５(16・23)区にある中世の横井戸である。緩斜面に大きなすり鉢状の穴を穿ったもので、北側の低い方に浅いくぼみが連続し、これにむかって流水するようになっている。南側のくぼみは上端で径3.5ｍほどあり、南端では比高が約1.3ｍある。底面はほぼ水平で、そのまま北側の浅いくぼみの底面につながる。両者の間の狭くなる部分には木杭(39～42)が打ち込まれている。南側で湧き出た水をこの部分でせき止めて水を溜めたものと考えられる。南側は最下層に混りのない砂利層があり、これより越前焼大甕の口縁部(254)と珠洲焼すり鉢(191)が出土した。一方北側の浅いくぼみの最下層にはうすい茶褐色ないしは黒色の腐植土があり、一時期よどみになっていたことがうかがえる。この部分より多量の木製品(４－11・26～28・49)が出土した。この他、この遺構は明らかに湧水を得るための施設であるが、一般的な円形素掘りの井戸と構造が異なり、規模も大きい。また主要な掘立柱建物群と離れた位置にあり、ただ単に生活に必要な飲料水を得ることを目的にしたものではない。これより低い位置に水田跡があり、これとの間に溝SD97が存在することから、水田に水を供給することを目的とした施設と考えられる。出土遺物はほかに珠洲焼(163・196・218・226)、瀬戸・美濃焼(139)、須恵器(18)が出土した。中世のものは14世紀代のものが多く、構築の時期が示唆される。

SD48（図版６・44－１・２）

Ｃ６(２)区にある幅約50cm、長さ約2.5ｍの浅い溝である。地山上の黒色土上にある浅いくぼみで、プランや壁の立ち上がりは明瞭でなく、底面にも小さな凹凸がめだつ。覆土は淡灰茶色土である。底面より珠洲焼壺片(163)が出土しており、中世のものである。

SE53（図版６・44－１・48－２）

Ｃ６(１)区にある円形素掘りの井戸である。径約80cm、深さ約60cmで、上下二層に分かれ、その間に植物質とともにワラのようなもので編んだものが遺存していた。土層は灰褐色土で、地山ブロックを多く含み、下層は黒灰色土で地山ブロックを少量含む。漆塗椀(１)が出土しており、中世と考えられる。

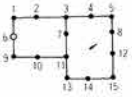
SE73（図版６・43－２）

Ｃ６(６)区にある。円形素掘りの井戸である。径約70cm、深さ約50cmで、底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はない。中世以後の確認面で検出したものである。

SK61（図版６・43－２）

C 6 (11)区にある円形の土坑である。径95～100cm、深さ40cmを測り、底面から緩く外傾して立ち上がる。底面から側壁下部にかけて、腐植土が厚さ 4 cm位堆積していた。その中から底・側壁に密着して、火を受けた木片が出土しており、ほかに出土遺物はない。

SB88（図版 6 ・43— 2 ）



C 6 区にある平面L字型を呈する南北 4 間(東6.8m・西6.6m)、東西 3 間(4.2m)の掘立柱建物(N—36°—E)である。柱穴 3 —13、 5 —15を桁行柱筋とする 2 間× 3 間の身舎に 2 間× 2 間の張り出しが付いた建物と考えられる。柱間寸法は不揃いで、最小 1 mから最大 2 mを測る。柱穴掘形は不整な円形を呈する。柱穴 3 ・ 5 ・15が径50cm前後と大きく、 8 ・ 9 ・12・13が径20cm前後と小さい。残りは径30cm前後である。深さも不揃いで 9 ～37cmを測る。斜面に建てられた結果、斜面上側(東側)の柱穴が深い。埋土は茶褐色～暗褐色土である。柱痕等は検出できなかった。本建物は図面上で把握したものである。柱穴 9 ・10・13は中世以後の遺構確認面で検出されており、中世以後の建物と考えられる。

SK49・SD52・SD55・SD47（図版 6 ・ 7 ・47— 5 ）

SK49はC 7 (8 ・13)区にある不整形の土坑、SD52・55はC 6 ・ 7 区にあり、地山の等高線に沿ってのびる溝、SD47はC 6 (13・18)区にある溝である。それぞれ重複しており、SK49・SD47はSD52・55より新しい。SD52とSD55はC 6 区で互いに接するようにしてのびる溝で、新旧関係は判然としなかった。覆土は、両溝の上層には灰褐色土がレンズ状に堆積し、下層で二溝に分かれる。C 7 区では、SD52は暗灰色シルト、SD55は暗灰色砂が堆積しており、SD52のSK49と切り合う付近とSD55のC 6 区とC 7 区の境付近には最下層に砂を含む荒砂利が存在した。C 6 区での上面確認は困難をきたし、SD55は下層暗灰色砂を目安にプランを確認し、SD52は不明瞭であった。SD55は長さ約17m、幅20～40cm、深さ10～20cmであり、SD55も幅・深さはほぼ同規模で、南側で広がる。SK49は長軸 3 m、短軸1.7m、深さ 5 mと浅く、覆土は灰褐色砂である。重複するSB86の柱穴は本土坑の底面精査の時点で検出したものである。またSD47は長さ2.4m、幅約50cm、深さ 5 ～ 8 cmを測る。すべて遺物は出土していない。新旧関係は認められるが、SK49とSD52・55は覆土が近似しており、大きな時間差はないと思われる。

SB86（図版 7 ）

C 7 区、SK49の南西にある 1 間(1.8m)× 2 間(3.6m)の掘立柱建物(N—53°—E)である。柱間寸法は1.8m等間で、東桁行の間には柱穴がない。柱穴掘形は径約20cmの円形で、深さ15cm前後が主体で、柱穴 2 のみ径32cmと大きい。この柱穴はSK49と重複し、SK49と同時期あるいはこれより古い。埋土は灰褐色土あるいは灰褐色砂である。柱穴 2 ・ 5 は確実に平安時代包含層下から検出されており、遺物は出土していないが、本建物は平安時代に属すると思われる。また、この南妻の西への延長線上にピットの並びが認められ、柵の可能性が考えられる。本建物は図面上で確認したものである。

SB70（図版７）

Ｂ・Ｃ７区の堺にある２間(東4.2ｍ・西4.0ｍ)×４間(10.2ｍ)の掘立柱建物(Ｎ－47°－Ｅ)である。柱穴11を検出しえなかったが、確認面が最も低くなっており、その付近に小さな凹みが多数あることから、いずれかが該当すると思われる。その他の点では東・西桁行の柱間寸法はよく対応しており、北から3.05・2.6・2.3・2.25ｍを測る。梁間は不揃いで、西妻の中央柱穴(７)は外へ張り出す。柱穴掘形は一辺25～54cmの方形と思われるものが多い。深さは13～70cmと不揃いであるが、確認面の比高差が東西で約60cmあることを考慮しなければならない。埋土は灰褐色土で、下層へいくに従って暗灰褐色土となる。遺物は出土していない。SD35と重複するが新旧関係は判然としない。西側柱列が中世以後の確認面で検出されており、中世以後の建物であろう。

SX75（図版７）

Ｃ７(22)区で、中世以後の確認面下で検出された落ち込みである。覆土は炭化粒を多く含む暗灰褐色土で、一部下げ過ぎたため形状は判然としないが、本来100cm×60cm位の楕円形の土坑であったと考えられる。本土坑周辺、Ｃ７(16・17・21・22)区では中世以後の確認面下にそれより若干色調が暗く、炭化粒を含む暗褐色土の堆積が認められ、ここからは平安時代の遺物(土師器杯)が良好な遺存状況で出土しており、平安の包含層と考えた。この包含層途中から切り込んでいるようであるが、徐々に変化しており判然としない。本土坑覆土中からの遺物の出土はなかったが、Ｃ７(22)区出土の土師器(35)等と関係が深いと思われる。

SK26（図版８）

Ｃ７(16・17)区にある楕円形の土坑である。長径145cm、短径115cm、深さ５cmで、覆土は黒灰色土に地山ブロックを含む。中世以後の確認面上で検出したもので、遺物は出土しない。

SE33（図版７・49－４）

Ｂ７(９)区にある円形素掘りの井戸である。径約80cm、深さ約85cmで、底面は水平で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は５層に分かれ、上から２層と４層は炭を多く含む黒色土層で、１層は暗灰褐色土、３層は茶灰色土(茶色砂質土混)、５層は暗灰色砂質土である。出土遺物は皆無で、時期は不明である。

SB74（図版10・40－１・43－３）

Ｂ７区にある桁行２間(4.5～4.8ｍ)×梁間２間(3.1ｍ)の掘立柱建物(Ｎ－37°－Ｅ)で、南側に廂をもつ。柱穴の配置は整ってはおらず、柱間寸法も不揃いである。廂の出は１ｍである。柱穴掘形は20～35ｍの隅丸方形で、深さは８～33ｍである。埋土はよくしまる暗褐色土で、柱痕は径８～12cmである。柱穴７・９には小さな板を３枚ならべた礎板が遺存していた。柱穴の埋土とプランからみて平安時代の建物と考えられる。図面上で把握したものである。

SD44（図版10・40—1・43—3）

B7(7)区にある2～3本の溝でSD37に隣接する。幅15～20cm、深さ10～15cmで、覆土は灰褐色砂質土層にうすい暗褐色土がのる。出土遺物はないが、土層からみて平安時代の遺構と推定される。

SK37・SK38・SK56（図版10・40—1・43—3）

いずれもB6(21～25)・B7(1～5)区にある幅広の溝状の浅い落ち込みである。方向は等高線に平行している。立ち上がりが不明瞭でプランの輪郭も明確ではない。深さは10cm程度で、覆土はV層と同じ暗褐色土である。SK37より須恵器無台杯(8)、土師器皿(53)、同鍋(72)、青磁碗(109)、SK38より珠洲焼すり鉢(211)、SK56より青磁碗(105)が出土している。

SA96（図版10）

A6・7区にある3間(6.2m)の柱列である。方向はN—50°—Eで、柱間寸法は両側1間が1.8m、中央1間が2.4mである。柱穴掘形は径20～50cmの円形で、深さ16～40cm、埋土は黒色土である。西側柱穴には柱痕が遺存していた。

SE1（図版4）

A6(23)区にある円形素掘りの中世の井戸である。排水用の暗渠掘削時に検出された。径約85cm、深さ約50cmで、底面は水平で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は有機質を多く含む黒色土で、下部に地山土を主体とする灰黒色粘土がうすく2層ある。これは壁面の崩落によるものであろう。黒色土中には3枚ほどの植物層が層をなす。黒色土層の中位より珠洲焼すり鉢(180)が出土しており、中世の井戸である。

SK51（図版3）

B6(16)区にある浅い落ち込みである。平面は楕円形で長軸50cm、短軸25cmで、深さ13cm内外である。覆土は暗褐色土である。珠洲焼すり鉢(205)が出土しており、中世に属する。

SE3（図版8・48—1）

C8(14)区の一段高い場所にある円形の井戸である。径約110cm、深さ25cmを測り、北西壁がほぼ垂直に、ほかは底面からすり鉢状に立ち上がる。覆土は大略2層に分かれ、土層の淡黒褐色土と灰白色土ブロックの混土と下層の黒褐色土の間に厚さ2cm位の植物腐植土層をもつ。浅いが形状や覆土からみて、井戸の上部が削平されたと考えられる。中国陶磁器の白磁皿(16世紀頃か)が出土しており、中世のものであろう。

SK24（図版8・48—8～10）

C8(6)区にある方形の土坑である。長辺100cm、短辺80cm、深さ35cmを測る。底面は平坦で側壁は垂直に立ち上がり、西と南～東には深さ約10cmの浅い段がある。土坑覆土は大略3層に分かれ、上層は暗灰褐色土、中層も同様であるが、炭化粒、鉄滓粒を多く含んでおり、下層は地山に近似する灰褐色土で炭化粒を若干含む。上中層間で鉄滓が面をなして検出され、また底

面直上で土師器片が出土したほか、フィゴ片等が出土している。遺物の出土は上中層に多く認められた。周囲の浅い段の覆土は淡灰褐色土で炭化粒を含み、東側の段の底面直上で土師器甕が出土している。

SD34・SD35・SD40（図版11）

Ｂ７(19・24)・Ｃ７(４・９)区にかけて、地山の傾斜にほぼ直交してのびる溝である。SD34は幅広の部分で60cm、狭い部分で10cm、深さ約５cmを測り、跡切れながら南へのびる。SD35はSD34とつながるかと思われるもので、幅50～65cm、深さ約５cmを測り、SB70と重複する部分には小さな凹凸が多い。覆土はともに暗灰白土で炭化粒を含む。SD40はSD34の西側に接するもので、幅約60cm、深さ５～10cmを測る。覆土は暗灰色土の上に灰白色土が堆積し、重複するピットより古い。３本の溝からは同様に土師器片が出土しており、ほかにSD34の南端の溝からは唐津焼片が１点出土している。

SD22　付SD36（図版11・42―１）

SD22はＢ７・８区の北側を地山の傾斜にほぼ平行してのびる溝である。Ｂ８(１)区で重複が認められ、西側の新しい方をSD22A、東側の古い方をSD22Bとした。SD22Aは幅の広い部分で350cm、狭い部分で180cmを測り、深さは10～25cmである。底面は溝状に凹凸があり数本が同一方向にのびている。覆土は下層から暗灰色土・黄褐色砂・暗灰色砂の順で堆積している。Ｂ８(７)区で板材が出土しているほか、珠洲焼(181・207)・須恵器・土師器片が出土している。南は途中試掘坑で切られ判然としないが、SD10・SD12につながるかと思われる。またSB46の東側柱列と重複し、これと同時期あるいは新しいと考えられる。

SD22Bは二本の溝が同一方向にのびるもので幅120cm、Ｂ７区で一本ずつに分かれ、東の溝はそのまま真直にのびるもので幅75cm、西の溝は北へ「く」の字に曲がるもので幅50cmである。深さは約20cmを測り、覆土は上層灰色シルト・下層黒褐色土で、SD22Aに近い部分ではさらにその下層に暗灰色シルトが堆積する。

SD36はＢ７・８区の堺にあり、SD22Bと同一方向にのびる溝で、幅175cm、深さは深い部分で25cmを測る。覆土がSD22Bと同一であることから同時に存在したと考えられる。珠洲焼(211)のほか土師器・フイゴ片が出土している。

SD22AとSD22B・SD36には新旧があるが、ともに中世の溝である。

SK28（図版11・49―１）

Ｂ８(８)区にある不正楕円形の浅い皿状の土坑である。長径1.9ｍ、短径1.25ｍ、深さ約12cmを測る。底部は中央に向けて少し凹み、側壁はやや外傾して立ち上がり、北東側は徐々に浅くなる。覆土は上層の灰白色土ブロックと暗灰色土の混土と下層の暗灰色砂の２層に分かれる。北東隅には小ピットがあり、北西側にはSD22につながる幅33cm、深さ５cmの溝がある。遺物は出土していない。

SK29（図版11・49—２）

Ｂ８(13)区にあり、SD22と重複する楕円形の土坑である。長径120cm、短径70cm、深さは確認面の高い東側から35cmを測り、底面からすり鉢状に立ち上がる。覆土は底面から西側にかけて黒灰色土～暗灰色砂、その上は黄褐色砂で、この黄褐色砂はSD22の覆土中層と同質である。本土坑を小溝が切っている。SD22との新旧関係は判然としないが、最終的にはほぼ同時に埋まったと思われる。遺物は出土していない。

SK25（図版８）

Ｂ８(15)区にある楕円形の浅い皿状の土坑である。長径2.15ｍ、短径1.5ｍ、深さは東側で10cmを測る。確認面が東から西へ傾斜して低い段があり、側壁は東側で緩く外傾し、西側では不明瞭となり、底面はほぼ平坦である。覆土は南北に２層に分かれ、遺物は出土していない。

SK30（図版９・49—３）

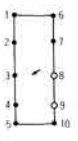
Ｂ８(19)区にある円形の土坑である。径約130cmで深さ10cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は東側がやや内傾するほかは緩く外傾して立ち上がる。覆土は上層が黒灰色シルトに炭化粒を含み、下層が炭化層であり、ここで火を焚いた可能性が強い。形態はSK７に近似する。

SK31　付SD32（図版９・49—４）

Ｂ８(23)区を中心に広がる不正方形の落ち込みで、南北4.0ｍ、東西5.5ｍ位、深さ10～20cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は南と北がやや外傾して、東は緩い傾斜で立ち上がり、浅い段をもつ。西は緩く立ち上がるかとも思うが、判然としなかった。覆土は上層が地山の若干よごれた感じの灰色砂、下層が暗灰色砂で炭化粒を含む。この下層はＣ７区・SX75付近の平安時代包含層に近似する。遺物は須恵器片と多量の土師器片が出土しており、これは特にＢ８(23)区の下層中からまとまって出土し、その付近では炭化粒の混入がほかより多い。本土坑内にあるピットのほとんどは覆土上面から掘り込まれたもので、底面で検出されたのは二基に過ぎない。Ｂ８(23)区と(18)区の堺・東側の緩い段の下にあるピットとＢ８(18)区・試掘坑のすぐ東にあるピットがそれで、径15～20cm、深さ８～17cmである。土師器(58・59・65)・須恵器(４・11)が出土している。

SD32はSK31の北側に約1.5ｍの長さでのびる溝である。幅50cmで、深さは深い部分で37cm、浅い部分で25cmを測り、東側に浅い段をもつ。覆土はSK31下層と近似しており、同一期のものと考えられる。

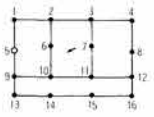
SB87（図版９）



Ｂ・Ｃ８区の南側にある１間(2.6ｍ)×４間(7.2ｍ)の掘立柱建物で、建物方位(Ｎ—55°—Ｗ)は地山の傾斜に沿う。柱穴８・９は検出されなかった。柱間寸法は北桁行で東から1.85・2.1・2.05・1.2ｍである。柱穴掘形は径20～30cmの円形で、深さは10～20cmを測る。ただし、確認面の比高は東と西で約80cmある。本建物は現場では東側１間×２間のみ

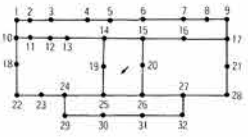
を確認し、整理時に、SK30と関係する柱穴４・５が、北側柱列延長線上にあることから西へのばしたものである。埋土は柱穴１～３・６・７が黒灰色土・柱穴４・５・10が暗灰色土である。遺物は出土していない。建物方位が隣接するSB14と丁度90度振れており、関係があるかと思われる。

SB11（図版９・43－１）



Ｂ９区東側にある３間(4.9ｍ)×３間(7.8ｍ)の掘立柱建物(Ｎ－27°－Ｅ)で、西側に廂をもつ。北妻の柱穴５は存在しないが、柱穴２－10と３－11の棟通りに間仕切りと思われる柱穴６・７がある。柱間寸法は桁行で北から2.4・2.7・2.7ｍ、梁間は身舎が東から2.0・1.6ｍの3.6ｍ、廂の出が1.3ｍである。柱穴掘形は身舎が方形、廂が円形で、径25～45㎝を測り、深さは15～75㎝の開きがあるが、これは東西の比高差が約１ｍあることを考慮しなければならないだろう。底面に柱根跡の認められたものがあり、径13～15㎝を測る。埋土は黒灰色土である。二ケ所でSB14の柱穴と重複しており、本建物はこれより古い。遺物は出土していない。

SB14（図版９・43－１）



Ｂ９区東側、SB11に重複する建物で、身舎が２間(3.7ｍ)×６間(13.7ｍ)で、東西両面に廂の付く掘立柱建物(Ｎ－33°－Ｅ)である。桁行中央に馬通りをもち、東桁行は７間である。柱間寸法は、桁行が南から４間目まで2.5～2.8ｍで、５間目からは東が1.3～0.9ｍ、西が1.65ｍ等間である。梁間は身舎北妻が1.7・2.0ｍ、南妻が1.9・1.8ｍで、馬通りの柱間は南妻と対応する。西側の廂の出は1.5ｍで、柱間は身舎に対応する。東側の廂の出は1.2～1.4ｍで、柱間は身舎と対応しない部分もある。柱穴掘形は、身舎が一辺35～50㎝の方形で、深さ15～70㎝を測り、廂が円形で、西側は径20～30㎝、深さ10～62㎝、東側は径20～35㎝、深さ11～40㎝を測り、一部径の大きいものもある。柱穴の深さはSB11同様、比高差を考慮しなければならない。底面に柱痕跡の認められたものがあり、径12～15㎝を測る。掘形埋土はSB11と近似する黒灰色土であるがこれより若干黒味をおびる。SB11と二ケ所で重複しており、これより新しい。また隣接するSB87とは建物方位が丁度90度振れており、関係があると思われる。遺物は出土していない。

SK６（図版９・43－１）

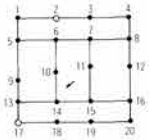
Ｃ９(16)区にある楕円形の土坑で、長径105㎝、短径70㎝、深さ30㎝を測る。底面は平坦で、側壁はやや外傾して立ち上がり、南東隅に小さな段をもつ。覆土は上層茶褐色砂質土、下層青灰色砂質土である。南西部でピット三基と重複し、本土坑はSB14の柱穴より古く、SB11の柱穴より新しい。遺物は出土していない。

SK７（図版９・43－１）

Ｃ９(16)区にある楕円形の土坑で、長径130㎝、短径110㎝、深さ10㎝を測る。底面は中央に

向けて緩く凹み、西壁はその傾斜のまま、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は上層が暗茶褐色土、中層が炭化粒を多く混入する茶褐色土、下層はしまりの強い茶灰褐色土である。本土坑はSB14の柱穴に切られており、上層はこの柱穴が埋まった後に堆積したものである。また中層中の炭化粒は径80cm位の広がりをもって集中が認められた。本土坑は底面のしまりも良く、ここで火を焚いた可能性が強く、SK30と近似する。遺物は出土していない。

SB46（図版11・42—1）



A・B8区にある掘立柱建物(N—41°—E)で、SB95と重複する。桁行3間(7.4m)、梁間4間(6.9m)で、東西両面に廂をもつ。身舎に束柱がある。柱間寸法は、南北が2.4～2.6m、東西は約2mで、廂の出は西側が1.4m、東側が1.5mである。柱穴掘形は身舎が径20～40cmの円形、廂が10～30cmの円形で、深さは12～39cmである。柱穴10・14はSK23の覆土を掘り込んでいる。

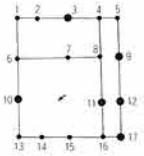
SB95（図版11・42—1）

A・B8区にある掘立柱建物(N—38°—E)で、SB46と重複する。南北2間(5.5m)、東西3間(5.1m)で、柱間寸法は東西方向では東側1間が1.2mと短く、南北方向でも等間ではない。柱穴掘形は径20～40cmの円形で、深さは9～38cmである。柱穴3に径7cmの丸柱の柱根が遺存していた。柱穴6はSK23の覆土を切る。

SA99（図版11・42—1）

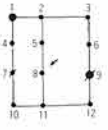
A8(5)・B8(1・2)区にある2間(4.0m)の柱列(N—48°—E)である。柱間寸法は2.0m等間で、柱穴掘形は径30～50cmの円形で、深さは15～32cmである。東側柱穴に丸柱の柱根が遺存する。方向はSB1[illegible]・46などと共通する。建物の可能性も否定できない。

SB91（図版12・41—1・50—10）



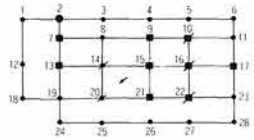
A・B8区でSB17と重複する位置にある掘立柱建物(N—42.5°—E)で、南北4間(6.7m)、東西3間(8.0m)である。南面に1間(1.2m)の廂をもつ。東側1間のところに間仕切りの柱が2つある。この他に束柱の可能性のある柱があり、総柱の可能性もある。柱間寸法は南北・東西方向ともに不揃いである。柱穴3・9～12・17に丸い柱根が遺存しており、柱穴3・9・10は谷側へ傾斜する。

SB92（図版12・41）



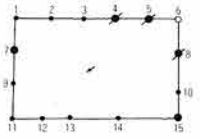
A・B8区でSB17・SB91と重複する位置にある掘立柱建物(N—45°—E)で、南北2間(5.1～5.3m)、東西3間(5.7m)である。北から1間に束柱がある。柱間寸法は不揃いで東西が1.8m・2.2m、南北が北が2m、南が3.1～3.3mである。柱穴掘形は径20～40cmの円形で、深さは4～54cmである。柱穴1・9に丸柱が遺存する。柱穴8・11から土師器と羽口が出土している。

SB17（図版12・41・50—1～6）



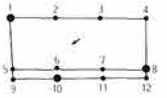
Ａ・Ｂ８・９区の下段にある最大の掘立柱建物(Ｎ―45°―Ｅ)で、桁行５間(14.1ｍ)×梁間４間(6.7ｍ)である。東・西面に廂をもつ。身舎には束柱がある。廂の出は東面が1.5ｍ、西面が1.2ｍで、身舎の柱間寸法は桁行が北より2.9ｍ・3.1ｍ・2.4ｍ・3.2ｍで等間ではなく、梁間は2.1ｍ等間である。北側の１間(2.5ｍ)は、廂と考えられるが、身舎がここまでのびる可能性もある。柱穴掘形は方形で相対的に身舎が大きく、廂は小さい。身舎の柱穴は一辺40～60㎝の方形であるが、柱穴16は一辺80㎝もある。柱根の遺存状況は良好で、身舎は15基のうち12基に柱根か礎板が遺存していた。身舎の柱は角柱で、礎板は方形の大きな板である。掘形埋土は黒色土と地山土の互層である。この建物は身舎が総柱で床張りであり、前後に廂をもつうえに、柱根や礎板の大きさや形態からみて、かなり立派なものである。柱根は柱穴９・10で谷の方向にかなり傾斜し、その根元が地山にかなり食い込んで検出された。一方、柱穴７・13・15・16・21・22など柱根が遺存していてもほぼ垂直な状況のものもある。

SB93（図版13・42―３・50―７・８）



Ａ・Ｂ９区にある梁間３間(6.4～6.6ｍ)×桁行５間(10.9～11.1ｍ)の掘立柱建物(Ｎ―36°―Ｅ)で、東側柱列南端の柱穴(６)は明確でない。柱間寸法は北妻と西妻ではほぼ等間で、それぞれ約2.2ｍとなるが、そのほかはかなり不揃いである。柱穴掘形は径30～50㎝程度の円形で、深さは16～53㎝である。柱穴４・５・８には柱根と礎板が遺存していた。柱根(図版32―81)は径約15㎝の丸柱で、礎板(図版32―82～84)は一辺約12㎝、厚さ約４㎝の方形の板材を２～３枚重ねている。柱根は丘陵側から谷側に傾斜していた。埋土は暗黄色砂質土で、SD12を切っている(柱穴４)。

SB94（図版13・42―３・50―９）



Ａ・Ｂ９区にある梁間２間(4.0～4.2ｍ)×桁行３間(8.9ｍ)の掘立柱建物(N―40°―E)で、西側に１間(0.6ｍ)の廂をもつ。廂の柱穴(9～12)は身舎の柱穴と通りが悪い。桁行の柱間寸法はほぼ3.0ｍの等間である。柱穴掘形は身舎で径40～60㎝、廂のものはこれよりやや小さい。平面形は円形にちかい。掘形の断面は丘陵側から谷側に向って傾斜しているものがあり(柱穴３)、埋土は黒灰色土に地山ブロックを含む。柱穴１には柱根が遺存していた。この柱根は径約25㎝の丸柱である。このほかに柱穴８・10で柱根が遺存していた。柱穴８・12は断面観察よりⅤ層を切り込んでいることが確認できる。

SD10・SD12（図版13・46―３）

Ｂ９・10区にある段の裾にめぐらされた２本の溝である。それぞれの溝のプランは部分的に不明瞭で、南側は平坦面のかたちにそって西側へ屈曲する。両者の切り合い関係は不明瞭で、覆土も同一で区別できない。北側はSD22につらなると推定される。幅20～50㎝、深さ10～15㎝で、覆土は黒色土である。平坦面に斜面からの水が流れ込まないようにするための溝で、建物

の建て替えによって何度か掘りなおされたり、溝さらいされたものと考えられる。SD12より木製農工具(12)、珠洲焼(176)が出土している。

SE 4（図版13・48—３）

Ｂ10(１)区にある井戸である。Ⅴ層を切り込んだ井戸で、径１ｍ、深さ約70cmの円形素掘りである。底面には越前焼大甕(254)の底部が敷かれていた。覆土は上・下２層で、上層は青灰色土、下層は暗青灰色砂質土で、両者は漸移的に変化する。曲物底板(20)が出土している。

SE16（図版13・48—５）

Ａ９区のSE15に隣接してある楕円形素掘りの井戸で、径0.9～1.25ｍ、深さ約50cmである。覆土は上層と中・下層で明瞭に分かれる。上層は黄灰色砂質土で、中・下層は黒っぽい土で、下層は粘性をおびる。下層は井戸が機能していた時期に形成されたもので、上層は人為的な埋め土あるいは洪水等により一時的に埋ったものと推測される。出土遺物はない。

SE15（図版13・48—４）

Ａ９区にある円形素掘りの井戸で、径0.85～1.1ｍ、深さ約60cmである。覆土は黒色土で、下部はやや粘性が強く、最下層にうすい植物の腐植物の層が存在する。出土遺物はない。

SE18（図版４・48—６）

Ａ９区にある円形素掘りの井戸で、径約１ｍ、深さ約60cmである。覆土は最下層がうすい黒色粘質土層で、その上に青灰色、黄灰色粘土のブロックがはいり、さらにその上に灰黒色土層となる。中層の粘土ブロックは井戸を廃棄する際の埋め土と考えられる。出土遺物はない。

SE98（図版４）

Ａ８(２)・Ａ７(22)区にある円形素掘りの井戸で、径約１ｍ、深さ約50cmである。覆土は灰黒色土で、出土遺物はない。

SK23（図版11・42—１・48—７）

Ｂ８(１・６)区にある土坑である。平面は径約２ｍの円形で、深さは約15cmと浅い。最下層に黒色土があり、その上に暗灰褐色土がのる。北側の部分は黒色土の上に地山にちかいよくしまった淡灰褐色土がある。須恵器・土師器が出土している。平安時代の遺構と考えられる。

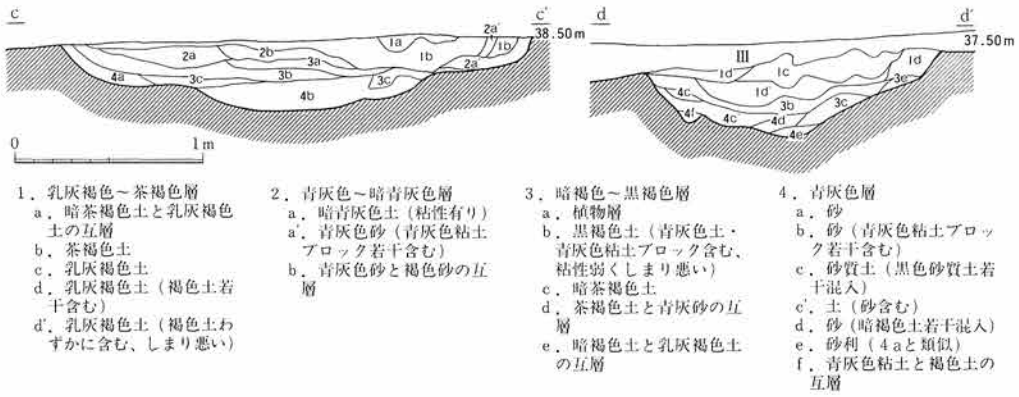
SD42・SD43（図版11・42—１）

Ｂ７(１)区にある小さな構で、方向は等高線に平行する。プランはあまり明瞭でなく、底面や壁面に凹凸がみられ、幅20～30cm、深さ14～28cmで、長さ1.5～４ｍほどである。SD43からは珠洲焼(163)が出土している。

SD57（図版３・46）

Ｂ２～４区、Ａ４～６区を等高線にほぼ沿って東から西へ走る溝である。Ａ５区からＡ６区にかけてほぼ直角に屈曲し北へ伸びる。最小幅約70cm、最大幅約1.5ｍを測り、深さは13～41cmである。調査区内の約29ｍを発掘した。この溝は調査区北西部で検出された水田跡を切って掘

削している。調査区の北東に設定したトレンチでの土層観察の結果、わずかに舌状に張り出した丘陵斜面裾をまくようにさらに西へ伸びると推定された。崩落を防ぐために杭を打設して溝上場を護岸している(図版33・43～48)。等高線に沿って掘削されていることより、水田に水を供給するための用水路と推定される。珠洲焼(187)・土師質土器(161)・土師器(44・52)のほか、木製品(12・13・25・36・50・52)が出土している。



第11図　SD57土層断面図

SD54（図版３・47―６）

Ａ・Ｂ６区丘陵斜面に沿って東から西へ伸びる。幅50cm～1.3m、深さ９～31cmを測る。SD57に西側を切られ全長は不明である。SD57を超えてさらに西側へ伸びていないことより、全長は18.2mより長くはならない。

SD97（図版３）

確認面上で多量の木材・自然木が出土し遺構の検出作業が困難であったこと、確認面からの掘り込みが浅かったことより、全体を発掘することはできなかった。Ｂ５区中央部斜面側の約4.75mを発掘した。幅約20～40cm、深さ６～10cmを測る。溝の南東側はＣ５区で若干南側に曲がり、その延長にはSX２(横井戸)がある。一方溝の北西側は地山等高線から斜面下方に向って朝顔状にしだいに開く浅い溝状の窪みが存在したことが推定される。このことよりSD97は、SX２の湧水を斜面下方の水田等に導くための用水路的な溝であったと考えられる。

SK58（図版３）

Ａ・Ｂ５区に位置する3.3×４mほどの不整方形を呈す土坑である。斜面に掘られた浅い土坑であるため北東側の立ち上がりは、明瞭でない。覆土は黄褐色粘質土である。

水田跡（図版14・45）

調査区北側の低い部分、Ａ・Ｂ２～６区で検出された。水田跡の存在は本調査の前には全く予想しなかったもので、調査日程の終盤になって、断面観察によりⅤ層下に淡黄灰色シルトを

介して黒色土層が存在し、その上面に水平な部分があり、アゼ状のたかまりや足跡状のくぼみが確認され、黒色土層が水田耕作土ではないかとの考えがもたれた。そのため、この黒色土を覆う淡黄灰色シルト層をていねいに除去したところ、アゼと足跡が検出され、これが水田跡であることが判明した。この段階ではすでにSD57の東側はこの黒色土層を除去しており、この部分についての詳細は不分明である。また、プラント・オパール調査も実施できなかった。

水田面は、南南東から北北西に緩く傾斜する緩斜面の標高36.5～37.5mにある。水田耕作土は腐植物を多く含む黒色土である。この層は低い部分ほど厚く、自然に堆積した層である。水田面の状況がよくわかるのはSD57の西側、標高37mより低い部分である。ここには等高線に平行する2列のアゼがみられる。北側のアゼ1はもっとも遺存状況がよい。上端幅で30～40cm、下端幅で50～80cm、高さ約10cmで、断面はカマボコ状となる。アゼの部分の土は水田耕作土と同じ土である。アゼ1は水口で途切れ、西側にほぼ直角に屈折し、アゼ3となる。水口のその南側にアゼ2がある。アゼ1とアゼ2の間の水口は50cmほどである。アゼ2の南西側2～3mのところにアゼ4・アゼ5・アゼ6が一直線上にある。アゼ4とアゼ5の間は30cmほどの水口であるが、アゼ5とアゼ6の間は明確でない。アゼ2～アゼ6はいずれも高まりがさほど明瞭でない。幅は約50cmである。

水田面には多くの足跡が残されている。足跡はA4区のほうが全般に少なく、歩いた痕跡が把握される部分もある(下図)。アゼ1とアゼ2よりも低い部分は20cm以上の高低差があり、このなかにごく小規模なアゼが存在した可能性もある。水田面を覆っていた淡黄灰色シルトは洪水などの一時的な堆積層と考えられ、これによって水田が埋没したと考えられる。水田面上面より若干の土師器片が出土している。

水田面の足跡

第Ⅴ章　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は平安時代・中世・近世の土器・陶磁器・木製品・石製品・鉄製品などで、土器・陶磁器の出土量は総計でコンテナ(深さ約９cm)25箱程度である。前述したように、遺物包含層は時期によって明確に分離しない部分が多く、土器・陶磁器を除くと、時期が不明なものもある。したがって、ここでは遺物の種別ごとに記述する。

１．土器・陶磁器

いずれの時期のものも、遺構からまとまって出土したものはほとんどないため、種別ごとに記し、遺物の出土地点についてはそれぞれの説明に加えることにする。時期別では平安時代の須恵器・土師器がもっとも多く、これに中世の陶磁器が次ぐ。近世陶磁器は少ない。須恵器・土師器と中世陶器の一部は胎土分析を行った(第Ⅴ章７・第Ⅵ章１参照)。

Ａ．平安時代

土器・陶磁器のなかではもっとも出土量が多い。須恵器と土師器の量比は、土師器が圧倒的に多く、目算で８割以上を占めると思われる。いずれも９世紀後半から10世紀前半にかけてのものであり、時期幅はあまりない。貯蔵形態は須恵器、煮沸形態は土師器で、供膳形態は須恵器と土師器とがあるが、土師器が圧倒的に多い。

１）須恵器（図版15・18～20・51～53）

無台杯・有台杯・椀・杯蓋・長頸瓶・横瓶・大甕がある。一部をのぞけば胎土・色調・焼成状況などから、いくつかの生産地を想定できるようなものではなく、ある程度共通した様相を呈する。胎土にはおおむね細かい白色の粒子を多く含むほかは精良で、焼成は堅緻で灰色を呈するものが多い。

無台杯（１～10）　口径11.9～13.6cm、器高2.5～3.3cmで、いずれも身の浅い器形(径高指数21～27)で、器壁はごくうすいものである。口径は８を除くとすべて12cm前後である。底部は水平かややくぼむもの(１～３・10)と、若干丸味をもつもの(７・８)がある。前者は底部と体部の境が比較的明瞭なのに対し、後者はあまり明瞭でない。体部のひらきは大きく、立ち上がりの角度は50度前後で、体部はほぼ直線的である。内面の底部と体部の境は著しくくぼむものが多い(１～３)。また口縁部内面がくぼむものがある(１・３・５・９)。底部外面はヘラ切り、

ほかはロクロナデで、これに伴う器面の凹凸は比較的大きく、器面にはナデの際に付着したヌタ様の縞がみられる。器面は特になめらかである。それぞれの出土地点は1はC7区、2はB7(6)区土器集中地点、3はC7(21・22)区、4はSK31、5はB7(6)区、6はB8区、7は不明、8はSK37、9はA6(19・21)区、10はA9・A10区である。

有台杯（11・12・14～16・19） 有台杯と有台椀は本来異なった器種であるが、破片では両者を明確に区別できないものもある。いずれも破片であり、全体の器形がわかるものはない。11・12は口径12cm未満で、12は体部のひらきがやや大きい。底部(14～16)の高台はいずれも低く、明瞭に断面が方形となるものはない。15・16は接地面をもつが、外端接地で、14は接地面は丸くおさまる。14・16からみると、底部と体部の境は明瞭でなく、体部下半は丸味をもつ。19は高台が残っておらず、有台杯でない可能性もある。19は特に黒っぽい色調で砂粒を多く含み、ほかと生産地のちがいを想定させる。底部外面はいずれもヘラ切りである。有台杯の器面は無台杯ほどなめらかでなく、ヌタ様の縞はみられない。11はSK31、12はA9区、14はA7区、15はA6区、16はB5区、19はA10区出土である。

有台椀（13・17・18） 13は口縁部が外反しその下方に稜をもつことから、椀とした。17・18の高台は有台杯のものより高く、椀と考えられる。17の高台は強く内傾する広い面をもち、外端部はやや尖り気味となる。体部下半はひらきが大きく、有台杯との形態差は明瞭である。底部外面はヘラ切りで、ヘラ削りなどは施されない。体部外面の器面の凹凸は大きい。18の高台は断面方形にちかい。底部外面はヘラ切り痕を残す。13はB2・B3区、17はB4区、18はSX2出土である。

杯蓋（20・21） 杯蓋は有台杯よりも量的に少ない。20・21ともに縁部は欠失する。つまみは環状で比較的大きい。天井部の器壁はやや厚く、外面はヘラ切りと思われる痕跡を残す。20はヘラ切り後にロクロ削り、21はロクロナデを施す。体部外面と内面はロクロナデである。20はB6(12)区、21はB6・B7区界線アゼ出土。

長頸瓶（22～28） 22～25は口頸部である。22は口径10.6cmと小さく、口縁端部外側に面をもつが、面の下端は顕著には引き出されない。A9区出土。白っぽい色調で須恵器のなかでは目立つ。23・24は22より大きい。23は口縁部外側の面下端が明瞭に垂下する。形態的には24と比較して口縁部が直線的である。B4区出土。24は口縁端部が上方につまみ上げられ、外側に面をもつ。その面下端は垂下せず丸味をもつ。B2・B3・B4区出土。25は口径20cmと大きい。大きく外反する口縁部で、端部の外側に面をもつ。面の下端はやや垂下する。C3区出土。

26～28は体部下半である。高台はいずれも低く、断面方形を呈し、接地面は広い。底部が広く残る28の外面は、ヘラ切りののちロクロ削りである。26の体部外面下端はきれいにロクロ削りされるが、28はこれが顕著でない。底部内面は27が指頭圧痕、28はエゴテ状の工具による調整である。26はC5区、27はB3区、28はC4・C5・B5区出土である。

横瓶（29）　形態からみて、横瓶と考えられる。口縁部は上方に広い面をもち、その外端部は外方へひき出される。口縁部内面にロクロ削りがなされる。Ｂ３区出土。

大甕（75～77・79～95）　いずれも小破片ばかりであり、器形がわかるものはない。体部の外面の叩き目と内面のあて具の文様とそのパターンは多様であり、おおかたの種類については図示した。

75ａ・ｂ・ｃは同一個体の口縁部と体部である。口縁部(ａ)は直線的にひらき、端部は外側に傾斜する広い面をもつ。その外端部は外方に長くひき出され、その下方に突部がある。口縁部と体部は接合部で剥離しており、体部の剥離部には叩き目が明瞭に残る。外面は平行叩き目で、これと直交する木目様の細かな条線がみられる。外側の叩き目は上位(ａ)では縦位、中位(ｂ)では横位、下位(ｃ)では斜位となる。内面のあて具は上位(ａ)では明瞭な同心円文で、中位(ｂ)では同心円文からやや弧状気味の平行文に変化し、下位(ｃ)では両者が重複する。また上位には内外面に刷毛目がわずかにみられる。器壁が厚く、かなりの大型品である。多くの破片があり、ＳＸ２とかなり広い範囲から出土している。

76も大型品の口縁部で、外反する口縁部の外側は大きくくぼみ、上下にひき出される。内外面のナデは75より粗雑である。Ａ10区出土。

77は外面が木目の斜交する平行文、内面が同心円文で、外面にはヨコナデが一部みられる。Ａ10区出土。

79は外面が木目の斜交する平行文、内面が同心円文で、外面にわずかにカキ目がみられる。Ｃ３区出土。

80は破片を研磨具として二次使用したもので側面が磨滅し、表面に打痕がみられる。外面は木目の斜交する平行文、内面が平行文である。Ｃ５区出土。

81は頸部から体部上端で、外面は細かい格子目、内面は木目がよく残る同心円文である。Ｃ３区出土。

82は体部下半で、底部との接合部で器壁が厚くなる。外面は木目が斜交する平行文、内面は平行文である。Ａ６・Ｂ６・Ｂ７区出土。

83は外面が斜格子目文とカキ目、内面が平行文と同心円文である。Ｂ２・Ｂ３・Ｃ３区出土。

84は外面の叩き目が83と同一で、胎土や器壁の状況からも同一個体と考えられる。内面は細かな木目が直交する平行文と、これとは別の平行文である。拓影図の下部はおそらく底部にちかい部分と推定され、この部分に木目のない平行文が施されている。83は体部の上位にあたるものとみられ、同心円文が上位になろう。Ｂ３区出土。

85は研磨具として二次使用された80と同一個体である。Ｃ４区出土。

86は体部下位にあたるもので、器壁が厚くなる。外面は間隔の広い木目が直交する平行文で、一見格子目状となる。内面は平行文で、木目状の細かい条線がみられる。Ａ10区出土。

87は外面斜格子目文、内面弧状の平行文である。A 7 区出土。

88は外面格子目文、内面すり消しである。内面にはかすかに一部格子状の叩き目が残る。A 10区出土。

89は外面格子目文、内面斜格子目文と同心円文である。斜格子はあるいは斜交する木目かもしれない。A 3 ・ B 3 区出土。

90は外面格子目文、内面すり消しである。消された叩き目文は不明である。B 3 区出土。

91は外面格子目文、内面は放射状文かと思われる文様である。A 8 区出土。

92は外面は細かい格子目文、内面は格子目文と同心円文である。A10区出土。

93は84と同一個体で、B 2 区出土。

94は外面格子目文、内面は細かい放射状文である。C 3 区出土。

95は外面が木目の斜交する平行文、内面が同心円文である。同心円文には車輪状のわずかな線がみられる。B 6 区出土。

2) 土師器（図版16・17・20・54・55）

土師器は遺存状況が不良なものが多い。そのため器面が荒れて調整などがわからないものもいくつかある。ほとんどがロクロを使用したロクロ土師器であるが、わずかにロクロ不使用の非ロクロ土師器を含む。器種としては無台椀と甕が大半を占める。胎土はおおむね精良である。なお38は海綿骨針を含む。

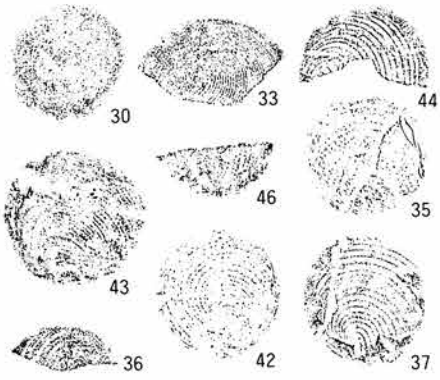
無台椀（30～50） かつての器種分類〔坂井秀弥1984・1986 a 〕では「杯」としていたものである。土師器の供膳形態の主体をなす。大小二つの器種がある。小さい無台椀IIが量的に多い。

無台椀II（30～46） 口径10.8～12.8cm、器高3.3～4.5cm、底径4.2～6.2cmで、若干法量と器形に相違がある。無台椀IIには内面を黒色処理した黒色土師器はみられない。法量では30・31などがかなり小さく、37～41などはやや大きい。調整は底部外面が回転糸切り無調整、ほかはロクロナデである。30は唯一の完存品で口径10.0cm、器高3.9cm、底径4.2cmである。底径が小さく、体部は丸味をもって立ち上がり、口縁端部はていねいにロクロナデされ、尖り気味である。ほかもていねいにロクロナデされ、器面はきれいである。口縁部外面はほかより赤く、重ね焼きされたことがうかがえる。

器形には、①底径が小さく、体部に丸味をもつもの(30・31・34・36・37)、②底径がやや大きく、体部に丸味をもつもの(33)、③体部にほとんど丸味をもたず、口縁部が外反するもの(35・38～41)などのタイプがある。①は内外面のロクロナデが比較的ていねいで、器面はなめらかなのに対し、③はロクロナデによる器面の凹凸が著しく、つくりは粗雑である。特に35・39・40は著しく、39は外面に沈線のようなくぼみが三条みられ、底部内面の中央は明瞭な凸部がある。②も①に比してロクロナデはていねいでない。こうした器形と調整のちがいは、時期

差にもとづく可能性が考えられる。

底部のうち46は底部外縁が突出気味で、体部の丸味が大きい。底部外面の回転糸切り痕には、条線の細密なものと太い粗いものの２種がある(第12図)。糸切り痕が観察されるもののうち、30・33・36・42・43・46は細密で、35・37・39・40・44は粗い。粗いものは前述した③のタイプに多く、つくりの粗雑な点と回転糸切りの原体には一定の関係が看取される。



第12図　土師器無台椀回転糸切り痕(1：3)

それぞれの出土地点は、30はＣ７(21)区、31・32はＢ３区、33はＡ９区、34はSK24、35はＣ７(22)区、36はＢ６・Ｂ７区、37はＡ10区、38はＢ３(６)区、39はＢ10区、40はＢ４区、41は不明、42はＣ７(17)区、43はＡ10区、44はSD57、45はSK24、46はＡ10(２)区である。

無台椀Ⅰ（47～50）　量的には少ない。黒色土師器が多い。法量はほぼ口径15㎝、器高５㎝である。黒色土師器の47は体部外面下半から底部をロクロ削りするが、底部外面の中央には一方向のヘラ削りがみられる。また、かすかに回転糸切り痕が残る。内面はヘラミガキである。48はほかの土師器に比して胎土に砂粒を多く含み、器肉が著しく黒いなど、大きなちがいがある。底部外面のヘラ削りは不定方向で、内面はヘラミガキである。49は底部破片で、底部外面と体部外面下端をロクロ削り、内面は黒色処理・ヘラミガキである。50は全体に器壁がごくうすい。底部外面から体部外面下端はロクロ削り、ほかの外面はロクロナデ、内面はヘラミガキである。内面に全く黒色処理の痕跡をとどめないが、内面ヘラミガキと外面のロクロ削りの調整技法は黒色土師器と同一で、一般的な土師器にはあまりみられないことから、二次焼成で内面の黒色処理が完全に消えたとも考えられる。47・48はＡ10区、49はＡ２・Ｂ２区、50はＣ７区出土である。

有台椀（51・52）　無台椀に比してきわめて数が少なく、希少な存在である。51は高台がごく低いものである。底部外面の調整は不分明であるが、かすかに糸切りと思われる痕がみられる。Ａ９区出土。52は高台のみ遺存するもので、高台は比較的高く、外方へひらくものである。SD57出土。51・52ともに体部が不明なため、有台皿の可能性もある。

皿（53）　皿もごく少ない器種である。底部は不明であるが、有台と考えられる。器壁はうすく、口縁部は外反する。SK37出土。

甕（54～71・96～100）　甕には大きさや細部の器形に多くの種類がある。法量からは小型品(54～57)、中型品(58・64～67)、大型品(68～70)などに分けられるが、その区別は明瞭なものではない。70のみ非ロクロ土師器である。59は鉢ともいうべき器形である。

口縁部はおおむねくの字状に外反するが、屈曲の度合いや端部の形態など多様である。55・

56はあまり屈曲しない。端部は、丸くおさまるもの(54・56・66)、面をもち下端部が垂下するもの(67)、上方へつまみ上げられ外傾する面をもつもの(55・64・69)、大きく上方へ屈折して、ひき上げられるもの(57・58・65・68)などがあるが、形態は体部ともあわせて、かなり多様である。59・71はあまり類例のない器形である。それぞれの出土地は、54はA9区、55はA10区、56はA7・A10区、57はC7区、58・59はSK31、64はA10区、65はSK31、66はA6区、67はC7区、68はB2区、69はA9・A10区である。

70は非ロクロの土師器で、くの字状に明瞭に屈折し、直線的にひらき、端部はわずかに面をもつ。内面の口縁部と体部の境は明瞭な稜をもち、体部は張りがほとんどない。器面はあれており、調整は不分明であるが、口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はハケ目と思われる。胎土に砂粒が多く、胎土色調はほかと明確に区別される(第Ⅶ章1A参照)。この胎土は無台椀48と類似している。A10・B10区出土。

71はかなり大型のもので、長胴の形態ではなく、類例はあまりない。口縁部は直線的にひらき、端部は外傾する面をもち、その上下がそれぞれひき出される。体部上半はロクロナデ、同下半は平行叩き目ののちヘラ削り、体部内面上半はロクロナデ、同下半はあて具のくぼみがみられる。A10区出土。

59は口縁部が外反しないものである。口縁部はやや肥厚し、端部は丸くおさまり、内面に凹線状のくぼみがみられる。

底部(60～63)はいずれも平底で、底部外面は回転糸切りで、ほかはロクロナデである。甕の底部は無台椀の底部と比較して、相対的に器壁があつく、体部の立ち上がりの角度が大きく、内面の調整があらい。平底の形態は甕のうち、小型品・中型品に限られ、大型品は丸底で、体部下半から底部にかけて叩き目をもつものが一般的である。60はB2・B3区、61はC3区、62・63はA10区出土である。

叩き目をもつ破片として5点示した(96～100)。須恵器と同様で種類は一定していない。外面は99が格子目文のほか平行文で、内面は平行文(96)、同心円文(98)、連弧文(100)、すり消し(97・99)である。97は平行文と連弧文のあて具痕が観察される。96はB7区、97はA9区、98・100は不明、99はB6区出土である。

鍋(72)　鍋は甕に比してごく少ない。72は「く」の字状に外反し、端部が上方へつまみ上げられる。体部内面はカキ目、ほかはロクロナデである。SK37・B6区出土。

鉢(73)　非ロクロの土師器で、胎土・つくりは74と共通し、同一地点から出土している。口径14.6cm、器高9.6cmで、安定した大きい平底をもつ。口縁部内外面のみかるくヨコナデし、ほかは指頭圧痕で、底部外面は無調整である。体部内面下半にはあらいナデのようなものが加えられる。全体に強い二次焼成を受け、口縁部内面にススが付着する。A10区出土。

筒形土製品(74)　器径約12cm、器高約12.5cmの筒形の土製品で、粘土紐の痕跡が明瞭に残

る。一方の端部は器壁が肥厚し、内側にはり出し、もう一方の端部は面をもつが、肥厚しない。図の外面下半部に強い二次焼成を受ける。類例は上越市一之口遺跡〔坂井秀弥1986ａ〕にあるが、用途は不明である。73と同一地点のＡ10区出土。

Ｂ．中　　世

中世の土器には、中国陶磁器・国産陶磁器があり、国産陶磁器には美濃焼を含む瀬戸焼、珠洲焼、越前焼などのほか、在地産の陶器と土師質土器がある。唐津焼は近世に含めることにする。全体ではかなりの時期幅がある。中国陶磁器は比較的多く、国産の施釉陶器である瀬戸・美濃焼よりもかなり多い。すり鉢や甕などの日常雑器では珠洲焼が大半を占め、越前焼や在地産の陶器はごく少ない。在地産と考えられる土師質土器は皿のみで、量的にも少ない。時期は13・14世紀が多く、その前後の時期のものも多少ある。

１）中国陶磁器（図版21・56・57）

青磁・白磁・青白磁・染付・緑釉がある。全体で約50点出土している。小破片のものが多いが、可能な限り図化につとめ、その他のものは写真で示した。全体の2/3以上を青磁が占める。時期幅がかなりあり、それぞれ多くの種別に分けられる。ここではそれぞれに説明を加えるにとどめ、総合的な時期区分やそれぞれの構成については後述する（第Ⅶ章２）。

青磁（図版21・56・57）

劃花文碗（101～103・115）　５点ある。101は全く外反しない口縁で、内面に２条の沈線と蓮華文かと思われる文様を配する。比較的釉は厚く、淡灰緑色を呈する。Ａ８区出土。

102もあまり外反しない口縁である。内面に一条の沈線と片彫りの蓮花文を配する。釉はオリーブ色がかる。SK19出土。

103は端部がやや外反する口縁部で、内面に３条の沈線により区画し、そのなかに飛雲文と思われる文様がわずかに残る。釉はうすく文様の凹凸が器面に明瞭にみられる。釉調は火を受けたように白濁した淡灰緑色を呈する。Ｂ６区出土。

図版56―ａは小破片で、内面の劃花文の彫りは浅く、文様は明確ではないが、片彫りの蓮華文と思われる。SD41出土。図版56―ｂは口縁部内面に２条の沈線をめぐらすほかは文様はみられないが、劃花文碗と考えられる。SD57出土。底部(115)の文様は不明であるが、高台がていねいに削り出されており、劃花文碗の可能性が強い。Ａ３区出土。

蓮弁文碗（104～111・116）　もっとも点数の多いもので、蓮弁の表現方法によって、Ａ・Ｂ・Ｃ類に分けられる。

Ａ類（104～110）

いわゆる鎬蓮弁文といわれるものである。ここではもっとも多い。口径13㎝前後の比較的小

さなもの(104・105)と口径15cm前後のもの(106～110)がある。蓮弁は太いもの(104～108)と比較的細いもの(110)がある。

104はオリーブ色の釉で、蓮弁は比較的細く、剣頭と弁の右側の輪郭を描く。全体に彫りが深く、鎬が直線的で端正な感じがもたれる。確認調査トレンチC(C5区か)出土。

105は全体の約1/5を残す比較的大きな破片である。蓮弁は太く、間隔をおいて全体の輪郭を描いたのち、間弁を配する。鎬も直線的で全体の彫りあがりがよい。部分的に外面にヘラによる傷がみられる。釉は薄青緑色で青味が強い。破面に漆つぎの痕跡が残る。SD56出土。

106は太い蓮弁で鎬をもつ。オリーブ色の釉である。A9区出土。

107は太い蓮弁で鎬をもたない。オリーブ色の釉が一部剝離している。SD45出土。

108は口縁端部がやや外反する。蓮弁は太く、釉が濁っているためかその輪郭は不明瞭である。鎬もあまりはっきりしない。釉は淡暗緑色を呈する。A8区出土。

109は比較的蓮弁が細く、鎬は2本となる。釉は淡緑色で厚くかかる。SK37出土。

110は口縁端部がやや外反する。蓮弁は細く、その上半部のみ輪郭を描く。蓮弁の削り出しはきれいではなく、素地の表面には小さな傷が多くみられ、鎬もみだれている。A6区出土。

図示しなかったもの(図版57—a～g)はA類にあたるものである。いずれも110よりは太い蓮弁である。

B類(116)

鎬蓮弁文のなかでも、蓮弁が細長く、立体的に彫り出されたもので、釉は厚い。いわゆる砧手と呼ばれるものである。図化できたのは116だけである。高台は径が小さく、細く尖り、畳付を除き内外面に施釉される。高台内側の中央は突出し、露胎部と施釉部分の境は赤茶色を呈する。B6区出土。

図示しなかったもの(図版57—h～j・m～r)もこのタイプである。rは火を受けて釉は白緑色を呈する。

C類(111)

ヘラ先による線描の蓮弁文をもつもので、1点のみである。やや深い身の器形で、口縁部の外面はややくぼむものの外反しない。蓮弁の間隔はせまくない。釉はうすく、やや白濁した黄味をおびる。C6区出土。

無文碗(112～114)　口縁端部が外反しないもの(112)と外反するもの(113・114)がある。112は火を受け釉が白濁する。A6区出土。

113は体部下半が丸く腰が張り、端反りの口縁である。内面見込みに円形の沈線がめぐる。釉はやや黄味をおびた淡緑色で透明感に乏しく、外面下半の一部に露胎がのぞく。A3区出土。

114は端反りの口縁で、釉は淡緑色でうすくかかり、透明感がある。C4区出土。

図示しなかったもの(図版57—k・l)も無文碗と考えられる。lは端反りの口縁ではない。

鉢（117）　1点のみである。底部のみ遺存するものであるが、高台径が6.6cmと大きく、碗ではなく鉢と考えられる。高台はうすく、接地面は狭いが水平な面をもつ。この部分のみ露胎で、ほかは淡緑色の釉が厚くかかる。露胎部と施釉部分は赤茶色を呈する。体部は細い蓮弁を立体的に彫り出した鎬蓮弁文をもつ。口縁部は外側に水平にのびるものと考えられる。B3・5区出土。

香炉（118）　1点のみである。小形の筒形の香炉である。口縁端部は広く水平な面をもち、内側に張り出す。外面と口縁部内面に淡緑色の釉がかかる。A6区出土。

皿（119）　青磁の皿は1点のみである。底部内面に櫛描文を配する、いわゆる同安窯系青磁である。底部から体部は明瞭に屈折し、内面はこの部分に沈線様のくぼみをもつ。釉は透明感のある淡青緑色を呈する。A8区出土。

青白磁（図版21・57）

4点出土しており、すべて図示した。蓋・合子・梅瓶がある。

蓋（120・121）　120は器径3.5cm、器高1.8cmの小型品で、周縁を輪花状にし、8葉の花弁を配する。上面の周縁に一個の小さなリングを貼付する。下面に径2.0cm、高さ7㎜の軸部を貼り付ける。上面のみ施釉する。釉調は淡青白色で、透明感がある。A8区出土。

121は器径3.3cm、残存高1.7cmで、上面中央に貼付されたリングが欠失する。周縁は丸く、その内側に6単位の花弁状の文様を配する。下面に径1.3cm、高さ1.1cmの軸部を貼付する。上面のみの施釉で、釉はやや濁った淡青白色を呈する。A6区出土。

合子（122）　器径5.4cm、器高1.6cmの蓋である。上面周縁から側面上半部まで幅の狭い蓮弁を彫り出し、上面に花弁を二重にめぐらす。端部から内面下半部をのぞいて淡青白色の釉がかかる。B8区出土。

梅瓶（123）　ごく小さな破片であるが、外面にヘラによる施文があり、梅瓶と考えられる。内面は無釉でロクロナデによる凹凸が明瞭で、外面の釉は濁った淡青色である。A5区出土。

白磁（図版21・57、125～130）

7点出土した。図示していない1点は細い線刻の文様をもつ。

125は碗の体部下半で、内面に段をもつ。この段はヘラ先によるもので、その上がわずかに肥厚する。体部下半は露胎で、ほかはやや灰味をおびた淡黄白色を呈する。露胎部はヘラ削りされ、施釉部分は小さな気泡が多くみられる。素地はやや粗く、淡黄白色を呈する。横田・森田分類〔横田賢次郎ほか1978〕の白磁碗Ⅳ類にあたると思われる。A8区出土。

126・127はいわゆる口禿白磁である。126は碗の口縁かと思われ、口縁端内外面が露胎である。釉はやや青味をおびた白色を呈する。A6区出土。127はやや外反する口縁の形態からみて皿と考えられる。端部は面をもち、端部内外面が露胎である。釉は白色である。A5区出土。

128は端反りの皿で、器壁はごくうすい。淡灰白色を呈する。B10区出土。

129は無台の皿で、底部外面はロクロ削りである。遺存部には施釉されない。素地は白灰色を呈し、緻密である。B5区出土。

130は有台の小型の皿である。口径10.4cm、器高2.2cmで、身は浅く、口縁部はやや内彎する。高台は厚く削り出されており、接地面は若干丸味をもつ。内面と口縁部外面にやや青味をおびた釉がかかる。素地は淡黄白色を呈し、やや軟質で、露胎部のヘラ削りされる部分の器面に粒子の移動した痕跡がみられる。高台内面に判読不能の墨書があり、その上に黒漆が直径1.3cmほどの円形状に付着している。一部にススが付着する。C5区出土。

染付（図版21・57）

3点のみ出土している。すべて図示した。碗と皿がある。

碗（131・132）　131は内彎する口縁で、口縁部内外面にそれぞれ2条の界線を配し、外面に丸を三つ結んだ文様モチーフを加える。C8区出土。

132は高台部で、内外面にそれぞれ2条の界線を配する。内面中央にはほかになんらかの文様が加えられている。高台接地面は露胎であるが、きれいではない。B6区出土。

皿（133）　器壁のかなり厚いものである。内面に唐草と思われる文様がみられる。高台は低く、断面三角形を呈する。高台接地面から内側は露胎である。B7区出土。

緑釉（図版21・57）

124の1点のみ出土した。盤の底部から体部にかけての破片である。体部内面下位に2条の沈線がめぐる。体部外面下端はくぼみ、底部との境が明瞭である。釉は濃緑色で、うすくてむらがある。素地はきわめて粗く、小砂粒や黒色の大きな粒子を含み、淡灰色から淡灰褐色を呈する。二彩の可能性もある。

2）瀬戸・美濃焼（図版22・58）

天目茶碗（134～136・138）　134は口径11.2cm、推定器高6.5cm。口縁部はくびれ、わずかに外反し、その内面にゆるい稜をもつ。遺存部の下端にヘラ先による沈線がみられ、高台にいたる。体部外面下半は露胎でロクロ削りされる。釉は厚くて、黒色を呈する鉄釉で、表面に気泡が多くみられる。口縁部のみ茶褐色を呈する。素地は白灰色で、堅緻である。SX2出土。

135は口縁端部を欠く。口縁部はややくびれる。体部下半は器壁がやや厚くなる。釉は口縁部のみ茶褐色で、ほかは黒褐色を呈し、厚くかかる。露胎の体部外面下半はロクロ削りである。素地は淡黄灰色を呈し、ややがさつである。口縁部の破損面に漆つぎの痕跡がみられる。

136は口径11.8cmで、口縁部のくびれはあまりない。釉は口縁部のみ褐色で、ほかは黒褐色を呈する。素地は灰白色を呈する。B8区出土。

138は口縁部がくびれ、大きく外反するもので、端部の外面がやや肥厚する。黒褐色の鉄釉がうすくかかり、素地は淡褐色でがさつである。胎土からみて美濃大窯期の所産であろう。B8

区出土。

小壺（137）　高台をもたない平底の器形である。底部外面は回転糸切りで、体部外面はロクロナデである。内面と外面上半に黒色の鉄釉がかかる。素地は灰色を呈する。C４区出土。

平碗（139～141・148）　139は体部破片で、外面下端にヘラ先による鋭い沈線がめぐる。内面と外面上半に淡緑色の灰釉がかかる。内面に焼き台(トチ)の痕跡がみられる。外面の露胎部はロクロ削りである。素地は淡褐色で、がさつである。SX２出土。

140は体部破片で、やや深めの身と考えられる。内面と外面の上半に淡黄緑色のうすい灰釉がかかる。露胎部はロクロ削りである。素地は精良・堅緻で、灰色を呈する。A８区出土。

141も体部破片で、ゆるい屈曲をもつ。内面と外面の下端をのぞいて、淡緑黄色の灰釉がかかる。露胎部はロクロ削りである。素地は淡褐色で、ややがさつである。B９区出土。

148は口径21.6cmの口縁部から体部である。口縁部はややくびれ、外反する。外面はロクロナデとロクロ削りによる凹凸が大きい。内面と外面上半に淡黄緑色の灰釉がかかる。内面に焼き台の痕跡がみられる。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。素地は淡褐色で、がさつである。A７区出土。

おろし皿（142・143）　142は口径14.2cmで、体部の立ち上がりは強い。口縁端部は外傾する面をもち、その中央はわずかにくぼむ。底部内面におろし目がある。内外面ともロクロナデで、灰釉がかかる。素地は淡灰色で、堅緻である。A６区出土。

143は142より体部の立ち上がりが弱く、口縁端部内側(内端)が若干ひき出され、水平な面をもつ。内面におろし目をもつ。口縁端部に淡黄緑色の灰釉がかかる。素地は淡灰褐色で、堅緻である。B５・B６区界線出土。

小皿（145・146）　145は口径5.4cm、器高1.2cmのごく小型の灰釉小皿である。底部外面は糸切り無調整で、体部から口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。底部外面以外はロクロナデである。内面から口縁部外面まで、淡緑色の灰釉がかかり、素地は白灰色で堅緻である。B５区出土。

146は口縁端部の小破片である。外面に沈線のような条線がある。内外面に淡黄緑色の灰釉がかかる。素地は淡灰色で、堅緻である。B７区出土。

水注（150）　灰釉の水注体部上半部で、肩部より上に２条１単位の櫛描直線文がめぐる。内面は指頭圧痕が明瞭で、下部は弱いヨコナデが加えられる。外面下部はロクロ削りで、注口部外面は指頭圧痕である。外面に灰釉が施されるが、うすくかかっているため淡褐色を呈する。素地は灰色で堅緻である。内面に漆の付着がみとめられる。C５区出土。

壺（147・149）　147は鉄釉の小型の平底の壺で、底部外面は回転糸切り不調整である。外面に黒褐色の釉の流れがあり、露胎部は茶褐色を呈する。素地は淡灰色で堅緻である。A10区出土。149は大型の四耳壺で外面に淡黄緑色の灰釉がかかる。内面は弱いヨコナデと指頭圧痕で、

外面はロクロ削りである。素地は淡灰色でややがさつである。B5区ほか出土。

折縁深皿（151） 底部のみである。内面に淡黄緑色の灰釉がかかる。体部下半から底部外面周縁はロクロ削りで、その内側は静止糸切りか一方向のヘラ削りである。素地は淡褐色を呈し、ややがさつである。約1/6破片で、足はみられない。B8区出土。

丸皿（144） 144は口径10.0cm、器高2.4cmの灰釉丸皿である。体部から口縁部はゆるい稜をもって屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。高台は低く削り出されたもので、その内側に輪トチの痕跡がみられる。底部内面は釉が拭いとられる。釉はオリーブ色の灰釉で、素地は淡黄灰色で、がさつである。大窯期の所産であろう。C8区出土。

3）土師質土器（図版22・64）

器種は皿だけである。手づくねのものばかりで、ロクロ成形のものはみられない。法量から大小2器種に分けられる。全体でも15点ほどしかない。

小皿（152～154） a類・b類の2種がある。両者は形態・手法などが全く異なっており、時期が異なるものと考えられる。b類は152の1点のみである。152は器壁がうすく、色調・胎土もほかのものと明瞭に異なる。口径7.4cmの小型品である。端部は外方へ引き出され、端部上面がわずかにくぼむ。底部は丸くなると考えられる。内面と口縁部外面はヨコナデ、外面体・底部は不調整である。胎土は精良で、淡褐色を呈する。底部内面は黒色を呈する。B7・A7区出土。16世紀頃に比定される（第Ⅶ章2A）。

a類（153・154）はb類よりかなり器壁があつく、底部は平底にちかい。身は浅く、口縁部は丸くおさまる。口縁部内外面はヨコナデで、底部外面の不調整の部分とに若干の稜をもつ。底部内面は不明である。底部外面にはかるい指頭圧痕がみられる。胎土に小砂粒を含む。153はA7区、154はA6区出土である。

大皿（155～161） 口径11.4～13.8cm、器高2.6～3.5cmである。小皿の分類のb類はみられず、a類ばかりである。ただし、155のみやや異なっている。155は器壁がほかよりうすく、つくりの差が感じられる。胎土は比較的精良で淡茶褐色を呈する。これ以外のものは小皿のa類と同じく、器壁が厚く、ひとつの器種セットをなすものと考えられる。底部はやや丸く、体部との境は明瞭でない。口縁部の内外面を2段にヨコナデする。外面下位のヨコナデは特に強く、体部との境が明瞭で突出するものもある。口縁端部は丸くおさめる。外面体部から底部は不調整で、かるい指頭圧痕がみられる。底部内面はヨコナデに先行する一方向のナデを施す。158は口縁部内外面にタール状の付着物があり、159は黒褐色を呈する。それぞれの出土地点は156がB5区、157がA6区、158がA6区、159がA7区、160がA6区、161がSD57である。

4）珠洲焼（図版23～26・59～62）

珠洲焼は石川県の能登半島先端の珠洲市周辺で生産された中世陶器で、越後においても雑器の主体をなす。越後では珠洲焼の系譜下にある在地窯が北部の北蒲原郡笹神村で一基確認されている（背中炙窯）〔川上貞雄1975〕が、本遺跡の出土品には在地産と考えられる珠洲系陶器はみられず、すべて珠洲焼と考えられる（第Ⅵ章２、第Ⅶ章２Ａ参照）。

個体数は中世の陶磁器のなかではもっとも多い。従来の県内の中世遺跡の調査例で、これほどまとまった資料は少ないため、別個体と考えられるものは可能な限り図化した。全体の器形がわかるものは少ない。

壺（162～164・167～172）

叩き成形の壺Ｔ種（吉岡分類）がほとんどで、ロクロ成形の壺Ｒ種（同）は、ごく小型の179のみである。162は数点の破片から復元したもので、底部と口縁部を欠く。肩が強く張り、口縁部が大きい器形である。体部内面上端の口縁部との接合部はヨコナデで、２条の凹線様の段がめぐるが、さほど器壁は厚くならない。体部内面下端は底部との接合で器壁が厚くなり、段をもつ。外面の叩き目は条線が細かい。内面は円形押圧痕である。灰色できわめて堅緻な焼成状況である。SE１・SK51・Ａ８区ピット14ほか出土。

163は完形品ではないが、全体の器形がほぼ復元できる唯一の壺である。口径15cm、体部径32cm、器高（推定）37cm。口縁部は若干ひらき気味で、端部は外方へ短く折れ、断面三角形状となる。口頸部中位はやや器壁が厚くなる。体部と口縁部の接合部は器壁が厚くなる。体部は肩の張らない器形で、外面の叩き目は条線が比較的太く綾杉状に施され、内面は円形押圧痕である。底部から体部下端はヨコナデで、底部外面は不調整で器面は粗い。口縁部から体部上半の外面と底部内面に灰かぶりがみられる。ほかは暗灰色を呈し、胎土は粗く、焼成堅緻である。SX２・SD43・SD48ほか出土である。

167～169は口縁部である。167は外反する口縁端部が外側に肥厚し、丸くなるが、一条の沈線状のくぼみがみられる。灰色で焼成堅緻。Ｂ７区出土。168は外反する口縁端部が外側に肥厚し、その上面はヨコナデによってゆるくくぼむ。肥厚した外側の下はくぼむ。口縁部は短い。暗灰色で、焼成堅緻である。Ｂ７区出土。169は外反する口縁端部外側が肥厚して丸くなり、163のようには尖らない。器面はやや褐色をおび、やや軟質である。Ｂ６・Ｂ７区出土。

170～172は底部である。170は厚い器壁で、外面のヨコナデに一部やや条線の太い叩き目が施される。内面はヨコナデ、底部外面は静止糸切りで、その周縁は圧痕で糸切り痕が消えている。体部外面下端に指頭圧痕がある。底部外面に漆と思われる黒色の付着物がある。灰色で、焼成堅緻である。171は淡灰褐色で軟質のもので、外面に一部叩き目が施される。底部外面は調整不明。ほかはヨコナデである。Ｂ５区出土。172は器壁が比較的うすい。底部外面は静止糸切りで、内面はヨコナデで、凹凸が比較的大きい。底部内面は磨滅しており、壺を二次使用したか、あ

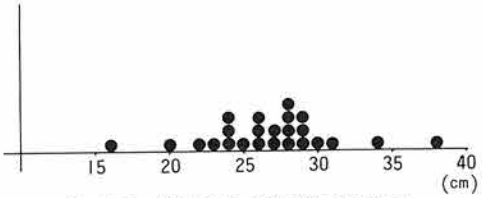
るいは鉢の可能性もある。灰色で焼成堅緻。A10区出土。

164は綾杉状の叩き目から、壺と判断される。叩き目の条線は比較的太い。灰色で焼成堅緻。A７区出土。

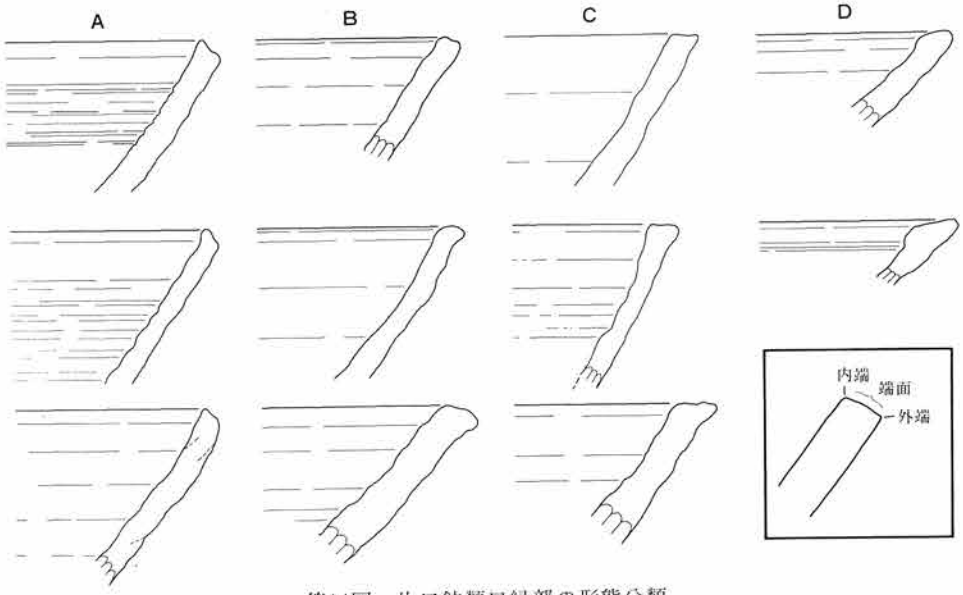
小壺（179）　体部径11.6cmの小型品である。口縁部と体部上半を欠くため、全体の器形は不明であり、類例もあまりみられない。底部は不調整で、ほかはヨコナデである。灰色で焼成堅緻。A７区出土。

片口鉢類（173～178・180～223）

すり鉢とおろし目のないこね鉢がある。破片の場合、両者の区別はむずかしい場合がある。鉢はもっとも個体数が多く、編年上の指標になる口縁部の形態やおろし目の原体や施文方法は一様ではない。全体の器形を復元できるものが少ないが、口径は15cmから38cmの幅がある（第13図）。25cm前後から30cm前後のものが大半で、このなかで大小の２器種に分けられるようである。胎土は白色の粒子のほか、動物起源の「海綿動物骨針」〔宇津川徹ほか1980〕（図版70－３）を含むものが多い。口縁端部の形態は、端部外面で面をとるA類、丸くおさめるB類、水平な面をつくり出すC類、端面が内傾するD類に大別される（第14図）。それぞれ、細部は一様ではなく、いくつかのバリエーションがある（第Ⅶ章２A）。おろし目は条線が細密で、断面が鋭いものと、太くて断面が鈍いものがある。条数は、８条程度のものから、密なものまである。ただし、小破片のものが多いので、全体の正確な条数は不明なものが多い。底部外面は大半が静止糸切りであるが、回転糸切りもわずかながら存在する。以



第13図　珠洲焼片口鉢類口径分布



第14図　片口鉢類口縁部の形態分類

下、口縁部が残っているものについてはこの形態分類を主に記述する。

口縁部Ａ類（180～187）

180～187は口縁部がＡ類のものである。おろし目は細密で断面が鋭いものが多い。条線は少ない。

180は口径34cm、推定器高14cm、底径12.4cmで、体部下半は直線的にひらき、口縁部にかけてごくわずか内彎する。口縁端部は内端部が上方へひき出され、尖る。内外面でもロクロによる凹凸が比較的めだつが、口縁部内面は細かな条線がみられ、ハケ状工具で調整したことがうかがわれる。おろし目は15本１単位で、細密で鋭利である。条数は不分明であるが12条程度か。口縁部内面にヘラ描の施文がみられる（図版62－４）。底部以外はロクロナデで、底部外面は静止糸切りである。灰色を呈し、堅緻である。SE１・SK51ほか出土。

181は口径31cm、器高14cm、底径14cmで、体部は直線的にひらき、口縁部が内彎する。口縁端部は内端がわずかに上方へひき出される。片口は幅が狭く、方向が偏っている。内外面ともロクロナデによる凹凸は比較的大きい。おろし目は細密で、幅３cm、12本が１単位で、全体は12条と推定される。淡灰色を呈し、堅緻である。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。SD22ほか出土。

182は口径30cm、器高14.2cm、底径12cmで、体部から口縁部までほとんど直線的で、器壁は比較的うすい。口縁端部の内端部は尖らず、丸くおさまる。内外面ともロクロナデによる器面の凹凸は大きいが、内面はとくに著しい。おろし目は細密で、幅1.8cm・12本、全体では12条と推定される。淡灰色を呈し、堅緻である。底部外面は回転糸切りの可能性もある。Ａ６・Ｂ６区出土。

183は口径28cmで、口縁部はわずかに内彎する。内端は上方へ引きあげられるが、外端は比較的丸い。器面にわずかな粘土紐の接合痕が残る。灰色で、若干軟質である。おろし目は細密で、幅1.8cm・９本１単位である。全体の条数は不明。Ｂ５・Ａ６・Ａ８区出土。

184は口径28cmで、口縁端部は内端が上方へ引きあげられて尖り、外端も明瞭な稜をもつ。おろし目は不明。灰色で堅緻である。Ｂ６区出土。

185は口縁部の小破片で、内面にヘラによる施文がみられる（図版62－５）。淡灰色で、やや軟質。Ａ５区出土。

186は小破片である。内端部が特に強くヨコナデされ、内側がくぼむ。灰色で堅緻。Ａ８区出土。

187は口径38cmの大型品で、体部から口縁端部までほぼ直線的であり、器壁も一定している。口縁端部はＡ類であるが、内端の引きあげは顕著ではない。おろし目は細密な幅2.8cm、18本の１単位で、全体の条数は不明であるが、密で20条は数えるものと推定される。灰色で堅緻。SD57・Ａ６区ほか出土。

188～191は小型品である。188は口径約15cmのもっとも小さいもので、おろし目はないものと推定される。口縁部はわずかに内彎し、口縁端部は面をもつが、内端部は引きあげられない点は注目される。内面はハケ目様の条線がみられる。暗灰色で堅緻である。A８区出土。

189は口径約20cmで、小破片であるが、おろし目はもたないものと推定される。口縁部は内彎し、端部は水平な面をもつが、内外に広くのびず、面は狭く、B類とは異なる。暗灰色で堅緻。B６区出土。

口縁部B類（190～194）

口縁部が丸味をもち、顕著に面をもたないものであるが、個体によるちがいは大きく、一様ではない。190は口径約22cmで、口縁部は直線的で、大きさに比して器壁はやや厚い。口縁端部はやや外傾する面をもつが、一般的なA類とは異なり、内外に引き出されてはおらず、全体に丸い。おろし目はもたない可能性がある。灰色で、堅緻。B６・C６区出土。

191は口径約24cm、器高９cm、底径10.4cmの小型品で、全体の約1/5を残し、全体の器形がわかる少ない例である。体部から口縁部は直線的で、端部は面をもつが、広く水平ではなく、内端・外端ともに丸くなる。底部外面は静止糸切りで、体部外面下端に持ち上げの際の指頭圧痕が残る。おろし目はさほど細密ではなく、幅2.4cm、10本が１単位で、全体は12条ほどである。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。灰色で堅緻。SX２最下層出土。

192は口径約25cmで、全体の約1/10残存するが、おろし目はみられない。体部はやや丸味をもち、口縁端部は上面が丸く、外端が外下方へ引き出される。内面下半部はよく磨滅する。暗灰色で堅緻。C５・C６区出土。

193は口径28cmで、器壁は厚い。口縁端部は丸味をもち、外端が外下方へ引き出され、内端はロクロナデで稜が明瞭である。おろし目はさほど細密ではない。全体の条数と１単位の本数は不明。灰色で堅緻。C５・B５区出土。

194は口径約25cmで、口縁端部は丸い。内面にハケ目様の条線がみられる。灰色で、内面に灰かぶりがある。堅緻。外面に研磨した傷があり、砥石のようなものとして二次使用したことが考えられる。確認調査Dトレンチ(B５区付近)出土。

口縁部C類（195～215）

口縁端部に明瞭な水平な面をもつタイプである。おろし目は太くて浅いものが多く、条数も多い。このタイプの口縁端部は水平な端面がわずかながらくぼみ、この部分がロクロナデで意識的につくり出されていることがわかる。そして外端がやや外方にのび、その下部がくぼんでおり、端部の水平な面と外端部下を同時にロクロナデしたことが考えられる。

195は口径約25cmで、内外端がともに内外に引き出され広い水平な端面をもつ。端面はややくぼみ、口縁部内面もくぼむ。灰色で堅緻。A10区出土。

196は口径約24cmで、内端が肥厚し、その下部が明瞭に大きくくぼむ。おろし目は太くて浅

く、幅2.3cm、７本である。暗灰色で堅緻。口縁内端部がかなり磨滅しており、二次的になんらかを研磨したと考えられる。SX２上層出土。

197は口径26cm、器高13.5cm、底径12.5cmで、いくつかの破片から全体を復元したものである。体部下半はやや丸味をもち、器壁がやや厚くなり、口縁部は直線的である。口縁端部は水平な面の端面に若干丸味をもち、外端がわずかではあるが外下方へ引き出され、Ｃ類のなかでもＢ類に近似する。底面は静止糸切りである。おろし目は太くて浅く幅３cm、11本１単位で、比較的密に施される。内面に灰かぶりがあり、灰色を呈し、特に堅緻である。底部内面は磨滅するが、硬質のため顕著でない。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。Ｃ５・Ａ８・Ａ９・Ｂ10区出土。

198は口径約23cm、器高約12cm、底径11cmで、体部にやや丸味をもつ。口縁端部は水平な面をもち、外端がやや肥厚する。内面はロクロナデの凹凸が著しい。片口は幅が比較的広いが、外方への引き出しは小さい。底部外面は静止糸切りである。おろし目は太く、幅３cm、11本１単位で、全体で16条以上と推定される。不明瞭ながら中心からはじまるおろし目がみられる。内面から口縁部外面まで淡黄灰色の灰かぶりが著しく、ほかは灰色を呈する。焼成は特に堅緻で、底部内面の磨滅ははっきりしない。Ｃ５・Ｂ５・Ａ７・Ｂ６・Ｂ７区出土。

199は口径27cmで、内外面の器面の凹凸は少なく、口縁端部も顕著に肥厚しない。端面は水平でややくぼみ、外端がやや引き出される。おろし目は太くて浅く、幅1.9cm、７本１単位で、全体は密に施される。底部内面周縁を起点としたおろし目がみられる。底部内面は磨滅する。淡褐色を呈し、火を受けたと推定されるが、堅緻である。Ａ５・Ｃ５・Ｂ６区出土。

200は口径26cmで、端面は広く水平な面をもち、わずかにくぼむ。内端の稜は明瞭で、外端は引き出されている。おろし目は太くて浅く、幅2.5cm、８本である。淡灰色で堅緻。Ｃ４・Ｂ７区出土。

201は口径約29cmで、口縁端部に波状文をもつ。端面は水平でややくぼみ、内端は肥厚せず、外端がやや引き出されている。端面の波状文は１本のヘラ先によるものである。灰かぶりがみられ、黒灰色を呈し、特に堅緻である。確認調査Ａトレンチ(Ｂ８区付近)出土。

202は口径約29cmで、口縁端部は広く水平で、ややくぼみ、外端が引き出される。端面に粗雑な波状文のような条痕がみられる。おろし目は、太くて浅い。単位は不明。灰色で堅緻である。Ａ10区出土。

210は口縁端部が広い水平な面をもち、わずかにくぼむ。内端・外端ともにやや肥厚する。灰色で堅緻。おろし目は比較的太くて浅い。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。Ａ10区出土。

211は口縁端部の水平な面に６本１単位の櫛描波状文を配するものである。端面は水平で内外にやや肥厚する。暗灰色を呈し、堅緻。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。SD36・38出土。

212は片口を残すもので、口縁部は水平な面をもつ。片口は外方へあまり引き出されない。お

ろし目は幅3㎝、10本1単位で、太くて比較的浅い。暗灰色で堅緻。

213は片口を残す口縁部である。口縁端部は水平な面をもつが、内端・外端がともに丸く、C類のなかではB類に近似している。おろし目は太くて浅い。片口はあまり外方へ引き出されない。灰色でやや軟質である。破損面に漆つぎの痕跡がみられる。B5・B6区出土。

214は壺の口縁部の可能性もある。端部は明瞭にくぼみ、外端は強く外方へ引き出され尖り気味で、内端も鋭い稜をもつ。A10区出土。

215は口縁部がやや内彎し、丸く屈曲する。端面が水平でややくぼみ、外端が著しく外方へ引き出される。淡灰色で堅緻。A7区出土。

口縁部D類（203～205）

口縁端部の面が内傾するものである。量的に少ない。

203の端面は丸味をもち、内端・外端ともに丸く、外端下部はロクロナデによってくぼまない。淡灰色でやや軟質。C4区出土。

204の端面はわずかにくぼみ、やや内傾する。内端の稜は比較的明瞭で、外端もやや丸味をもち、その下部はくぼまない。灰色で堅緻。B6区出土。

205の端面は広く内傾しており、内端は丸くその下部が凹線様にくぼむ。器壁はうすい。太くて浅いおろし目がわずかに残る。淡灰色でやや軟質。B5区出土。

底部類（206～209・216～223）

口縁部を残さないものを一括して述べる。

206は器壁が厚い。おろし目は比較的細密で、幅3㎝、18本、全体で16条ほどと推定される。底部外面は静止糸切りで、底部縁辺はおろし目の施文と同一の原体によって、一部面取りされ、体部外面下端に深い指頭圧痕がみられる。灰色で堅緻。A8・A10区出土。

207のおろし目は細密で、幅2.5㎝、約14本、全体で16条ほどと推定される。底部内面はよく磨滅する。淡灰色でやや軟質。SD22ほかA6・A8区出土。

208は体部に丸味をもち、内面にロクロナデの凹凸が顕著である。おろし目は太くて浅く、幅2.5㎝、8本、全体で16条ほどと推定される。底部内面はよく磨滅する。灰色で堅緻、やや粗雑なつくりである。おろし目などからみて、213と同一個体の可能性がある。C6区出土。

209は大型品の体部である。おろし目は細密で、全体で8条と推定される。内面はよく磨滅する。淡灰色でやや軟質。A6・A10区出土。

216～223はおろし目をもった底部である。216は内面がよく磨滅し、おろし目をほとんどとどめない。底部外面に糸切り痕はみられない。淡灰色を呈し、やや軟質。C5区出土。

217は底部外面に確実な回転糸切り痕をとどめる唯一の例である。おろし目は細密で、内面は磨滅する。淡灰色で堅緻。A6区出土。

218は底面がやや丸く、体部外面は指頭圧痕などで器面があれている。おろし目は太く、幅

1.8cm、6本である。全体は16条ほどか。灰色で堅緻。SX2下層出土。

219は器壁が特に厚く、体部下半はくびれる。おろし目は太く、幅2.8cm、8本、全体で12条ほどか。底部外面は糸の条線が弧状をなすが、静止糸切りと思われる。内面はよく磨滅する。淡灰色で堅緻。火を受けたと推定される。B8区出土。

220は内面がよく磨滅し、太いおろし目がわずかに残る。底部外面は静止糸切りである。灰色で堅緻。B6区出土。

221は内面がきわめてよく磨滅し、ほとんどおろし目をとどめない。底部外面は糸切り痕はみられない。灰色でやや軟質。C3区出土。

222は内面がよく磨滅し、太いおろし目が残る。胎土や色調は200と類似しており同一個体の可能性がある。底部外面の糸切り痕は明瞭でない。淡灰色で堅緻。B10区出土。

223は体部破片で、おろし目は太く、幅2.8cm、7条である。淡灰色で堅緻。A6区出土。

こね鉢底部（173～178）

内面におろし目をもたないものである。底径は173がやや大きいほかは8～9cmで、おろし目をもつすり鉢に比して相対的に小さい。

173はやや大きめのもので、体部外面下半がくびれる。底部外面は静止糸切りである。内面中央は著しく磨滅する。4辺の破損面のうち3辺はよく磨滅しており、破片の状態で研磨具として二次使用したことがうかがえる。壺の底部の可能性もあり、そうした場合、壺の下半部のみを鉢として利用したことが想定される。灰色で特に堅緻である。C5区出土。

174は底部外面の糸切り痕の条線が弧状を呈し、回転糸切りの可能性をもつ。内面は磨滅する。暗灰色で堅緻。A10区出土。

175も底部外面の糸切り痕の条線が弧状を呈するが、渦巻がみられず静止糸切りの可能性が強い。内面はよく磨滅する。灰色で堅緻。B3区出土。

176は底部外面が静止糸切りで、内面はよく磨滅する。外面の器面は黒灰色を呈し、器肉は淡黄灰色を呈する。SD10・B9区出土。

177は底部外面静止糸切りで、内面はよく磨滅する。灰色で堅緻。B8区出土。

178は底部外面静止糸切りで、内面はよく磨滅する。淡灰色で堅緻。C6区出土。

甕（165・166・226）

甕は個体数が著しく少なく、口縁部は226の1点のみである。

226は口径約54cmの大甕である。多くの破片があり、調査区のほぼ全域から出土している。口縁部は短く外反し、玉縁状に肥厚する。体部外面は叩き目、内面は円形押圧痕、口縁部内面はヨコナデである。叩き目は上部は水平で、下部では右下がりとなる。底部外面には砂が付着する。灰色で堅緻である。SX2下層からも出土している。

165は体部破片で、外面は条線の比較的太い叩き目、内面は押圧痕で、炭化物が付着する。暗

灰色で堅緻。A 8区ピット9出土。

166は体部上端で、わずかに内外面ヨコナデ調整の部分がみられる。外面の叩き目はきめが細かい。内面は円形押圧痕である。灰色で堅緻。B 5区出土。

研磨具（224・225）

須恵器や珠洲焼のような比較的堅い焼き物には研磨具として利用した破片がみられる。224は甕の体部破片で、一方の破損面は新しいものであるが、ほかの面はよく磨滅している。灰色で緻密。B 5区出土。225はすり鉢の破片で、比較的太いおろし目を残す。4つの破損面すべてが磨滅している。暗灰色で堅緻。C 3区出土。

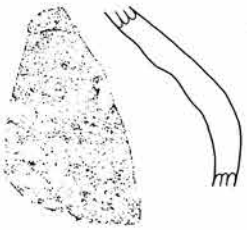
5）越前焼・その他（図版26・27・63・64）

越前焼は量的にごく少ない。甕・すり鉢・壺がある。越前焼と断定できないものもある。

甕（254）　口径約70cmの大型品で、多数の破片がある。口縁部は外反し、上方へ屈折して、比較的広い口縁帯となる。その上端部は外反気味で丸くおさまり、下端部も垂下する。底部は広い平底である。体部外面上端に横方向の4条の櫛目が上下2段にあり、その下に方形の押印がなされる（第15図）。押印は格子目を含むが全体の文様は不分明である。調整は口縁部から体部上端まではヨコナデ、体部外面はナデ、内面は指頭圧痕、底部と体部の接合部内面は強いヨコナデ、底部外面はワラ様の圧痕があり不調整、底部内面は指頭圧痕である。底部はSE 4の井戸底部に敷かれて検出され、ほかはSX 2最下層をはじめ調査区のほぼ全域から出土している。

第15図　越前焼押印
（1：1）

第16図に示したものは甕の肩部と考えられる。同一個体の破片が何点かある。内面には指頭圧痕と粗いナデがみられる。器面は暗茶褐色で、器肉は灰色を呈する。胎土は粗く、黒色や白色の夾雑物を多く含む（図版64—5）。胎土や色調などから在地の瓷器系陶器（北蒲原郡笹神窯など）かとも考えられたが、胎土分析の結果は越前焼か珠洲焼で、狼沢・背中炙領域とは対応しない（第Ⅵ章1）。越前焼の可能性が考えられるが、笹神村の権兵衛沢窯〔中川成夫ほか1970〕、安田町赤坂山窯〔渡辺文男1978〕など狼沢・背中炙窯以外にも中世の在地窯は知られていることから、在地窯の可能性も考慮しておきたい。



第16図　越前焼（系）甕
（1：3）

このほか、甕の破片である78（図版18）も中世陶器と考えられる。内面は指頭圧痕と粗いヨコナデ、外面はハケ目と叩き目である。叩き目はわずかではあるが格子状となる。色調は黒灰色で、胎土は黒色の小粒子を多く含む。A 6区出土。胎土分析では珠洲焼とされる（第Ⅵ章1）が、

技法からみて瓷器系陶器であり、産地については第16図の甕と同様に考えておく。

すり鉢（227・228）　227は口径29cmで、直線的にひらき、端部は水平な面をもつ。淡褐色で焼成は軟質で、器面があれているが、内面に口縁端部まで達するおろし目が観察される。B10区出土。

228は口縁部が内側に屈折し、広い口縁帯をもつ。口縁帯外面は2条の凹線を配する。その内面はふくらむ部分があり、その上下はくぼむ。淡褐色で、焼成堅緻。C7・C8区出土。口縁部形態は備前焼に類似する。加賀では16世紀末頃に備前焼の技法が直接的に移入されており（作見窯）〔上野与一ほか1982〕、これはその可能性が考えられる。

壺（229）　外面に断面三角形の突帯をめぐらす壺である。器面は茶褐色で、器肉は灰色を呈する。焼成堅緻である。C3区ピット2出土。

C．近　　世

大半が唐津・伊万里を主体とした肥前系陶磁器で、瀬戸・美濃焼を含むその他の陶磁器は少ない。近世陶磁器はV層には全く含まれず、I層～IV層出土で、特に調査区南辺の7～10区に集中している。時期は16世紀末から幕末までのものがあるが、17世紀前半までの時期のものが比較的まとまっている。

1）肥前系陶磁器（図版29・65）

唐津焼

皿（230～238）　見込みが遺存しており、重ね焼の方法がわかるもののうち、231～233は胎土目、234～237は砂目である。

230はやや内彎する口縁で、内面と外面上半に透明釉がかかる。A6区出土。

231～233は削り出し高台をもつ。いずれも底部内面に胎土目をとどめる。内面と外面の一部に淡緑色の釉がかかる。232は高台内側にも釉が及ぶ。231・232は素地が灰色ないしは灰褐色を呈し、233は明茶褐色を呈する。231はA6区、232はC8区、233は確認調査トレンチB（B7区付近）出土。胎土目の手法から16世紀末から17世紀初頭に比定される。

234は削り出し高台で、底部内面に砂目をとどめる。内面に透明感のある淡緑色の釉がかかる。素地は灰色を呈する。B8区出土。砂目の手法から、17世紀前半に比定される。

235・236は高台をもたず、底部外面は回転糸切り不調整である。いずれも内面に淡黄緑色の釉がかかり、砂目が残る。素地は淡茶褐色を呈する。236は身が深く、碗の可能性もある。ともにC3区出土。17世紀前半。

237は内面に段をもって直線的にひらくもので、削り出し高台をもつと考えられる。内面と口縁部外面に透明釉がかかる。素地は淡茶褐色を呈する。表面採集。17世紀前半。

238は内面に鉄絵の施文がみられる。内面と口縁部外面に透明釉がかかる。A7区出土。いわゆる絵唐津で、16世紀末から17世紀初頭に比定される。

碗（239・240） 239は内外面に透明釉がかかり、外面に鉄絵の施文がみられる。C3区出土。16世紀末から17世紀初頭。

240は削り出し高台をもつが、これは底部外面の周縁をのぞく内側をえぐりとったもので、接地面には回転糸切り痕がそのまま残る。高台外側面はヘラ削りされる。高台に砂目かと思われる融着物がみられる。内面にはヘラによる調整で渦巻状の稜が生じている。内面と外面下端をのぞいて鉄釉がかかるが、内面は全面ではなく、露胎部が残る。素地は赤褐色を呈する。C9区出土。17世紀前半。

瓶（249） 外面には透明釉に鉄絵の施文がみられる。内面は暗黄緑色の釉がかかる。内面上半はエゴテによる調整がおこなわれる。B7区出土。16世紀末から17世紀初頭。

壺（250・253） 250は器壁がごく厚いもので、底部外面は回転糸切り不調整、内面はヘラによる調整で渦巻状の稜が明瞭である。素地は赤茶色を呈する。外面上半に鉄釉が施されていたとみられ、わずかに釉の流れがみられる。B10区出土。17世紀前半。

253は壺胴部に貼り付けた把手である。叩き成形で、内面に同心円文のあて具痕がみられる。外面は鉄釉がかかる。B5区出土。同心円文あて具より16世紀末から17世紀初頭に比定される。

図版65—bは外面上半部に鉄釉を施す壺で、外面はロクロ削りされる。A5区出土。図版65—aは、絵唐津の鉢と考えられる。

すり鉢（252） 台をもつもので、内外面に鉄泥を塗る。内面に重ね積み焼成時の耐火砂を敷いた跡がみられる。A10区出土。18世紀から幕末。

伊万里・磁器

碗（241・242） 241は伊万里染付である。C7区出土。242は全体に灰味をおびており、呉須が褐色を呈する。A8区出土。

瓶（243） 内面に釉がかからず、瓶と考えられる。高台接地面に砂の付着がみられる。B7区出土。

皿（244） 染付ではない白磁の小皿である。高台は削り出しで、面取りされる。外面の体部下半から底部はヘラ削りである。高台接地面をのぞいて釉がかかり、やや青味をおびた淡灰色を呈する。高台接地面は淡茶色を呈する。素地は淡灰色できわめて精良・堅緻である。A9区出土。17世紀前半。

2）その他の陶器（245～248・251）

245は透明釉がかった小型碗で、素地は粗く、瀬戸・美濃焼と考えられる。B10区出土。246は内面と口縁外面に透明釉がかかり、底部内面に桜の花のスタンプが押印される。外面はてい

ねいなロクロ削りである。C 6 区出土。247は245と類似した素地で、瀬戸・美濃焼のごく小さな杯である。内面と外面上半に透明釉がかかる。A 5 区出土。248は褐釉の瓶である。体部外面のみ施釉される。産地不明。A10区出土。251は高台を削り出したすり鉢である。鉄化粧される。素地は淡褐色を呈し、がさつである。越中瀬戸の可能性が強い。B10区出土。246・248は19世紀以降で、その他のものは17・18世紀頃に比定されよう。

2．木 製 品

当遺跡は丘陵裾部に立地しているため地下水位が高く、さらに斜面からの流水が多く木質遺物の遺存状態は良好で、調査では100個体以上の木製品を得た。これらの遺物は井戸・土坑・溝と遺物包含層(Ⅴ層)から出土している。図示した遺物は全体の約半分である。

木製品には、什器類・調度類・履物類等の日常生活用品、木簡・木札類、建築用部材、杭を含めた不明木製品がある。以下分類に従って記述していく。なお、遺物保管の不手際により、ラベルを失い、出土地点が不明なものもいくつかある。

A．日常生活用品（図版28・29・66・67）

椀（1～5） 図示した椀はすべて同一の器形を呈すると考えられる。磨滅が著しいものの削り出しによる輪高台を有し、高台部からなだらかな曲線で内彎気味に立ち上がるものである。斉木秀雄の分類〔斉木秀雄1983〕では椀－Ⅱ類にあたる。

1は漆器椀である。図上復原により口径14.7cmと推定される。口縁部の器厚が4㎜とやや厚く、他の漆器椀に較べ鈍重な感じを受ける。内外面ともに黒漆が塗られているが外面に漆塗りの際の横方向のハケ目が明瞭に残る。口縁端部外面には内面に塗られた漆の盛り上がりがみられる。全体的に雑な仕上げである。SK53出土。

2は漆器椀で、高台径7.8cmを測る。磨滅が著しいものの幅約3㎜ほどの輪高台が残る。高台部からほぼ水平に開き、体部下位が若干張り、体部はおおむね1と同様にゆるやかに立ち上がる。器厚は全体に均一な厚さで3～4㎜を測り、薄手に仕上げられている。内外面ともに黒漆を塗った後に朱漆で文様を描いている。漆の剝落が著しく施された文様の詳細は不明であるが、植物(笹・竹か)葉と推定される。漆の剝落した部分では木地の上の下塗りが認められる。B 5 区Ⅴ層出土。

3は漆器椀で、口径13.0cm、器高4.3cm、底径6cmと推定される。幅3㎜、断面四角形の輪高台を有する。図上復原ではあるが当遺跡出土の木製椀の中で唯一器形の全体像を知り得た例である。器厚は2～3㎜と薄く、木地仕上げ・塗りともに非常に丁寧である。器面には光沢がある。外面黒漆、内面朱漆が塗られている。体部下位に木地整形段階での削り出しによる

右上がりの沈線が走る。B6区V層出土。

4は漆器椀体部破片である。4×6cm大で器厚は5mmほどである。図示した破片の他に同一個体と思われる3.5×5cm大の破片が出土している。遺存状態が良好でなく、特に外面の漆の剝落が著しい。下塗り後内面朱漆・外面黒漆が塗られる。外面には朱漆で文様が描かれるが、一部分しか残存していないため全容は不明である。SX2出土。

5は5.5×4.8cm大の底部から胴部下位にかけての破片である。器厚はほぼ均一で5mmほどである。小破片であるため器形及び法量は不明であるが、輪高台の痕が見られることと底部からゆるい曲線で立ち上がっていることよりII類と考えられる。器面には木目に沿って若干の凹凸があるがおおむね平滑に木地を仕上げている。内外面ともに黒漆を塗った後に朱漆を使って文様を描いている。小片であるため文様の全容は不明であるが、見込み部分には丸く区画した内側に、植物文様と推定されるものを描いている。外面にも見込み部分と同じ文様を数カ所描いているものと推定される。C5区V層出土。

皿（6・7） 図示した皿は2点とも総高台を有する。器形は若干異なるが両者とも斉木分類〔前掲書〕の皿II類の範囲に含まれる。

6は口径9.4cm、器高1.1cm、底径5.9cmを測る。底部厚4～5mm、体部厚2～3mmで薄手に仕上げられている。高台外側9mmほどの部分をさらに削り出し、二重の総高台を有しているようにみえる。底部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反気味に開く、漆は塗られていないが木地仕上げは丁寧である。未成品の可能性もある。出土地点不明。

7はほぼ完形の皿である。口径9.8cm、器高1.7cm、底径6.9cmを測る。底部及び体部下位の器厚6～9mm、側壁厚2mmを測る。高台部から直線的に体部下位の弱い屈曲点まで開き、そこから若干内彎気味に立ち上がり、口縁端部がやや外反する。さほど丁寧に木地仕上げがなされておらず、器面全体にロクロによる凹凸が残る。全体に黒漆が塗られてはいるが、漆が薄く木地が透けて見える。B2区Ⅶ層出土。

椀・皿には上記のほか図示しえなかったものが9点ある。すべて漆塗りである。特にB6区ピット1出土の漆器皿は、器壁が薄く漆もしっかりしており非常に丁寧に作られている。

箱物（8～13・21） 出土したのはすべて箱物の部材で、箱形に組み合わされた状態で出土したものは一例もない。なお、すべて接合には木製釘を使用している（木釘か竹釘かは不明）。

8は側板である。長方形の柾目板で厚さ7～9mm。左側面（実測図上、以下同じ）下半に出1.2cm、幅約3cmの柄を切り出し、右側面上にも出1cm、幅0.7cmの柄を切り出す。上辺外側角のみ面取りされている。釘穴は、左側の柄上、木口より6mm内側に2孔、右側木口に2孔、上辺には左側木口より2.4cm、4.2cmの位置に上方より1孔ずつ、さらにここには左側の穴に交差するように左斜め上方から1孔釘穴が穿たれている。同様に下底面には左右両木口より6mmほど内側に1孔ずつ、中央やや左寄りに1孔穿たれている。計10孔の釘穴のうち6孔に釘が挿さった

状態で残っている。いずれも頭部は欠失している。釘穴はすべて径約３㎜を測る。釘穴の位置から側板４枚を組み合わせた後、一方の板の柄正面から他方の板の木口に釘穴を貫通させ、そこに釘を打ち込んで側板同志を固定し、さらに同様な技法で底板を側板に固定したものと考えられる。上辺に穿たれた３孔の釘穴の意味は不明である。内側は上辺中央を中心に火を受けて炭化した部分が広がる。刃物傷が両面、特に内側に著しく残る。Ｃ５区Ⅴ層出土。

９は側板である。5.7×12.9cmの長方形の柾目板で厚さ９㎜を測る。右側面を下底面から７㎜×3.2cmほど、同様に左側面を上辺から９㎜×2.6cmほど切り取り、それぞれに柄を切り出している。釘穴は左側柄上、木口より５㎜ほど内側に２孔、同木口に２孔、右側柄上に１孔、同木口に２孔、下底面中央に１孔、計８孔が穿たれている。そとうち５孔には釘が残っている。右側木口に残る１本は径4.5㎜を測り、頭部まで残っている。釘穴は側板正面では径４～５㎜、木口では３㎜を測り、断面円錐形を呈するものと考えられる。左側面下方及び下底面の外側面は面取りされている。内側上辺中央はやや磨滅して穿み、そこを中心に火を受けて炭化した部分が広がる。外側に数条の刃物傷が残る。８と９は寸法や形状がほぼ同一で、出土地点が近いことから同一個体の可能性が強い。Ｃ５区Ⅴ層出土。

10～13・21は箱物底板と考えられるものである。10は柾目板材である。木目に沿って下方は欠失し、残存部は幅4.6cm、長さ11.1cm、厚さ１cmを測る。残存部分より台形を呈する板と推定される。木口をそのまま残す左側面と上辺のコーナーを直線的に削り取っている。さらに上辺の角の一部は面取りしている。上辺には左側木口より1.5cmの位置に径２㎜ほどの釘穴が穿たれ、正面中央部下方にも径約５㎜の穴が穿たれる。試掘Ｃトレンチ中央出土。

11は６×15cmの長方形の柾目板材で厚さ約４㎜を測る。左側が折損するため全容は不明である。右下コーナーは雲形に削り出され、その内側約２cmの位置に径８㎜ほどの穴が穿たれる。SX２出土。

12は底板と考えられる柾目板材である。右側は折損するが残存部は幅6.6cm、長さ12.1cm、厚さ約５㎜を測る。下辺及び左側木口は面取りしている。同木口より７㎜内側に２孔、下方の穴に接する位置で１孔、下辺より３㎜内側に２孔、計５孔の釘穴が穿たれている。左側の２孔には釘が残っている。面取り及び釘穴の状況より箱物のコーナーに固定されていた底板と考えられる。先端の尖ったもので押圧したと思われる溝状の窪みが、上辺に対し直角に約30条ほどみられる。裏面は火を受け全体に炭化している。遺存する釘頭部が炭化していることより、裏面が底部外面にあたるものと考えられる。SD57(Ｂ４区)出土。

13は底板と考えられる柾目板で、右側は折損し、下方は木目に沿って欠失する。残存部は幅2.7cm、長さ10.3cm、厚さ6.5㎜を測る。左木口は面取りがなされ、内側８㎜と５㎜の位置に径約３㎜の釘穴が穿たれる。SD57(Ａ・Ｂ４区)出土。

21は柾目板材で上部は折損する。残存部は幅4.8cm、長さ16.5cm、厚さ７～９㎜を測る。下端

から上方に向ってしだいに薄くなる。両側面に法がつけられ断面台形を呈する。左下角は削られて丸味を帯びている。板中央、下端木口より3.5cmの位置から4.5cm間隔で径約２㎜の釘穴が、ほぼ一直線に３孔穿たれる。下の２孔には釘が残っている。右側上部に刃物傷が残る。Ｂ５区Ｖ層出土。

曲物（14～20・25～28）　14～20は曲物底板あるいは容器の蓋と考えられるものである。底板には一枚板でつくられたもの(16)と、何枚かの板を合わせてつくられたもの(18・19)がある。

18は下方約 1/4 が折損している。最大幅5.8cm、長さ16.4cm、厚さ９㎜を測る。柾目板を使っている。推定径は約23cmである。周縁部側面は面取りされ、径約５㎜の釘穴が３孔穿たれている。板目に沿って裂けることを配慮したため、釘穴の穿孔は板目に対し直角か斜めの方向からなされている。１孔には釘が挿さったままの状態で残っている。裏面は火を受けて全体に炭化している。Ａ６区Ｖ層出土。

19は曲物底板で柾目板を使っている。幅4.2cm、長さ20cm、厚さ１cmを測る。両面・周縁ともに丁寧に整形している。裏面中央に木目に沿って幅約１cm、深さ約５㎜の溝が削られているが意味不明である。周縁部側面に法をつけ、木目の方向を避けて径約4.5㎜・深さ約２cmの釘穴を２孔穿っている。両側面にも若干の法がつけられるが、これは底板を隙間なく合わせるためと考えられる。曲物の推定径は約25.5cmである。SE４出土。

20は柾目板を使った曲物底板で左側 4/5 を欠失する。両面・周縁ともに丁寧に整形されているが全体に木目が浮き出ており、使用頻度が高かったと推定される。周縁には若干法がつけられる。最大幅3.8cm、長さ20cm、厚さ７㎜を測る。曲物推定径は58.4cmである。正面には尖ったもので押圧してつけられたと思われる細い溝状の窪みが数条走る。出土地点は不明。

14～17はその径が若干小さいことより蓋の可能性が残る木製品である。14は径8.3cm、厚さ５㎜の円形の板材である。木目に沿って下半は欠失する。周縁部は若干法をつけて丁寧に削り落とされており、断面平行四辺形を呈する。中心に断面円錘形の穴が穿たれていることよりつまみ・把手等の装着が考えられる。蓋の可能性が強い。正面に刃物傷が数多く残っている。Ｃ５区Ｖ層出土。

15は円盤状木製品である。径約８cm、厚さ約７㎜を測る。両面・周縁部ともに丁寧に整形されており平滑である。周縁部は若干の法をつけて丹念に削られている。柄杓等小物のはめ込み式の底板であろうか。Ｃ５区出土。

16は柾目板を使った円盤状木製品である。木目に沿って左半を欠失する。推定径13cm、厚さ８㎜を測る。丁寧に整形されているが、両面には削りによる窪みが若干残る。周縁部は若干の法をつけて削られ断面台形を呈する。はめ込み式の曲物底板と考えられる。SX２出土。

17は板目を使った蓋であろう。左半は欠失し、残る右半も遺存状態は良好でない。長径11cm・短径現在長4.7cm、厚さは約1.5cmである。周縁部を幅約６㎜にわたって薄くしている。本来楕

円形を呈するかもしれない。Ｃ５区Ⅴ層出土。

25～28は曲物側板と考えられる木製品である。25は側板綴じ部で、板が２枚重なっており、幅5.1cm、長さ11.2cm、厚さ６mm(３mm×２枚)を測る。幅1.3mmの桜皮で綴じている。板は柾目である。内面には５～７mm間隔でほぼ平行に、木目に対しやや斜めの方向に刃物による刻みが入れられる。板を曲げやすくするためのものである。SD57(Ｂ３区)出土。

26は板は柾目である。木目に沿って欠失しており、残存部は幅1.7cm、長さ12.1cm、厚さ６mmを測る。上端内面角は面取りされ丸味を帯びている。内面には８mm～１cm間隔でほぼ平行に、木目に対し直角な方向で刻みが施される。刻みのある面を内側にして緩く湾曲している。SX２出土。

27は板材で柾目を使用している。左右両端は折損しており、残存部は幅2.8cm(2.4cm＋0.4cm)、長さ20.7cm、厚さ3.5mmを測る。これのみ２枚の板を横に並べた状態で綴じている。横に並べて綴じた板を使った曲物側板は他にその例をみないことより疑問が残る。折敷の可能性もある。２枚の板が隙間なく綴じられるように合わされる側面には法をつけている。幅約１cmの桜皮を使って綴じている。下底面の内側４mmの位置に径３mmほどの穴を１孔穿孔している。SX２出土。

28は柾目使用の板材である。左右両端は折損している。残存部は幅約４cm、長さ29cm、厚さ６mm(３mm×２枚)を測る。２枚の薄板を重ね合わせ、幅約１cmの桜皮を使い２ケ所で綴じている。下辺は平坦に削っているが上辺は若干の法をつけている。SX２出土。27・28はその裏面に木目を切る方向の等間隔・平行な刻みが見られず曲物側板とするには若干の疑問が残る。

火鑽臼（22）　今回の調査で出土した火鑽臼はこれ１点である。上下両端とも折損し全容は知り得ないが残存部は幅2.6cm、長さ16cm、厚さ１cmを測る。正面に６孔、裏面に１孔焦げた枘穴を有する。枘穴はいずれも径1.3cm前後、深さ９mm前後を測る。裏面には焦げた部分が帯状に広がる。Ｂ２杭付近(Ａ・Ｂ２区)Ⅵ層直上出土。

板杓子（23・24）　２点とも飯などの穀類をすくうのに使用されたと考えられる。現在の杓文字にあたるものであろう。両者とも一部分しか遺存せず全容は知りえないが、同一の形状を呈すると推定される。身よりやや細い板の部分から銀杏の葉状に広がり、板状の身の部分へと続く。身の先端部は丸くなる。周縁部は面取りされ端部は丸味を帯びる。

23は厚さ５mmほどの柾目板を使用している。木目に沿って左側の大部分を欠失し、幅広の身の一部分のみ残存する。幅３cm、長さ15cmを測る。Ｃ５区Ⅴ層出土。

24は木目に沿って右側を若干欠失する。残存部は幅3.8cm、長さ21.1cm、厚さ4.5mmを測る。身の先端部は使用によって若干磨滅する。両面に刃物傷が数条ある。SX２出土。

箸状木製品（29～33）　板材を縦割りにして角材を作り全体を粗く削り丸味をもたせる。29・30・33はその後さらに両端を削り尖らせる。31・32は一端を尖らせ他端は木口をそのまま残す。箸はすべてグリッドのⅤ層及び腐植層よりの出土。

棒状木製品（34） 34は太さ2.4×1.7cm、長さ30.1cmを測る。箸同様に板材を縦割りにした後角をすべて面取りし、断面隅丸長方形を呈するように丸味をもたせる。下側1/3ほどを削り細めさらに先端部を丁寧に削り込んで尖らせている。火鑽棒とも考えられるが、先端部が炭化していないため疑問が残る。出土地点不明。

漆塗り雲形肘木（35） 右側を折損しており全容は知り得ない。残存部は幅4cm、長さ6.6cm、厚さ6mmを測る。経机などの裏面四隅に脚と共に付属する装飾品であろう。コーナーL字を構成する2辺は本体あるいは脚に接着するため、ほぼ直角に削られている。L字の短辺は面取りされており、溝状の枘穴にはめ込んで接着し、長辺は平坦に削られ表面には漆が残る。漆を接着剤として固定したものと推定される。連続する円弧で構成される雲形部分は面取りされ、両面とも平滑に整形されている。漆は塗りがやや薄いものの上質なものを使用しているためか光沢が残っている。全体に丁寧なつくりである。B5区V層出土。

下駄（36～38） 36は一木から台・歯ともに削り出す連歯式のものである。つま先部分と踵部分を若干欠失するが長楕円形の台に肉厚の長方形の歯を2枚削り出している。残存する台は長さ17.2cm、幅9.2cm、厚さ3.2cmを測る。歯は残りが悪く高さ・幅は不明であるが、厚さは2～3cmほどである。遺存状態があまり良好でなく整形・仕上げについての詳細は不明である。表の足の接する部分の窪みの状況より右足用のものと考えられる。SD57(A6区)出土。

37は幅5.2cm、高さ9.6cm、厚さ1.4cmの長方形の差歯である。正面及び両側面は丁寧に削られているが裏面には鋸引きの痕跡と思われるものが4条残る。両面の上部には台の痕跡が明瞭に残る。下底面は使用によって磨滅し丸くなっている。A7区撹乱坑出土。

38は上辺9.1cm、下辺13.5cm、高さ7.7cmを測り下方に広がる「銀杏歯」の差歯である。上辺中央部に高さ1.4cmほどの柄を削り出している。両側面角は面取りされ丸味を帯びている。37同様両面上部に台の痕跡が残り、下底面は使用により磨滅して丸くなっている。試掘Cトレンチ南半出土。

B．木札・木簡（図版30・67）

当遺跡においては、昭和59年度の試掘調査時に出土した呪符を始めとして10数点の木札・木簡がある。今回は赤外線写真撮影の結果墨書が残っているもの、遺存状態が良好でその形状が明確なもの6点を図示した。以下それぞれについて若干の記述をする。

54は呪符で長さ11.4cm、幅2.5cm、厚さ3mmを測る完形品である。長方形の柾目薄板を使い上端部を山形に削り出し、右側縁部下方を斜めに削っている。墨書が書かれている面は平滑に仕上げられているが、裏面は木目の凹凸が残る。昭和59年度に試掘Cトレンチ南側V層から出土。

釈文 「(符籙)急々如律令」

符籙は二目呪符号である。

55も完形の木簡である。長さ15.1cm、幅3.4cm、厚さ５㎜を測る。長方形の柾目薄板の上端の両角をおとし圭頭にしている。下半は両側から削って尖らせている。正面は丁寧に削られ平滑であるが裏面には木目の凹凸が残る。赤外線写真によると正面に墨痕らしきものが認められるが判読は不可能である。昭和59年度試掘Ｃトレンチ南側Ⅴ層出土。

56は木簡である。上端は方頭である。下端の尖った部分をわずかに折損する。長さ13.8cm、幅3.3cm、厚さ５㎜を測る。板目薄板を使用している。墨書は最初の一字が読める。他は痕跡がわずかに認められるのみで判読は不可能である。Ａ６区出土。

釈文　「中(ノ)□□　□」

57も木簡である。上端右側と左側面をわずかに欠失するもほぼ完形に近い。上端は方頭である。板目薄板を使用している。長さ14.3cm、幅3.1cm、厚さ５㎜を測る。図示した６点の中で墨書が比較的明瞭に残っている１点である。両面ともに丹念に削られ平滑であるが、裏面に墨書は認められない。Ａ６区Ⅴ層出土。

釈文　「三斗(ノ)□□□　□」

　　ち□□□　□」

58は木簡である。おそらくⅤ層出土と思われる。木目に沿った左側と、下方を欠失するため全容は知りえないが、短冊型を呈する。長さ13.3cm、上端部幅1.7cm、最大幅2.5cm(推定)、厚さ５㎜を測る。板目薄板を使っている。木口をそのまま残す上端部より若干膨みながら下方へ伸びる。上端の５㎜下方ほぼ中央に径約５㎜の穴が穿たれている。墨書は正面にのみ残る。Ａ３区出土。

釈文　「すへさ□□」

59は左側面下方を若干欠失するがほぼ完形に近い。長さ13.2cm、幅2.2cm、厚さ４㎜を測り短冊型を呈する。縦割りにした竹を使用していると推定される。上端に穴が穿たれている。両面とも墨痕はない。Ｂ３区Ⅴ層出土。

Ｃ．建築用部材（図版31・32・68）

当遺跡では多数の柱根・礎板が出土しているが、遺存状態が良好な掘立柱建物の柱根・礎板を中心に図示した。

SB17（61～72）　図版31に掲載したものはすべてSB17の部材である。60は柱穴９出土の柱根である。19.5×19.7cm角の芯柱(木の芯を使った柱)で残存長72.1cmを測る。当遺跡における最大の柱根で、遺存状態も良好である。４つの角は幅約４cmにわたってすべて面取りしてある。底面を含む全面に手斧等の工具によるはつり痕が明瞭に残る。すべて木目の方向に沿ってはつっている。底面から３cmと５cmの位置に正面からそれぞれ右側面、左側面へ貫通するように１辺

3.5～4㎝程の正方形の穴が2孔穿たれている。柄穴とは考えられず意味不明の穴である。

61は柱穴10出土の柱根である。18.7×18.8㎝角の芯柱で残存長60.6㎝を測る。60同様に角を幅約5㎝にわたり面取りし、正面下部には側面に貫通する穴が2孔穿たれている。底面には工具によるはつり痕が明瞭に残るが、側面は丁寧に仕上げられその痕跡はほとんど認められない。裏面下部は大きく削られ断面台形を呈する。

62は柱穴7出土の柱根である。角柱を意識したと思われるが断面は歪んだ四角形を呈する。9×12.7㎝と他の柱根に比べて若干細い。残存長50.3㎝を測る。68と同様に丸太の外側より木取りされている。

63は柱穴15出土の柱根である。遺存状態が良好でなく、表面には木目の凹凸が著しい。観察の結果約18×18.5㎝角の芯柱と推定され、残存長50.3㎝を測る。

64は柱穴13出土の柱根である。16×18.4㎝の角柱で残存長51.8㎝を測る。両側面に柾目が出る。底面にはつり痕が比較的明瞭に残る。側面角の面取りはさほど丁寧ではない。4つの角すべてに行われてはおらず、幅も一定ではない。

65は柱穴16出土の柱根で遺存状態は良好でない。約17㎝角の芯柱である。残存長39.6㎝を測る。幅約5.5㎝にわたって面取りされた正面左側角のみ遺存するが、これより他の角も面取りされていたと推定される。

66は柱穴21出土の柱根で65と同様に遺存状態は良好でない。約18㎝角の芯柱である。角はすべて幅4～5㎝ほどにわたって面取りされていると推定される。残存長44.1㎝を測る。

67は柱穴22出土の14×17㎝の角柱で残存長32.6㎝を測る。丸太を四つ割りにしたもので右側面と裏面に柾目が出る。側面角の面取りはない。全体に工具によるはつり痕が明瞭に残る。

68は柱穴17出土の柱根である。14.5×17.8㎝の角柱ではあるが、若干歪んでおり断面台形を呈する。底面にはつり痕が残る。側面角は面取りされるがさほど明瞭ではない。丸太の外側部分から木取りしている。

69は柱穴22より出土した礎板である。形状から柱の下端を切り取って転用したものと考えられる。14.4×16.8㎝角の芯柱で残存長28.7㎝を測る。60・61と同様に正面から両側面へ貫通する穴が2孔穿たれる。丁寧に仕上げられ、はつり痕跡はほとんど残っていない。

70は柱穴16出土の礎板である。木目に沿って中央で2つに割れた状態で出土した。幅26.4㎝、長さ51.7㎝、厚さ7.6～9.6㎝を測る。上面は柱と接していたためか中央部が若干窪んでいる。丸太を半截し、両側面及び上面を削って板に仕上げている。

71は柱穴10出土の礎板で70同様に木目に沿って中央で2つに割れている。幅28.5㎝、長さ33㎝、厚さ3.2～8.6㎝を測る。左半の厚い部分の中央が若干窪んでいる。丸太を半截し両側面及び上面を削って整形している。下方の木口にはつり痕が残る。

72は柱穴20出土の礎板である。幅20㎝、長さ37.1㎝、厚さ4.5～6.8㎝を測る。70・71とは異

なり丸太の外側部分を割り取って使用している。柱と接する上面は中央部を削り窪ませている。両側面、底面も若干削り断面台形を呈している。

SB91（73～78） 73は柱穴10、74は柱穴17、75は柱穴９、76は柱穴12、77は柱穴11、78は柱穴３よりそれぞれ出土している。図示した６点はすべて丸太をそのまま柱として使用している。底面にはつりの痕跡が見られる。側面には部分的に若干はつり痕が見られる。73と78が径約13cmとやや細く、他の４点は短径で13.2cmを測るものがあるが、長径はすべて18cm前後を測る。残存長は77が40.7cmで最小、73が66.7cmで最大である。

SB92（79） SB92の柱穴１出土の柱根である。13×16.8cmほどの丸太をそのまま使っている。残存長は52.3cmを測る。底面は丁寧にはつられている。

SB93（80～84） 80は柱穴４出土の柱根で14.5×17.7cmの丸太を使っている。残存長は61.6cmを測る。側面下方と底面をはつっている。

81は柱穴７出土の柱根である。遺存状態はあまり良好でない。径約９cmと細い丸太を使っている。残存長37.7cmを測る。

82・83・84は柱穴５出土の礎板である。３枚が重なった状態で出土した。上に立てられる柱の高さを調整するためと推定される。82・83が厚さ約３cmと薄いのもこのためであろう。

その他（85～88） 85はＢ３区ピット２出土の柱根で径11×14.5cmほどの丸太を使っている。残存長は40.7cmを測る。86はＢ３区ピット１出土の柱根で、13×14.5cmほどの太さである。正面と右側面は平坦に削られている。底部にはつり痕が見られる。残存長は40.7cmである。87はＡ８区ピット12出土の柱根で底面径13.1×14.7cm、残存長29.1cmを測る。底面にはつり痕が明瞭に残る。88はＡ９区ピット21出土の柱根で径約12cm、残存長51cmを測る。丸太材をそのまま使用している。

Ｄ．杭・用途不明木製品（図版30・67・69）

杭（39～48） 39～42はSX２出土の杭である。42は覆土中層より出土したもので上部は折損している。径3.7cm、長さ32.5cmを測る。39～41は横井戸であるSX２の出口部分で横に一直線に並んで出土している。杭の先端は地山層に達していた(図版６・44)。最大径及び長さは39が7.2cm・97.2cm、40が6.9cm・87.6cm、41が4.8cm・43.2cmを測る。３本とも「く」の字状に曲った枝を使用している。下端の先端部のみ削って尖らせている。特に39の先端部は丹念に削られている。出土状況及びその形状から横井戸に関連する施設の杭と考えられる。

43～48はSD57西側杭列の真直な樹枝を利用した杭である。Ａ４区において出土している。これに続く杭列がＡ５区で検出されている。上部はすべて折損している。径3.5～4.5cmほどの枝を使用し下方を削って尖らせている。

用途不明木製品（49～53） 49は直径8.2cm、長さ15.4cmを測る。丸太材を縦に半截した後、

木口を削り側面台形を呈するように仕上げている。用途不明である。SX２下層出土。

50は杭の先端部分か楔と考えられる。上部は折損している。残存部は長さ21.1cmを測る。5.2×6.8cmほどの角材を使用し、表裏両面から丁寧にはつって先端部を断面楔形に仕上げている。SD57(Ｂ４区)出土。

51は板材で幅4.5cm、長さ13cm、厚さ２cmを測る。左側は木目に沿って欠失する。右側面角はゆるやかな弧を描くように削っている。小判型を呈すると推定される。A10区Ⅴ層出土。

52は15×13.5cmとほぼ正方形に近く、厚さは約６cmを測る。49同様に木口を削って断面台形を呈するように仕上げている。SD57出土。

53は農工具と思われる木製品である。木目に沿って左側半分を欠失する。残存部は幅6.4cm、長さ17.2cm、厚さ1.4cmを測る。図上復原すると最大幅10.6cm、先端部幅４cm、全長17.3cmを測る。長方形の板材の上辺両角を丸く削り、側面は下方に向って若干細くなるように削り、下辺角をさらに丸く削り込む。周縁部は刃を意識したのか断面三角形を呈するように削っている。中央部やや上方に3.2×3.7cmほどの柄を装着するための正方形の穴が穿たれている。使用のためか先端部断面は若干丸味を帯びている。SD12(Ｂ９区)出土。

３．石　製　品（図版33・69）

砥石

砥石は図示しなかったものを含め仕上砥５点、中砥７点計12点が出土している。いずれも時期は確定できない。

中砥（１～６）　中砥は方柱状を呈すものと扁平な直方体を呈すものに大別できる。前者には１・２・３・６があり、後者には４・５がある。石質はすべて凝灰岩である。方柱状を呈するものは４面に擦痕があるが、扁平なものについては側面にはそれがほとんどない。擦痕は部分的にしか観察できず、その方向は長辺と同じかあるいは右下がりである。ごくわずかに短辺と同方向・左下がりの擦痕もある。方柱状の完形品の１と扁平直方体の４を中心に以下若干の記述を行う。

１は角をわずかに欠損するもののほぼ完形である。中央部は2.7×3.1cmほどの太さで、全長25.8cmである。重量は520gと重く手に持って使用するには適さないであろう。使用により中央部が磨滅して若干へこんでいる。他の中砥に比べへこみ方が少ないのは、使用されて間もなく折損し廃棄されたためと推定される。図の表面下端には幅１mmの石鋸による切り出し痕がある。上下両端面は、切り出した時のままで擦痕などは全くない。左側面上端部を除くすべての端部角に幅３～５mm、長さ６～20mmのＶ字状の溝がある。刃物等の薄い金属製品の側面を研磨したのであろうか。裏面上端より６mm下方の中央に、径6.5mm、深さ2.5mmほどのすり鉢状の穴があ

る。穴の中心がやや左側にあり、裏面に対し右斜め上方から穿たれている。意味不明である。B８区撹乱溝、B・C９区出土。

４は下方を折損する。石質が他のものと若干異なりやや粗い感じを受ける。上端部幅2.9cm、厚さ1.7cm、折損部幅４cm、厚さ２～６mm、残存長5.7cmである。上端部から折損部左側にかけてしだいに薄くなる。右側面は擦痕は認められないものの磨滅して平滑であるが、左側面は若干磨滅してはいるものの切り出し時の面がほぼそのまま残る。左側面を除く３つの面の上方にはスス状の褐色の付着物がある。B６区Ⅴ層出土。

３は図左上方の折損面に幅２mmと1.5mmのV字状の溝が２本走る。金属製品の側面を研磨したものと推定される。

６は表裏両面の左側角が幅1.5～２mmほどの平滑な面になっており、角を使って製品を研磨したと推定される。

仕上砥（７）　図示したものの他に４点出土しており、石質はすべて泥岩である。上半は欠損する。幅３cm、厚さ１cm、残存長7.8cmと、扁平な長方形を呈する。両側面及び下端面は擦り切り痕を明瞭に残す。砥面は平滑である。擦痕は図の表・裏・左側面の３面にある。表・左側面は右下がりの方向である。裏面には数条の擦痕があるのみで方向も一定ではない。さらに左側下半に幅約１mm、長さ1.3cmと７mmのV字状の削痕がある。A７区出土。

硯（８～10）　この他に剥離した底面(一部側面を残す)が１点ある。８は黒色粘板岩を使用した長方硯である。上方及び右側は折損し、裏面は剥離している。幅6.1cm、長さ4.9cm、厚さ１cmの陸の左側コーナー部分である。断面は台形を呈すると考えられる。下端には幅3.5mmほどの縁が一部残る。陸面に削痕が残る。SD22(B８区)出土。

９は長方硯である。石質は頁岩と思われる。図の左側面を残すのみで他は折損し裏面も剥離している。側縁に幅６mmほどの縁が削り出されていることにより、これが硯の裏面と考えられる。B５区Ⅳ層出土。

10は頁岩を使用した長方硯のコーナー部分である。図右側及び下方は折損し、裏面も剥離する。図上端及び左側面に擦り切りの痕が明瞭に残る。表面は上方が若干剥離するものの残りは比較的良好である。周縁を沈線で区画し、波頭文を線彫りする。SE60ゴミ層出土。

磨製石斧（11）　石質は砂岩である。当遺跡南側の丘陵上に縄文時代中期のタテ遺跡〔高橋保1985〕が存在することから、そこからの流れ込みと推定される。B３区Ⅶ層出土。

４．鉄　製　品（図版33・69）

12は鉄釘と考えられるもので長さは10.6cmを測る。断面は扁平な長方形を呈する。B９(７)区スミ集中地点出土。

13は腐食が著しく詳細な形状は不明であるが、残存する先端部はしだいに扁平になっており先端部は断面三角形を呈すると推定される。タガネ状の鉄製品であろうか。B 7(25)区地山上面出土。

14・15は同種の鉄製品と推定される。頭部をやや斜めに作り出し若干広い面を持たせる。茎部は14が若干扁平ではあるが両者とも方形を呈し、先端部は細く尖がっている。長さは15が22.7cm、14が19.7cmを測る。15はB 5(13)区V層、14はB 6(19)区V層より出土している。14・15ともタガネ状の鉄製品と考えられる。

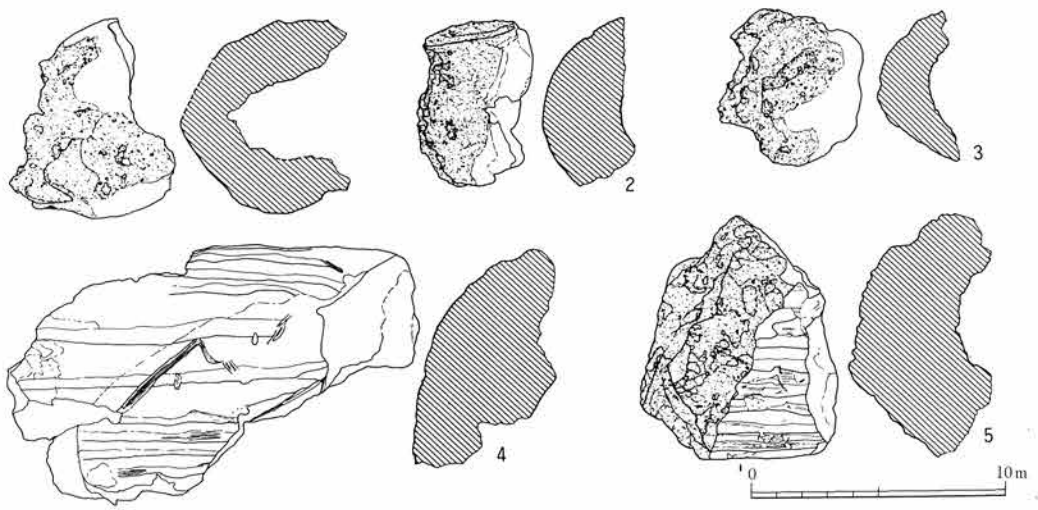
16は鍬・鋤などの木製農工具に装着した刃と考えられるもので、台形状を呈している。上辺の左右両側をたたき出し、上辺を台形状に形作っている。刃部幅は約10cm、先端は断面三角形を呈する。厚さが約3mmと非常に薄い。

5. 鍛冶関連遺物

羽口と鉄滓がかなり出土しており、鍛冶工房が存在したことがうかがえる。鉄滓の出土状況からみて、これらは平安時代のものと考えられる。鉄滓については別に科学的分析を行った(第VI章2)。タガネ状の鉄製品(図版33—13～15)は鍛冶に関連した遺物の可能性が考えられる。

羽口(第17図)　大・小2種ある。大型品(4・5)は外径15cm前後で、厚さは4～5cmもある。外面に平行する凹線状の圧痕がみられる。これは製作時に外側にスノコ状のものを巻きつけたことによるものと推定される。胎土はごく粗く、小礫や砂粒を多く含み、熱を受けてもろい。5は先端部で、鉄滓が溶着している。4はSK68、5はSD57出土である。

1～3は小型品で外径10cm以下で、厚さは2～3cmである。外面にスノコ状の圧痕はみられ



第17図　羽口実測図

ない。胎土は大型品と共通する。いずれもＡ６区出土。

鉄滓（図版70）　総計約15kgの鉄滓が出土した。遺構出土はSK24やSK77などを中心に2.3kgを量る。しかし鉄滓が出土した遺構のうち明確に平安時代のものと考えられるのはSK24・SK31のみである。

６．銭　　貨（第18図・図版64）

Ｂ６区に設定したトレンチ出土の景徳元宝(1008年)である。

第18図　銭貨拓影（２：３）

７．胎土分析資料の考古学的所見

今回、平安時代の須恵器・土師器、中世陶器について、一部胎土分析を実施した。分析資料の個別の所見は本章１で既述し、分析結果については第Ⅵ章１のとおりである。また、考古学的知見について第Ⅶ章１・２で若干ふれたが、胎土分析をするにあたっての問題の所在や、所見について若干補足しておく。

問題の所在　①須恵器。現在のところ県内では９世紀後半以降の窯は、佐渡(島)小泊窯以外は未確認である。この時期の須恵器は国を越えた広域的な流通が存在した可能性〔坂井秀弥1984〕を想定し、佐渡などから移入していないか。②土師器。非ロクロ成形の甕(70)は手法や胎土がまったく異なり、佐渡のものに類似する。その可能性はあるか。また、一般的なロクロ土師器の生産地はひとつか複数か。③「珠洲系陶器」。越後では珠洲系の在地窯が北部で１基(笹神・背中炙窯)確認されており、番場遺跡の「珠洲系陶器」が「珠洲焼」か否か。珠洲窯と在地窯の流通圏を明らかにすること。④「瓷器系陶器」。「珠洲系陶器」と同様で、瓷器系の在地窯が北部笹神窯に数基存在する。問題も同じ。

所見　資料のうち、中世陶器(越前系)の１(実測図199)は観察者の誤認(Ｐ78註１)。越前系２は胎土手法から越前焼、同３は胎土が粗雑で在地窯と観察された。珠洲系とした16(第16図)・17は手法は珠洲系ではないが、色調から一応これに含めた。珠洲系１～14は在地産でない珠洲焼とみてよい胎土・手法・色調である。なお、唯一の珠洲系在地窯の背中炙窯の採集品も２点資料に加えた。白根市馬場屋敷遺跡は当遺跡よりさらに笹神窯に近く、その製品が搬入されている可能性が強いことから資料に含めた。考古学的所見は第４表のとおりである。

第Ⅵ章　自然科学の分析・調査

1．番場遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

A．はじめに

土器は粘土を高温で焼成して作られたものである。粘土を登り窯の中で1,350℃に達する高温で焼成しても、その化学特性に変動が生じないことは粘土の焼成実験によって実証されている。このことは土器生産の現場である窯跡から出土した多数の土器片を分析することによっても確認された。すなわち、須恵器古窯跡には種々様々の焼成度の破片が出土する。これらを分析した結果も、その焼成度の違いによって化学特性に変動がないことを示した。

また、重量パーセントにして30%の砂粒を加えて焼成した粘土を分析した結果も、添加砂粒によって化学特性に特に大きな変動はないことを実証した。このことはまた、一窯跡から出土した2種類の破片、砂粒を含む破片と含まない破片を分析した結果でも、その化学特性に特に差違は認められなかったことによって再確認された。

こうして、焼成度によっても、また、添加砂粒によっても、土器の化学特性は影響を受けないことが実証された。したがって、土器を分析して得られる化学特性は素材粘土の化学特性であることがわかった。

さて、粘土は岩石が風化して生成したものである。筆者は窯跡出土須恵器とともに、日本列島の基盤を構成する岩石である花崗岩と、その上に分布する土壌、粘土も分析してきた。その分析データをみる限り、粘土の化学特性は母岩に支配されているといえよう。したがって、岩石の化学特性に地域差があるように、粘土、したがって、土器の化学特性に地域差があってもよいように思われる。この推定を実証するための絶好の試料が窯跡出土須恵器片である。須恵器は5世紀から12世紀にかけて日本国内の各地で製作された。須恵器は登り窯で焼成された。その窯跡は考古学者によって各地に多数発掘されている。一窯跡からは通常、多数の須恵器片が出土する。したがって、全国各地の、しかも、分析に供し得る多数の須恵器片試料が入手し得る訳である。筆者はこの10年間に、全国各地の多数の須恵器片試料をエネルギー分散型蛍光X線分析法で分析してきた。その結果、須恵器の化学特性には地域差があること、しかも、地質構造に関連した地域差があることがわかった。この地域差を活用すると、胎土分析によって土器の流通を追跡することができる。

本報告では、番場遺跡出土土師器、須恵器、中世陶器、及び、白根市馬場屋敷遺跡出土中世

陶器の胎土分析の結果について報告する(第Ⅴ章７、Ｐ70参照)。

Ｂ．分析の方法

土器の胎土分析では通常、土器片資料を粉砕し、100～200メッシュ程度の粉末にする。そのために、タングステンカーバイド製乳鉢(硬度9.5)が使用される。メノウの乳鉢では素材が軟かすぎて、十分に粉砕できない。粉末にする一つの理由は試料を均質化することである。さらに、粉末試料を成形して、試料と検出器の間の立体角を一定にし、蛍光Ｘ線の相対測定を可能にすることである。この幾何学的条件が一定でないと、同一試料でも積分された蛍光Ｘ線強度は一定にならない。筆者らは通常、塩化ビニール製リングを枠にして、粉末にした土器試料を15トンの圧力でプレスし、直径20㎜、厚さ３㎜のコイン状錠剤に成形し、蛍光Ｘ線分析試料とする。

定量分析における標準試料としては土器と同質の珪酸塩試料が必要である。このために、地質調査所から配布されている20種ばかりの岩石標準試料が使用される。とりわけ、K、Ca、及び、Rb、Srの含有量が比較的バランスがとれているJG―１が有効である。筆者はこの10年間、終始一貫してJG―１を標準試料として使用してきた。また、その分析データにより、測定値の恒常性もチェックできる。このため、分析データはJG―１による標準化値で表示される。

Ｃ．分析結果

１）番場遺跡出土土器

番場遺跡出土土器の分析値を第３表に示す。産地推定は終局的には判別分析法という統計学的手法を導入し定量的に行うのであるが、そのためには生産地である窯跡と供給先である遺跡の年代等の諸条件を整理しておかなければならない。今回はこれらの諸条件が十分整理されていないので、第３表に基づいて作成した分布図上で定性的に産地を探ることにした。

土師器　土師器には生産地である窯跡は殆んど残ってはいない。したがって、須恵器のように窯跡出土土師器に対応させる訳にはいかない。そのため、まず、ここに分析された10点の土師器の胎土が同質といえるかどうかを調べるため、クラスター分析をした。K、Ca、Rb、Srの４因子を使ってクラスター分析した結果を第19図に示す。このデンドログラムでは横軸に類似したものから順に試料番号を並べてある。縦軸はK、Ca、Rb、Srの分析値から計算した類似度を示す。そして、類似したものから順に、逐次、横線で結んである。類似度が大きいと、縦軸の間隔はせまくなり、逆に、類似度が下がると、縦軸の間隔は大きく開きギャップができる。第19図をみると、No.１～No.７(本書の遺物番号の対照は第３表参照)の７点の試料はよく類似した胎土をもつことを示し、No.５とNo.９の間には大きなギャップがあるところから、No.９は他の試料とは類似していないことがわかる。ただ、この分析法の欠点は縦軸のギャップのある何処か

第3表　番場遺跡出土土器の分析値（分析値はJG−1による標準化値で示す）

種別	器種	資料番号	実測図番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
土師器	甕	1	65	0.515	0.191	2.71	0.422	0.312	地元
	〃	2	67	0.628	0.267	1.95	0.439	0.436	〃
	〃	3	70	0.500	0.228	1.70	0.555	0.496	〃
	〃	4	71	0.627	0.135	3.20	0.418	0.210	〃
	筒形土製品	5	74	0.608	0.436	2.27	0.498	0.608	〃
	鉢	6	73	0.531	0.331	2.35	0.514	0.500	〃
	無台椀	7	なし	0.577	0.367	2.29	0.471	0.438	〃
	〃	8	〃	0.415	0.154	1.23	0.373	0.347	〃
	黒色無台椀	9	〃	0.290	0.416	2.52	0.196	0.510	不明
	無台椀	10	〃	0.574	0.288	4.50	0.363	0.338	地元
須恵器	長頸瓶	1	24	0.388	0.182	2.42	0.474	0.362	小泊
	有台杯	2	19	0.454	0.252	6.77	0.282	0.380	不明
	大甕	3	85	0.555	0.160	1.43	0.702	0.426	小泊 or 能登
	〃	4	81	0.371	0.326	1.85	0.519	0.657	小泊
	〃	5	89	0.383	0.218	1.99	0.485	0.494	〃
	〃	6	82	0.541	0.157	1.40	0.732	0.433	小泊 or 能登
	〃	7	なし	0.402	0.341	2.21	0.442	0.578	小泊
	長頸瓶	8	〃	0.460	0.253	2.57	0.523	0.470	〃
	無台杯	9	〃	0.420	0.087	3.59	0.475	0.277	〃
	有台杯	10	〃	0.392	0.211	2.60	0.431	0.477	〃
	〃	11	〃	0.423	0.179	2.62	0.489	0.358	〃
	杯蓋	12	〃	0.350	0.118	2.74	0.392	0.291	不明
中世陶器（越前系）	片口鉢	1	199	0.482	0.275	1.81	0.553	0.541	珠洲焼
	大甕	2	254	0.634	0.190	1.37	0.557	0.434	越前焼
	甕	3	第16図	0.511	0.225	2.34	0.479	0.388	越前焼 or 珠洲焼
中世陶器（珠洲系）	甕	1	226	0.456	0.207	2.03	0.611	0.400	越前焼
	片口鉢	2	163	0.473	0.352	1.98	0.531	0.542	珠洲焼
	〃	3	187	0.500	0.282	2.07	0.535	0.528	〃
	〃	4	198	0.592	0.456	1.66	0.677	0.663	〃
	〃	5	182	0.515	0.276	1.79	0.582	0.574	〃
	〃	6	180	0.572	0.413	1.73	0.648	0.637	〃
	〃	7	197	0.562	0.382	1.71	0.671	0.597	〃
	〃	8	192	0.423	0.483	2.56	0.411	0.626	〃
	〃	9	184	0.484	0.323	1.93	0.562	0.540	〃
	〃	10	196	0.491	0.385	1.78	0.447	0.655	〃
	〃	11	205	0.401	0.171	2.03	0.475	0.414	越前焼
	〃	12	203	0.433	0.252	1.60	0.462	0.561	珠洲焼
	〃	13	183	0.430	0.273	1.68	0.524	0.508	〃
	〃	14	208	0.496	0.384	1.79	0.442	0.662	〃
	壺	15	162	0.437	0.295	2.01	0.527	0.468	〃
	〃	16	78	0.436	0.240	2.58	0.452	0.433	〃
	〃	17	なし	0.668	0.343	2.39	0.639	0.537	〃
背中炙窯陶器		1	〃	0.690	0.344	2.57	0.615	0.476	
		2	〃	0.697	0.355	2.59	0.608	0.477	

資料番号：第19～33図の番号

ら別胎土であるかを判断する基準については何の情報も提示しないことである。したがって、第19図ではNo.1～No.7をⅠ群、No.4・5をⅡ群、No.9をⅢ群と3群に分類してもよいし、また、No.1～No.5をⅠ群、No.9をⅡ群の2群に分類してもよい。あるいは、No.1～No.9をⅠ群としてまとめてしまうことも可能である。どちらの分類がよいかはデンドログラムだけでは判断のしようがない。そこで、土器の地域差をもっともよく表示するRb—Sr分布図を描いてみることにした。第20図には土師器のRb—Sr分布図を示す。この図にはまた、佐渡島の小泊窯跡群出土須恵器の分析値を全部包含するようにして小泊領域をとってある。そうすると、大半の土師器は地元、小泊領域内に分布するが、No.9のみは孤立して分布することがわかる。第19図のデンドログラムでも示されたように、やはり、No.9の土師器は他の土師器とは別胎土をもつ、すなわち、別産地の土師器とみる方がよい。しかし、No.4・5は他の7点の土師器と同質の胎土をもつか否かは第20図をみる限り、判断することは難しい。ここではNo.1～No.5をⅠ群、No.9をⅡ群の2群に分類することにする。そうすると、Ⅰ群の土師器は小泊領域にほぼ対応することがわかる。須恵器胎土の化学特性がそのままストレートに土師器の化学特性にまで拡張して適用できるかどうかについては未だ問題はあるが、地元窯の須恵器の胎土に類似した胎土をもつということは地元産の粘土を素材として作った地元産の土師器である可能性が十分あると考えられる。No.9の産地は不明である。

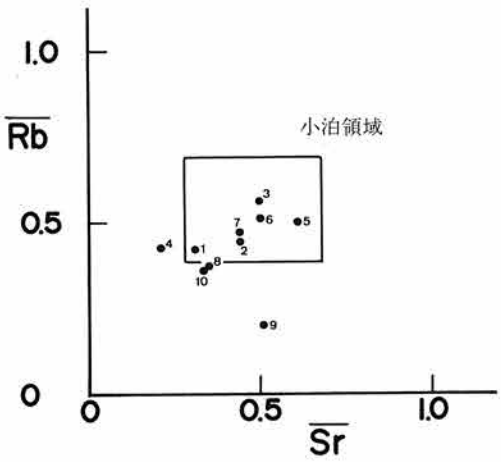
須恵器　第21図には須恵器のRb—Sr分布図を示す。また、佐渡島の小泊窯跡群の須恵器もプロットしてある。そして、これらを全部包含するようにして小泊領域をとった。勿論、この領域は定量的な意味をもつものではないが、少なくとも小泊窯跡群の須恵器はこの領域に分布することを定性的に示す。そのため、各地の須恵器の地域差を比較したり、遺跡出土須恵器の産地を定性的に手探りしたりする上には、この領域は有効に役立つ。第21図より、No.2を除いて、他の11点の須恵器はほぼ小泊領域内に分布することがわかる。

第22図にはK因子で小泊領域に対応させてある。No.12を除いてほぼ小泊領域に対応する。

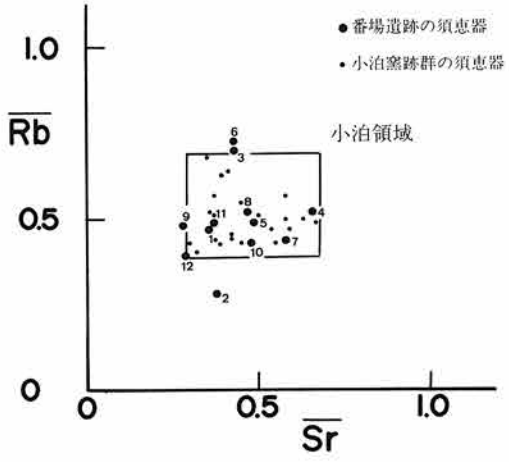
第23図にはCa因子で小泊領域に対比してあるが、Ca因子では全試料が小泊領域に対応した。

Fe因子は土師器、須恵器とも胎土の特性を示す上で有効ではなかったので、解析因子としては使用しなかった。

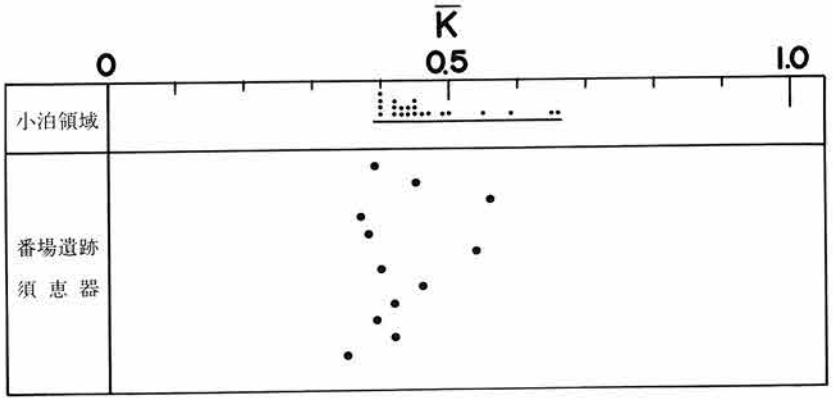
この結果、No.2・12を除く他の10点の須恵器は全因子で小泊領域に対応しており、地元、小泊窯跡群が有力な産地と推定される。また、これら10点の須恵器のうち、No.3・6の2点にはK、Rb量が多く、かつ、Fe量が少ない点で能登半島産の須恵器と同質の胎土をもつ。したがって、胎土分析からみて能登半島産の可能性ももつことになる。このため、これらの資料については再度、考古学的に器型観察を行う必要がある。しかし、大部分の試料にはFe量が多く、逆に、K量が少ないところから、能登半島産ではなく、小泊窯跡群産とみられる。No.2・12の産地については保留しておく。



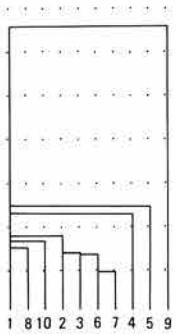
第20図　番場遺跡出土土師器の
Rb—Sr 分布図



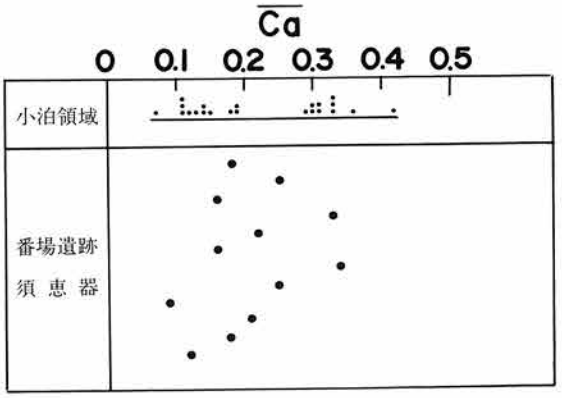
第21図　番場遺跡出土須恵器の
Rb—Sr 分布図



第22図　番場遺跡出土須恵器のＫ量



第19図　番場遺跡出土土師器のＫ･Ca･Rb･Sr
のクラスター分析

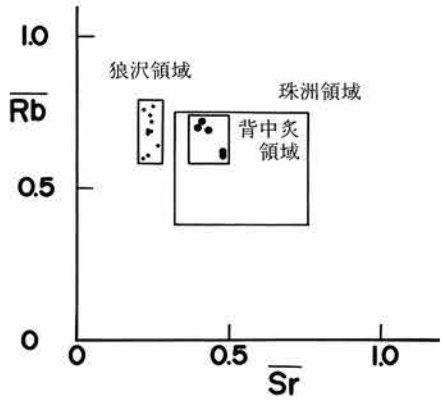


第23図　番場遺跡出土須恵器の Ca 量

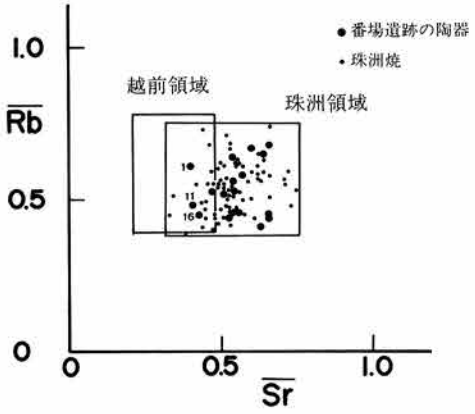
中世陶器　次に、中世陶器の分析結果について説明する。その前に、地元の狼沢窯、背中炙窯の中世陶器、及び、能登半島の珠洲焼の Rb—Sr 分布図を第24図に示しておく。背中炙領域は珠洲領域に含まれるが、狼沢領域は珠洲領域をずれ、両者の相互識別は可能であることがわかった。

第25図には番場遺跡出土中世陶器の Rb—Sr 分布図を示す。同時に、カメワリ坂窯、法住寺1、2、3号窯、西芳寺1、2、3号窯から出土した珠洲焼をプロットしてある。そして、これら珠洲焼を全部包含するようにして珠洲領域をとってある。そうすると、番場遺跡出土の中世陶器はすべて珠洲領域に分布することがわかる。ただ、No.1・11・16の3点は越前焼領域との重複領域に分布するので産地推定をする上に注意を要する。

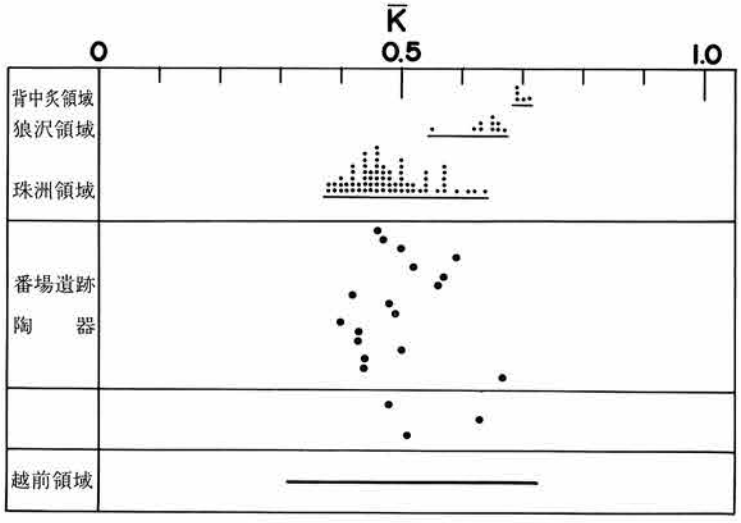
第26図にはK因子について、番場遺跡の中世陶器を背中炙領域、狼沢領域、珠洲領域に対比してある。全試料は珠洲領域に対応するが、背中炙領域には対応しない。したがって、K因子で背中炙窯産の可能性をもつものはないことになる。勿論、狼沢窯産の可能性をもつものがない



第24図　背中炙窯出土陶器の Rb—Sr 分布図



第25図　番場遺跡出土陶器の Rb—Sr 分布図

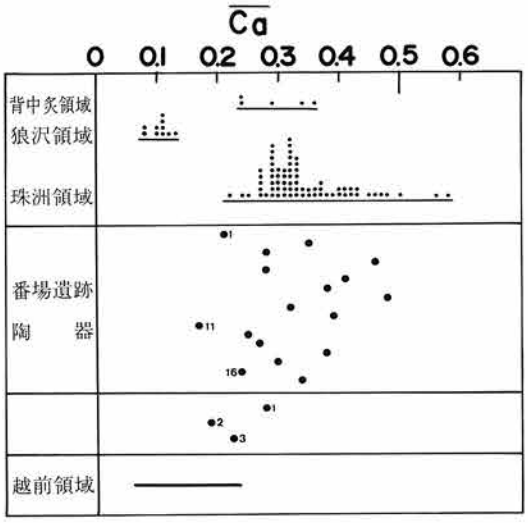


第26図　番場遺跡出土陶器のK量

ことは第25図のRb—Sr分布図より明らかである。

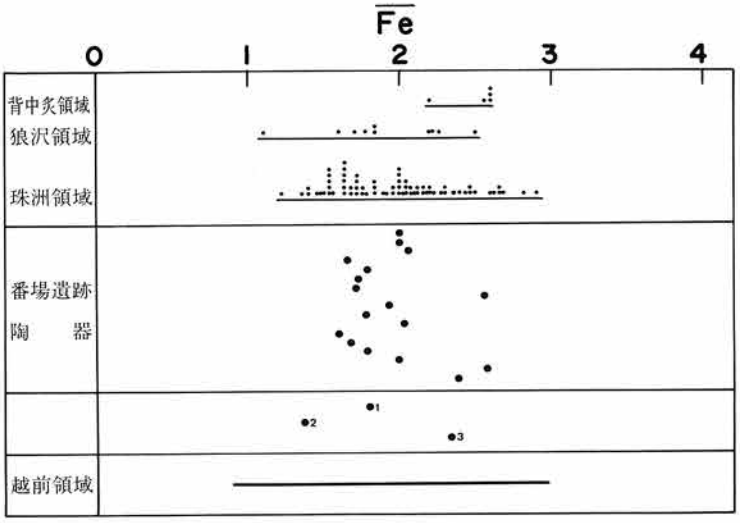
第27図にはCa因子を対比してある。Ca因子では珠洲焼と越前焼の相互識別は可能である。そうすると、第25図のRb—Sr分布図で珠洲領域と越前領域の重複領域に分布したNo.1・11・16のうち、No.1とNo.11の2点にはCa量が少なく、越前領域に分布することがわかる。他のすべての中世陶器は珠洲領域に分布した。

しかし、第28図のFe因子では珠洲焼と越前焼の相互識別はできず、分析した番場遺跡の全試料は珠洲、越前の両領域に分布した。



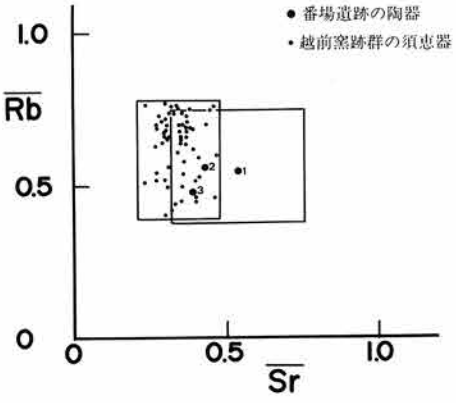
第27図　番場遺跡出土陶器のCa量

この結果、番場遺跡の中世陶器はNo.1・11の2点を除いて他の試料は全因子で珠洲領域に対応したことになり、珠洲焼である可能性は高い。一方、No.1・11はCa・Sr量がやや少なく、越前焼である可能性をもつ。器形による検証も必要である。



第28図　番場遺跡出土陶器のFe量

次に、器形観察からみて越前焼と推定された3点の陶器のRb—Sr分布図を第29図に示す。同時に越前窯跡群出土須恵器もプロットしてある。狼沢窯の終末期須恵器と初期中世陶器でその化学特性が同じである。つまり、同じ素材粘土を使っていたことがわかっているので、越前焼の代わりに越前窯跡群の須恵器を使って越前領域を求めた。そうすると、No.1は越前領域をずれて珠洲領域に分布したが、No.2・3は両領域が重複する領域に分布した。この図だけではどちらに帰属するとも判別ができないので、第26・27・



第29図　越前産と推定された陶器のRb—Sr分布図

28図にK・Ca・Fe因子を対比した。Ca因子で越前焼と珠洲焼の相互識別ができることがわかっているので、Ca因子に着目すると、No.1は越前領域には入らず珠洲領域[1]に、逆に、No.2は珠洲領域には入らず越前領域に分布し、それぞれ珠洲焼、越前焼と推定された。しかし、No.3はCa因子でも両領域の重複領域に分布し、どちらとも判別できなかった。

2）白根市馬場屋敷遺跡出土中世陶器

馬場屋敷遺跡出土中世陶器の分析値を第4表にまとめてある[2]。この結果に基づいてRb—Sr分布図を作成したのが第30図である。No.9・10の2点は珠洲領域をずれて越前領域に分布した。しかし、他の10点はほぼ珠洲領域に分布しているとみてよい。

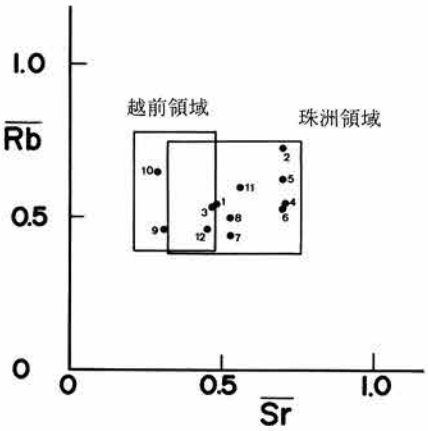
第31図にはK因子を対比してある。全試料が珠洲領域と越前領域に分布した。

第32図にはCa因子を対比してある。そうすると、Rb—Sr分布図で珠洲領域をずれて越前領域に分布したNo.9・10の2点はCa量が少なく、Ca因子でも珠洲領域をずれて越前領域に分布した。No.9・10は越前焼の可能性が高い。

第33図にはFe因子を対比してある。No.10は珠洲領域をずれて越前領域に分布したが、他の試料は両領域の重複領域に分布した。

以上の結果、馬場屋敷遺跡出土の中世陶器のうち、No.9・10の2点は越前焼の可能性が高く、他は珠洲焼と推定された。

上述したように、胎土分析は土器の流通を追跡する上に有効な手段ではあるが、土器の年代的差違は識別できない。土器の年代的差違は土器の器形観察による考古学的研究に従わなければならない。したがって、土器の流通を追跡する研究は分析化学者による土器胎土の地域差と考古学者による土器の年代的差違に関するデータの組み合わせの上に成り立つことになる。このことから、土器の流通を通して新しい歴史学を展開する上には考古学者と分析化学者との各自の分野を超えた共同研究が必要であることがわかる。このように異分野にまたがる共同研究によって新分野を開拓しようとする試みははじめてのことであろう。大いなる心意気と展望をもって努力しなければならない[3]。

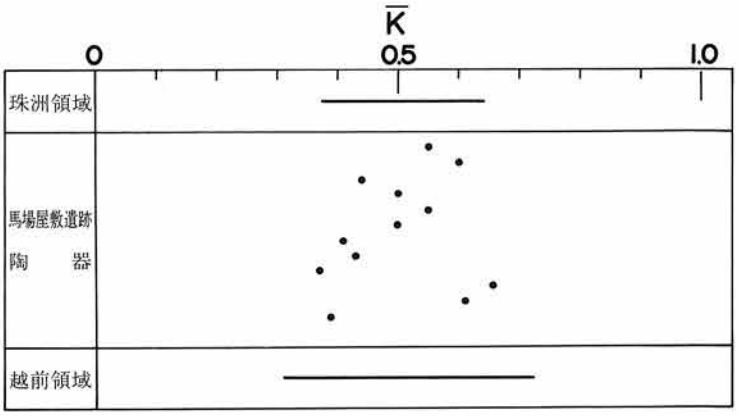


第30図　馬場屋敷遺跡出土陶器のRb—Sr分布図

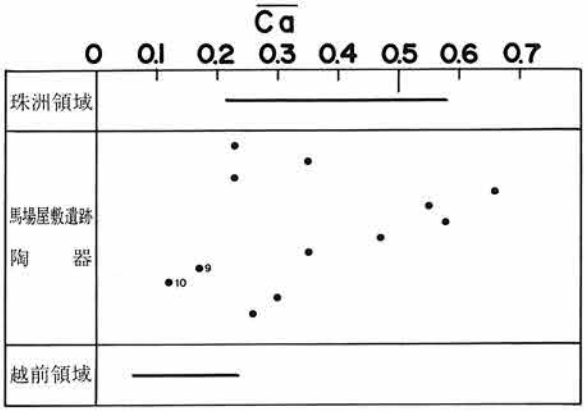
1）No.1（実測図199）は二次焼成で淡褐色を呈し、これによって越前焼と誤認したもので、分析の結果と一致する。

2）越後の「珠洲系陶器」が珠洲焼か珠洲系在地窯の製品かどうか判断するために、良好な資料を多く出土している馬場屋敷遺跡の資料の分析を試みた。資料の提供にあたっては白根市教育委員会と遠藤孝司の協力を得た。

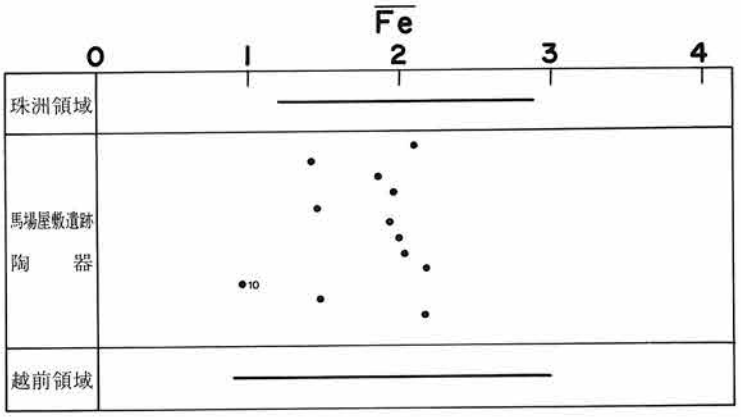
3）今回の胎土分析資料の考古学的知見については、第Ⅴ章7（P70）、第Ⅶ章（P90・99）参照。（以上註は坂井）



第31図　馬場屋敷遺跡出土陶器のK量



第32図　馬場屋敷遺跡出土陶器のCa量



第33図　馬場屋敷遺跡出土陶器のFe量

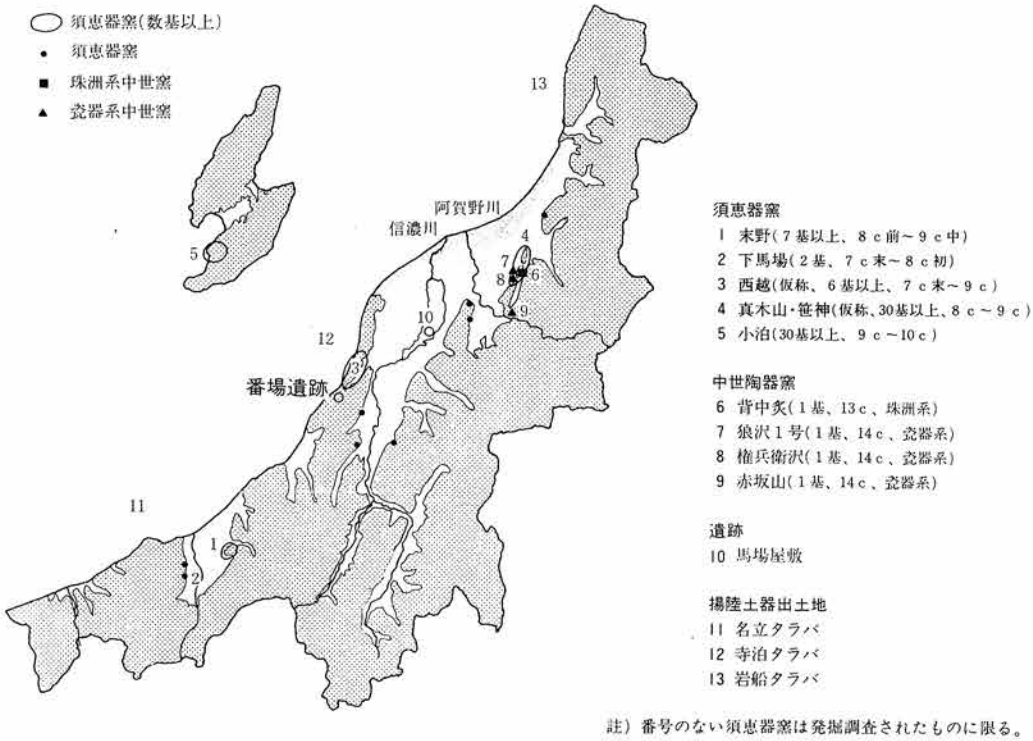
第４表　馬場屋敷遺跡出土中世陶器の分析値

資料番号	出土層位	器　種	報告書番号	観　察	K	Ca	Fe	Rb	Sr	推定産地
1	上層	甕	図版51－１	珠洲(生焼け)	0.546	0.227	2.100	0:544	0.480	珠洲焼
2	〃	甕(Ⅴ期)	第39図４	珠　洲	0.602	0.348	1.420	0.729	0.703	〃
3	〃	すり鉢(Ⅴ期)	第40図11	〃	0.443	0.226	1.860	0.541	0.474	〃
4	下層	壺(Ⅲ期)	第11図２	〃	0.503	0.656	1.960	0.550	0.710	〃
5	〃	甕(Ⅲ期)	第11図６	〃	0.550	0.550	1.460	0.625	0.699	〃
6	〃		なし	〃	0.500	0.579	1.930	0.528	0.698	〃
7	〃	すり鉢	〃	〃	0.406	0.470	2.010	0.439	0.531	〃
8	上層	甕	第39図３	〃	0.431	0.352	2.040	0.502	0.530	〃
9	〃	すり鉢	なし	越　前？	0.372	0.169	2.180	0.464	0.308	越前焼
10	〃	甕？	図版23—3･4	越　前	0.655	0.122	0.969	0.651	0.294	〃
11	〃	甕？	図版23—1･2	笹　神？	0.611	0.297	1.490	0.597	0.564	珠洲焼
12		すり鉢(Ⅴ期)	なし	珠　洲	0.390	0.259	2.170	0.459	0.446	〃

１）報告書は川上貞雄・遠藤孝司1984である。

２）出土層位の上層は「馬場屋敷遺跡」、下層は「馬場屋敷下層遺跡」を示す。両層は同一地点にあるが、厚い洪水堆積層で上層・下層が分けられている。

３）器種の編年区分は珠洲焼〔吉岡康暢1982ｂ〕によるもので、坂井が加筆した。観察は肉眼観察にもとづく推定産地で、遠藤孝司による。



第34図　県内のおもな須恵器窯と中世陶器窯の分布

2．出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物及び内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の金属学的調査

大澤正己

A．出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物の調査結果

概要

9世紀末葉～10世紀中葉に比定される番場遺跡出土遺物を調査して次の事が明らかになった。

遺物の性格は鍛冶工房跡である。鉄素材の成分調整を目的とする精錬鍛冶(大鍛冶)から鉄器製作の鍛錬鍛冶(小鍛冶)まで行っている。各鉄滓は鍛冶炉の炉底に堆積した椀形滓であった。なお高チタン(Ti)含有の砂鉄製錬滓の混入もあった。これは含鉄鉄滓の鉄分の多い個所を採取した残材と考えられる。

1．調査方法

(1)　供試材

第5表に示す。鉄滓5種に炉材溶着鉱物2種である。

(2)　調査項目

①肉眼観察　②顕微鏡組織　③粉末X線回折　④EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査　⑤ビッカース断面硬度　⑥化学組成

2．調査結果

(1)　鉄滓(精錬鍛冶滓：大鍛冶滓)Z—851、Z—856

肉眼観察：両方共赤褐色を呈す椀形状の鉄滓である。半分を欠損する。

顕微鏡組織：Z—851　鉄滓は白色粒状の Wüstite：FeO と淡灰色多角形の Ulvöspinel：$3FeO \cdot Fe_2O_3 \cdot TiO_2$ および Magnetite：Fe_3O_4、それらの間隙の灰色盤状結晶の Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$ らから構成される。なお Wüstite 粒内にも Ulvöspinel が析出している。

Z—856鉄滓は Ulvöspinel を析出した Wüstite と Fayalite で構成される。

粉末X線回折：第6表に示す。同定結果は顕微鏡組織とほぼ同じである。回折プロフィールは紙面の量に制限があり割愛した。

EPMA 調査：Z—856鉄滓を特性X線像で示す。白色輝点が集中するところが分析元素の存在を表わしている。Wüstite 粒内の淡灰色析出物および粒界に Ti が検出される。砂鉄系の精錬鍛冶滓の晶癖である。

化学組成：第7表に示す。製錬滓に比べて鉄分が多く造滓成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO)は少なく、かつ随伴微量元素も低減された傾向がよく出ている。

Total Feは多く58.9～66.3%であり、このうち酸化第1鉄(FeO)が54.2～62.9%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)24.01～24.89%の割合である。造滓成分は6.57～14.67%と少ない。TiO_2は3.71～3.75%、Vが0.11～0.12%とやや高目で、精錬鍛冶滓の成分レベルを表わしている。

(2) 鉄滓(鍛錬鍛冶滓：小鍛冶滓)Z—854、Z—855

肉眼観察：表皮側に木炭痕をつけた椀形滓である。表裏ともに赤褐色で局部に鉄錆を滲ませる。

第5表 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡	試料	出土位置	推定年代	試料大きさ		調査項目					
					サイズ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	粉末X線回折	EPMA	ビッカース断面硬度	化学組成
Z-851	番場	鉄滓(椀形精錬鍛冶滓)	A9V層	9C末～10C中葉	100×85×30	545	○	○			○
2	〃	炉材(ガラス質鉱物)	B5(16～18)V層下部	〃	50×50×40	85	○	○			○
3	〃	〃	B5(21)V層下の砂850718	〃	120×80×38	375	○	○			○
4	〃	鉄滓(椀形鍛錬鍛冶滓)	B6(21～25)V層	〃	105×70×30	320	○	○			○
5	〃	〃	SK24	〃	80×60×20	195	○	○			○
6	〃	鉄滓(椀形精錬鍛冶滓)	SK24	〃	50×50×40	130	○	○	○		○
7	〃	鉄滓(砂鉄製錬滓)	SK60 850718	〃	70×50×45	145	○	○	○		○
W-861	内越	鉄滓(砂鉄製錬滓)	トレンチSK26西	9C後半頃	90×40×17(流出滓)	175	○				○
2	〃	〃	〃	〃	50×60×70(炉内滓)	265	○				○
3	〃	小鉄塊(過共析鋼)	SK21(製鉄炉)	〃	50×35×30	100	○		○	○	○
4	〃	鉄滓(砂鉄製錬滓)	〃	〃	70×80×40(流出滓)	182	○				○
5	〃	〃	〃	〃	100×85×65(炉内滓)	700	○				○

番場遺跡：新潟県三島郡出雲崎町小木字番場所在　　内越遺跡：新潟県刈羽郡西山町大字別山字熊谷1356所在

第6表 粉末X線回折結果(1)

符号	遺跡名	試料	組物組成 / 示性式 / ASTMカードNo.	Wüstite FeO 6—615	Magnetite Fe_3O_4 19—626	Ulvöspinel $3FeO·Fe_2O_3·TiO_2$ 25—417
Z-851	番場	鉄滓：精錬鍛冶滓		◎	○	◎
2	〃	炉材：ガラス質鉱物				
3	〃	炉材：ガラス質鉱物				
4	〃	鉄滓：鍛錬鍛冶滓		◎	○	
5	〃	鉄滓：鍛錬鍛冶滓		◎	○	
6	〃	鉄滓：精錬鍛冶滓		◎		○
7	〃	鉄滓：砂鉄製錬滓				○
Z-853C	〃	炉材：胎土		○		

強：◎ ＞ ○ ＞ ○：弱

顕微鏡組織：白色粒状の大きく成長したWüstiteが多量に晶出する。Fayaliteは少量である。

粉末X線回折：第6表に示す。Wüstite、Magnetite、Fayaliteらが同定された。検鏡結果に準じたものである。

化学組成：第7表に示す。Total　Feは70%と精錬鍛冶滓(Z—851、Z—856)より更に鉄分が多く含有され、FeOが65.8～67.8%、Fe_2O_3は24.7～26.9%である。鉄分の増加分だけ造滓成分は低減され4.52～5.13%となる。また、TiO_2は0.52～1.47%も少なくなる。Vも0.088～0.11%と少なくなる。これら成分構成と鉱物組成のWüstite量から鍛錬鍛冶滓に分類できる。

(3)　鉄滓(砂鉄製錬滓：炉内残留滓)Z—857

肉眼観察：表裏ともに黒褐色を呈し、気泡少なく緻密な鉄滓である。打欠き面をもつ。

顕微鏡組織：鉱物組成は白色棒状のIlmenite：FeO、TiO_2と少量の多角形結晶のUlvöspinelが共存し、灰色長柱状のFayaliteが粒間の隙間を埋める。高チタン含有の砂鉄製錬滓である。

粉末X線回折：第6表に示す。主要鉱物はIlmeniteであり、UlvöspinelとFayaliteがあとに続く。

EPMA調査：図版75に示す。Ilmenite($FeO \cdot TiO_2$)とUlvöspinel($3FeO \cdot Fe_2O_3 \cdot TiO_2$)の結晶にTiが強く、さらにFeが重なって検出される。中央の円形結晶は金属鉄であり、これには白色輝点がFeのみが集中する。粒間のガラス質部分はSi、Al、Ca、Mg、K、Naらが存在する。

化学組成：第7表に示す。製錬滓は精錬鍛冶滓や鍛錬鍛冶滓に比べて鉄分が少なく、造滓成分や砂鉄中の脈石成分が多い。Total　Fe 26.0%と低目で、FeOが28.6%、Fe_2O_3が5.39%である。造滓成分は39.28%高く、かつTiO_2も21.68%と高値を示す。Vは0.24%とこれも多い。MnOは0.97%と高目である。

(4)　炉材ガラス質鉱物　Z—852、Z—853

肉眼観察：多孔質の赤褐色ガラス質付着物面と、裏面側はスサ入り粘土からなっている。

顕微鏡組織：暗黒色ガラス質基地に白色針状や点状のIlmenite系Fe—Ti酸化物が析出する。

第6表　粉末X線回折結果(2)

	Ilmenite	Fayalite	Mullite	α—Quartz	α—Cristobalite
	$FeO \cdot TiO_2$	$2FeO \cdot SiO_2$	$3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$	SiO_2	SiO_2
符　号	29—733	20—1139	15—776	5—490	11—695
Z-851		○			
2			○	◎	○
3				◎	○
4		○			
5		○			
6		○			
7	◎	○			
Z-853C			○	◎	

強：◎ ＞ ○ ＞ ○：弱

第7表　鉄滓、炉材ガラス鉱物、小鉄塊、砂鉄の化学組成

符号	遺跡名	市町別	出土位置	試料	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナシウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / (Total Fe)	TiO_2 / (Total Fe)	注
Z-851	番場(ばんば)	出雲崎	A9V層	精錬鍛冶滓	9C末～10C中葉	58.9	54.2	24.01	9.72	3.43	0.57	0.95	0.19	3.75	0.024	0.023	0.23	0.12	0.12	0.004	14.67	0.249	0.0637	1
2	〃	〃	B5(16～18)	ガラス質鉱物	〃	3.01	1.80	2.30	68.10	21.41	0.36	0.94	0.03	0.52	Nil	0.005	0.089	0.18	0.014	0.003	90.81	30.169	0.1728	〃
3	〃	〃	B5(21)V層下の砂	〃	〃	6.00	5.46	2.51	65.70	16.53	1.18	1.24	0.17	1.52	Nil	0.008	0.071	0.052	0.040	0.003	84.65	14.108	0.2533	〃
4	〃	〃	B6(21～25)V層	鍛錬鍛冶滓	〃	70.0	65.8	26.90	2.90	1.93	0.09	0.21	0.04	0.52	0.069	0.026	0.28	0.11	0.088	0.004	5.13	0.073	0.0074	〃
5	〃	〃	SK24	〃	〃	70.0	67.8	24.70	2.74	1.38	0.13	0.27	0.07	1.47	0.058	0.043	0.28	0.075	0.11	0.004	4.52	0.065	0.0210	〃
6	〃	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	66.3	62.9	24.89	3.70	2.34	0.15	0.38	0.09	3.71	0.058	0.024	0.25	0.11	0.11	0.003	6.57	0.099	0.0560	〃
7	〃	〃	SK60	砂鉄製錬滓	〃	26.0	28.60	5.39	23.08	10.30	1.75	4.15	0.97	21.68	0.037	0.015	0.20	0.37	0.24	0.004	39.28	1.511	0.8340	〃
W-861	内越	西山町	トレンチSK26西	砂鉄製錬滓	9C後半頃	38.5	46.0	3.95	16.80	6.76	2.42	3.28	0.81	18.18	0.076	0.024	0.26	0.06	0.33	Nil	29.26	0.760	0.4720	2
2	〃	〃	〃	〃	〃	33.5	41.2	2.14	21.30	7.75	3.26	3.68	0.81	16.18	0.035	0.026	0.21	0.04	0.16	Nil	35.99	1.074	0.4830	〃
3	〃	〃	SK21	小鉄塊酸化物	〃	47.0	19.62	45.40	9.54	4.12	0.50	1.27	0.27	10.01	0.14	0.062	0.23	0.79	0.62	Nil	15.43	0.328	0.2130	〃
4	〃	〃	〃	砂鉄製錬滓	〃	36.5	43.50	3.80	20.72	6.99	2.77	2.97	0.74	16.01	0.063	0.037	0.045	0.09	0.35	Nil	33.45	0.916	0.4390	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	40.5	46.30	6.42	15.34	6.39	1.82	2.84	0.71	17.43	0.082	0.061	0.27	0.09	0.39	Nil	26.39	0.652	0.4300	〃
6	山三賀II	聖籠町	SI840(カマド？)4層	鍛錬鍛冶滓	8・9C	55.4	51.4	22.08	14.80	3.68	1.33	0.61	0.065	0.20	0.006	0.039	0.33	0.36	0.005	0.008	20.42	0.369	0.0040	3
7	〃	〃	SI840 4層	〃	〃	55.5	19.83	57.30	13.42	2.70	0.39	0.22	0.032	0.046	0.013	0.123	0.20	0.73	0.030	0.007	16.73	0.301	0.0010	〃
8	〃	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	48.0	46.4	17.04	21.66	5.44	0.66	1.03	0.160	4.25	0.11	0.067	0.31	0.36	0.12	0.009	28.79	0.600	0.0890	〃
9	〃	〃	SI4 2層黒色土	鍛錬鍛冶滓	〃	52.0	56.7	11.33	24.26	5.29	0.50	0.45	0.032	0.14	0.007	0.023	0.35	0.16	0.002	Nil	30.50	0.587	0.0030	〃
0	〃	〃	SI4 北東2層黒色土	〃	〃	59.0	58.9	18.87	14.46	3.40	0.60	0.41	0.045	0.11	0.007	0.059	0.17	0.16	0.003	0.042	18.87	0.320	0.0020	〃
Z-858	鶴巻田	柏崎市	TD10-12-G-I-10	ガラス質鉱物	平安～中世	10.20	6.61	7.24	62.40	22.67	0.15	0.27	0.17	0.17	Nil	0.005	0.120	0.051	0.040	0.004	85.49	8.381	0.0170	4
9	〃	〃	TD14-H-12	〃	〃	11.63	6.39	9.53	53.00	28.90	0.39	0.55	0.18	0.25	Nil	0.005	0.140	0.086	0.061	0.004	82.84	7.123	0.0210	〃
0	〃	〃	TD-17I-7	砂鉄製錬滓	〃	44.90	47.4	11.57	10.90	7.65	1.19	3.96	0.74	13.76	0.13	0.018	0.190	0.310	0.84	Nil	23.70	0.528	0.3060	〃
4B-6	真木山	豊浦町	B地点	砂鉄製錬滓	平安初期	37.82	33.16	17.01	18.61	9.36	2.35	2.90	0.87	13.77	0.16	0.074	0.206	0.09	0.31	0.01	33.22	0.875	0.3640	5
S-18	〃	〃	〃	〃	〃	20.6	8.0	20.30	46.00	5.60	1.20	2.20	0.56	11.80	0.12	0.017	0.070	0.376	0.19	0.004	55.00	2.670	0.5730	〃
19	〃	〃	C地点	〃	〃	34.7	24.8	21.70	20.00	5.10	1.40	2.90	0.88	17.60	0.14	0.021	0.16	0.213	0.43	0.004	29.40	0.847	0.5070	〃
2I-821	馬場	佐渡	B6 2層(No64)	鍛錬鍛冶滓	9C後半～10C	57.9	37.5	41.70	13.02	3.85	2.38	0.55	0.036	0.18	0.009	0.015	0.30	0.40	Nil	0.005	19.80	0.341	0.0030	6
2	〃	〃	E6 2層	〃	〃	44.3	47.2	10.90	27.30	8.24	4.63	0.88	0.046	0.25	0.009	0.014	0.37	0.07	0.006	0.002	41.05	0.927	0.0060	〃
1	〃	〃	遺跡内	砂鉄	自然堆積	27.3	5.17	33.30	33.50	10.96	3.62	2.44	0.360	3.40	0.064	0.016	0.61	0.27	0.10	0.005	—	—	0.1250	〃
2	〃	〃	〃	〃	〃	29.6	5.60	36.20	29.90	9.60	3.69	2.34	0.400	4.10	0.076	0.015	0.60	0.19	0.12	0.002	—	—	0.1390	〃
3	馬場周辺	〃	海岸浜砂鉄	〃	現代	41.2	8.91	48.90	17.82	6.20	2.10	1.43	0.840	5.09	0.058	0.022	0.44	0.11	0.13	0.002	—	—	0.1240	〃
4	〃	〃	石花川右岸	〃	〃	22.5	4.31	27.40	—	—	—	—	—	3.17	—	—	—	—	—	—	—	—	0.1410	〃
5	〃	〃	〃 左岸	〃	〃	32.5	6.90	38.80	—	—	—	—	—	4.29	—	—	—	—	—	—	—	—	0.1320	〃

注1．大澤正己「出雲崎町番場遺跡出土鉄滓・炉材鉱物及び内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の金属学的調査」『番場遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集)新潟県教育委員会1987

2．同上　3．新潟県教育委員会『山三賀II遺跡現地説明会資料』1986.8.24、分析試料は新潟県教育委員会より提供を受ける。未発表

4．新潟県教育委員会調査、近日中に報告予定　5．大澤正己「真木山遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」『真木山製鉄遺跡』(豊浦町文化財報告2)豊浦町教育委員会1981

6．大澤正己「馬場遺跡出土の砂鉄・鉄滓調査」『馬場遺跡』(新潟県佐渡郡相川町北片辺馬場遺跡発掘調査報告)相川町教育委員会1983

粉末X線回折：第6表に示す。鉱物組成は珪酸系でα—Quartz(SiO_2)、α—Cristobalite(SiO_2)それにMullite($3Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$)で構成される。粘土の胎土も大差ない組成で、こちらはFeOを若干含む。

化学組成：第7表に示す。鉄分はほとんど含有せず珪酸やアルミナ系である。Total　Feは3.01～6.0%で、FeOが1.8～5.46%、Fe_2O_3は2.3～2.51%の割合でいずれも低値である。造滓成分は逆に多く、85～90%を占める。Al_2O_3が16.5～21.41%と高目である事から耐火度も高かったと想定される。

3．まとめ

番場遺跡は、高チタン砂鉄を原料とした鉄素材の鍛冶工房跡であった。鍛冶作業は、精錬鍛冶から鍛錬鍛冶と連続した工程がとられたと推定できる。鉄素材の供給地は、乙茂所在の合清水製鉄址や金谷川内製鉄址〔中村孝三郎ほか1978〕に比定しても無理のない鉄滓中TiO_2の分析結果が出ている[1)]。この地域に注目しておきたい。（番場と乙茂の距離は約4㎞、推定年代も可能性をもつ）

B．内越遺跡出土鉄滓・小鉄塊の調査結果

概要

古代に属し（第Ⅱ章3Ａ参照）、製鉄遺構と炭窯を共伴する内越遺跡〔山本肇ほか1983〕から出土した鉄滓と小鉄塊を調査して次の点が判明した。

鉄滓は高チタン(Ti)含有砂鉄を原料とする製錬滓であった。小鉄塊は炭素(Ｃ)を1.3%含有する浸炭組織の過共析鋼であって、吸炭反応を考えて製鉄炉の竪炉と矛盾しない。鉄中の非金属介在物(鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物)は含チタン系と硫化物系の2種が検出された。砂鉄系原料であっても硫化物系介在物はTiを含有しない。今後の金属学的調査において鉄器生産履歴の大きな指標になるものである。

1．調査方法

(1)　供試材

第5表に示す。鉄滓は流出滓2点、炉内残留滓2点、小鉄塊1点の計5点である。

(2)　調査項目

第5表に示す。

1）大澤正己1981　79頁。TiO_2として15.12～28.51%を含有する鉄滓が出土している。Ti→TiO_2の換算値を使用。

2．調査結果

(1) 鉄滓(流出滓：W—861、W—864、炉内残留滓：W—862、W—865)

肉眼観察：流出滓は黒色ないし小豆色の飴状肌の緻密な鉄滓である。炉内残留滓は黒色から黄褐色で粗鬆な肌に木炭痕を残す。また裏面には高温で青灰色に変色した炉材粘土を付着する。

顕微鏡組織：鉱物組成は、流出滓、炉内残留滓ともに、Ulvöspinel + Fayalite と、基地の暗黒色のガラス質スラグである。いずれも砂鉄製錬滓の晶癖を示す。

化学組成：第7表に示す。製錬滓は鍛冶滓に比べると、鉄分は少なく造滓成分、TiO_2ら脈石成分は多い。Total Fe は33.5～40.5%であり、FeO が41.2～46.3%、Fe_2O_3 が2.14～6.42%の割合である。造滓成分は26.39～35.99%、TiO_2 は16.01～18.18%と多く、V も0.16～0.39%である。また MnO も多く0.71～0.81%を含有する。内越遺跡の鉄滓は Cu が Nil とほとんど含まれていないのが特徴で番場遺跡出土鉄滓との差異は明らかである。

(2) 小鉄塊(W—863)

肉眼観察：表裏ともに赤褐色を呈し、表皮に亀裂を走らせ、そこより赤黒色の鉄錆を滲ませ金属鉄の残留を予測させる。磁性強い。

顕微鏡組織：研磨で観察できる非金属介在物は EPMA の項で述べる事にして、ピクラル腐食(etching)で現われた浸炭組織から記す。製鉄炉内で還元された低炭素鋼は、木炭にかこまれて、変態点(800℃以上)以上で加熱されると、高温で発生したCOガスが鉄塊表面に浸入し、浸入した炭素が拡散して内部に浸透し、表層は炭素量の高い鋼に変化する。竪炉は還元帯が長いので浸炭作用は起しやすい。組織は白い素地がフェライト(Ferrite：α鉄)、その中に薄片紐状の析出物があるのは初析セメンタイト(Cementite：Fe_3C)であり、白黒層状にあるのがパーライト(Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)である。鋼としては炭素量の高い過共析鋼(C：0.8%以上)である。

EPMA 調査：図版76・77に示す。非金属介在物は2種類存在する。図版76に示す非金属介在物は Ti 系である。特性X線像の BE(組成像)に示す介在物は4相に分かれている。そのうちの1は珪酸塩系である。主要組成は CaO—MgO—K_2O—Al_2O_3—SiO_2 系となり、図版76に定量分析値と示している。TiO_2 は3.6%が固溶されている。2は珪酸塩介在物に析出した Ulvöspinel ($3FeO \cdot Fe_2O_3 \cdot TiO_2$)である。$TiO_2$ は85.7%と出ている。3は介在物を縁どる物質で硫化物でありSとして29.8%を含有する。この相には TiO_2 が2.3%検出される。珪酸塩介在物の周縁にもう一種の相が存在する。燐の偏析帯で P_2O_5 として20.6%が含有される。

特性X線像の白色輝点集中度で介在物を観察すると、1の珪酸塩部は Si、Al、Ca、Mg、K、Na らが重なりをみせる。2の個所の板状結晶は Ti で珪酸塩の周縁からも検出される。また、S、P も円縁部に存在するのが判る。介在物は酸化物であるので O が珪酸塩とその円縁介在物にすっぽり重なる。

第８表　小鉄塊の分析結果

成分 / 試料	Total Fe	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V	Ca	Co	Ni	Al	Mg	Cr	Mo	Sn
金　属　鉄	92.5	1.30	0.43	0.025	0.15	0.086	0.008	0.51	0.038	0.004	0.031	0.027	0.083	0.045	0.009	0.008	0.005>

図版77は、結晶粒界に析出した硫化物系介在物である。FeO との共存でＳとして30.6%が定量されている。この硫化物系には Ti を固溶していないので、単独検出の時の履歴判定には注意を要する。福島県新地町所在の金子坂遺跡の出土小鉄塊において、砂鉄系でありながら Ti のないこの硫化物系介在物が検出されている〔大澤正己1987〕。

ビッカース断面硬度：図版73に荷重１kgで測定した圧痕を示す。硬度は265で過共析鋼としては、やや軟質である。フェライト部分の多い個所であろう。

化学組成：第７表に示す分析値は酸化物の測定値である。Total　Fe が47.0%で Fe_2O_3 が45.4%と高目である。鉄滓を含有しているので TiO_2 が10.01%とこれも多い。金属鉄の分析結果を第８表に示す。こちらは Total　Fe が92.5%の中でＣ：1.3%、Si がやや多く0.43%、Mn 低目の0.025%、Ｐは高目で0.15%、Ｓ0.086%とＰの偏析帯や硫化物系介在物が存在するのでこれは高い。また砂鉄系であるので Ti は0.51%とこれも多いが、他の随伴微量元素らは低目である。

３．まとめ

内越遺跡のSK21遺構は、高チタン砂鉄を原料とした竪形製鉄炉と推定される。還元された小鉄塊は、Ｃ：1.3%の過共析鋼レベルであり、精錬鍛冶(大鍛冶)にかけて、硬鋼クラスの鉄素材の原料となったと想定できる。産出鉄塊は、熱処理効果のあがる鋭利な刃物や工具類の供給源になりえたであろう。　(62.４.19)

第Ⅶ章　ま　と　め

1．平安時代

A．土　　器

年代　番場遺跡の平安時代の土器は、遺構出土でまとまったものはほとんどなく、ここでは包含層出土土器を含めた出土土器の全体から、時期を考えることにする。当期の土器は須恵器と土師器であるが、供膳形態のなかで土師器の占める割合は、土師器が圧倒的に多い。奈良・平安期の土器の供膳形態を通観するとき、須恵器が大半を占める時期から、土師器が多くなる時期へと明瞭に変化することがわかる。たとえば、県西南部(頸城地方・上越地方)の上越市今池遺跡群の編年(以下「今池編年」と略す)〔坂井秀弥1984〕では、土師器の占める割合はⅤ期(９世紀前半・中葉)の２割から、Ⅵ期(９世紀後半)の７～８割に大きく変化する。これは県西南部のあり方であり、地方によって多少の違いがあることも考慮されるが、北陸地方中部の加賀・能登においても同じ様相がみられ〔田嶋明人1986〕、広い地域で供膳形態の須恵器が激減するという動きがあったものと考えられる。したがって、番場遺跡の土器もほぼ９世紀後半以降に比定することが可能である。

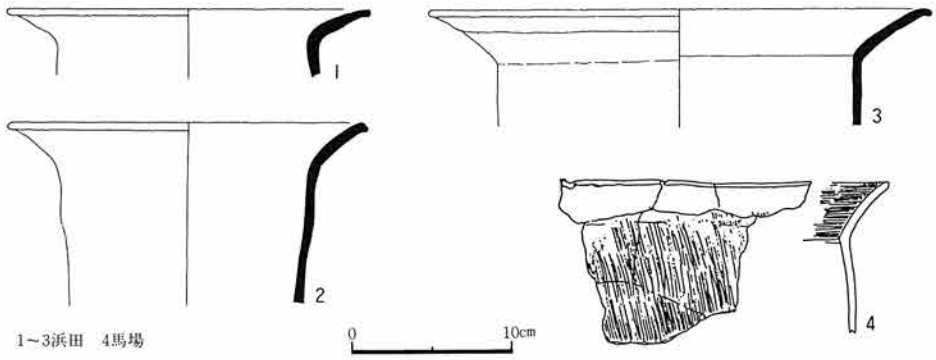
越後におけるこの時期の土器としては、前述の今池編年Ⅵ・Ⅶ期の資料、同Ⅶ期の前半期に比定される上越市一之口遺跡西地区出土土器〔坂井秀弥1986ａ〕、南蒲原郡栄町半ノ木遺跡出土土器〔関雅之ほか1973・坂井秀弥1982〕などが知られており(第36図参照)、これ以外でもかなり存在する。今池編年のⅥ期とⅦ期の相違は、①供膳形態における須恵器の割合が２～３割から１割以下に減少する。②身の浅い須恵器有台杯が消滅する。③須恵器杯類の底部糸切り技法がみられなくなる。④有台杯・無台杯ともに身のひらきが大きくなり、有台杯では高台が断面方形のものから丸いものへ変化する。⑤長頸瓶の頸部が太くなる、などの変化がある〔坂井秀弥1986a〕。

当遺跡の土器では良好な遺構一括出土の土器がないため、土師器との量比は不分明である。また、須恵器杯類の底部の糸切り技法は浦川原村・三和村末野窯〔小島幸雄ほか1983〕など県内でも東海・東山道の技法が移入・定着した西南部にほぼ限定されるもので、ここでは比較の対象にならない。これらの点を除くと、まず第一に須恵器の無台杯はおしなべて今池Ⅵ期土器(今池SD３出土土器)より器壁が薄く、底部に丸味をもつものがあるということが指摘される。次に、有台杯は身の浅いものがなく、高台がすべて断面方形ではなく、ごく低く丸味をもったものであり、有台椀という器種が存在することも注目される。長頸瓶の形態はⅥ期ではなくⅦ期のものである。以上の点からみて、当遺跡の須恵器はほとんどすべてが今池Ⅵ期より後出し、

Ⅶ期に比定されよう。今池Ⅶ期前半は９世紀の第４四半紀から10世紀前半という年代観をもっており〔坂井秀弥1986ａ〕、当遺跡の土器もほぼこれに比定される。ただし、土師器では無台椀で体部に丸味をもたず、調整が比較的粗いもの(35・39・40)は、今池Ⅶ期でも前半に比定される一之口遺跡西地区出土土器にはみられず、これより後出的で今池Ⅶ期の後半に比定される下新町出土土器に類例があり、時期の下限は10世紀中葉頃まで下るものと思われる。有台Ⅲ(53)も同様に新しいものと考えられる。

非在地系土器　当遺跡の土師器は大半がロクロ使用のロクロ土師器である。ロクロ土師器でないのは甕(70)と鉢(73)、筒形土製品(74)のみである。筒形土製品は一般的な器種でなく、やや特異なものと考えられる。鉢(73)も胎土や製作技法が同じで、両者は同時に製作され、伴出していることから使用された場も同じと推定される。これに対し、甕(70)はごく一般的な器種でありながら、胎土や製作技法が全く特異である。胎土は特に砂粒が多く、色調は褐色でほかのロクロ土師器と明瞭に区別される。越後の土師器の甕においてロクロが使用されるようになるのは、８世紀初頭頃で以後急速に普及し、８世紀後半には非ロクロの土師器がほとんど消滅すると考えられる〔坂井秀弥1983・1984〕。したがって、製作技法上からは甕(70)は８世紀までのものと考えられるが、形態や伴出する土器からみて、その可能性は少ないといえる。まず、この甕は体部を欠失するものの、体部上端が直線的なことから、長胴の形態をとるものと考えられる。長胴の形態は古墳時代後期以降に出現するが、その時期のものは上越市山畑遺跡〔小島幸雄1978〕の例などから体部と口縁部の境は明瞭に屈折せず、ゆるく外反するのみである。これに対し、この甕は体部と口縁部の境が明瞭に屈折し、口縁部は「く」の字状に直線的に外反することから、６世紀から８世紀の間のものとしてはなじまない形態である。また、これ以外に土師器・須恵器がかなり出土していながら、すべてが９世紀から10世紀の時期とみて大過ないものであり、これだけ別の時期とするのも妥当ではないと思える。

ところで、この甕に類似した例は越後にはみることができないが、佐渡には平安期の例で見い出すことができる。第35図は真野町浜田遺跡〔関雅之ほか1975〕と相川町馬場(ばんば)遺跡〔本間嘉晴



第35図　佐渡出土の土師器　　〔関ほか1975・本間ほか1983原図〕

ほか1983〕出土の土器である。浜田遺跡の報告ではこのタイプは古式土師器第Ⅳに分類され、和泉期から鬼高期にかけての地方色の強いものではないかとされている。一方、馬場遺跡の報告では「佐渡島内では奈良・平安時代の遺跡から出土する普通の甕のタイプ」とされ、底部は薄手丸底で、器壁の厚さは2㎜ほどという。両者の報告で年代的位置づけが異なるが、浜田遺跡では平安期の須恵器に伴う土師器が全く不明とされている。浜田遺跡の平安期の遺構は竪穴住居1基が検出されており、これに伴う須恵器は多量に出土している。器種構成からみれば、明確な時期決定の根拠を欠いているこのタイプの甕こそが平安期のものと考えるべきであろう。したがって、平安期の佐渡では北陸地方で一般的なロクロ土師器が生産されず、非ロクロの土師器が盛行していたという、きわめて特異な地域性が存在したのである。

以上のように、このタイプの甕を佐渡の平安期の土師器とすると、番場遺跡の甕(70)は佐渡から搬入されたと考えられる。胎土が明瞭に異なるのはそのためであろう。出雲崎は本土側でもっとも佐渡に近い位置にあり、交流もさかんだったことも予想される。なお、胎土分析によるRb—Sr分布では、この甕は佐渡の須恵器窯の小泊領域に重複する。

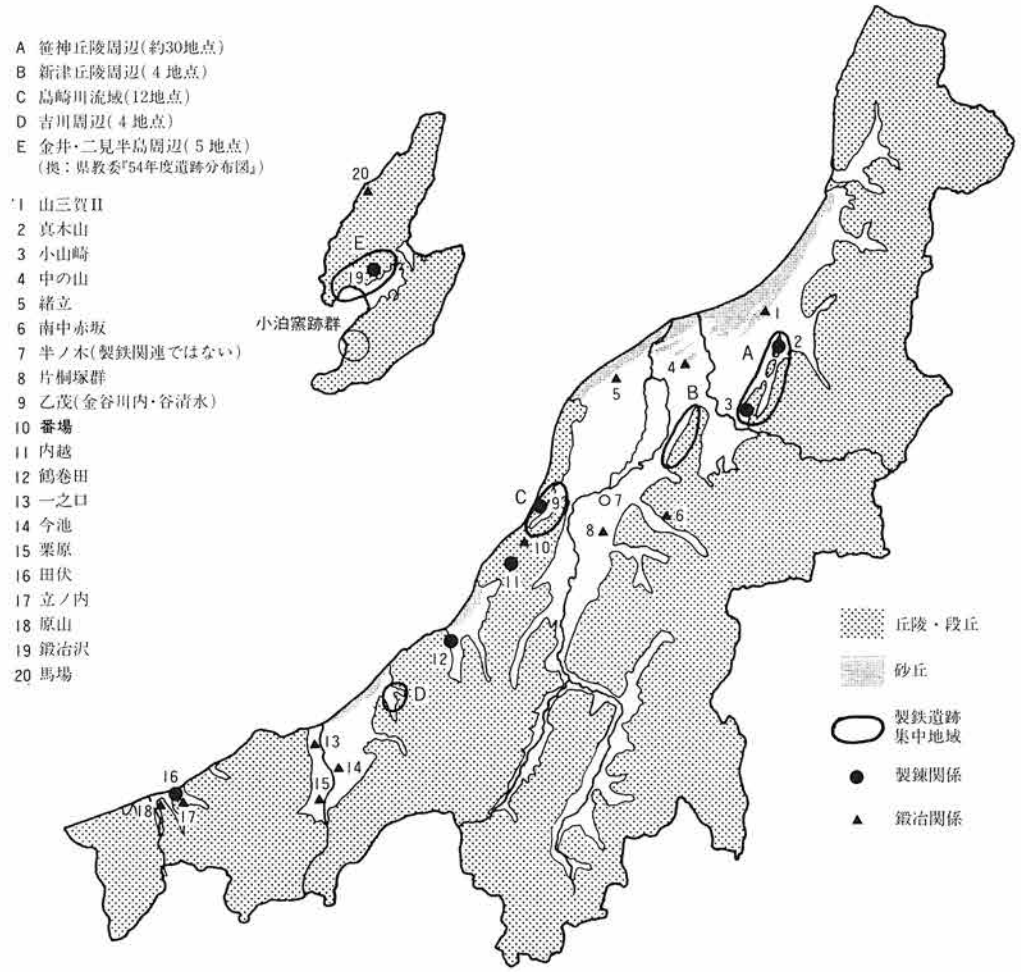
須恵器の産地　供膳形態から須恵器が激減する9世紀後半以降の須恵器窯は現在のところ越後では確認されておらず、県内では佐渡の小泊窯(第34図参照)〔本間嘉晴ほか1958、本間嘉晴1986〕が知られているにすぎない。番場遺跡出土の須恵器(12点)については胎土分析を実施した(第Ⅵ章1)。その結果、1点は不明、2点は小泊窯か能登で、ほかは小泊領域に対応した。対比する資料が少ないためこれより即座にこれらの須恵器の生産地を佐渡の小泊窯に求めることはできないであろうが、土師器に佐渡から搬入されたと考えられるものが存在することからすれば、須恵器も同様に搬入されている可能性は強いといえる。肉眼観察による限り、小泊窯の須恵器と番場遺跡の須恵器は胎土や色調など共通する点が認められる。ただ、この時期の須恵器は越後のなかでは西南部から北部の地域まで、胎土や色調などはほとんど共通する特徴がみられるため、これらがすべて小泊窯の製品であるとするには今後の検討が必要である。胎土分析の結果、能登の可能性が指摘されるものがあることも同様で、今後の検討課題である。しかし、8世紀と9世紀前半頃を中心とする律令期には、土器はほとんど国を越えては流通しなかったと考えられるが、かりに9世紀後半以降そうした広汎な土器の流通が展開するのであれば、その歴史的意義は大きい。なお、佐渡の須恵器の杯類・椀皿類は、すべて底部回転ヘラ切りであり、椀皿類が回転糸切りである南加賀の戸津窯〔吉岡康暢1983など〕などと異なっている。番場遺跡の椀は回転ヘラ切りであり、手法からも佐渡産の可能性が指摘される。今後さらに胎土分析のデータを蓄積する必要があろう。

B．鍛冶工房

番場遺跡からは総計約15kgの鉄滓が出土した。SK24からは鉄滓530gと平安時代の土師器が伴

出し、鉄滓は平安時代のもので、その時期に製鉄関連遺構が存在したことがうかがえる。鉄滓は製鉄の第１段階の製錬、第２段階の精錬鍛冶(大鍛冶)、第３段階の鍛錬鍛冶(小鍛冶)のいずれの段階でも排出される。番場遺跡の鉄滓は分析によれば(第Ⅵ章２)、砂鉄製錬滓・精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓の３種ともあるが、製錬炉が検出されていないことや鉄滓の出土量からみて、精錬鍛冶と鍛錬鍛冶を行う鍛冶工房が存在したと考えられる。

県内の製鉄関連遺跡　県内の製鉄関連遺跡の分布はおおよそ第36図のとおりである。製鉄関連遺跡はおおよそ第１段階の製錬と第２段階・第３段階の鍛冶に関連するものに分けられる。このうち製錬遺跡と考えられるものは、丘陵地帯に立地し、群をなしているものが多い。最も規模が大きいのはＡ群の笹神丘陵周辺であり、約30地点が確認されている。これに次ぐ規模が島崎川流域のＣ群である。Ａ群では豊浦町真木山遺跡Ｂ・Ｃ地点〔関雅之ほか1981〕、Ｃ群では金谷川内・合清水の２遺跡〔中村孝三郎ほか1978〕が発掘されており、ともに砂鉄を原料とした８～９世紀の製錬遺構が確認されている。真木山遺跡Ｂ地点では２基の竪形炉、Ｃ地点では製錬



第36図　製鉄関連遺跡分布図

第９表　新潟県の製鉄関連遺跡

種別	遺跡名	所在地（第36図位置）	推定年代	立地	製鉄関連遺構・遺物	備考	文献
製	真木山Ｂ・Ｃ	豊浦町（２）	８・９Ｃ	丘陵	竪形炉２（Ｂ）、竪形炉５・木炭窯１（Ｃ）	砂鉄製錬滓、須恵器窯近接	関　雅之ほか1981
製	小山崎	安田町（３）		台地	炉状遺構３、火床遺構(土坑)３、フイゴ羽口	砂鉄製錬滓	川上貞雄　1979ａ
製	金谷川内(乙茂)	出雲崎町（９）	８Ｃ後半～９Ｃ前半	丘陵	製鉄炉、須恵器有台杯	砂鉄製錬滓、須恵器窯近接	中村孝三郎ほか1978
製	合清水(乙茂)	出雲崎町（９）	８Ｃ後半～９Ｃ前半？	丘陵	製鉄炉、大型フイゴ羽口	砂鉄製錬滓、須恵器窯近接	中村孝三郎ほか1978
製	内越	西山町（11）	９Ｃ後半頃	丘陵	竪形炉１、木炭窯(３)	砂鉄製錬滓	山本　肇ほか1983 本書第Ⅵ章２
錬	鶴巻田	柏崎市（12）	平安～中世	丘陵裾河川跡		河川跡から大量の砂鉄製錬滓出土	藤巻正信　1987
錬	田伏製鉄	糸魚川市（16）	近世以降？	沖積地	坩堝状遺構１		土田孝雄　1986
鍛	山三賀Ⅱ	聖籠町（１）	８・９Ｃ	内陸砂丘	鍛冶関連竪穴２、フイゴ羽口	８・９Ｃの大集落、鍛錬・精錬鍛冶滓	坂井秀弥　1987ｂ
鍛	中の山	亀田町（４）	９Ｃ	内陸砂丘	火床遺構(土坑)２	９Ｃの集落	川上貞雄　1982
鍛	緒立	黒埼町（５）	10Ｃ後半頃	内陸砂丘	鍛冶関連竪穴１、フイゴ羽口	平安期の集落か	品田高志　1986
鍛	南中赤坂	下田村（６）	９Ｃ後半～10Ｃ前半	台地	焼土坑２、フイゴ羽口	竪穴住居なし	千葉英一　1977
鍛	片桐塚群	見附市（８）	９Ｃ	沖積地	フイゴ羽口	平安期の集落	家田順一郎　1985
鍛冶（精錬・鍛錬）	番場	出雲崎町（10）	９Ｃ末～10Ｃ中葉	丘陵裾	掘立柱建物・土坑など、フイゴ羽口	鍛冶工房(専業)、鍛錬・精錬鍛冶滓	本　書
鍛冶（精錬・鍛錬）	一之口	上越市（13）	９Ｃ～10Ｃ前半	沖積地	フイゴ羽口	平安期の集落	坂井秀弥　1986ａ
鍛冶（精錬・鍛錬）	今池	上越市（14）	８Ｃ～10Ｃ	沖積地	フイゴ羽口	推定越後国府関連遺跡	坂井秀弥ほか1984
鍛冶（精錬・鍛錬）	栗原	新井市（15）	８Ｃ前半	沖積地	フイゴ羽口	頸城郡衙関連遺跡	高橋　勉　1984
鍛冶（精錬・鍛錬）	立ノ内	糸魚川市（17）	平安	台地	フイゴ羽口	平安期の製塩遺構あり	高橋　保　1987
鍛冶（精錬・鍛錬）	原山	糸魚川市（18）	９Ｃ末～10Ｃ	台地	竪穴２、鍛冶関連土坑数基、フイゴ羽口	鍛冶工房	土田孝雄　1986
鍛冶（精錬・鍛錬）	馬場	相川町（20）	９Ｃ後半～10Ｃ	海岸砂丘	鍛冶関連土坑数基	祭祀関連遺跡、鍛錬鍛冶滓	本間嘉晴ほか1983

註　１）推定年代は報告書掲載の土器などより推定したもので、報告の年代と異なるものがある。
　　２）鉄滓については第７表の文献を参照のこと。

炉５基と木炭窯１基が比較的良好に検出された。このほか、西山町内越遺跡〔山本肇ほか1983〕でも砂鉄を原料とした９・10世紀の製錬炉と木炭窯が検出されている（第Ⅵ章２）。木炭窯はすべて登窯タイプである。時期は不分明なものが多いが、田伏製鉄遺跡が近世以降と推測される以外は、奈良・平安期のものが大半と考えられる。

鍛冶関連の遺構と遺物が検出されている遺跡はかなり多い。製錬遺跡の場合、丘陵の斜面に立地し鉄滓が多量に散布していることなどから、発掘をしなくともその存在を知ることができるが、鍛冶関連遺構の場合、発掘後に鉄滓の出土などによって判明することが多い。そのため、未調査の遺跡は含まないのが原則である。これまでに知られた遺跡のあり方をみると（第９表）、基本的には遺跡の性格が、鍛冶工房を主体とするもの（Ａ類）と、鍛冶工房が何らかの遺跡に付帯して設けられているもの（Ｂ類）の２者に分類され、後者はさらに遺跡の性格によって、①一般集落、②官衙関連遺跡、③祭祀関連遺跡などに分けられる。Ａ類には糸魚川市原山遺跡・下田村南中赤坂遺跡、Ｂ類①には見附市片桐塚群遺跡・亀田町中の山遺跡・聖篭町山三賀Ⅱ遺跡・上越市一之口遺跡、Ｂ類②には新井市栗原遺跡・上越市今池遺跡、Ｂ類③には相川町馬場遺跡などがあげられる（以上の文献は第９表参照）。しかしながら、鍛冶遺構が明確に把握された馬場遺跡・中の山遺跡・山三賀Ⅱ遺跡・緒立遺跡などの例もあるが、鉄滓やフイゴの羽口が出土しただけで、これに関連する遺構がまったく不明な例も多い。時期は栗原遺跡が奈良時代、今池遺跡は奈良時代か平安時代、ほかはいずれも平安時代、とりわけ９世紀後半から10世紀にかけてのものが多い。

鍛冶工房を主体とする原山遺跡・南中赤坂遺跡はともに台地上に立地し、水田を中心とした農業生産を基盤にする立地条件ではない。原山遺跡は一辺３ｍほどの竪穴住居跡２基があり、これに近接する数基の土坑から焼土、炭化物、鉄滓、羽口が出土している。南中赤坂遺跡では住居跡は検出されなかったが、焼けた土坑と羽口、鉄滓が検出されている。いずれも平安時代、９世紀後半～10世紀のもので、鍛冶作業をするために台地上を選地したことが想定される。

番場遺跡の性格　番場遺跡は平安時代の遺構がいまひとつ明確ではないが、一般集落とは考えられない。この時期の一般的な居住施設は掘立柱建物か竪穴住居である。竪穴住居は全く存在していないし、掘立柱建物数棟と井戸数基は存在するとみられるが、集落遺跡で住居に使用されたと考えられる掘立柱建物と比較すると、規模や構造がかなり異なっている。上越市今池遺跡群や一之口遺跡西地区などの例からすると、一般的な集落内の住居は梁間２間、桁行３間程度で、柱間は２ｍ前後の等間となるものが多いようである。番場遺跡は傾斜地であり、こうした構造をとれなかったとも考えられるが、柱穴の配置の不規則性などはやはり建物の構造自体が定住性の強い一般集落の住居と異なることによるものと考えられる。こうした遺構の不安定さに比較して鉄滓がかなり多いことや、丘陵裾の狭い限定された場所に立地することも、生産遺跡という性格を示唆する。しかし、土器の出土量や井戸の存在からみて、それがごく短期

間のものではなく、一定の期間かなり専業的に鍛冶作業が行われたものと推察される。鍛冶作業には製錬された鉄素材から鉄製品になるまでに精錬鍛冶と鍛錬鍛冶の２つの工程があるが、ここではこれが一連の作業としてなされたことがわかる。この鍛冶工房へ供給された鉄素材は島崎川流域に多く分布する製錬遺跡で製錬されたと考えられ、こうした製錬の場が近くに存在したからこそ、一時的ではなく、一定の期間専業的に鍛冶作業を行うことが可能であったといえよう。金谷川内・合清水遺跡や番場遺跡の鉄滓からみて、その原料は砂鉄と考えられる。

ところで、平安時代の９世紀後半から10世紀の時期には、遺跡の分布が沖積地内の自然堤防上や台地上までひろがることが指摘される〔坂井秀弥1985・1986ａ〕が、鍛冶遺跡の多くがこれと同じ時期であることは注目される。これは一面では調査されている遺跡の多くがこの時期のものであることと表裏一体であろうが、９世紀後半から10世紀にかけては、律令期とは異なった未墾地の開発が積極的に行われたこと〔坂井秀弥1985・1986ａ〕、そしてその背景に農工具などの鉄製品が広く普及したことの２点が示唆されているように思われ、製鉄遺跡との関連が想起される。

２．中　　世

Ａ．土器・陶磁器

中世の土器・陶磁器の出土量は従来の県内で報告例のうち最も多い例と考えられる。これらは種類が多く、構成は多様で時期幅もかなりある。遺構出土のまとまった資料は１・２例しかないため、おもに型式分類を中心に、全体の構成をみる。

１）中国陶磁器

中国陶磁器の編年研究は近年の資料の増加とともにかなり進んできている〔横田賢次郎ほか1978、森田勉1982、上田秀夫1982、小野正敏1982・1985など〕。横田ほか1982はおもに14世紀中葉まで、その他は14世紀から16世紀までをそれぞれ対象としている。ここではこれらを参考に年代比定をこころみる。

14世紀代までに比定されるのは、青磁・白磁・青白磁・緑釉がある。青磁では内面劃花文碗の101・102(横田・森田分類の竜泉窯系Ⅰ－２類、以下同じ)、103(竜泉窯系Ⅰ－４類)、蓮弁文碗Ａ類の104～110(竜泉窯系Ⅰ－５類)、同Ｂ類の116(竜泉窯系Ⅲ類)、櫛描文皿の119(同安窯系Ⅰ類)がある。白磁では碗の125(Ⅳ類)、皿の129(Ⅴ・Ⅵ類か)、口禿の碗・皿の126・127(Ⅸ類)がある。青白磁では蓋の120・121、合子の122、梅瓶の123が、緑釉では盤の124がある。

これらのうち、横田・森田編年のⅡ期(11世紀中葉から12世紀初頭)に多いものが、白磁の碗(125)・皿(129)、Ⅲ期１小期(12世紀中葉から13世紀初頭)に多いものが、青磁の碗(101～103)、

皿(119)、Ⅲ期2小期(13世紀中葉)に多いものが、青磁の碗(104～109)、Ⅲ期3小期(13世紀後半から14世紀中葉)に多いものが、青磁の碗(116)、白磁の碗・皿(126・127)である。青白磁・緑釉は13～14世紀頃に比定されよう。

一方、上田分類では青磁の蓮弁文碗A類(104～110)がB－Ⅰ類で、13世紀から14世紀初頭に、同B類(116)がA類で、13世紀末から14世紀初頭に、同C類(111)がB－Ⅲ類で15世紀に、無文の端反り碗(113・114)がD類で、14世紀から15世紀に、それぞれ位置づけられている。香炉(118)は筒形で15世紀代に位置づけられよう。白磁の皿(130)は森田分類のD類で15世紀、端反りの皿(128)はE類で16世紀である。染付は碗(131)が小野分類の碗C群Ⅲ、132もC群と考えられ、15世紀後半から16世紀前半に比定される。133の皿も同様であろう。

2）瀬戸・美濃焼

12世紀末葉に成立する古瀬戸は前期・中期・後期の三様式に区分され、それぞれ、Ⅰ～Ⅳに細分されている〔藤沢良祐1984など〕。それによると、前期様式は12世紀末葉、中期様式は13世紀末葉、後期様式は14世紀末葉にそれぞれ成立し、一様式ほぼ100年という年代観が考えられている。また、15世紀末葉以降のいわゆる大窯期は11小期に区分されている〔藤沢良祐1986〕。前期様式にあたるものは体部上半に櫛目文がある水注(150)である。おろし皿(142)は口縁端部の内端がつまみ出されていないことから、前期の後半から中期の前半のものと考えられる。中期様式にあたるものは、四耳壺(149)、折縁深皿(151)、小壺(137)、小皿(145)である。後期様式にあたるものは、天目茶碗(134～136・138)、平碗(139～141・148)、小皿(146)、おろし皿(143)、壺(147)である。これらのうち、天目茶碗(138)は赤味をおびた胎土で、口縁部の形状から後期でも最末期で大窯期に近い時期と考えられる。大窯期にあたるものは丸皿(144)で、底部内面の釉を禿いていることから第5・6小期に比定され、実年代は16世紀後半と考えられる。[1)]

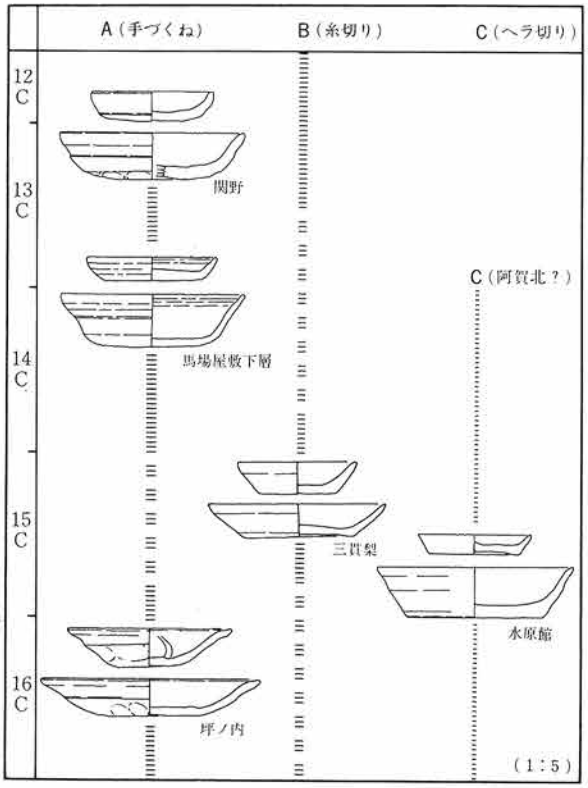
3）土師質土器

土師質土器は皿のみである。出土点数は比較的少ない。県内の中世の土師質土器皿の製作技法には、手づくねのタイプ(A類とする)、ロクロ成形で底部回転糸切りのタイプ(B類)、ロクロ成形で底部回転ヘラ切りのタイプ(C類)、手づくねで横ナデの調整を行わないタイプ(D類)がある。D類は新井市坪ノ内館跡〔坂井秀弥ほか1986〕に散見される程度で、ごく少なく、C類は水原町水原館跡〔川上貞雄1977〕に多くみられるが、全県的に一般的なものではない。C類は伴出遺物から、14～16世紀と考えられる。A類・B類は県内ばかりでなく、全国的にも中世を通して一般的なものであるが、分布はそれぞれ明瞭に異なる。畿内と北陸地方は手づくねのA類、北陸を除く東国では糸切りのB類が主体をなすものと概観される。また、鎌倉においては

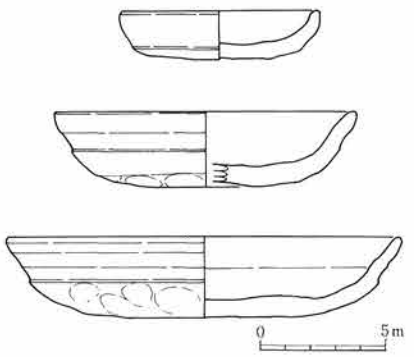
1）当遺跡出土の瀬戸・美濃焼は藤沢良祐氏に実見のうえ、編年的位置を教示いただいた。

13世紀にＡ類がけっこうみられることが知られている〔服部実喜1985ａ〕。当遺跡ではすべてがＡ類である。

県内の従来の資料は、さほど多くはないが、おおよそのあり方は類測できる（第37図）。まず、最も良好な資料として白根市馬場屋敷下層遺跡〔川上卓雄ほか1984〕がある。この遺跡は厚い洪水堆積層に覆われており、13世紀末（1289）から14世紀初頭（1310）までの紀年銘木簡５点を伴っていることから、時期的に限定できる。この土師質皿はすべてＡ類である。一方、Ｂ類は白根市若宮様遺跡〔川上貞雄ほか1984〕・水原町掘越館跡〔川上貞雄ほか1979b〕、小国町御館〔大河内勉ほか1985〕、上越市至徳寺跡〔小島幸雄ほか1983〕、新井市坪ノ内館跡〔坂井秀弥ほか1986〕、長岡市三貫梨遺跡〔駒形敏朗1987〕などでみられる。これにはＡ類が遺跡内で伴出している例があるが、伴出遺物からいずれも15～16世紀と考えられる。そして、伴出遺物がほぼ15世紀に限定される三貫梨遺跡では比較的出土量が多いにもかかわらず、まったくＡ類が含まれないことが注目される。かつて15・16世紀代のＡ類とＢ類は地域的な分布の偏差があるものと考え、15～16世紀の時期には両者が供存するとの見通しを述べた〔坂井秀弥ほか1986〕が、こうした例を勘案すると、15世紀代にほとんどＢ類によって占められる時期が存在したという可能性も強い[1)]。そして、このタイプの後にＡ類が再び盛行するものと予測される。この時期のＡ類は坪ノ内館跡、上越市春日山城跡〔小島幸雄編1977～1984〕に典型的なように、口縁部が外反し端部が上方につまみ上げ



第37図　越後における中世土師質土器皿の変遷
（各報告書原図）



第38図　関野遺跡出土の
土師質土器皿〔坂井秀弥1987ａ原図〕

1）三貫梨遺跡では珠洲焼がⅤ期に主体をおくことから、15世紀前半代を中心にＢ類が盛行したと推測される。坪ノ内館跡の報告ではＡ類とＢ類が同時期との認識から、館跡の成立期を15世紀後半と考えたが、時期が異なるとすれば、成立期は15世紀前半まで遡るであろう。なお北陸地方の越中以西の地域では13世紀以降にＢ類が卓越することはない。

られて断面が尖るものである。これは畿内と同様の手法で、北陸地方全般でも共通しており、その背景に畿内の製作技法が広く普及したことが考えられる。当遺跡のb類(152)はこの時期のものである。

他方、13～14世紀と考えられるA類の資料は、馬場屋敷下層遺跡例のほかに上越市今池遺跡〔坂井秀弥ほか1984〕、黒埼町釈迦堂遺跡〔関雅之1973〕、燕市長所遺跡〔関雅之ほか1976〕、中之島町杉之森遺跡〔戸根与八郎ほか1976〕、柏崎市関野遺跡〔坂井秀弥1987〕(第38図)などにも数例報告されている。これらはいずれも珠洲焼Ⅱ～Ⅳ期が伴出しており、時期は13・14世紀にほぼ限定される。口縁部内外面ヨコナデで、底部外面が不調整、体部内面がナデという調整は共通するものの、器形は当遺跡例に典型的なタイプ(A1類)と馬場屋敷下層遺跡に典型的なタイプ(A2類)に分けられる。前者は口縁部と底部の境にヨコナデによって生じた稜が突出しているが、後者はこれが顕著ではない。この相違は時期差に由来する可能性が考えられるが、当遺跡を含めて時期決定できる資料に乏しく、両者の前後関係は明らかではない。ただ、前者は器壁が厚く、口縁部を2段にナデる手法より古様が感じられ、12世紀後半から13世紀代に比定される可能性がある[1)]。155は器壁が薄く、口縁部の形態が若干異なり、新しいとも考えられる。

なお、土師質皿の出土量は日常雑器とみなすにはあまりにも少ないと考えられ、東日本同様、畿内とは異なった様相がみられる。日常雑器ではなく、非日常的なもの〔河野真知郎1986〕である可能性は強い。日常雑器としては木製品を考慮する必要があろう。

4) 珠洲焼

陶磁器類のなかでもっとも出土量が多い。珠洲焼はⅠ～Ⅶ期の編年区分が明らかにされている。各期の年代観はⅠ期(12世紀中葉～13世紀初頭)、Ⅱ期(13世紀前半～中葉)、Ⅲ期(13世紀後半)、Ⅳ期(14世紀)、Ⅴ期(15世紀前半)、Ⅵ期(15世紀後半)、Ⅶ期(16世紀前半)である〔吉岡康暢1982bほか〕。

片口鉢 珠洲焼のうち片口鉢は出土個体数が多いことに加えて、口縁部の形態やおろし目などから編年基準にしやすい。前述したように片口鉢は口縁端部の形態から、A・B・C・Dの4類に区分した。A類は端部に面をもち、内端を上方へつまみあげるタイプ、B類は面を丸くおさめるタイプ、C類は水平な面をもつタイプ、D類は端面が内傾するタイプである。この区別はおおよそA類＝Ⅱ期、B類＝Ⅲ期、C類＝Ⅳ期、D類＝Ⅴ期に対応する。この分類を模式化するとそれぞれのタイプのなかのバリエーションの変化[2)]を類推できる(第39図)。すなわち、①内端のつまみあげが顕著な段階、②これがゆるい段階、③内端の調整が外端と同様になり、

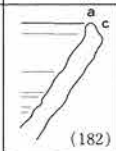
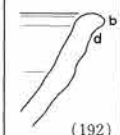
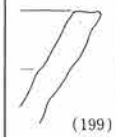
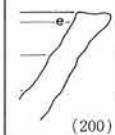
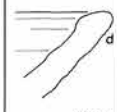
1) 鎌倉期初頭前後に畿内の手法が東日本にも影響を及ぼしたと考えられる。ただ、北陸地方をのぞけばその影響は鎌倉など点的かつ一時的なものであり、在地の様相にはあまり変化はみられない。

2) これはあくまでも形態分類であって、生産地でこの変化は確認されてはいない。今後の課題である。

両端とも丸くなる段階、④外端が外方へひき出される段階、⑤端面が水平かややくぼみこの面を明瞭につくり出す段階、⑥内端が内方へひき出され、端面が広くなる段階、⑦端面が内側に傾斜する段階、である。④・⑤の段階では外端はやや尖り気味であるが、⑥の段階ではこれが丸味をもつ。また⑥の段階では外端の下部がくぼむのに対し、⑦の段階ではこれがくぼまずにふくらむ。これを編年区分と対応させると、①・②の段階がII期、③・④の段階がIII期、⑤・⑥の段階がIV期、⑦の段階がV期となる。ただし187は②の段階であるが、内端の引き出しが顕著でなくおろし目の条数が多いため、ここではIII期に含めた。⑦の段階では端面に櫛描波状文を配するものが多いが、当遺跡出土例にはIV期の2例(201・211)にみられるが、V期のものにはみとめられない。

片口鉢のおろし目はA類(II期)のものは明らかに細密で、C類(IV期)のものは太く、口縁部との対応が明瞭である。B類は191・193のみおろし目がわかるが、比較的太いものと考えられる。全体の条数ではA類が12条前後、C類は16条以上で、B類はわからない。

器種構成　以上の分類をもとに、図示したものの各期の個体数を算出すると、第10表のとおりになる。[1)] 別個体と認識したものについては基本的に図化しているので、これがほぼ全体の状況と判断される。片口鉢類のうち、口縁端部がやや直立し、内端の引き出しがみられない189と、底部が回転糸切りの可能性をもつ174はI期に、おろし目のないこね鉢はII期に、口縁部が残らないものについてはおろし目を基準比定した。壺・甕については叩き目や口縁部の形態をもとにした。

段階	形態	特徴	分類
1	 (182)	端部は面(c)をもち、内端(a)が上方へつまみあげられる。この部分の断面は鋭角となるものが多い。	A類(II期)
2	(186)	内端のつまみあげが顕著でなくなり、この部分の断面は直角にちかい。端面はゆるくくぼむ。	
3	(190)	内端のつまみあげがなくなり、外端と同様、丸味をおびる。	B類(III期)
4	 (192)	外端(b)がつまみ出されるようになり、端部は丸味をおび、端面が不明瞭である。外端の下部(d)はくぼむ。	
5	 (199)	端部が明瞭に水平になり、中央がややくぼむ。外端は鋭角になるが、内端は鈍角である。	C類(IV期)
6	 (200)	端面が広くなる。外端が厚くなり、内端も内側に引き出され、内端の下部(e)にくぼみが生じる。	
7	 (203)	端面が内傾し、内端下部のくぼみが大きくなる。外端下部(d)はくぼまず、ふくらむ。	D類(V期)

第39図　珠洲焼片口鉢の口縁部変遷模式図

第10表　珠洲焼の時期別個体数

	片口鉢(こね鉢)	壺(小壺)	甕	計
I	2 (174・189)	—	—	2
II	10 (180～186・188・207・217) こね鉢 6 (172・173・175～178)	1 (162) 2 ? (170・171) 小壺 1 (179)	1 ? (166)	21
III	10 (187・190～194・206・207・215・218)	3 (164・167・169)	1 ? (165)	14
IV	18 (195～201・208・210～213・216・219～222・226)	2 (168・163)	1 (226)	21
V	3 (203～205)	—	—	3

1) 珠洲焼の資料の多くは吉岡康暢氏に実見のうえ、編年的位置を御教示いただいた。

器種別にみると、片口鉢類が圧倒的に多く、壺・甕がごく少ないことが注目される。壺は叩き成形のT種のみで、小形のロクロ成形のR種がなく、全体の器種構成は単純である。また、各期の実年代の幅を勘案すると、13世紀に対して14世紀がやや少ない個体数を消費していたことが推測される。もっとも基本的な陶器である珠洲焼により、遺跡の年代を推考するならば、Ⅰ期からⅤ期までの12世紀後半から15世紀前半までは生活が維持されていたといえるが、Ⅱ期からⅣ期の13・14世紀代が中心でⅥ期の例が1点も出土していないことから、15世紀後半にはいったん生活が維持されなくなり、空白期になると推測される。Ⅵ期には珠洲焼の生産量が減少するといわれるものの、県内では能登・越中同様なお雑器類の主体をなすと考えられるからである。

生産地　今回の調査で出土した中世陶器については20点を抽出して胎土分析を実施した(第Ⅵ章1)。新潟県においては北部の笹神丘陵周辺に中世の瓷器系と珠洲系の在地窯が知られており、そうした製品が番場遺跡出土品に含まれていたかどうか確認する必要があったからである。その結果、珠洲焼(系)の17点については在地の珠洲系陶器窯である笹神村背中炙窯(Ⅱ期、13世紀前半頃)の製品と判断されるものはなく、1点をのぞいて産地は珠洲窯と推定された。越前焼と推定された片口鉢(205)は肉眼観察では還元焔焼成で、越前焼とは考えられないことから珠洲系陶器の可能性もある。

従来、県内では背中炙窯の存在から、在地の珠洲系陶器がかなり流通していたとする意見があり、報告書などでは「珠洲系陶器(陶質土器)」と呼称されることが多かった〔関雅之1973〕。これに対して県内の「珠洲系陶器」は基本的に珠洲焼で、在地産の製品は笹神窯周辺の狭い範囲に流通していたとする意見もあった[1)]。胎土分析の結果は上記のとおりで、背中炙窯の操業期のⅡ期の製品もすべて珠洲焼であった。また、新潟平野中央部の白根市馬場屋敷下層遺跡出土品にも在地産と判断されるものは皆無であり、背中炙窯などの在地窯の製品は操業時においても県北部の阿賀北地方(阿賀野川以北)を中心に流通したと考えられる。それ以外の「珠洲系陶器」は基本的に珠洲焼とみてよいであろう。背中炙窯の製品は胎土の特徴などから珠洲焼とおおよそ識別が可能と考えられ、その流通圏を明確にするためにも、今後、「珠洲焼」か「珠洲系陶器」かの判断が要請されよう。番場遺跡の珠洲焼をみるかぎり、胎土中に海綿骨針(白色の小さな棒状品)を含むものが多く、その有無は識別のひとつの基準になりうるものと思われる。

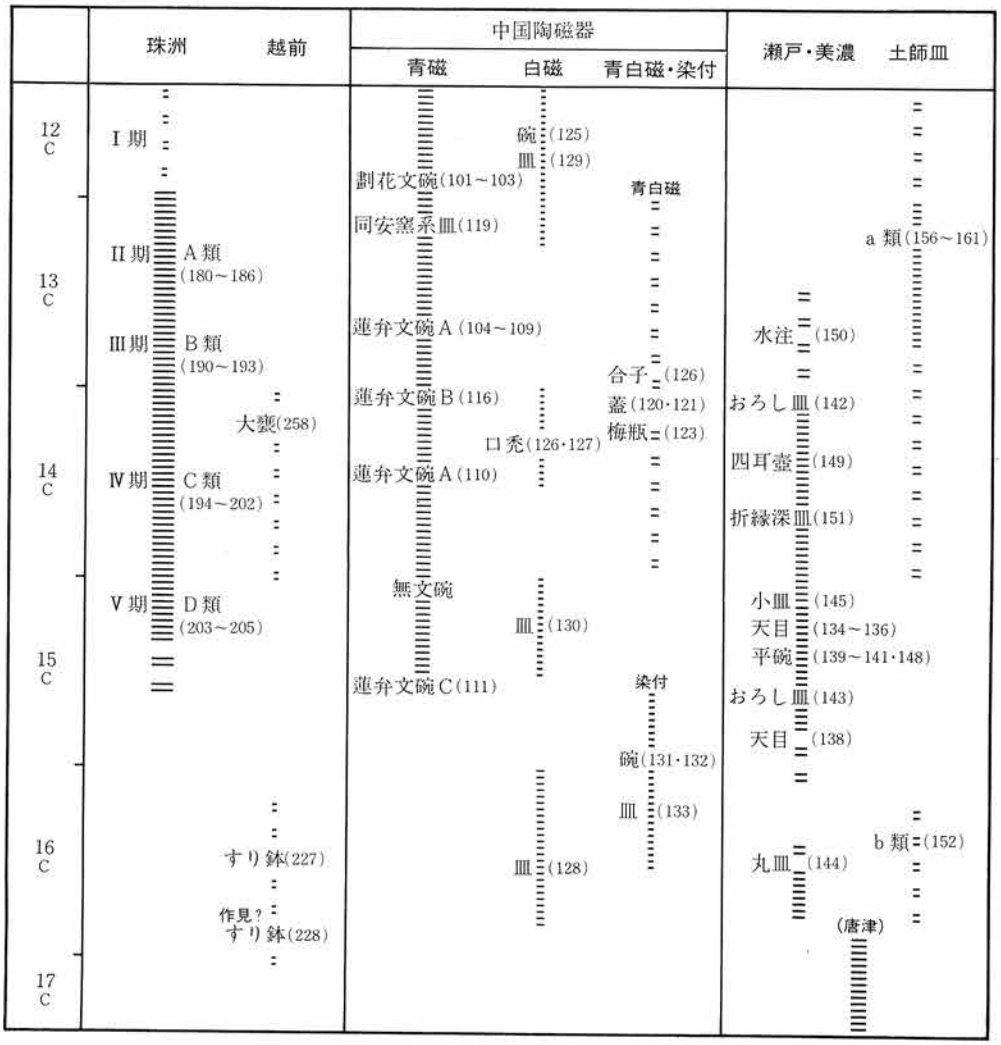
瓷器系陶器も同様で、14世紀代に比定される大甕(256)は越前焼である。越後で越前焼が多くなるのは珠洲焼が衰退する15世紀後半以降、特に16世紀以降であり、それ以前の越前焼はごく少ない。瓷器系の在地窯は背中炙窯と近接する笹神村狼沢1号窯〔中川成夫ほか1973〕、権兵衛沢窯〔中川成夫ほか1970〕、安田町赤坂山窯〔渡辺文男1978〕などが知られている(第34図)。これらはいずれも14世紀代に比定されるが、これと同時期の大型品(254)がこれらの窯よりはるかに

1)「シンポジウム北陸における中世陶器の生産と流通」における金子拓男の発言〔小松市立博物館1979〕など。

遠い越前の製品であることは、在地窯の流通範囲の規模を示唆するといえよう。なお、この他の瓷器系陶器片２点(78・第17図)は、肉眼観察では越前焼とは異なると思われるが、胎土分析の結果、越前焼の可能性が指摘されている。

５）陶磁器類の構成（第40図）

時期別の陶磁器類のあり方を前述のおおよその年代比定をもとにみると、まず、片口鉢類・甕・壺などの日常雑器類は１例のみ14世紀代の越前焼大甕(169)が含まれる以外、すべてが珠洲焼であり、その比重の大きさが知られる。珠洲焼が片口鉢・壺・甕のほとんどを占めるのは県内通有のあり方である。珠洲焼が減少し、越前焼がこれに代わるのはほぼ16世紀代であり、越前焼(系)のすり鉢(227・228)・壺(229)はこの時期のものである。



第40図　中世の陶磁器類の構成

珠洲焼以外には船載の中国陶磁器と国産の瀬戸・美濃焼と土師質土器がある。このうち中国陶磁器と瀬戸・美濃焼はほぼ同じ機能を補完していたとされるが、12・13世紀代は大半が中国陶磁器で、瀬戸・美濃焼は水注(150)などわずかである。平碗や天目茶碗がいまだ生産されていないので碗皿類は皆無である。瀬戸・美濃焼は14世紀代にはやや多くなり、15世紀代には中国陶磁器を上回ると考えられる。ただこれは天目茶碗と平碗が大半である。

器種構成をみると、在地産の椀形態は皆無であり、皿も土師質土器が少量存在するのみである。中世の椀には東海地方の山茶椀や畿内地方の瓦器椀など、日常雑器としての性格をもつものが知られているが、北陸地方や関東地方では在地産の椀は一般的ではない。これは椀の形態がこの地方で欠如していたか、木製品として存在したかのいずれかによるものであろう。漆器椀は近年鎌倉などで大量に出土するようになり、かなり消費されていたことが推測されてきている〔手塚直樹ほか1982〕。当遺跡でも数点の出土例がある。消費量全体の遺存率を考慮すれば、木製品の椀が日常雑器の主体をなしていたとみてよいであろう。皿も同様である。ただし、当遺跡では中国陶磁器の碗が多く、これが日常容器として使用されていた可能性は十分考えられるが、中国陶磁器の多さはこの遺跡の性格に起因するものであって、こうした陶磁器の構成は普遍的ではないと考えられる。

他方、煮炊具が陶磁器類には全くみられないことも注目される。このことも北陸地方・関東地方と同様である。畿内では土釜が一般的であり、15・16世紀の信州や上野では土製の内耳鍋がみられる。土製の煮炊具は北陸地方では11世紀代に甕が消失して以来、まったくみられない[1)]。煮炊具を用いない調理は考えられないから、鉄製品が普及するという意見〔福田健司1986など〕が妥当であろう。

先に少しふれたように、当遺跡の陶磁器の構成は一般的ではない。すなわち、豊富な中国陶磁器と瀬戸・美濃焼の出土量と器種にかなりの高い階層性がみられる。中国陶磁器では青白磁の梅瓶と蓋・合子など従来の県内の調査例では経塚などを除くと出土例がないものがある。また緑釉盤は県内初例であり、東日本でも鎌倉以外ではほとんど出土していないものである。一方、瀬戸・美濃焼では水注・四耳壺は一般の集落ではあまり出土しないものであろう。こうした量と器種の豊富さはこの遺跡の居住者の階層を如実に示している。後述するように、建物の構造にもその傾向が明瞭にあらわれており、在地のなかではかなり上級の階層であったことは容易にうかがえよう。

B．中世遺構と遺跡の性格

建物の構造（第11表）　中世の遺構は調査区南辺に集中する掘立柱建物群が主体をなす。この部分は傾斜地を削平して、２つの平坦面を形成し、それぞれに掘立柱建物が配置されている。

1）北陸地方西部の加賀では11世紀前半に比定される三浦遺跡上層期に甕がみられるのが最後であろう。

第11表　建物一覧表

建　物	間　　数（南北×東西）	方　　位	廂縁	東柱	柱	礎板
	m　　m		（面）			
SB81	1（1.7）×3（4.45）	N—70°—E				
SB88	4（6.6・6.8）×3（4.2）	N—36°—E				
SB86	2（3.6）×1（1.8）	N—53°—E				
SB70	4（10.2）×2（4.2・4.0）	N—47°—E				
SB74	2（3.1）×2（4.5・4.8）	N—37°—E	1			
SB87	1（2.6）×4（7.2）	N—55°—E				
SB11	3（7.8）×3（4.9）	N—27°—E	1	○		
SB14	6（13.7）×4（6.6・6.4）	N—33°—E	2			
SB46	3（7.4）×4（6.9）	N—41°—E	2	○		
SB95	2（5.5）×3（5.1）	N—38°—E				
SB91	4（6.7）×3（8.0）	N—42.5°—E	1	○(?)	丸	
SB92	2（7.0～7.3）×3（5.7）	N—45°—E		○	丸	
SB17	5（14.1）×4（6.7）	N—45°—E	3	○	角	○
SB93	5（10.9～11.1）×3（6.4×6.6）	N—36°—E			丸	○
SB94	3（8.9）×2（4.0～4.2）	N—40°—E		○	丸	

掘立柱建物の検出は、多くの柱穴から相互に関連するものを抽出する作業であり、抽出できなかったものもあることは認識している。

掘立柱建物のうち、最も明確に検出されたものはSB17である。それは柱根が良好に遺存しており、それらがすべて角柱だったことによる。SB17は桁行5間で前後両面に廂をもつ。身舎は梁間2間で束柱をもっており、総床張りの建物であったことがわかる。廂をもつ建物はほかにSB94・SB91・SB46・SB11・SB14など多く、束柱をもつ建物はSB46・SB11などがある。

県内で中世の建物が検出されているのは、上越市今池遺跡・子安遺跡〔坂井秀弥ほか1984〕、白根市馬場屋敷下層遺跡〔川上貞雄ほか1984〕、長岡市三貫梨遺跡〔駒形敏朗1987〕、新井市坪ノ内館跡〔坂井秀弥ほか1986〕、糸魚川市立ノ内遺跡〔高橋保1987〕などがある。中世の掘立柱建物については、今池・子安遺跡の例から、柱掘形は古代の掘立柱建物に比較して相対的に小さくて、平面形が丸いこと、束柱をもつ総柱の建物と廂縁をもつ建物が比較的多いことを指摘した〔坂井秀弥ほか1984〕が、このことは当遺跡についても相当する。今池・子安遺跡は遺物からみてほぼ13・14世紀の建物と考えられ、当遺跡と同時期である。これと同時期である馬場屋敷下層遺跡の建物は柱穴が不分明なものの、ムシロのような敷物やスノコ状の間仕切りが遺存しており、11.2×6.2mの規模の土間の家屋で内部は4つに間切りされていることが推測される。これがどういった性格の建物か明確ではないが、建物の構造を具体的に知ることができる貴重な例である。一方、坪ノ内館跡・立ノ内遺跡は15・16世紀の時期を主体とするが、廂縁はもつものの束柱や、身舎の梁間が一間で、棟持柱をもたないことで共通する。両者ともに館跡であることから、15・16世紀の館の建物特有の構造なのかもしれない。

ところで、中世の建物については絵画資料が一定の構造を示している。たとえば有名な『一遍

聖絵』・『法然上人絵伝』によれば、地方武士の住宅は土間をもたず、総床張りで、身舎の周囲や前後に廂や縁を配置している。また「奥山荘波月条絵図」には建物の表現として2種あり、一方が床張りと考えられる高床建物を示している。したがって、こうした建物は一般庶民にまで広く普及していたのではなく、一定の階層、すなわち在地領主の住宅を意味するものといえよう。番場遺跡はそうした点からみて、一定の階層の屋敷の一画ということができる。[1)]

以上のように、中世の番場遺跡は在地領主層の屋敷の一画と考えられ、出土遺物からみて12世紀後半から15世紀前半まで継続して営まれたことが知られる。その後16世紀頃に若干の遺構が形成されるが、その規模は小さい。したがって、鎌倉初期から室町前期までが遺跡の主体である。

小木氏との関係　この周辺の中世の在地領主として知られるのは、小木(荻)氏だけである。小木氏は南北期の文献にみえる(第Ⅱ章2)が、鎌倉期よりこの地に蟠居していたとみてよいであろう。「小木」という氏名は明らかに地名の「小木」に通じ、小木氏は小木周辺の在地領主とみられる。現在の大字「小木」は近世の「小木村」を継承し、「小木村」の領域は基本的に中世の「小木」の領域を継承したと考えられる[2)]ことから、小木氏の本拠地はほぼ現在の大字「小木」の範囲内に比定することが可能である。「小木」の範囲は小木の集落(字「タテ」)とその南東側(字「町ノ裏」)と南側(字「寺尾」)の谷、及び島崎川に面した字「番場」・「谷地」・「矢郷」である(図版1)。このなかで集落の存在する「タテ」は地名からみて、中心地の可能性が考えられる。これに大字「相田」の字「大門(だいもん)」が接するが、この付近は前述したように(第Ⅱ章3、第6図)、地割に町割的な側面があり、要害である小木ノ城の城下町的な機能が想定される。字「タテ」はその城主の居館を示し、「町ノ裏」は町の存在を示すものと類推される。また、屋号の「鍛冶屋敷」・「中茶や」・「紺屋」などはその町に居住した商工業者の存在を示唆するものと考えられる。こうした町割は、福井県一乗谷朝倉氏遺跡の例などから、戦国期を中心に形成されたと考えられ、この小木の町割も中世でも末期のものと類推される。したがって、タテに存在したと推定される居館主がそのまま鎌倉から南北朝期の小木氏に関係するとはみられない。かりに、「タテ」の館[3)]が戦国期か、これに近い時期にこの地につくられたとすれば、それ以前の領主の館を別の地に想定することも可能であり、番場遺跡をその候補地としてみることもできるのである。番場遺跡は15世紀後半から16世紀にはすでに館といった中心的な機能は考えられないが、それ以前の13・14世紀を中心

1) 当遺跡と同じく、緩斜面を削平して比較的規模の大きい掘立柱建物を配する例として、神奈川県上浜田遺跡〔國平健三ほか1979〕、東京都多摩ニュータウンNo.22遺跡〔佐藤攻1975〕がある。ともに遺構・遺物の内容から鎌倉武士の住宅と推定される。後者は鎌倉街道に面しており、重要な交通路との関連が想起される。武士の屋敷が重要な河川や交通路を支配しうる要衝の地にあったことはすでに指摘されている〔豊田武1963〕が、この点は番場遺跡でも注目される。

2) 小木村は新田村ではなく、中世には成立していた集落である。

3) 第6図にみえるA地点の南側には幅6～10mの細い区画が存在し、あたかも堀の痕跡のようにみえる。これは東西約100mで小木ノ城主の居館にふさわしい規模で、その可能性が強いと思われる〔坂井秀弥1987c〕。

にした時期には出土遺物や建物がともに優秀であり、文献にみえる小木氏の屋敷とみても無理はない。番場遺跡と小木氏を結びつける文献史料がないため、ここでは可能性を指摘するにとどめざるを得ない。後考をまちたい。

3．結　　語

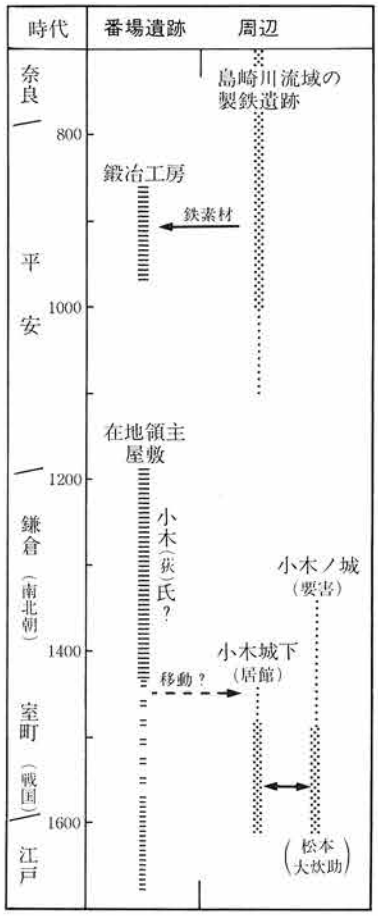
番場遺跡の調査成果について、これまで7章にわたって述べてきたが、最後にその要点を列挙して結語としたい。

(1) 番場遺跡は新潟県の中央、海岸よりの三島(さんとう)郡出雲崎町大字小木字番場に所在する。遺跡は信濃川の支流である島崎川に面した低い丘陵の裾、標高約40mに立地する。従来この遺跡の存在は知られていなかったが、「番場」という地名から、中世城館に関連した遺構の存在を予想して昭和59年に試掘調査を実施して、はじめて確認されたものである。

(2) 発掘調査は出雲崎バイパス(国道116号)の建設に伴って昭和60年に実施した。調査範囲はバイパス法線部分幅約40m、長さ約120m、面積約4,400m²である。

(3) 調査の結果、平安時代と中世の遺構・遺物が検出された。平安時代は鍛冶工房が検出された。鉄滓計約15kgとフイゴの羽口10数点が出土した。鉄滓は砂鉄を原料にした製錬滓、精錬鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓があるが、製錬滓は少ない。鍛冶遺構は明瞭ではなく、これと併存したと推定される遺構に掘立柱建物数棟と井戸・土坑数基がある。掘立柱建物は桁行・梁間とも不規則である。平安時代の土器は須恵器と土師器で、土師器が量的にかなり多い。器種は須恵器の無台杯・有台杯・有台椀・長頸瓶・横瓶・大甕、土師器の無台杯・有台椀・甕・鍋(以上ロクロ土師器)・鉢・筒形土製品(以上非ロクロ)がある。時期は9世紀末葉から10世紀中葉に比定される。佐渡からの搬入品と考えられる非ロクロの土師器甕が1点ある。須恵器は佐渡小泊窯の製品と考えられるものがある。

(4) 中世の遺構は掘立柱建物数棟・井戸数基・溝数条・横井戸1基、などである。調査区南辺の傾斜地は2段にわたって削平され、それぞれの平坦部に建物が配置され、谷に面して丘陵を背負った屋敷地となる。下段の平坦部



第41図　番場遺跡の消長と周辺の動向

の上手には溝がめぐり、その前に建物・井戸が特に集中しており、屋敷の中核をなしていたことがうかがえる。これらの北側には横井戸があり、その前面に水田跡が検出された。水田跡の年代は平安から中世で、詳細は不明である。建物は廂縁をもつものが多く、大規模なものは桁行５～６間ある。束柱をもつものが２棟あり、総床張りの建物と考えられる。そのうちのSB17は一辺約20cmの角柱で、当時の建物としてはかなり立派であり、その居住者として在地領主層が想定される。

(5) 中世の出土遺物には陶磁器類・木製品・石製品・鉄製品・銭貨などがある。陶磁器類には中国陶磁器(青磁碗・皿・香炉・鉢、青白磁合子・梅瓶・蓋、白磁碗・皿、染付碗・皿、緑釉盤)、瀬戸・美濃焼(水注・四耳壺・折縁深皿・平碗・天目茶碗・おろし皿・小壺・壺・小皿・丸皿)、珠洲焼(片口鉢・壺・甕)、越前焼(甕・すり鉢・壺)、土師質土器(皿)などがある。陶磁器の構成としては、片口鉢・壺・甕の日常雑器の３器種が珠洲焼であり、これに中国陶磁器と瀬戸・美濃焼の碗皿類と水注・瓶子・合子などの奢侈品が加わる。土師質土器皿は手ずくねのタイプのみで量は少ない。木製品には墨書を残すものがあり、１点は「急々如律令」のまじない札である。このほか漆器椀・皿・箱物・曲物・下駄・箸・火鑽臼などがあり、石製品には砥石・硯がある。陶磁器としては中国陶磁器、瀬戸・美濃焼が量的に多く、器種も奢侈品が多いことが注目される。緑釉盤は県内初例のものである。遺物のうえからも在地領主層が想定される。遺物の主体は12世紀後半から15世紀前半までの期間であり、検出された遺構の大半がこの時期のものと考えられる。

(6) 遺跡の所在する小木周辺には、南北朝の在地領主として小木(荻)氏の存在が文献から知られ、この遺跡はその屋敷という可能性も考えられる。遺跡に近接する字「タテ」には戦国期の城下町的な地割と地名がみられ、この周辺における戦国期の中心地と考えられる。

第42図　小 木 遠 望(小木ノ城より)

引用・参考文献

足利健亮　1975　「東国・交通」『日本歴史地理総説』古代編　吉川弘文館

阿部洋輔　1987　「念仏宗の伝幡」『新潟県史』通史編２　中世編　新潟県

家田順一郎　1985　『片桐塚群遺跡』　見附市教育委員会

石井進　1986　「木簡から見た中世都市『草戸千軒町』」『国史学』第130号

石井進・網野善彦編　1986　『朝日百科日本の歴史』１　中世Ⅰ－１　朝日新聞社

石井進編　1986　『朝日百科日本の歴史』２　中世Ⅰ－２　朝日新聞社

伊藤鄭爾　1958　『中世住居史』　東京大学出版会

井上慶隆　1976　「三島郡の荘・保」『かみくひむし』21

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』２　日本貿易陶磁研究会

上野与一・宮下幸夫　1982　「作見窯について」『小松市立博物館研究紀要』第19集

内嶋善兵衛　1986　「日本のスノーベルト日本海岸の気候」『日本の気候』日本の自然５　岩波書店

宇津川徹・上條朝宏　1981　「土器胎土中の動物珪酸体について(1)･(2)」『考古学ジャーナル』181･182　ニュー・サイエンス社

宇野隆夫　1981　「遺物」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　京都大学埋蔵文化財研究センター

大河内勉・荒川正明ほか　1985　『新潟県刈羽郡小国町御館発掘調査報告』　小国町教育委員会

大澤正己　1981　「真木山遺跡出土の鉄滓・鉄塊の調査」『真木山製鉄遺跡』　豊浦町教育委員会

大澤正己　1987　「金子坂遺跡製鉄関連遺物の金属学的調査」『金子坂遺跡』(新知町埋蔵文化財調査報告書)　福島県新知町教育委員会

大三輪龍彦監修　1981　『掘り出された鎌倉』　新発見の鎌倉遺跡と遺物展図録　鎌倉考古学研究所

大橋康二　1984　「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』　佐賀県立九州陶磁文化館

小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』２　前掲

小野正敏　1985　「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『ミューゼアム』1985年11月号　東京国立博物館

金子拓男ほか　1975　「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』35　新潟県人文研究会

金子拓男　1975　「新潟県青海町天神山経塚出土の陶製経筒と珠洲焼の成立について」『信濃』27－１　信濃史学会

金子拓男・岡本郁栄ほか　1977　「西古志の考古学的調査」『新潟県文化財調査年報第16　寺泊・出雲崎』　新潟県教育委員会

金子拓男ほか　1980　「新潟県」『日本城郭大系』７　新人物往来社

狩野久編　1979　「木簡」『日本の美術』No.160　至文堂

川上貞雄　1975　『五頭山麓の古陶』水原博物館開館十周年記念展図録　水原町立水原博物館

川上貞雄　1977　『水原城館址及水原代官所址発掘調査報告書』水原町教育委員会

川上貞雄　1979ａ　『行塚遺跡・小山崎遺跡』　安田町教育委員会

川上貞雄　1979ｂ　「堀越館址発掘調査報告」『水原郷土誌』第11集　水原町教育委員会

川上貞雄　1982　『中の山遺跡』　亀田町教育委員会

川上貞雄・遠藤孝司　1984　『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』　白根市教育委員会

河野真知郎　1986　「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21　神奈川考古同人会

北村亮ほか　1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第36　出雲崎百塚』　新潟県教育委員会

木村宗文　1986　「越後国延喜式内社の所在をめぐって」『政治社会史論叢』　山田英雄先生退官記念会編　近藤出版社

久々忠義ほか　1984　『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町木製品・総括編　上市町教育委員会

國平健三ほか　1979　『上浜田遺跡』　神奈川県教育委員会

小島幸雄編　1977～1984　『春日山城跡発掘調査概報』Ⅰ～Ⅶ　上越市教育委員会

小島幸雄　1978　『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』　上越市教育委員会

小島幸雄・中村美恵子　1983　『伝至徳寺跡発掘調査報告書』　上越市教育委員会

小島幸雄ほか　1983　「末野古窯跡群」『新潟県文化財調査年報第22　保倉川流域』　新潟県教育委員会
小林健太郎　1978　「北陸道・越後国」『古代日本の交通路』II　大明堂
駒形敏朗　1987　『三貫梨遺跡―第２次発掘調査―』　長岡市教育委員会
小松市立博物館編　1979　「シンポジウム　北陸における中世陶器の生産と流通」『小松市立博物館研究紀要』第14集
斉木秀雄・原広志　1983　『研修道場用地発掘調査報告書』　鎌倉市鶴岡八幡宮研修道場用地発掘調査団
坂井秀弥　1982　「越後の灰釉陶器」『信濃』34―４
坂井秀弥　1983　「越後における７・８世紀の土器様相と画期」『信濃』35―４　信濃史学会
坂井秀弥　1984　「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』　新潟県教育委員会
坂井秀弥・戸根与八郎ほか　1984　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集』　新潟県教育委員会　前掲書
坂井秀弥　1985　「頸城平野古代・中世開発史の一考察」『新潟史学』18　新潟史学会
坂井秀弥　1986ａ　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集　一之口遺跡西地区』　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1986ｂ　「新潟番場遺跡」『木簡研究』８　木簡研究会
坂井秀弥　1986ｃ　「新潟県の鉄生産」『シンポジウム　北陸の鉄生産　基調報告要旨』　たたら研究会
坂井秀弥　1986ｄ　「毛抜形大刀」『新潟県文化財大観』　新潟日報事業社
坂井秀弥・金沢道篤　1986　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集　新井市坪ノ内館跡』上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書II　新潟県教育委員会
坂井秀弥　1987ａ　「関野遺跡」『柏崎市史資料集』考古２　柏崎市
坂井秀弥　1987ｂ　「山三賀II遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』３　新潟県教育庁文化行政課
坂井秀弥　1987ｃ　「中世小木城下の復元」『新潟史学』20　新潟史学会
佐藤攻　1975　「多摩ニュータウン内遺跡・昭和49年度調査」『調査・研究発表会Ｉ発表要旨』　武蔵野文化協会考古部会
渋澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編　1984　『新版　絵巻物による日本常民生活絵引』全五巻　平凡社
関雅之　1973　「西蒲原郡黒埼町釈迦堂遺跡調査報告」『新潟県埋蔵文化財緊急調査報告書第１』　新潟県教育委員会
関雅之・本間信昭　1973　「南蒲原郡栄村半ノ木遺跡調査報告」『新潟県埋蔵文化財緊急調査報告書第1』　前掲
関雅之・本間信昭　1975　『浜田遺跡』　真野町教育委員会
関雅之・戸根与八郎ほか　1976　「燕市長所遺跡発掘調査報告」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第６』　新潟県教育委員会
関雅之・本間信昭編　1981　『真木山製鉄遺跡』　豊浦町教育委員会
品田高志　1986　「緒立遺跡」『新潟県史』通史編１
高橋勉　1984　『栗原遺跡第７次第８次発掘調査報告書』　新井市教育委員会
高橋保　1985　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第39　タテ遺跡』　新潟県教育委員会
高橋保　1987　「立ノ内遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』３　新潟県教育庁文化行政課
田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ｉ』　石川県立埋蔵文化財センター
たたら研究会編　1986　『シンポジウム　北陸の鉄生産　基調報告要旨』　前掲
千葉英一　1977　「南中赤坂遺跡」『下田村文化財調査報告７』　下田村教育委員会
土田孝雄　1986　「原山遺跡」・「田伏製鉄遺跡」『糸魚川市史』資料編１
手塚直樹・河野真知郎・斉木秀雄ほか　1982　『神奈川県鎌倉市千葉地遺跡』　千葉地遺跡発掘調査団
寺村光晴ほか　1985　『横滝山廃寺跡発掘調査概報　第４次調査』　寺泊町教育委員会
東京国立博物館編　1976　『日本出土の中国陶磁』
戸根与八郎ほか　1976　「南蒲原郡中之島村杉之森遺跡発掘調査報告」『新潟県埋蔵文化財調査報告　第８』新潟県教育委員会
豊田武　1963　『武士団と村落』日本歴史叢書　吉川弘文館
中川成夫・倉田芳郎ほか　1970　「笹神村権兵衛沢址の調査」『新潟県文化財調査年報第10　水原郷』　新潟県教育委員会
中川成夫・土井義雄・川上貞雄　1973　『狼沢窯址群の調査』　笹神村教育委員会

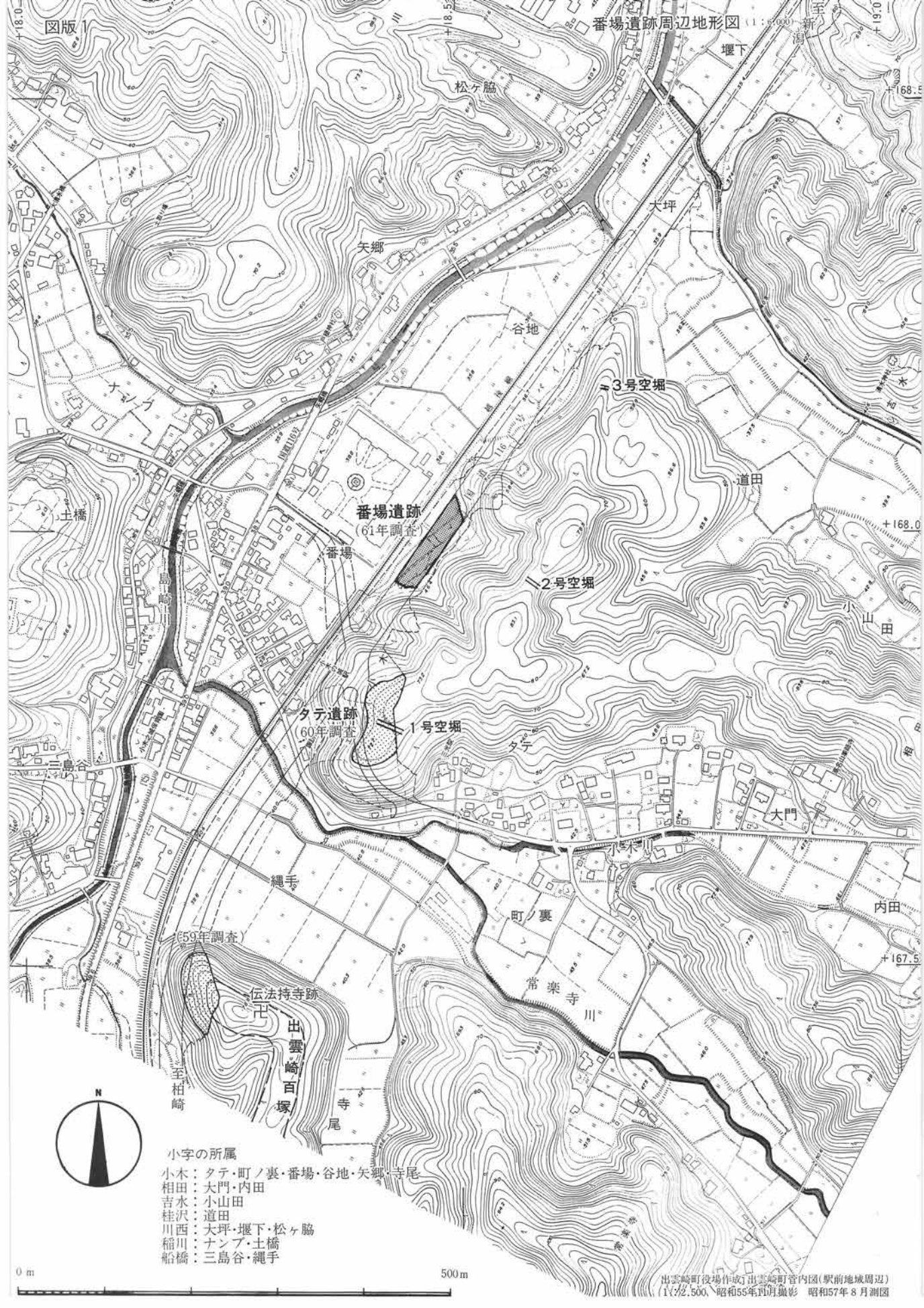
中村孝三郎・岡本郁栄　1978　『出雲崎乙茂の製鉄址』　出雲崎町教育委員会
楢崎彰一　1976　『瀬戸・美濃』日本陶磁全集９　中央公論社
新潟県教育委員会　1980　『昭和54年度新潟県遺跡地図』
新潟県教育委員会　1987　『新潟県中世城館分布調査報告書』
西越郷土誌編纂会　1926　『小木の城山』　1978復刻
服部実喜・小川裕久　1984　『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会
服部実喜　1985ａ　「鎌倉旧市城出土の中世土師質土器」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会
服部実喜　1985ｂ　「中世鎌倉における陶磁器構成の時代的変遷」『貿易陶磁研究』５　日本貿易陶磁研究会
福田健司　1986　「南武蔵における平安時代後期の土器群」『神奈川考古』21　神奈川考古同人会
藤木久志　1963　「家臣団の編成」『藩制成立史の綜合研究　米沢藩』　吉川弘文館　（のちに藤木1986　『戦国大名の権力構造』　吉川弘文館に所収）
藤沢良祐　1984　「古瀬戸概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ　土岐市
藤沢良祐　1986　「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館
藤巻正信　1987　「西田・鶴巻田・桐山遺跡」『柏崎市史資料集』声古２　柏崎市
本間嘉晴・椎名仙卓　1958　「佐渡小木半島周辺の考古学的調査」『新潟県文化財年報第２　南佐渡』　新潟県教育委員会
本間嘉晴ほか　1983　『馬場遺跡』　相川町教育委員会
本間嘉晴　1986　「小泊窯址群」『新潟県史』通史編１　原始・古代
宮田進一　1985　「出土遺物による時期区分」『弓庄城跡第５次緊急調査概要』　上市町教育委員会
森田勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』２　前掲
山本肇ほか　1983　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第33　内越遺跡』　新潟県教育委員会
柳恒雄　1983　「西山～別山油帯の水系パターンと地殻変動」『新潟県社会科研究紀要』第18集
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館
吉岡康暢・平田天秋　1976　「珠洲市史」第一巻
吉岡康暢・水野九右衛門　1976　『越前・珠洲』日本陶磁全集７　中央公論社
吉岡康暢ほか　1977　『珠洲法住寺３号窯』　石川県教育委員会・珠洲古窯跡発掘調査委員会
吉岡康暢　1981　「中世陶器の生産と流通」(一)・(二)　『考古学研究』108・110　考古学研究会
吉岡康暢　1982ａ　「珠洲系陶器における加飾法の展開と特質」『東洋陶磁』８号
吉岡康暢　1982ｂ　「北陸・東北の中世陶磁をめぐる問題」『庄内考古学』18　庄内考古学会
吉岡康暢　1983　「奈良・平安期の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』　松任市教育委員会・石川考古学研究会
米沢康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32―６　信濃史学会
渡辺文男　1978　「越後五頭山麓赤坂山の中世陶窯」『新潟史学』11　新潟史学会

図　　版

凡　例

1．ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
2．遺構はすべて一連番号を付し、建物(SB)、柵・塀(SA)、井戸(SE)、土坑(SK)、その他(SX)などで分類した。
3．遺構実測図は1：300図と1：100図の2種作成した。1：100の図は右頁に、これに関係する遺構断面図などは左頁に掲載し、あわせてひとつの図版とした。
4．1：100図は20cm間隔の等高線を表示した。直線で表現されているものは調査にかかる試掘抗や排水溝である。
5．遺物の番号は本文・実測図・写真ともすべて共通している。土器実測図の断面は須恵器のみ黒ぬりにし、他はすべて白ぬきである。木製品については断面・側面図に年輪を模式的に表現した。
6．器径の復原が困難な土器については中心線と外形線を離した。
7．実測図・写真の縮尺は各図版に示した。

図版1



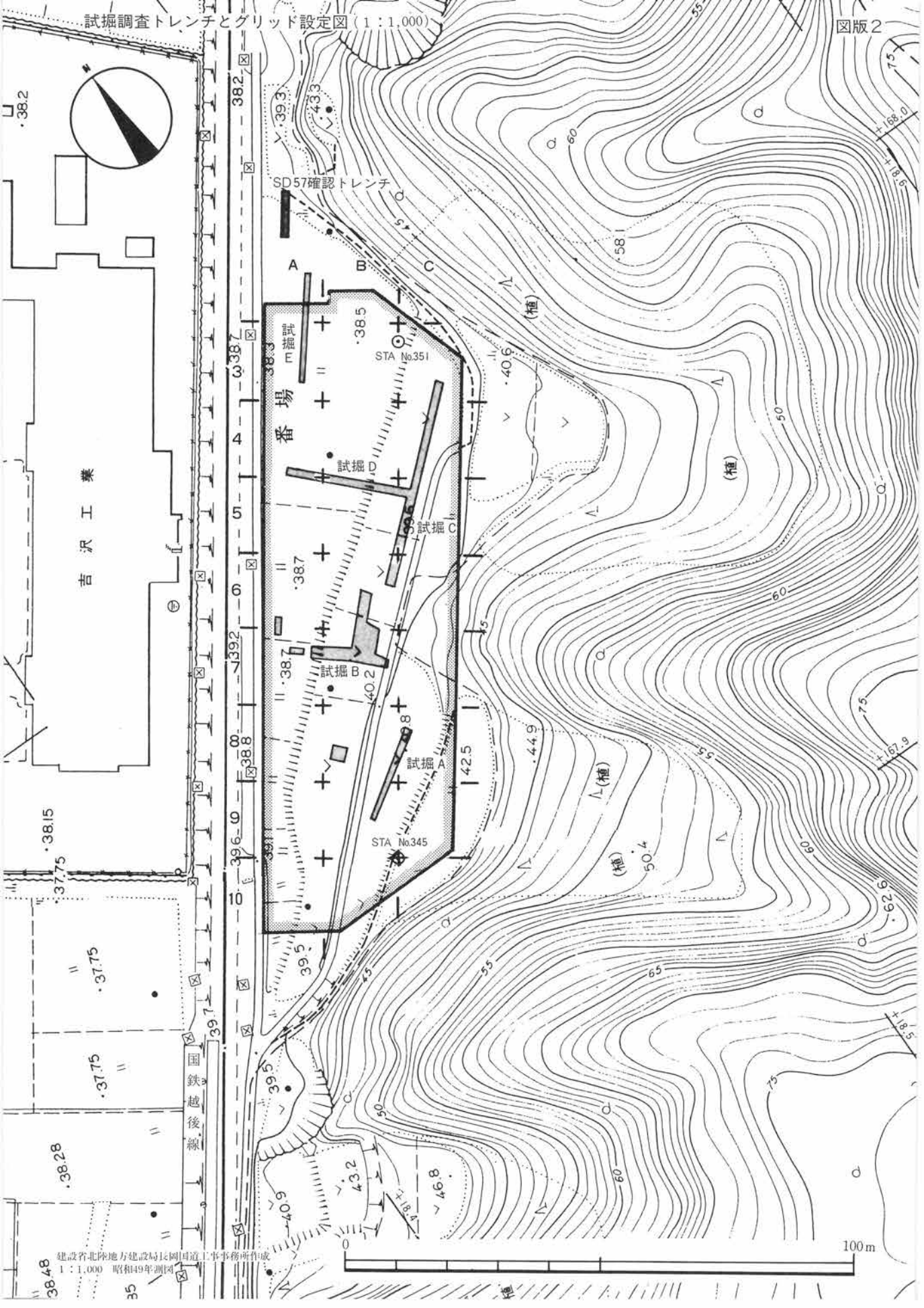
小字の所属

小木：タテ・町ノ裏・番場・谷地・矢郷・寺尾
相田：大門・内田
吉水：小山田
桂沢：道田
川西：大坪・堰下・松ヶ脇
稲川：ナンブ・土橋
船橋：三島谷・縄手

出雲崎町役場作成 出雲崎町管内図(駅前地域周辺)
(1:2,500、昭和55年11月撮影　昭和57年8月測図

試掘調査トレンチとグリッド設定図（1：1,000）

図版2



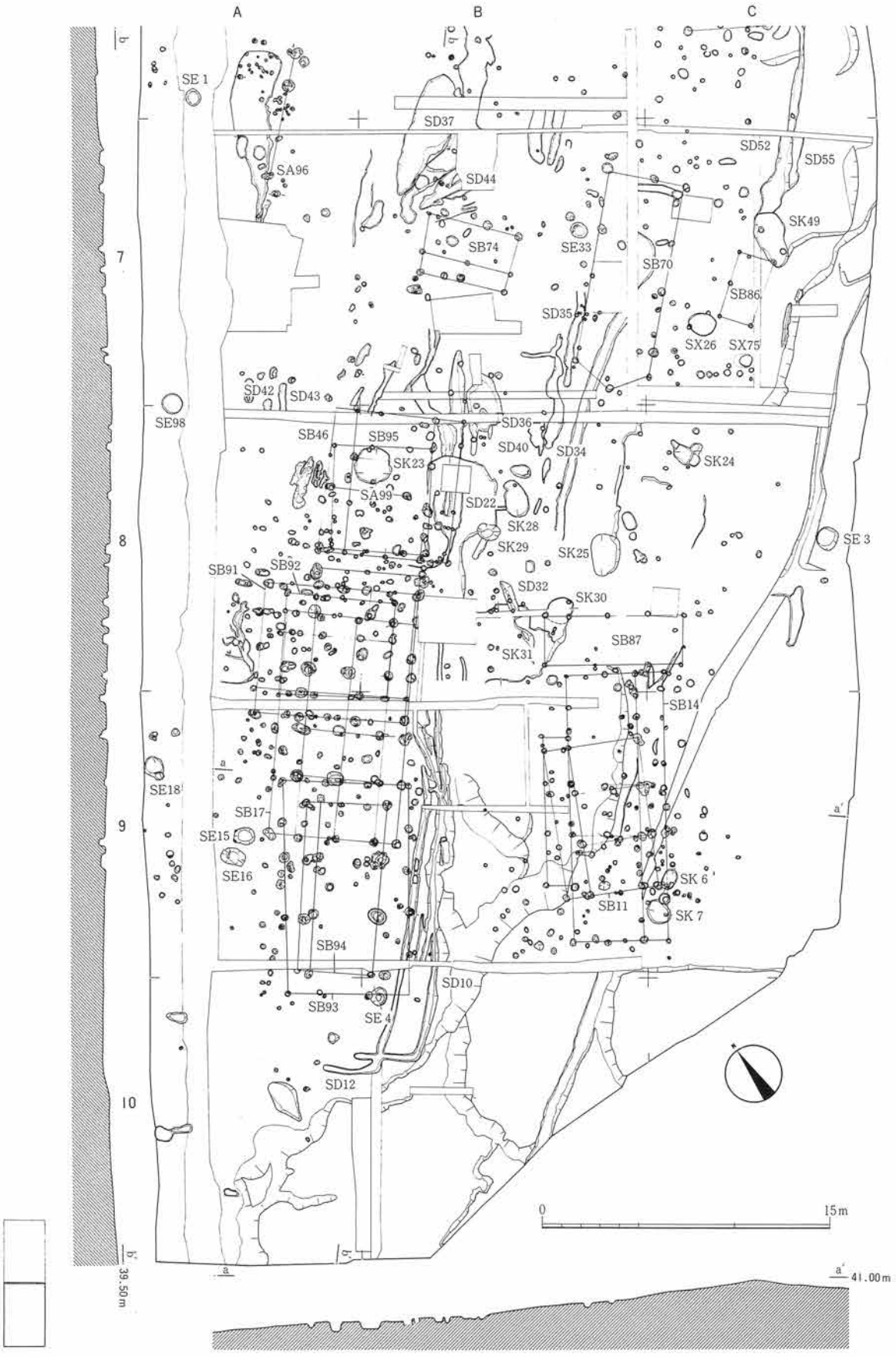
建設省北陸地方建設局長岡国道工事事務所作成
1：1,000　昭和49年測図

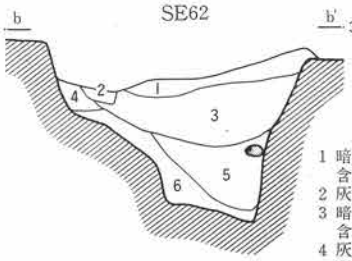
図版3

北半部遺構実測図　1：300

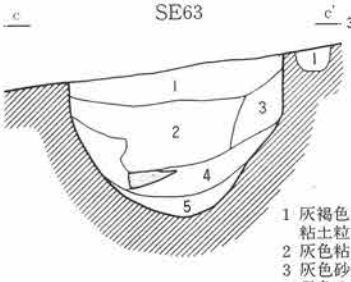
南半部遺構実測図　1：300

図版4

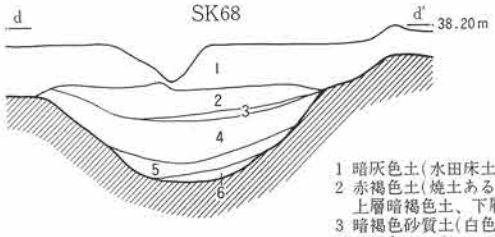




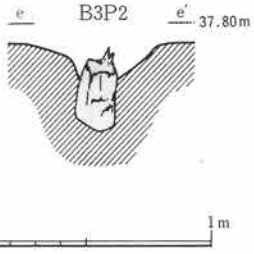
1 暗灰褐色土(炭化粒・褐色地山粒含む)
2 灰褐色土(ＳＫ62を切るピット)
3 暗灰褐色粘質土(地山ブロックを含む)
4 灰白褐色地山ブロック＋灰色粘質土
5 黒褐色土(粘性あり、地山ブロック・炭化粒・植物腐植を含む)
6 黒褐色粘質土

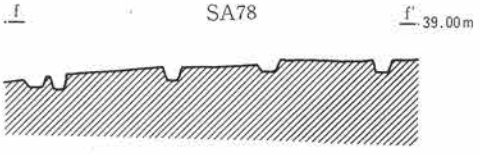


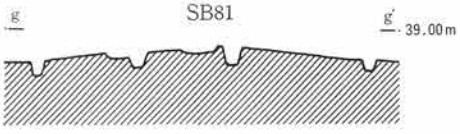
1 灰褐色土(灰白色土・灰色粘土粒を含む)
2 灰色粘質土(炭化粒を含む)
3 灰色砂質土
4 黒色土(炭化した木質等を含む)
5 暗灰色粘質土

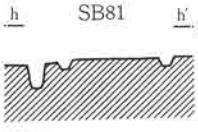


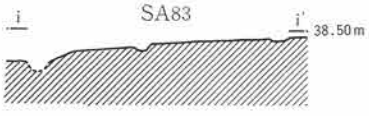
1 暗灰色土(水田床土か)
2 赤褐色土(焼土あるいは植物腐植)上層暗褐色土、下層炭化層
3 暗褐色砂質土(白色粒含む)
4 暗褐色シルト
5 暗褐色砂質土
6 黒灰色シルト

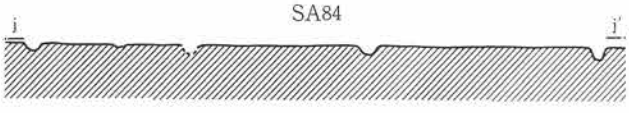


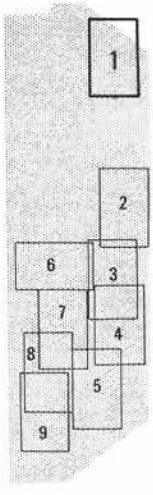


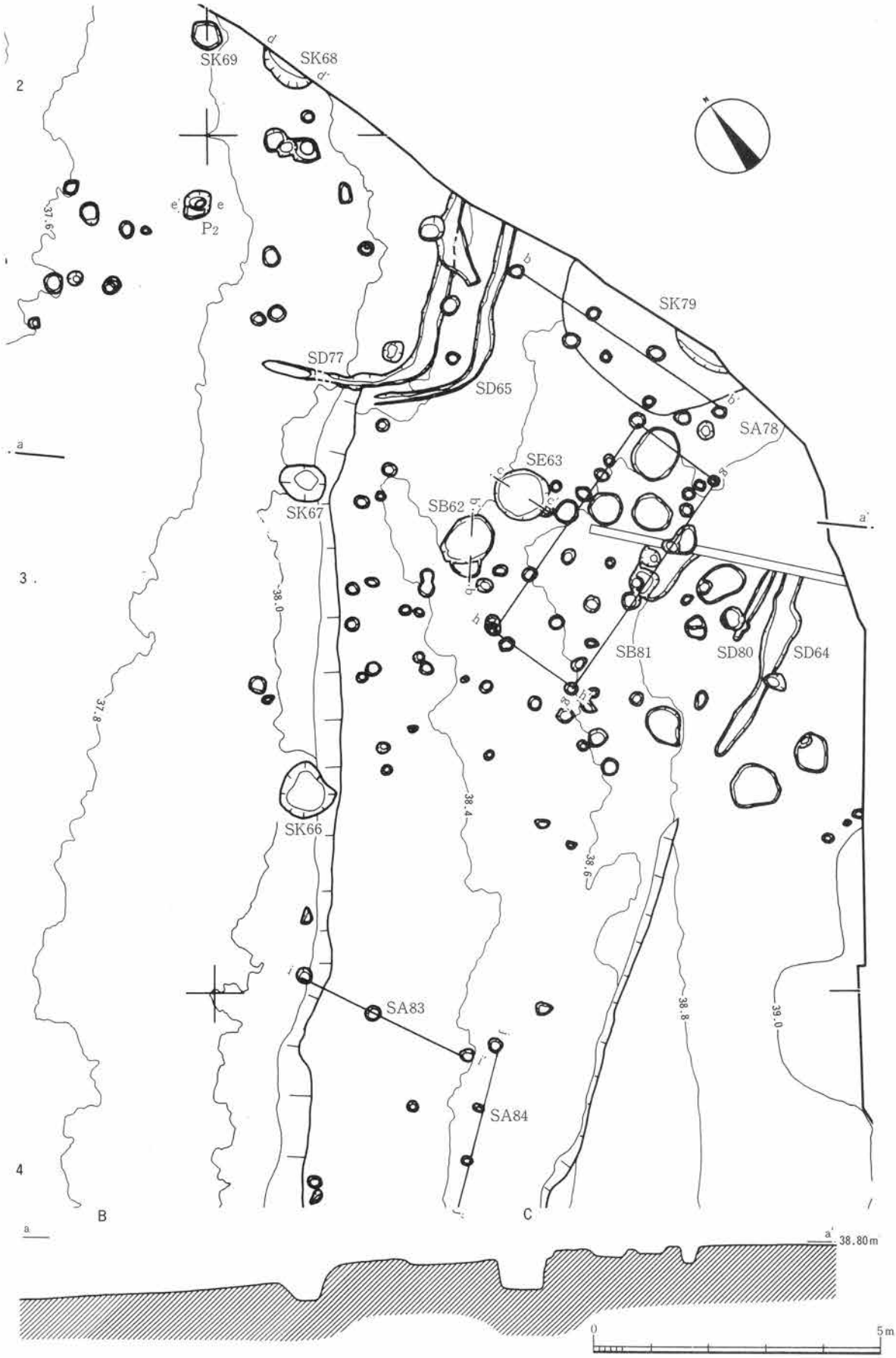


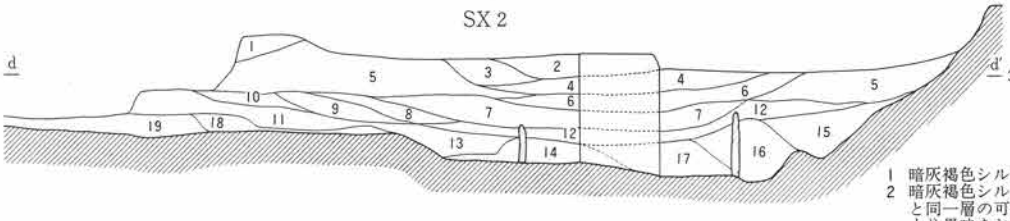


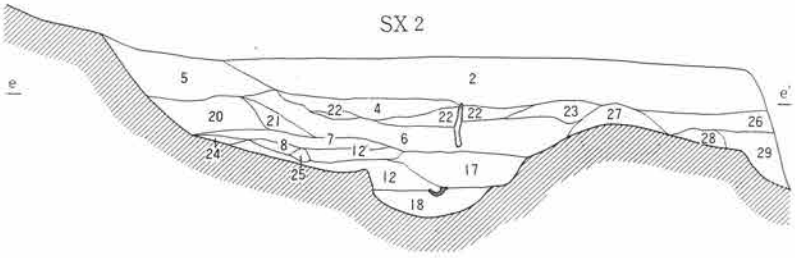


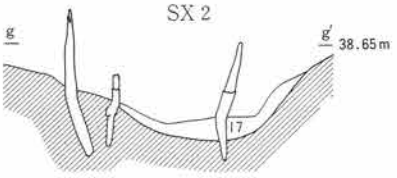




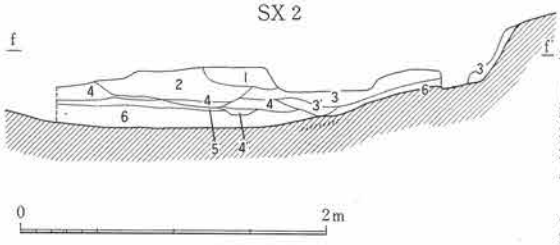

SK69
SK68
P2
SK79
SD77
SD65
SA78
SE63
SK67
SB62
SB81
SD80
SD64
SK66
SA83
SA84
37.6
38.0
37.8
38.4
38.6
38.8
39.0
38.80m
0
5m



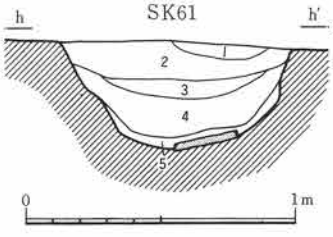




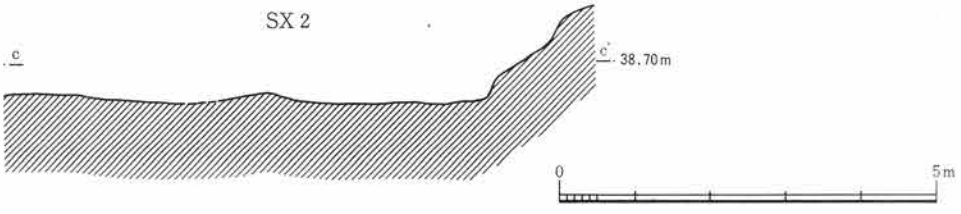
1 暗灰褐色シルト(砂利含む)
2 暗灰褐色シルト(砂利含む、1層と同一層の可能性あり、若干1層より黒味をおびる)
3 淡黒灰色砂利
4 淡黒灰色シルト
5 暗褐色砂利
6 黒灰色シルト
7 暗灰色シルト
8 黒灰色砂利
9 黒色炭化層(砂利含む)
10 茶褐色砂利(植物腐植を含む)
11 淡黒灰色砂利(灰色砂利・炭化粒含む)
12 暗青灰色砂利
12' 褐色砂利
13 暗灰色砂利
14 暗青色砂(地山か否か不明)
15 暗灰色砂利+シルト層
16 黒灰色粘質土
17 黒灰色砂利+シルト層
18 砂利層(腐植物をほとんど含まず)
19 黒灰色土・灰色砂利・炭化層の互層
20 黒灰色砂利
21 黒褐色砂利
22 黒茶褐色砂利
23 暗灰色シルト(砂利含む)
24 褐色砂利
25 青色砂
26 暗灰色シルト(砂利・地山ブロック含む)
27 灰黒色シルト
28 黒灰色シルト(砂利・地山ブロック含む)
29 黒灰色砂質土(地山ブロック含む)

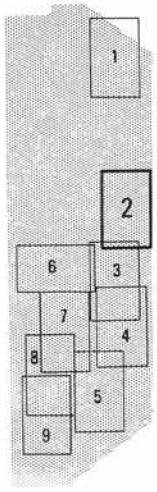


1 褐色砂利
2 黒褐色腐植土・褐色砂利の混土
3 暗褐色砂利
3' 酸化した褐色砂利
4 淡黒褐色腐植土・暗青色砂利の混土
4' 青色砂利
5 黒色腐植土
6 茶褐色腐植土



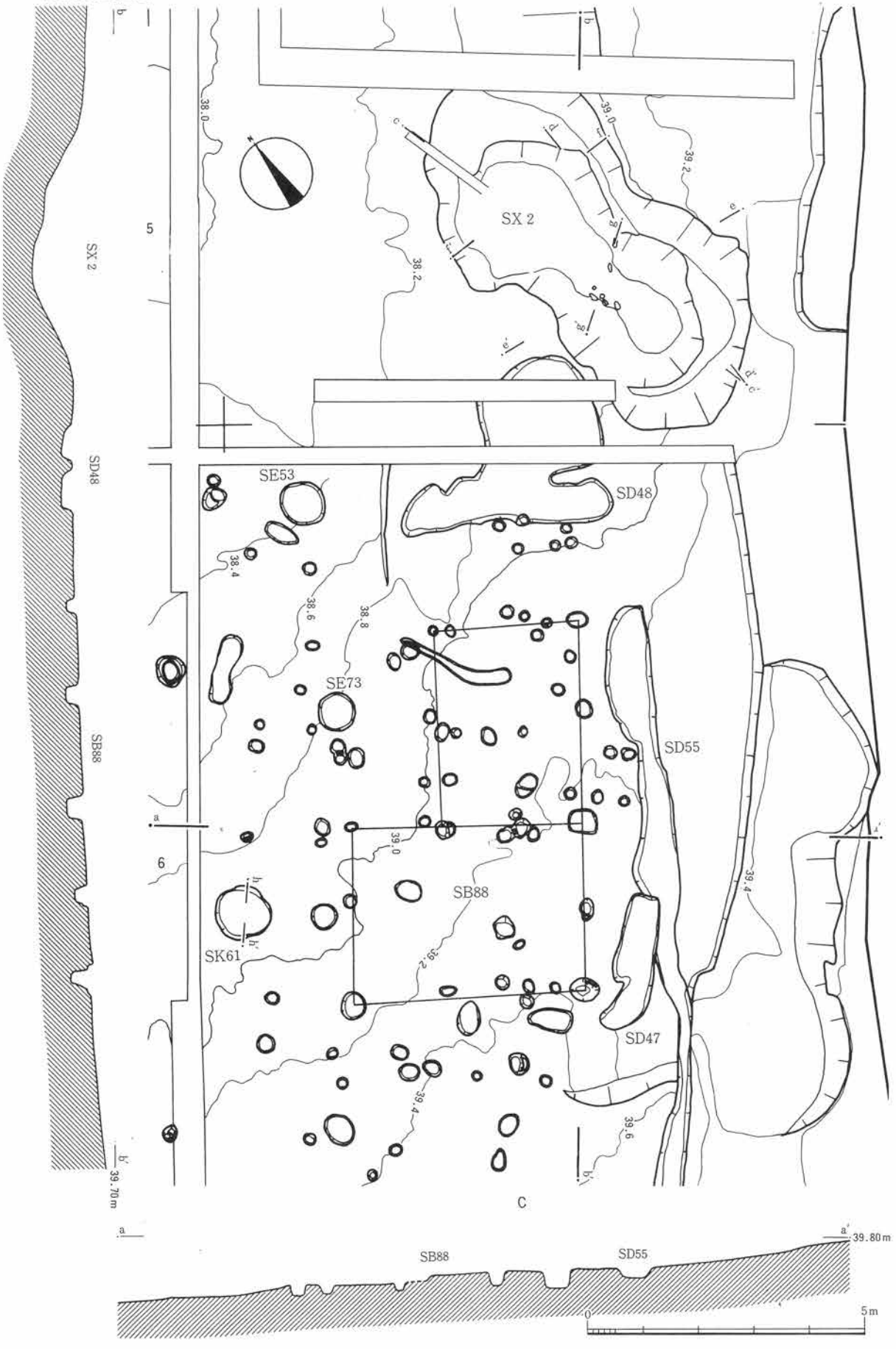
1 黒灰色土(炭化粒含む)
2 暗灰色シルト(1～2㎜の炭化・灰白色粒含む)
3 暗灰色シルト(1cm位の炭化粒・灰白色ブロック含む)
4 暗灰色シルト+灰白色ブロックの混土(埋め土)
5 茶褐色植物腐色土

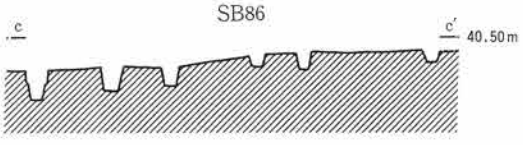


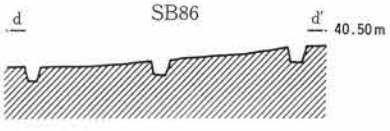


遺構実測図2　1：100

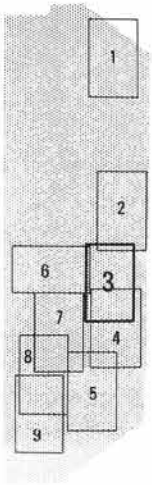
図版6



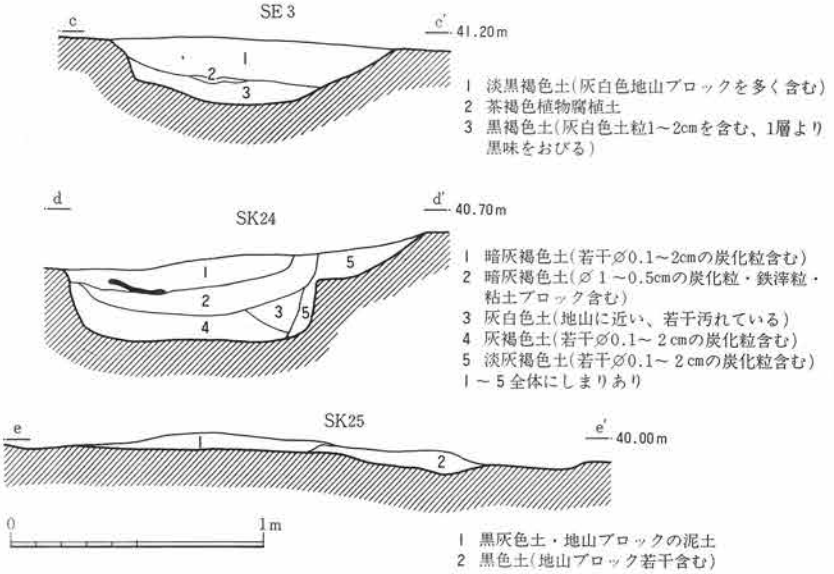

SB86
c
c'
40.50m

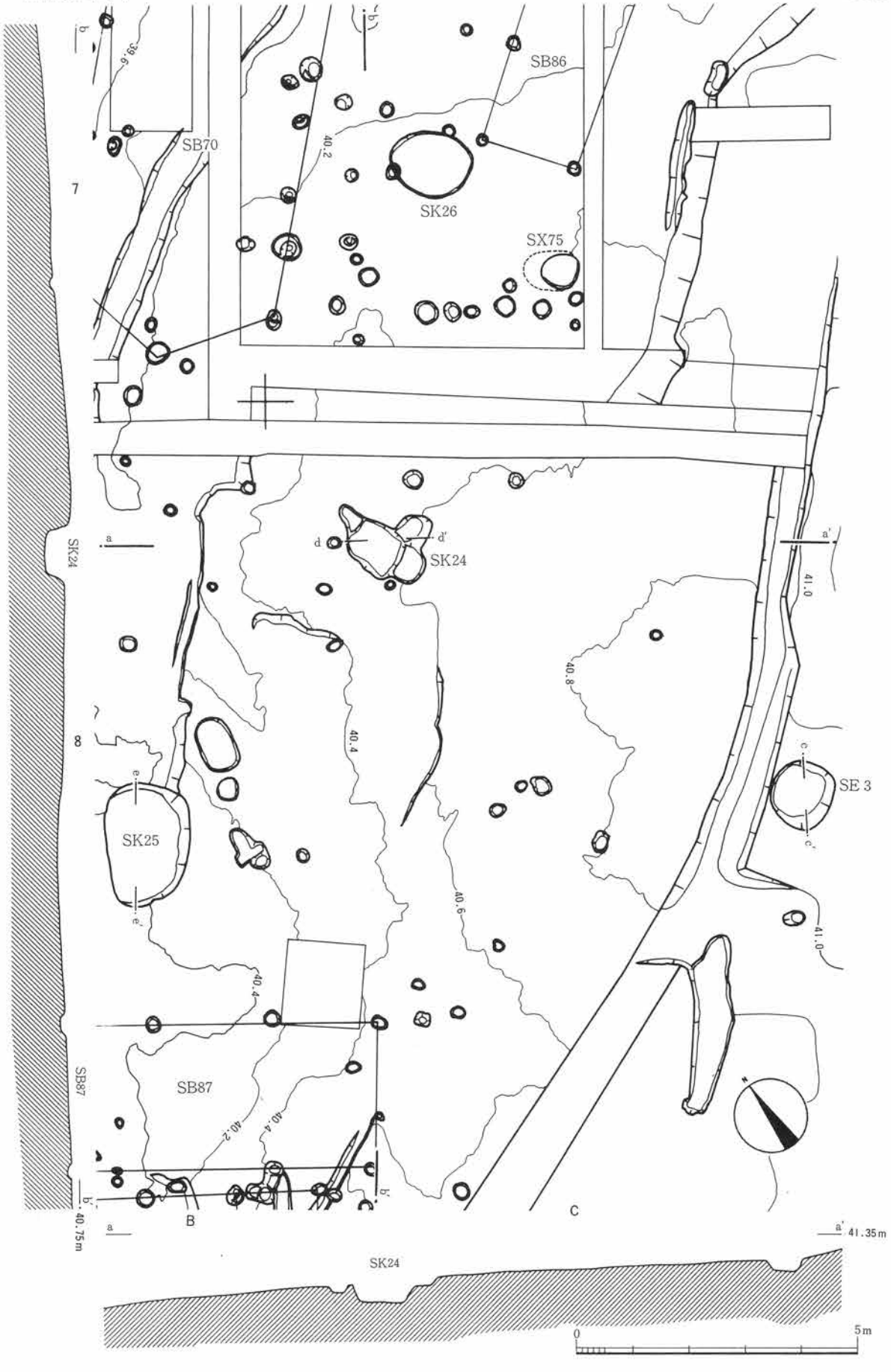

SB86
d
d'
40.50m

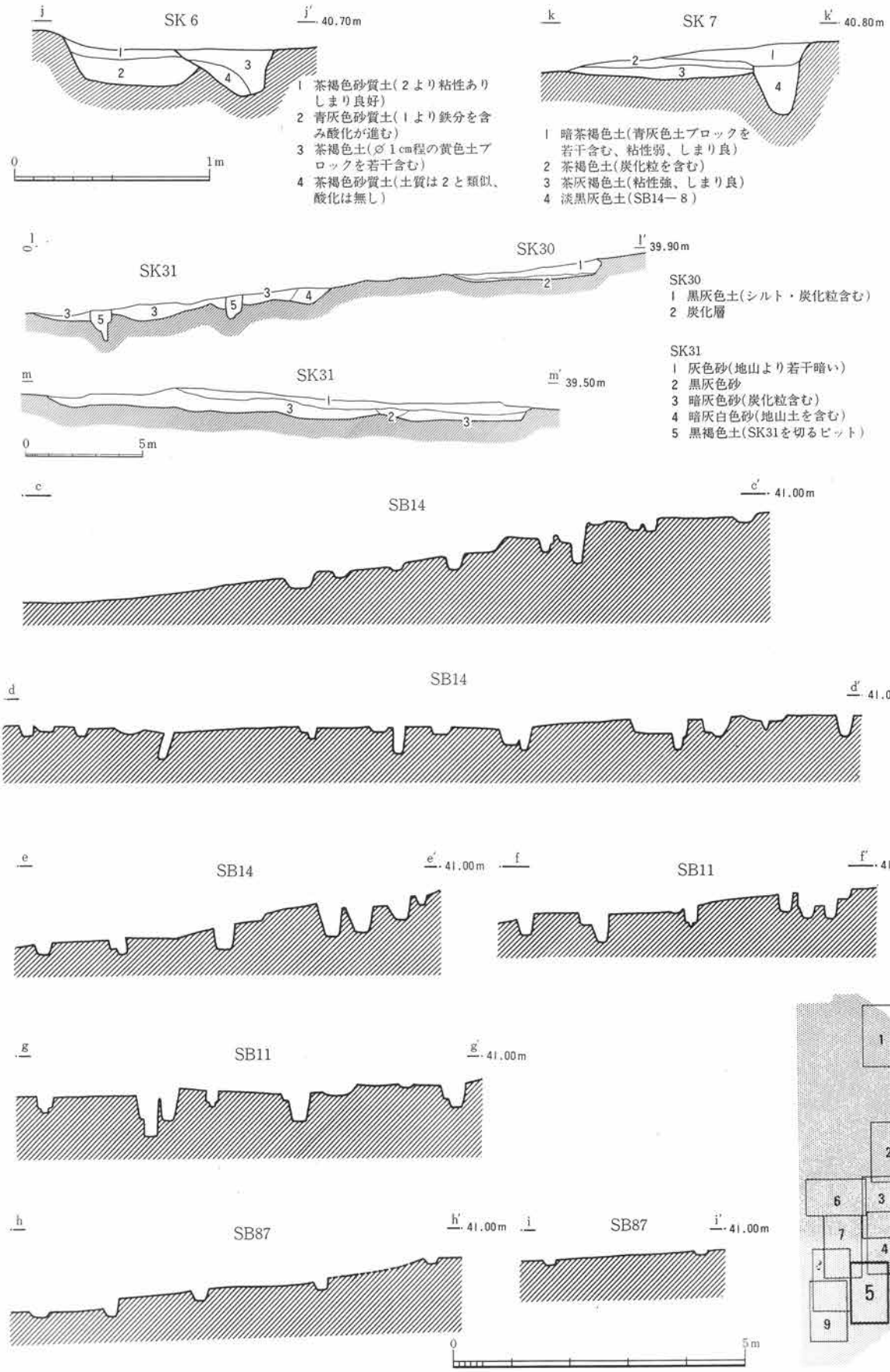
0
5m

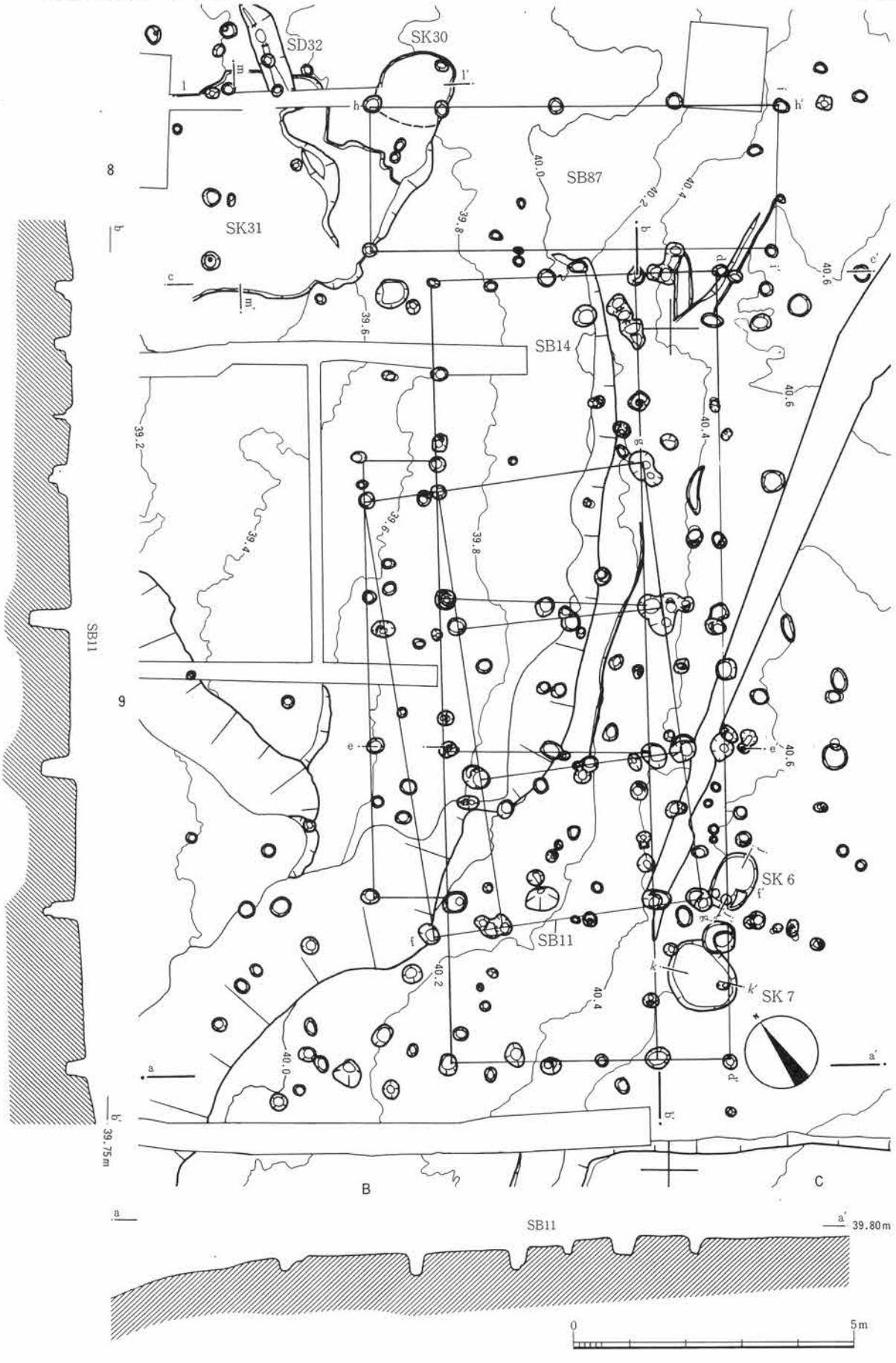

1
2
3
4
5
6
7
8
9

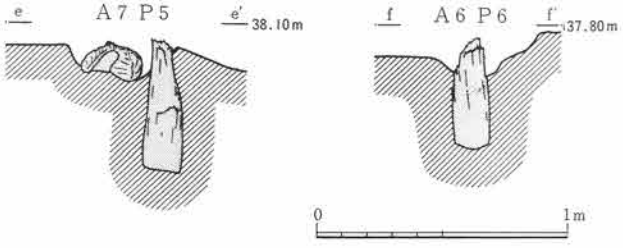
SD52
SD55
SK49
SE33
SB70
SD35
SB86
SK26
SK75
SB70
B
C
40.50m
40.00m
0
5m


SE 3
c
c'
41.20m
1
2
3
1 淡黒褐色土(灰白色地山ブロックを多く含む)
2 茶褐色植物腐植土
3 黒褐色土(灰白色土粒1～2cmを含む、1層より黒味をおびる)
d
d'
SK24
40.70m
1
2
3
4
5
1 暗灰褐色土(若干∅0.1～2cmの炭化粒含む)
2 暗灰褐色土(∅1～0.5cmの炭化粒・鉄滓粒・粘土ブロック含む)
3 灰白色土(地山に近い、若干汚れている)
4 灰褐色土(若干∅0.1～2cmの炭化粒含む)
5 淡灰褐色土(若干∅0.1～2cmの炭化粒含む)
1～5全体にしまりあり
e
e'
SK25
40.00m
1
2
0
1m
1 黒灰色土・地山ブロックの泥土
2 黒色土(地山ブロック若干含む)
1
2
3
4
5
6
7
8
9

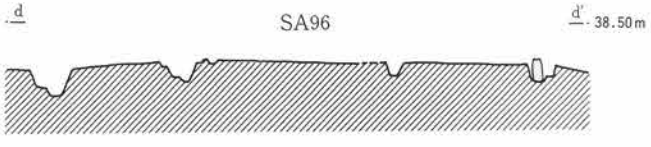

SB86
SB70
SK26
SX75
SK24
SK25
SE 3
SB87
41.0
40.8
40.4
40.6
40.2
39.6
41.35m
40.75m
0
5m

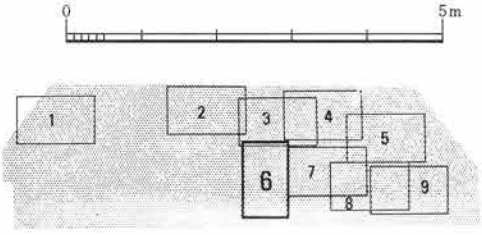

j
SK 6
j' 40.70m
1
2
3
4
0
1m
1 茶褐色砂質土(2より粘性ありしまり良好)
2 青灰色砂質土(1より鉄分を含み酸化が進む)
3 茶褐色土(φ1cm程の黄色土ブロックを若干含む)
4 茶褐色砂質土(土質は2と類似、酸化は無し)
k
SK 7
k' 40.80m
1
2
3
4
1 暗茶褐色土(青灰色土ブロックを若干含む、粘性弱、しまり良)
2 茶褐色土(炭化粒を含む)
3 茶灰褐色土(粘性強、しまり良)
4 淡黒灰色土(SB14－8)
l
SK31
SK30
l' 39.90m
1
2
3
4
5
SK30
1 黒灰色土(シルト・炭化粒含む)
2 炭化層
SK31
1 灰色砂(地山より若干暗い)
2 黒灰色砂
3 暗灰色砂(炭化粒含む)
4 暗灰白色砂(地山土を含む)
5 黒褐色土(SK31を切るピット)
m
SK31
m' 39.50m
1
2
3
0
5m
c
c' 41.00m
SB14
d
SB14
d' 41.00m
e
SB14
e' 41.00m
f
SB11
f' 41.00m
g
SB11
g' 41.00m
h
SB87
h' 41.00m
i
SB87
i' 41.00m
0
5m
1
2
3
4
5
6
7
8
9


SD32
SK30
SK31
SB87
SB14
SB11
SK 6
SK 7
8
9
B
C
39.75m
39.80m
0
5m

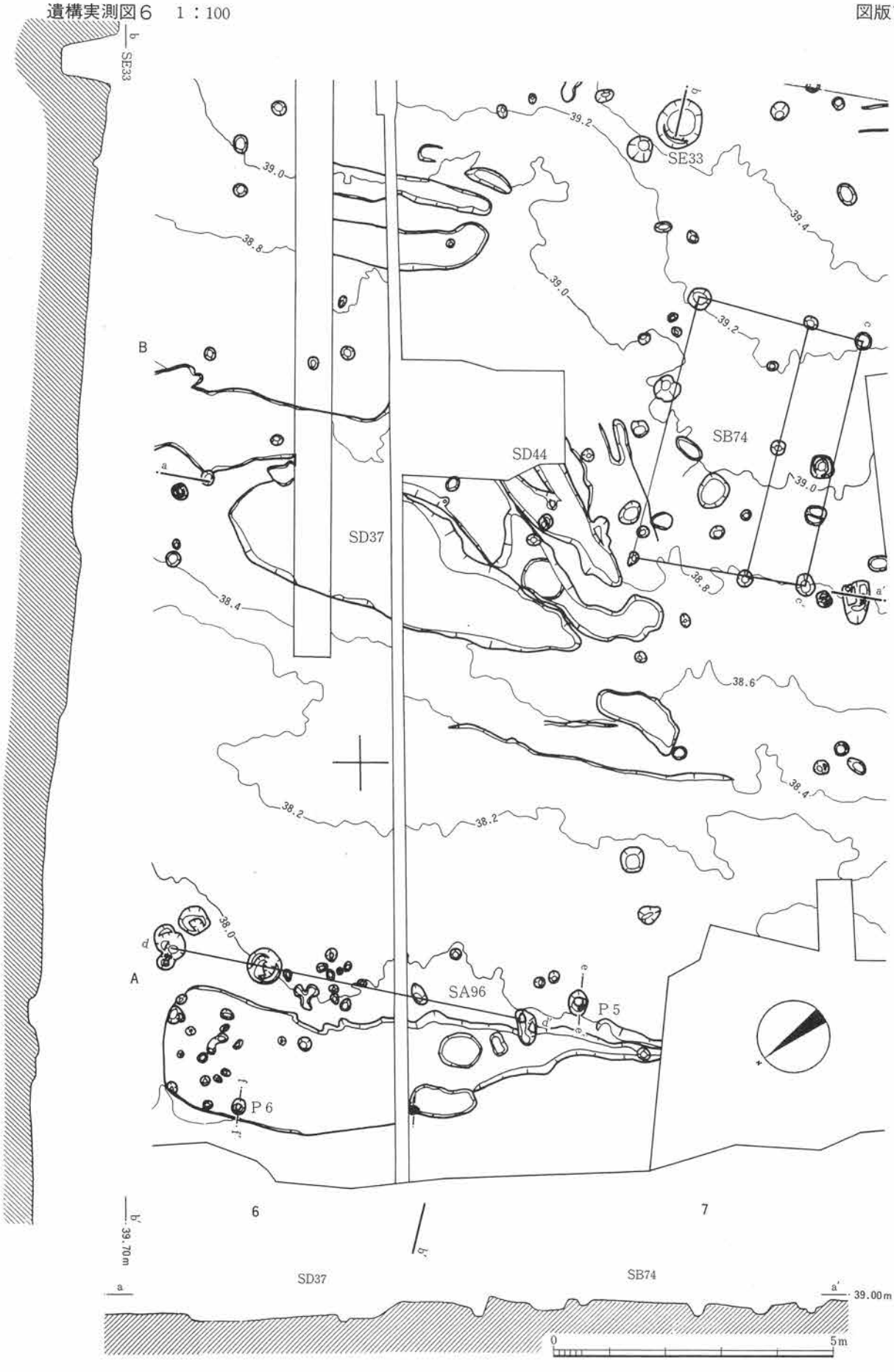

e
A7 P5
e'
38.10m
f
A6 P6
f'
37.80m
0
1m

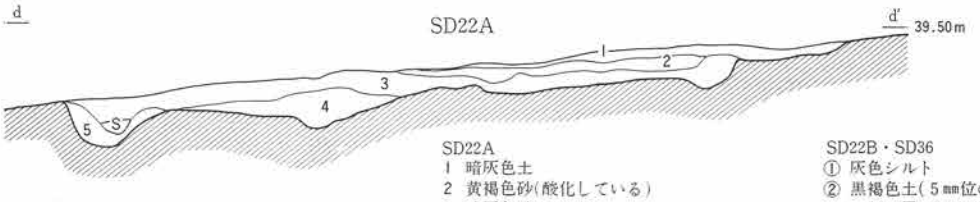
c
SB74
c'
39.50m


d
SA96
d'
38.50m


0
5m
1
2
3
4
5
6
7
8
9

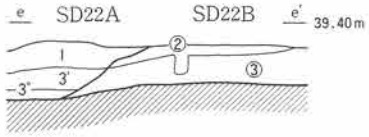
遺構実測図6　1：100

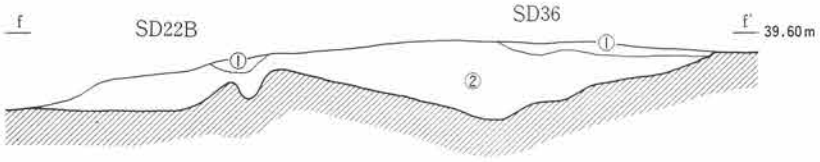

SE33
SD37
SD44
SB74
SA96
P5
P6
A
B
6
7
39.0
38.8
39.2
39.4
38.4
38.6
38.2
39.70m
39.00m
0
5m

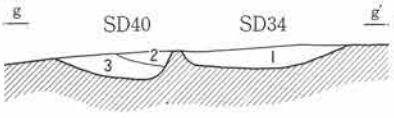


SD22A
1 暗灰色土
2 黄褐色砂(酸化している)
3 暗灰色砂＋シルト
3' 暗灰色シルト(1層より黒い、灰褐色土が縞状に入る、炭化粒含む)
3" 暗灰色砂
4 暗灰色砂と褐色砂・荒砂の相互層
5 灰白色土(5㎜位の炭化粒含む)

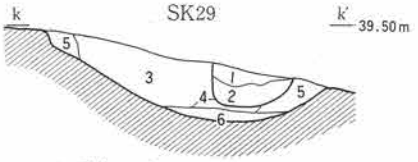
SD22B・SD36
① 灰色シルト
② 黒褐色土(5㎜位の炭化粒含む、一部下層に地山ブロック含む)
③ 暗灰色シルト(若干炭化粒含む)



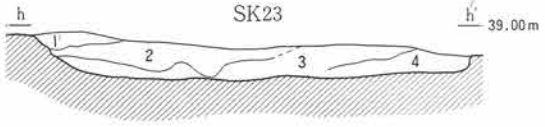


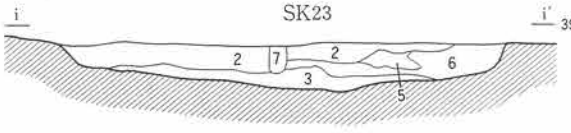


1 暗灰色土(炭化粒含む)
2 灰白色土(若干汚れる)
3 暗灰色土(炭化粒含む)

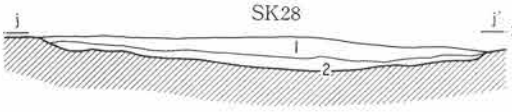


1 灰色シルト
2 黒灰色土(灰白色粘土ブロック多い)
3 黄褐色砂(SD22A 2層と同一)
4 黒灰色土(1㎜炭化粒含む)
5 暗灰色シルト
6 暗灰色砂

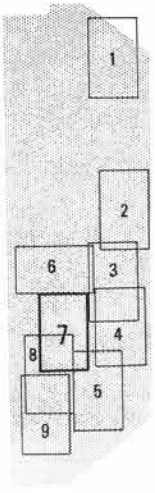


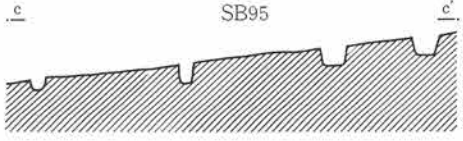


1 黒色土
2 暗灰褐色土
3 黒色土
4 灰褐色土(黒色土ブロックより固い)
5 灰褐色土ブロック
6 淡灰褐色土(よくしまる)
7 暗褐色土

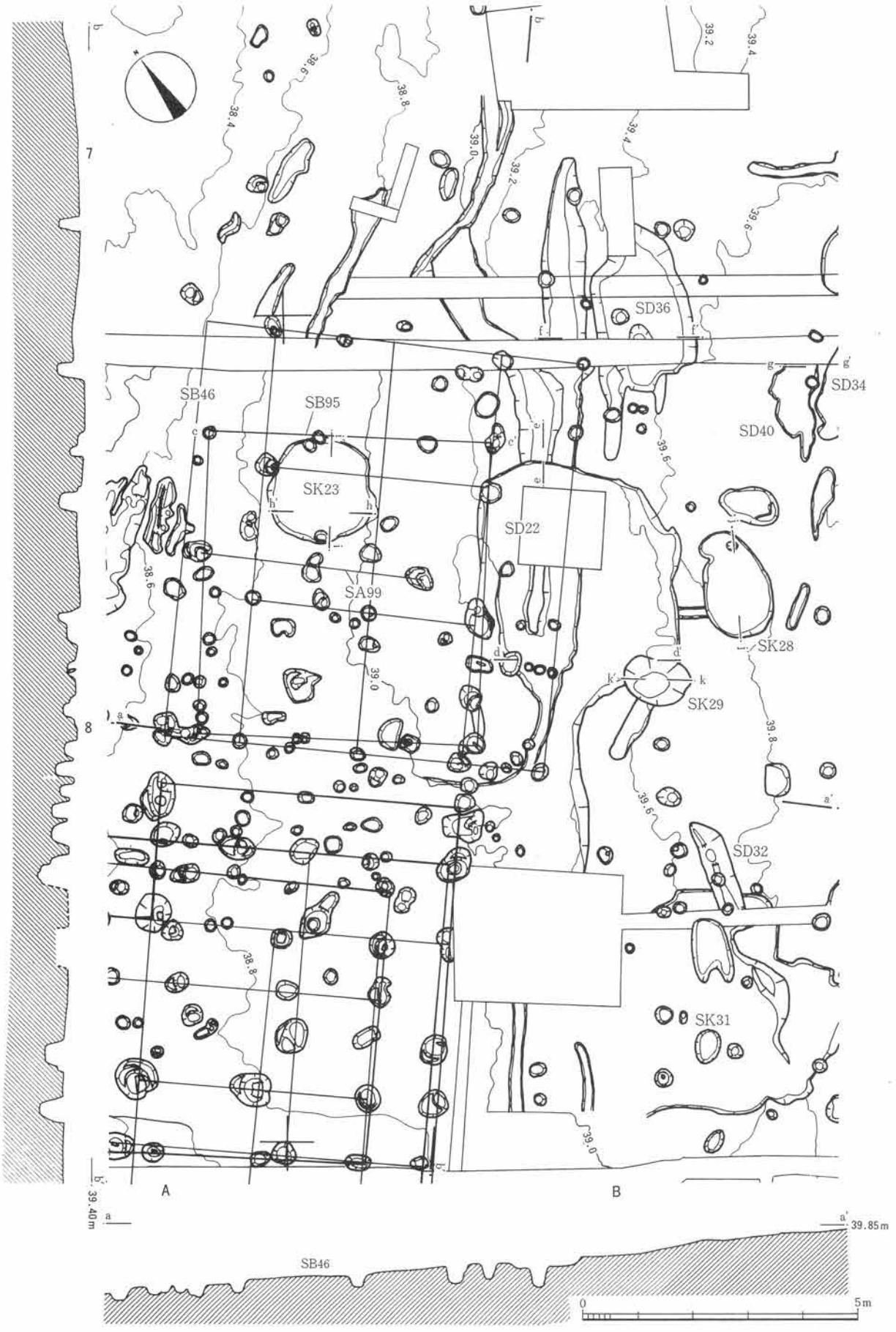


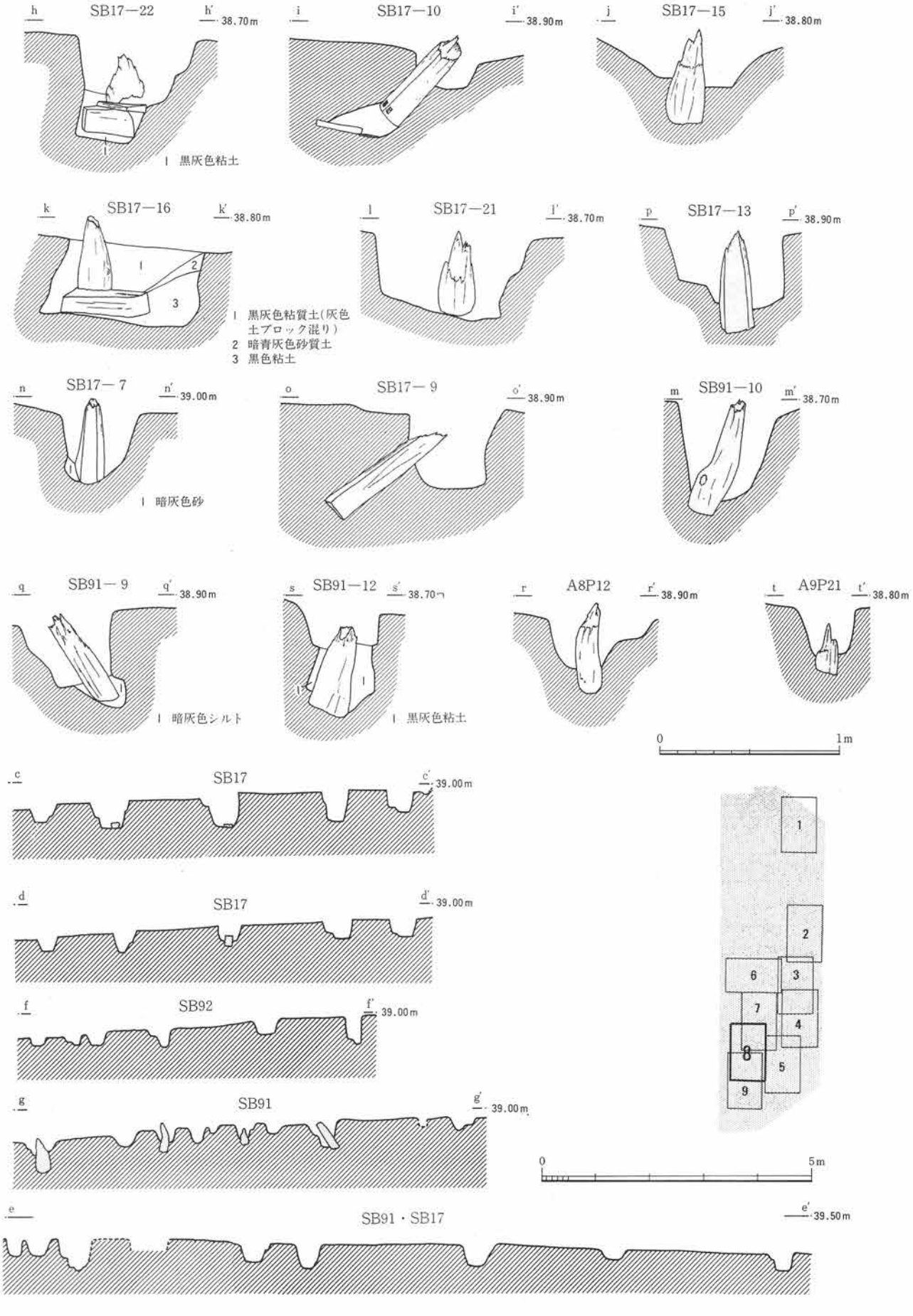
1 灰白色地山ブロック・暗灰色土の混土
2 暗灰色砂





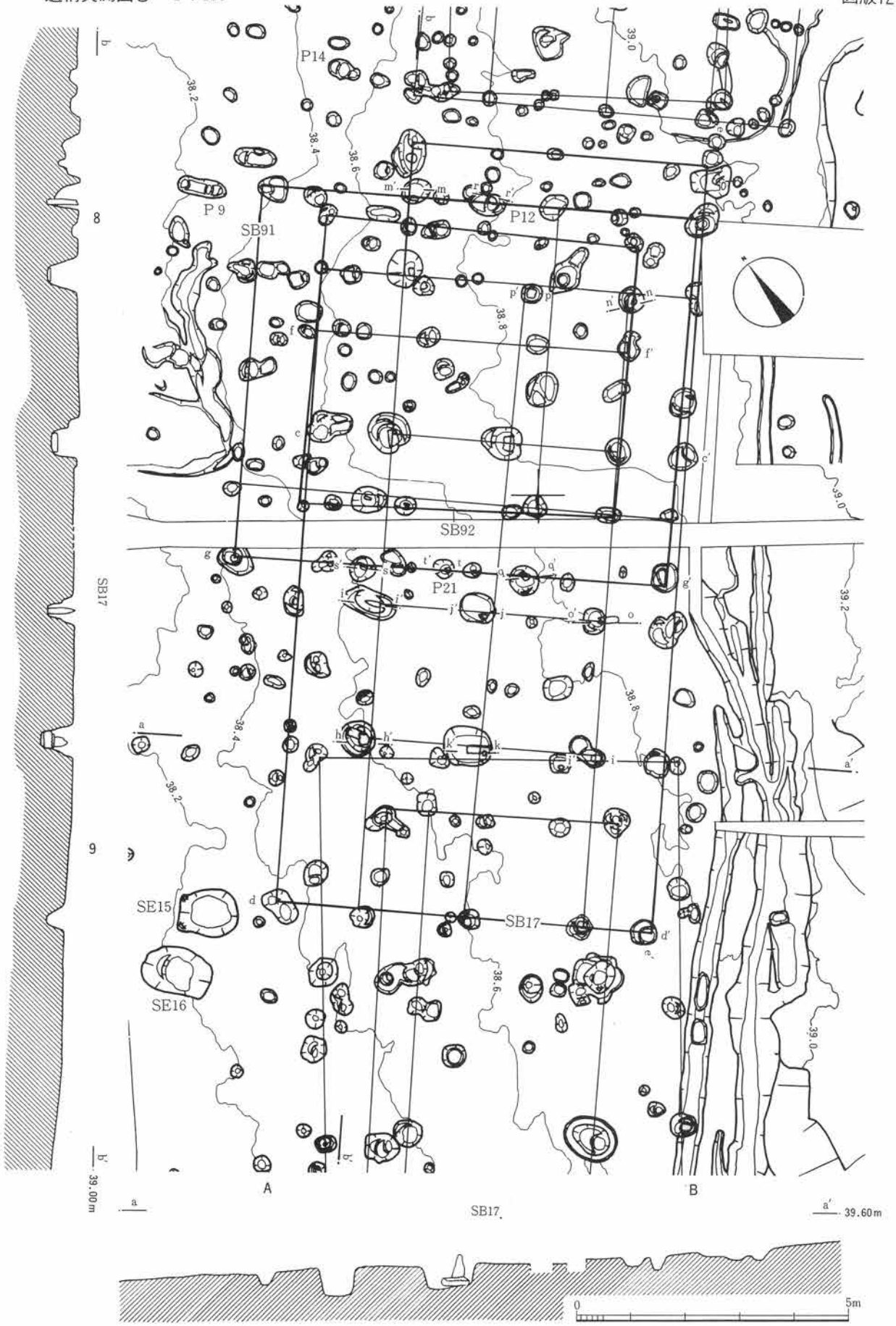
遺構実測図7　1：100

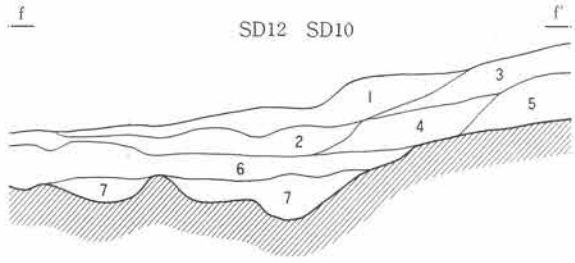

SD36
SD34
SD40
SB46
SB95
SK23
SD22
SA99
SK28
SK29
SD32
SK31
A
B
39.40m
39.85m
SB46
0
5m


h
SB17—22
h'
38.70m
1 黒灰色粘土
i
SB17—10
i'
38.90m
j
SB17—15
j'
38.80m
k
SB17—16
k'
38.80m
1 黒灰色粘質土(灰色土ブロック混り)
2 暗青灰色砂質土
3 黒色粘土
l
SB17—21
l'
38.70m
p
SB17—13
p'
38.90m
n
SB17— 7
n'
39.00m
1 暗灰色砂
o
SB17— 9
o'
38.90m
m
SB91—10
m'
38.70m
q
SB91— 9
q'
38.90m
1 暗灰色シルト
s
SB91—12
s'
38.70
1 黒灰色粘土
r
A8P12
r'
38.90m
t
A9P21
t'
38.80m
0
1m
c
SB17
c'
39.00m
d
SB17
d'
39.00m
f
SB92
f'
39.00m
g
SB91
g'
39.00m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
5m
e
SB91・SB17
e'
39.50m

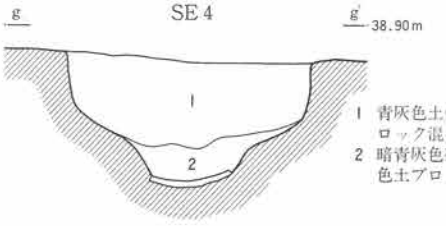
遺構実測図8　1：100

図版12

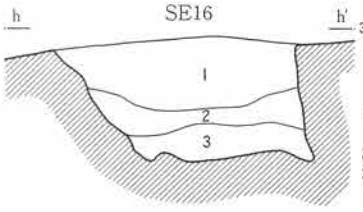




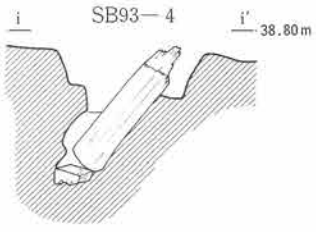
1 泥岩ブロック・灰褐色土
2 灰褐色土
3 暗灰褐色砂質土
4 灰褐色土に黒色土ブロックわずかに含む
5 暗褐色砂質土
6 灰黒色砂質土
7 黒色土

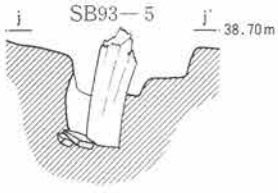


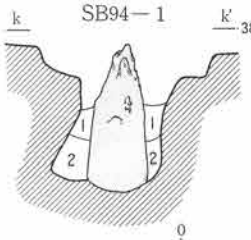
1 青灰色土(黒色土ブロック混り)
2 暗青灰色砂質土(黒色土ブロック混り)



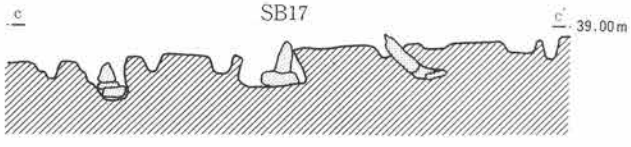
1 黄灰色砂質土(全く黒色土を含まない)
2 黒色砂質土
3 灰黒色粘質土(灰色土ブロックわずかに含む)

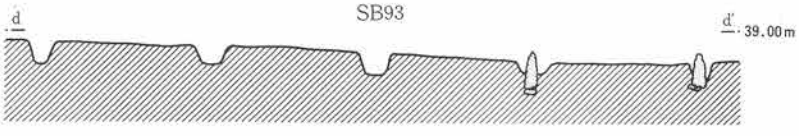


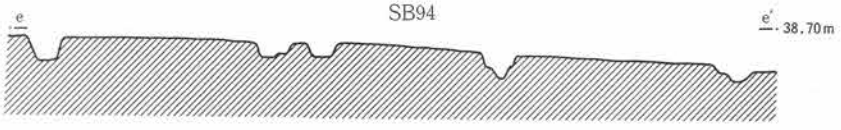


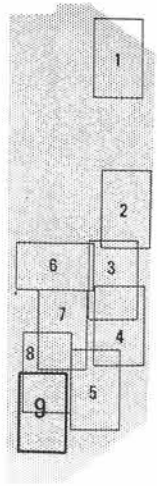


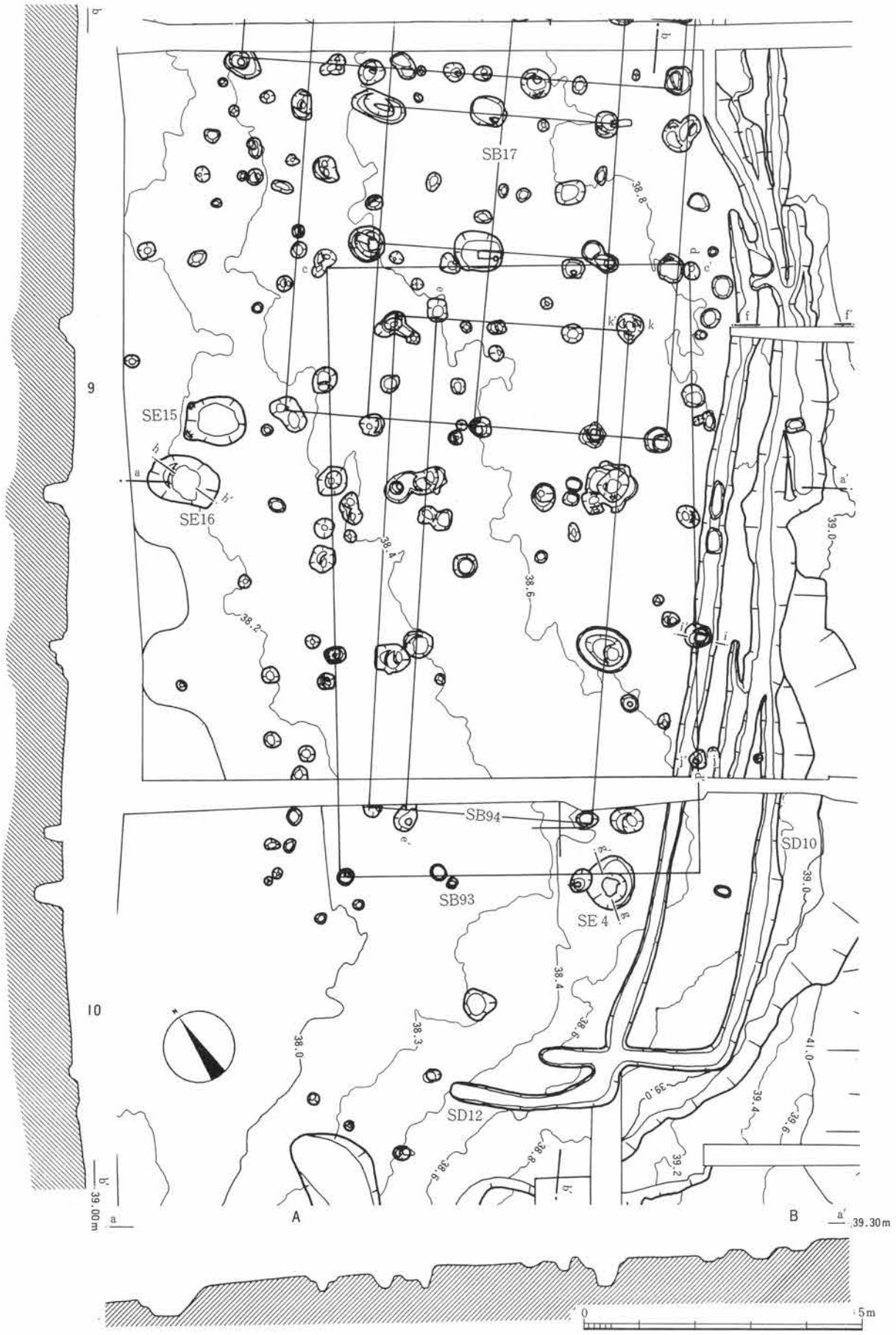
1 黒灰色粘質土
2 暗灰色シルト(黒色土粒含む)





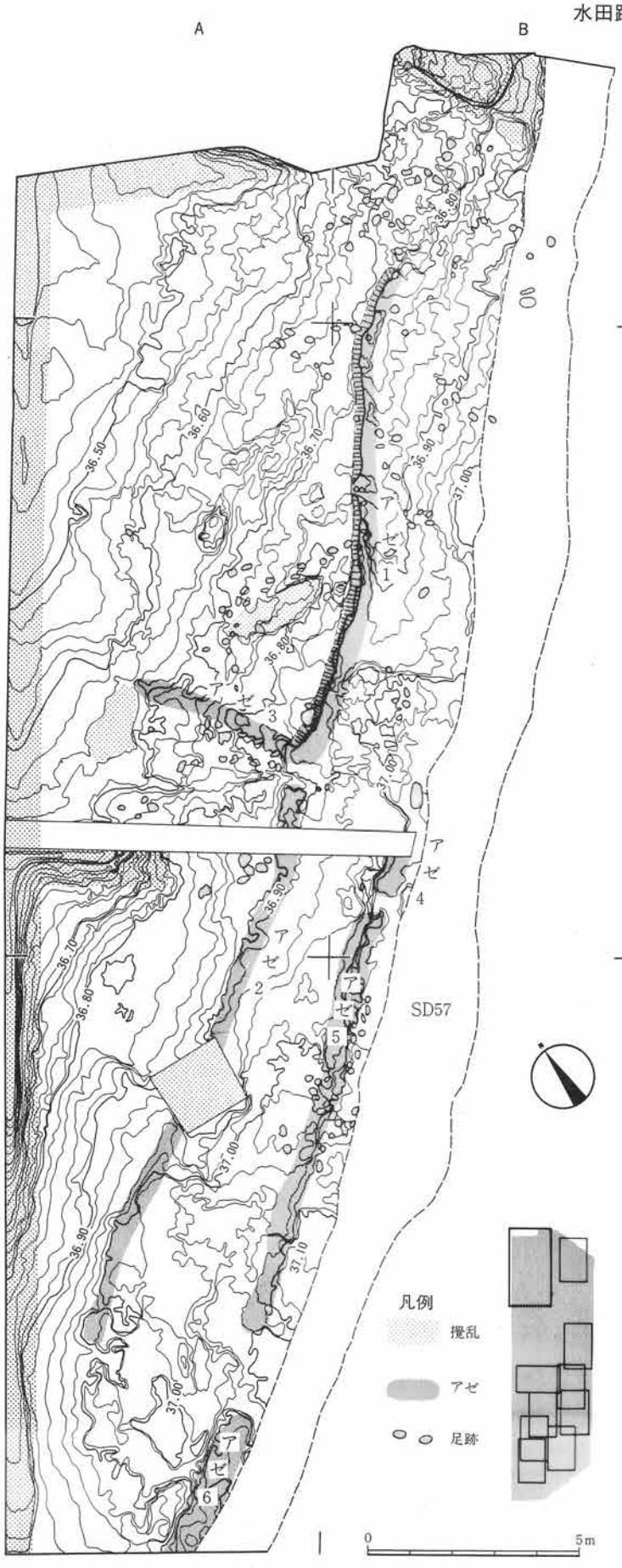


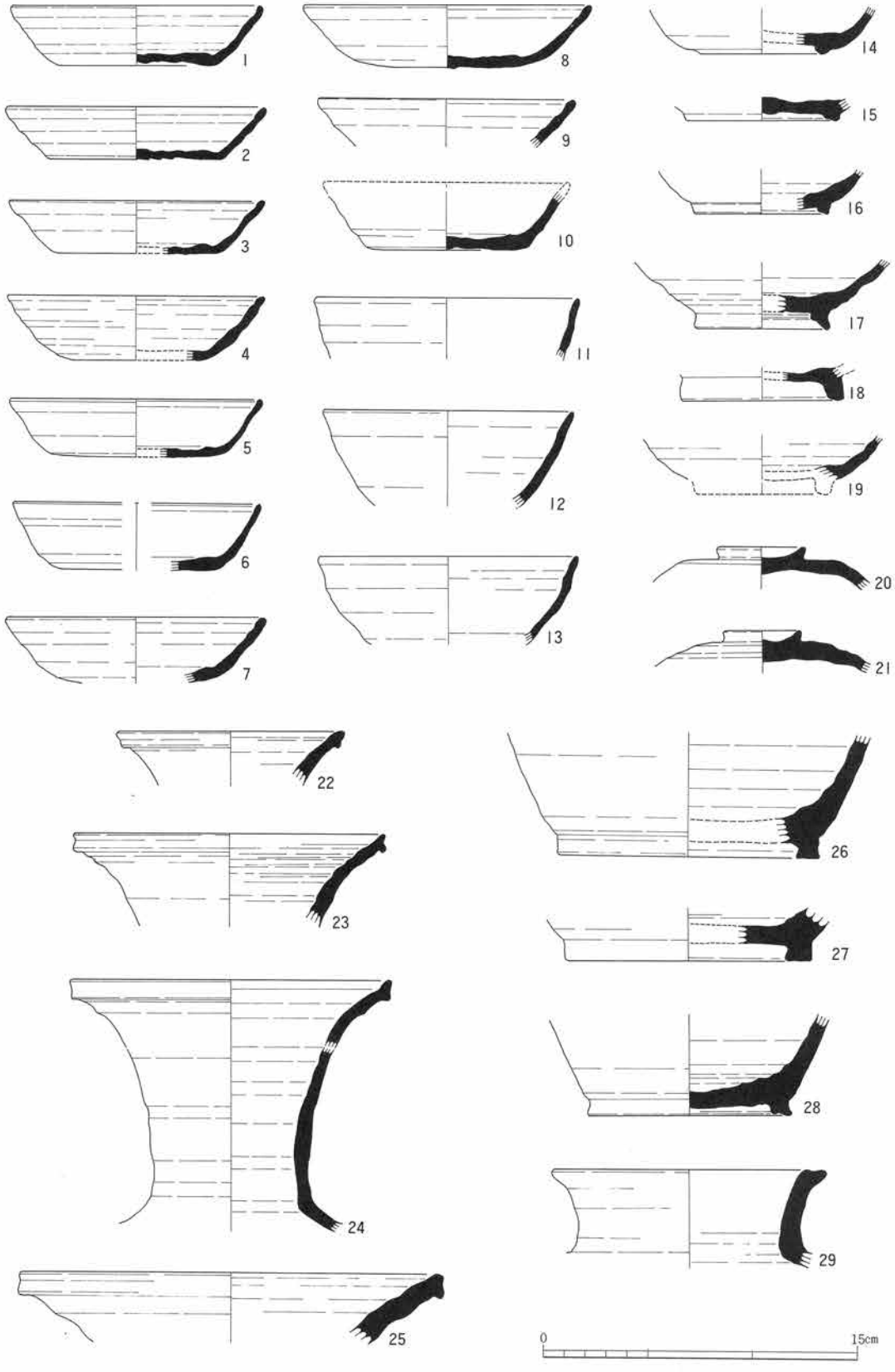



SB17
SE15
SE16
SB94
SB93
SE 4
SD10
SD12
9
10
38.8
38.4
38.6
38.2
38.0
38.3
39.0
39.4
39.6
41.0
39.2
A
B
39.00m
39.30m
0
5m

図版14

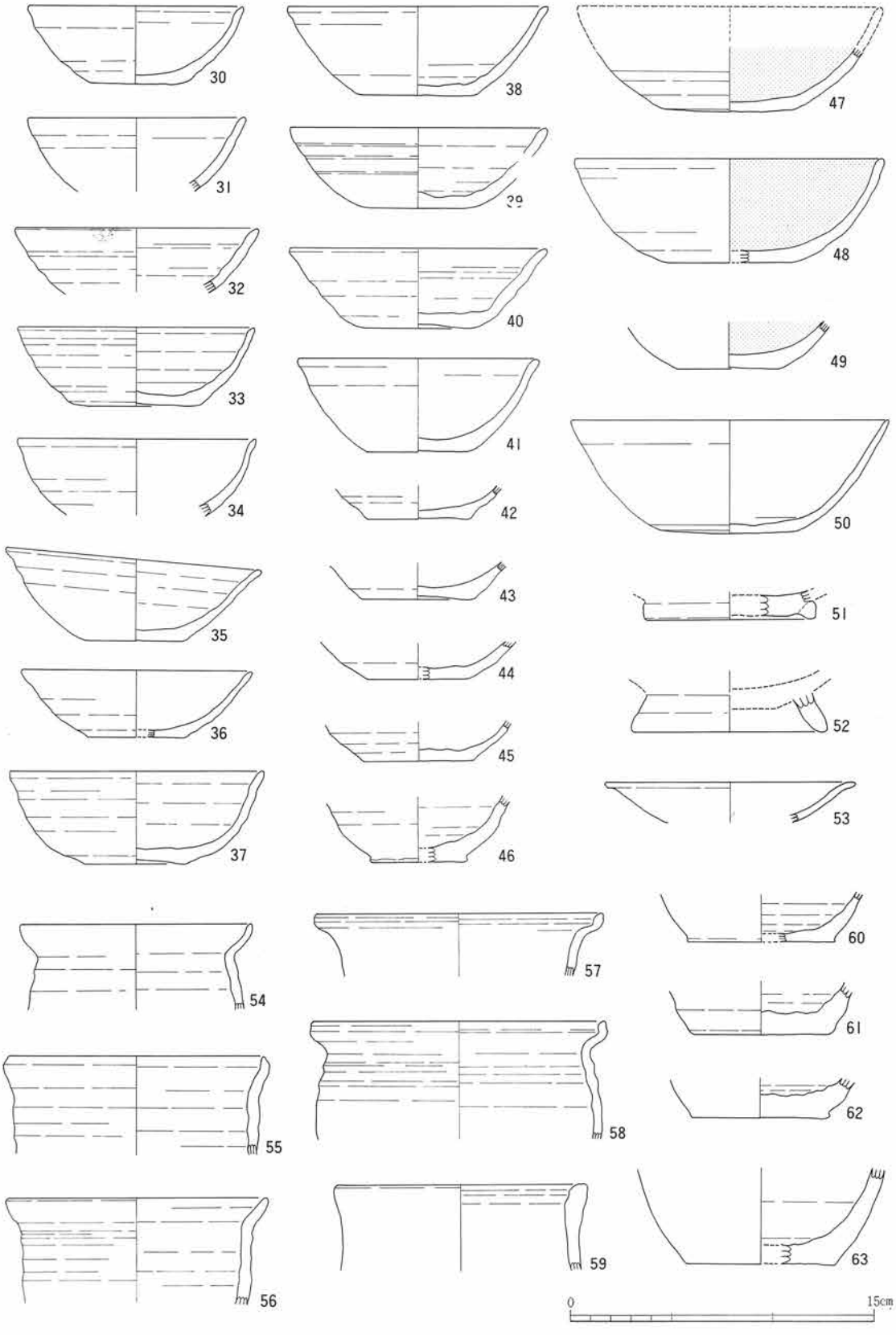
水田跡実測図　1：150





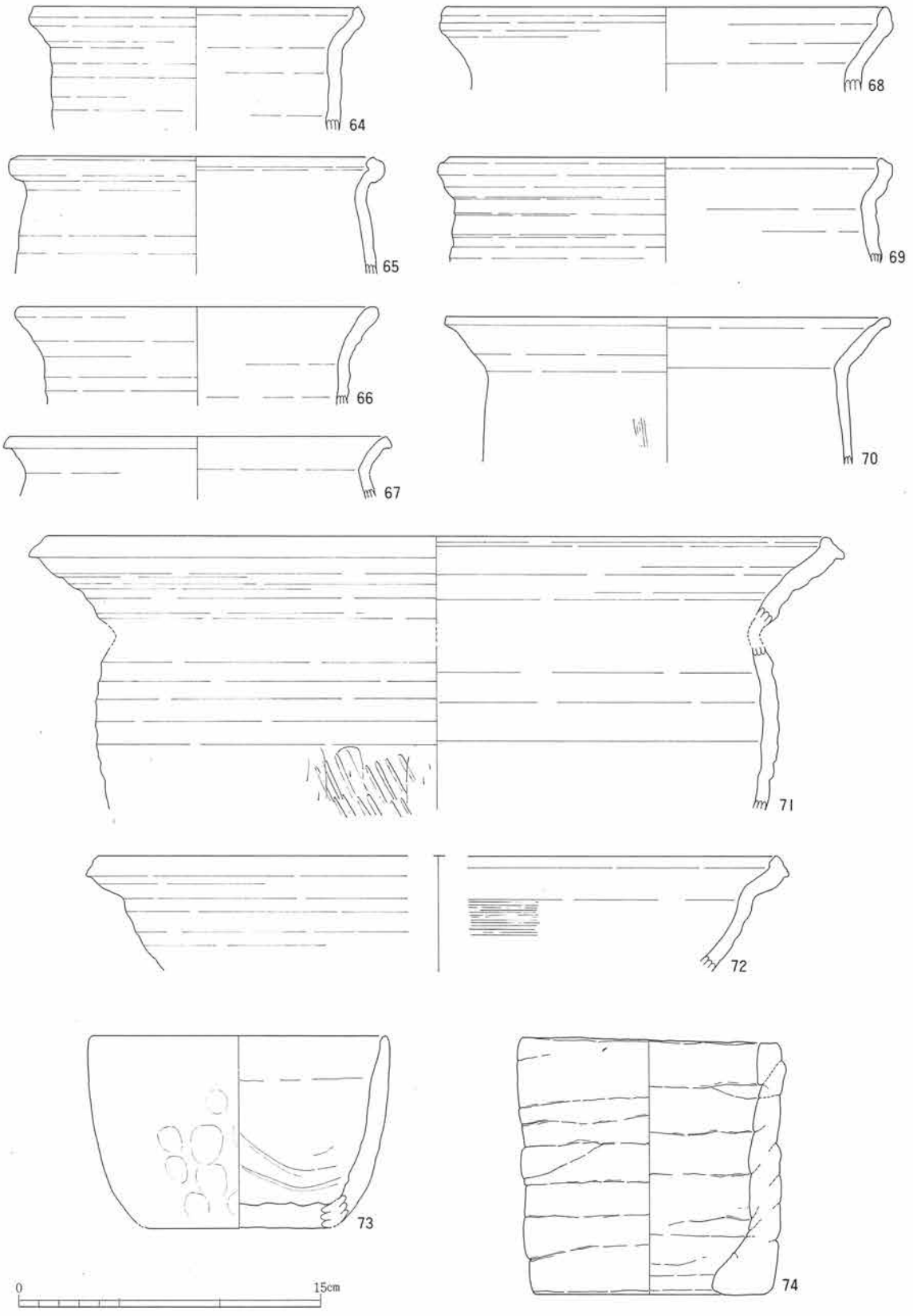
無台杯(1～10)　有台杯(11・12・14～16・19)　有台椀(13・17・18)　杯蓋(20・21)　長頸瓶(22～28)　横瓶(29)　1：3

出土遺物実測図2　土師器



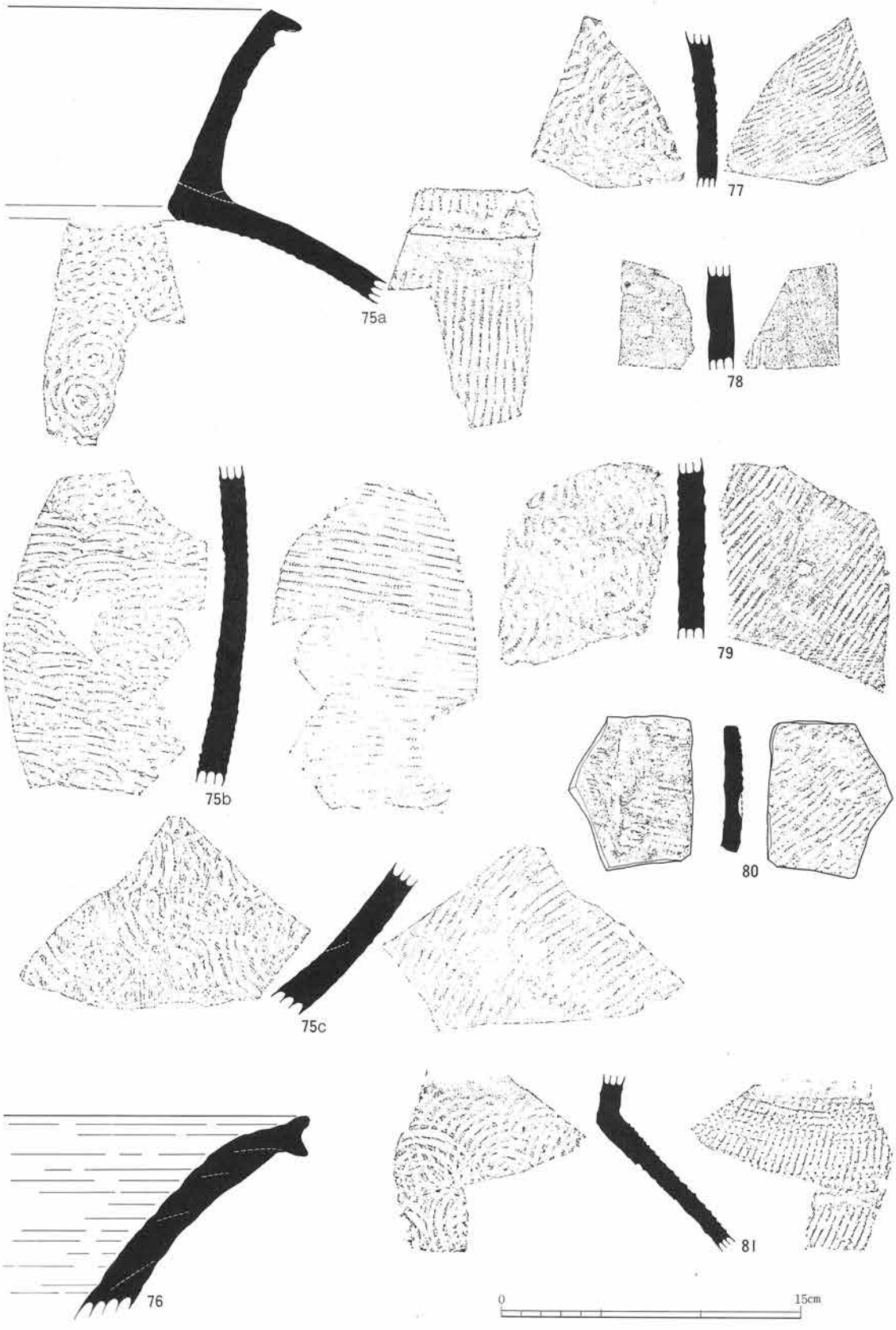
無台椀(30～50)　有台椀(51・52)　皿(53)　甕(54～63)
47～49 黒色土師器

1：3



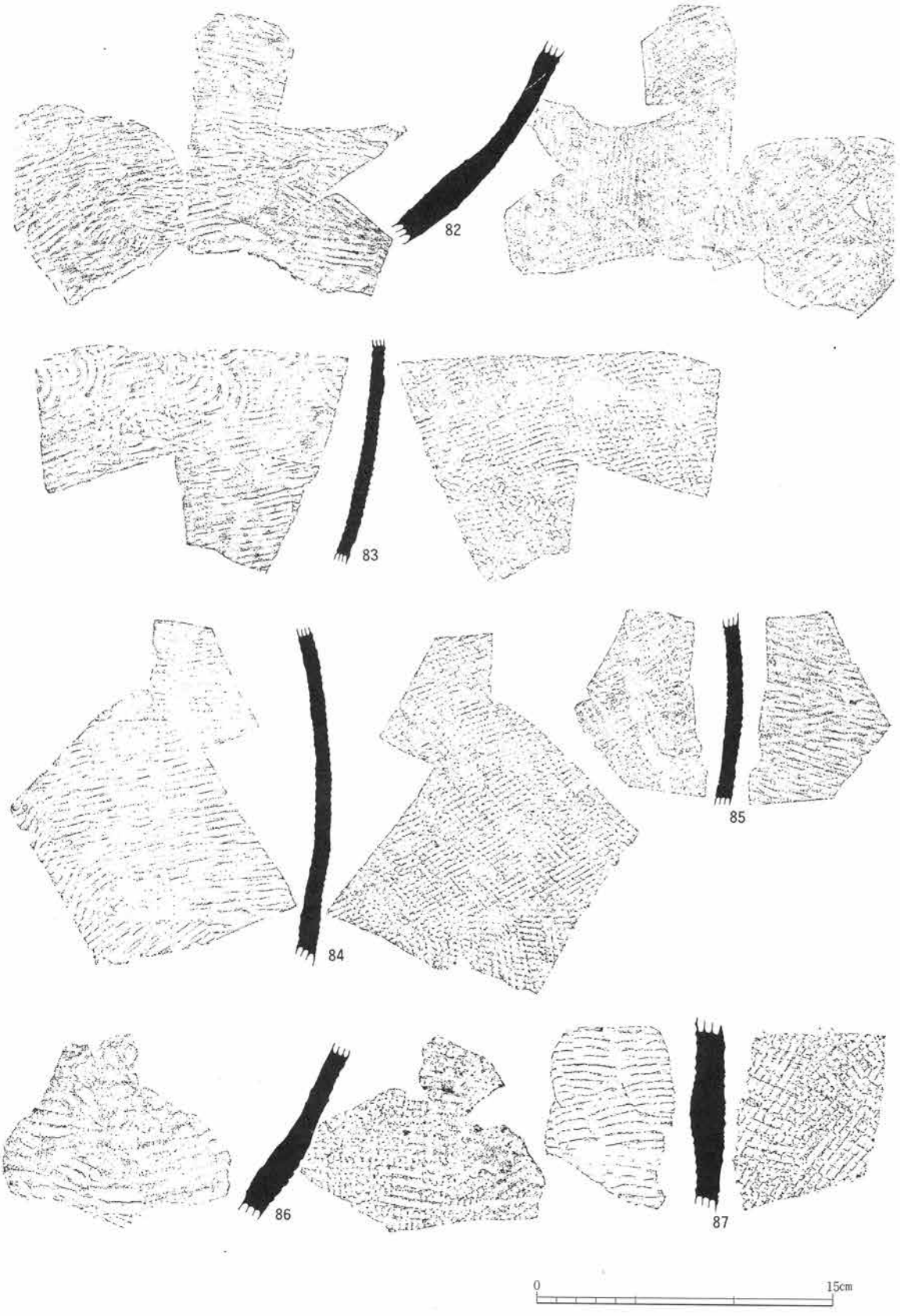
甕(64～71)　鍋(72)　鉢(73)　筒形土製品(74)

1：3



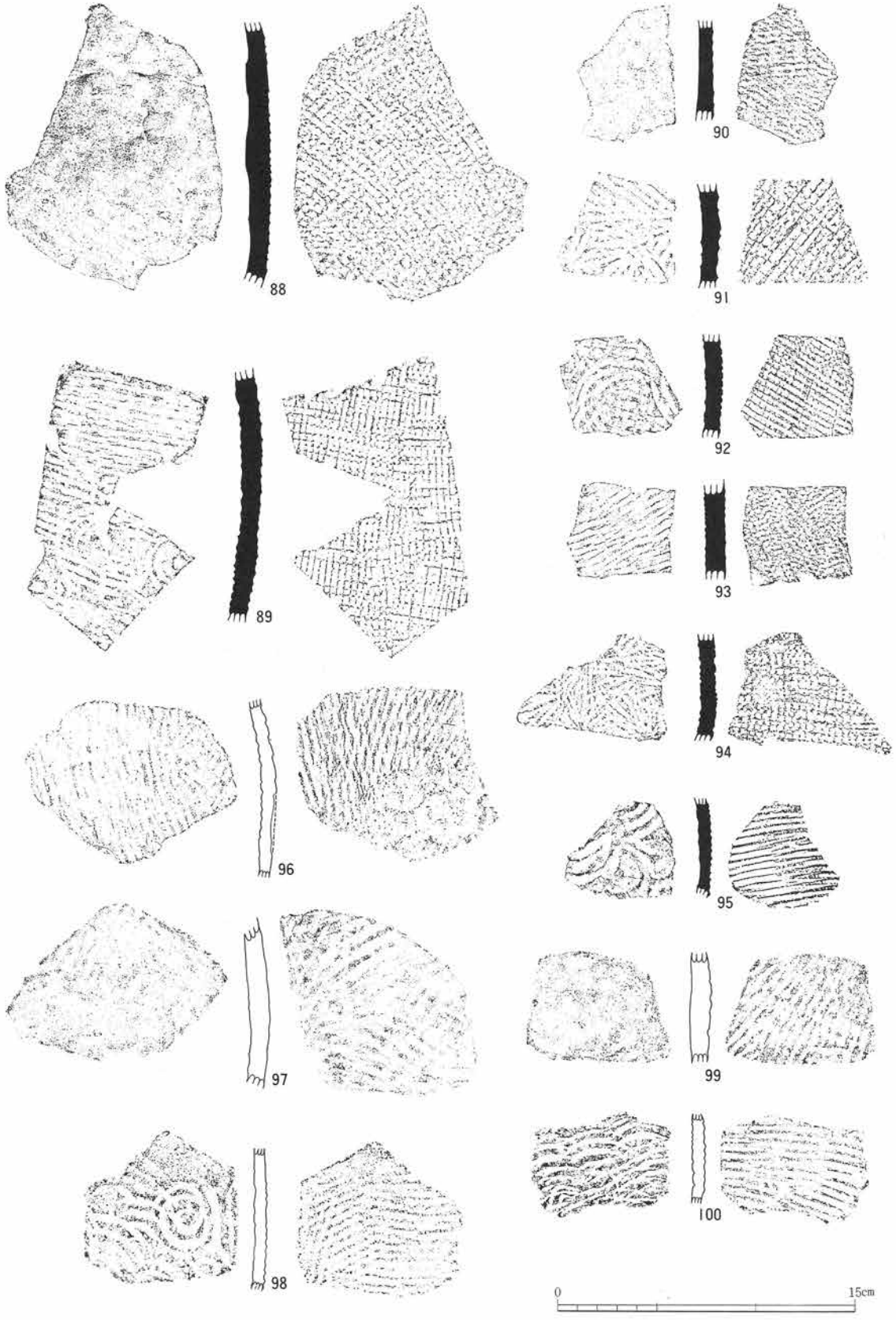
大甕(75～77・79～81)
78 中世陶器

1：3



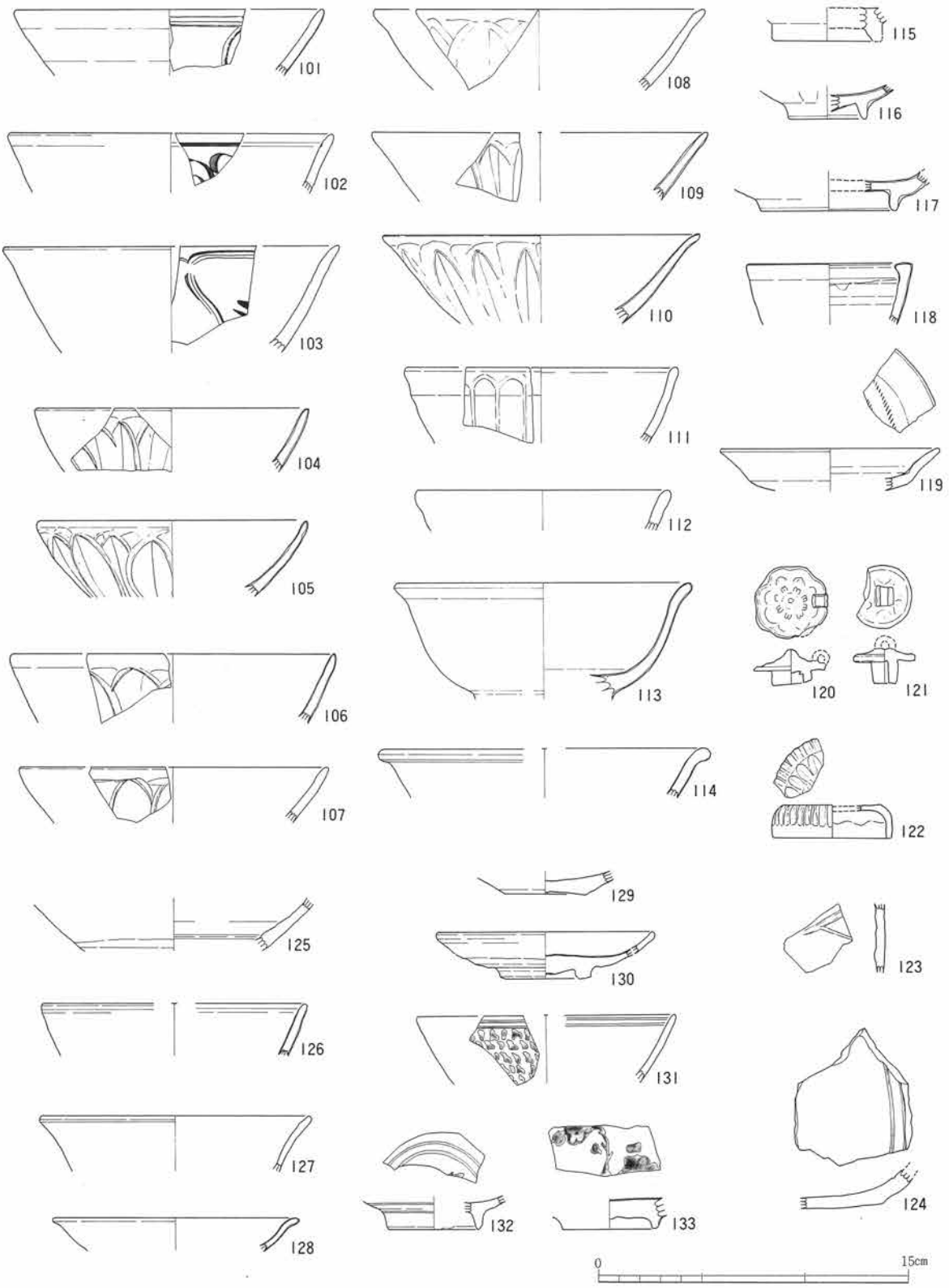
大甕(82～87)

1：3



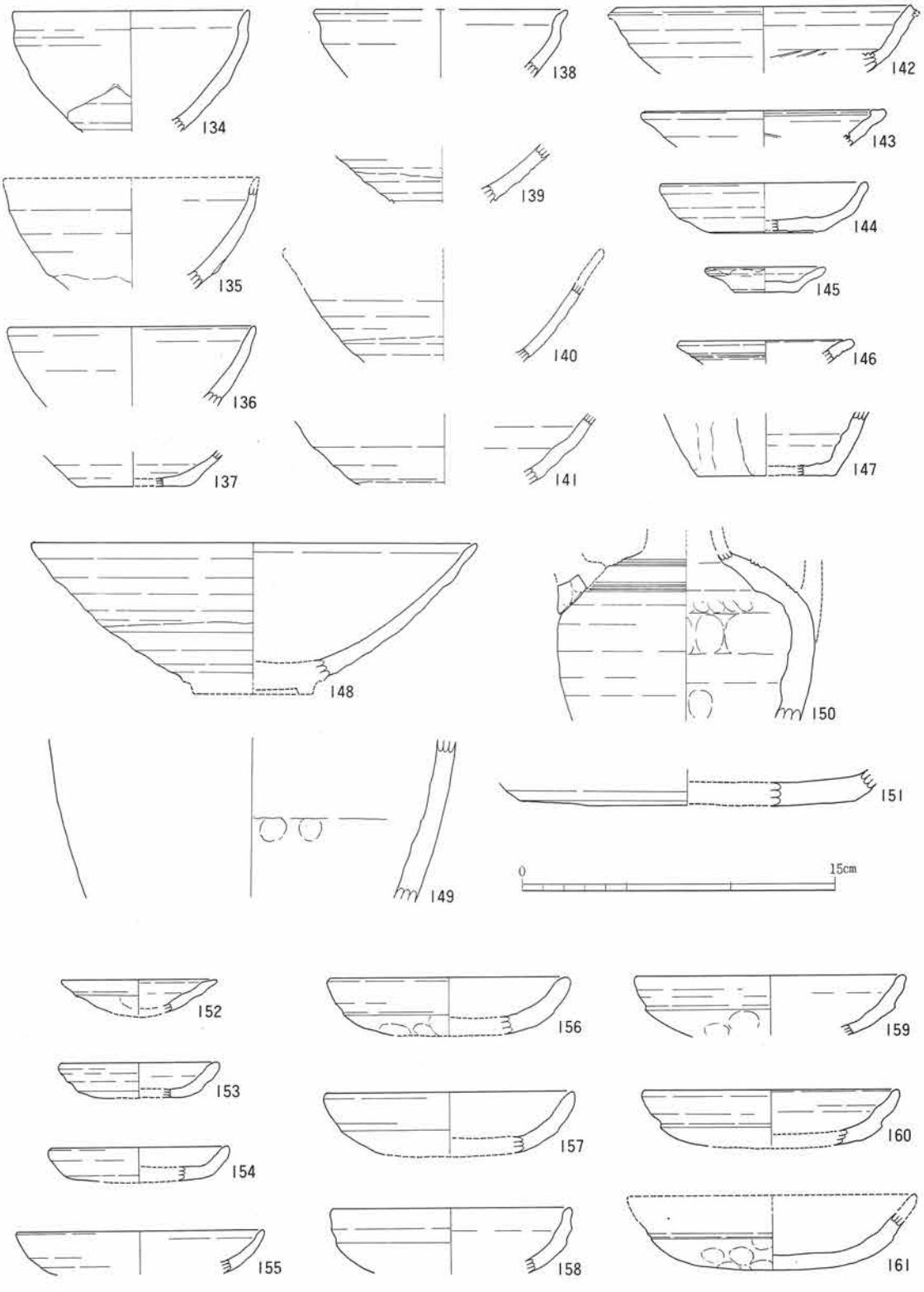
88～95 須恵器　大甕(88～95)
96～100 土師器　甕(96～100)

1：3



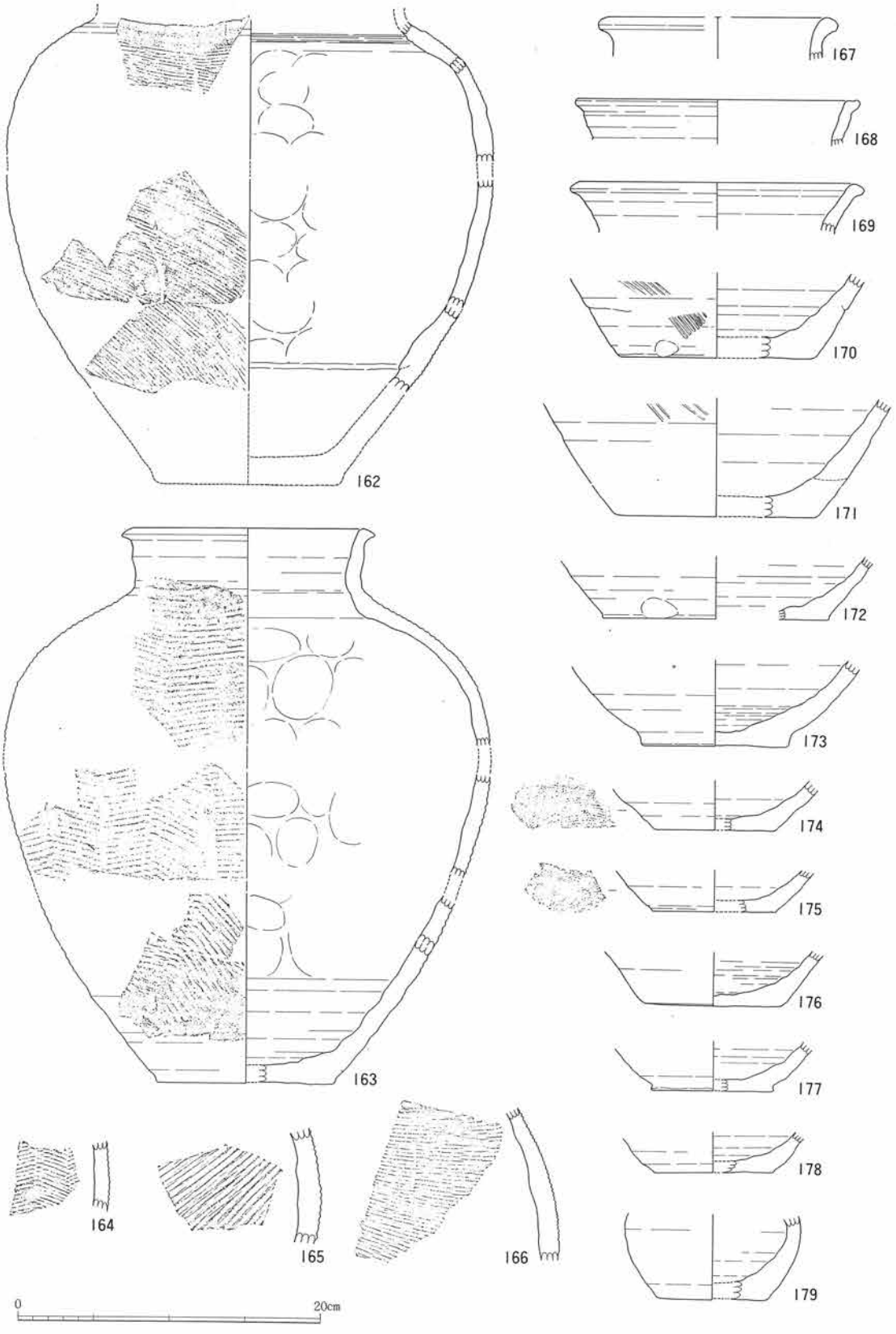
青磁(劃花文碗101～103・115　蓮弁文碗104～111・116　無文碗112～114　鉢117　香炉118　皿119)
青白磁(蓋120・121　合子122　梅瓶123)　白磁(碗125・126　皿127～130)　染付(碗131・132　皿133)　緑釉盤(124)

1：3



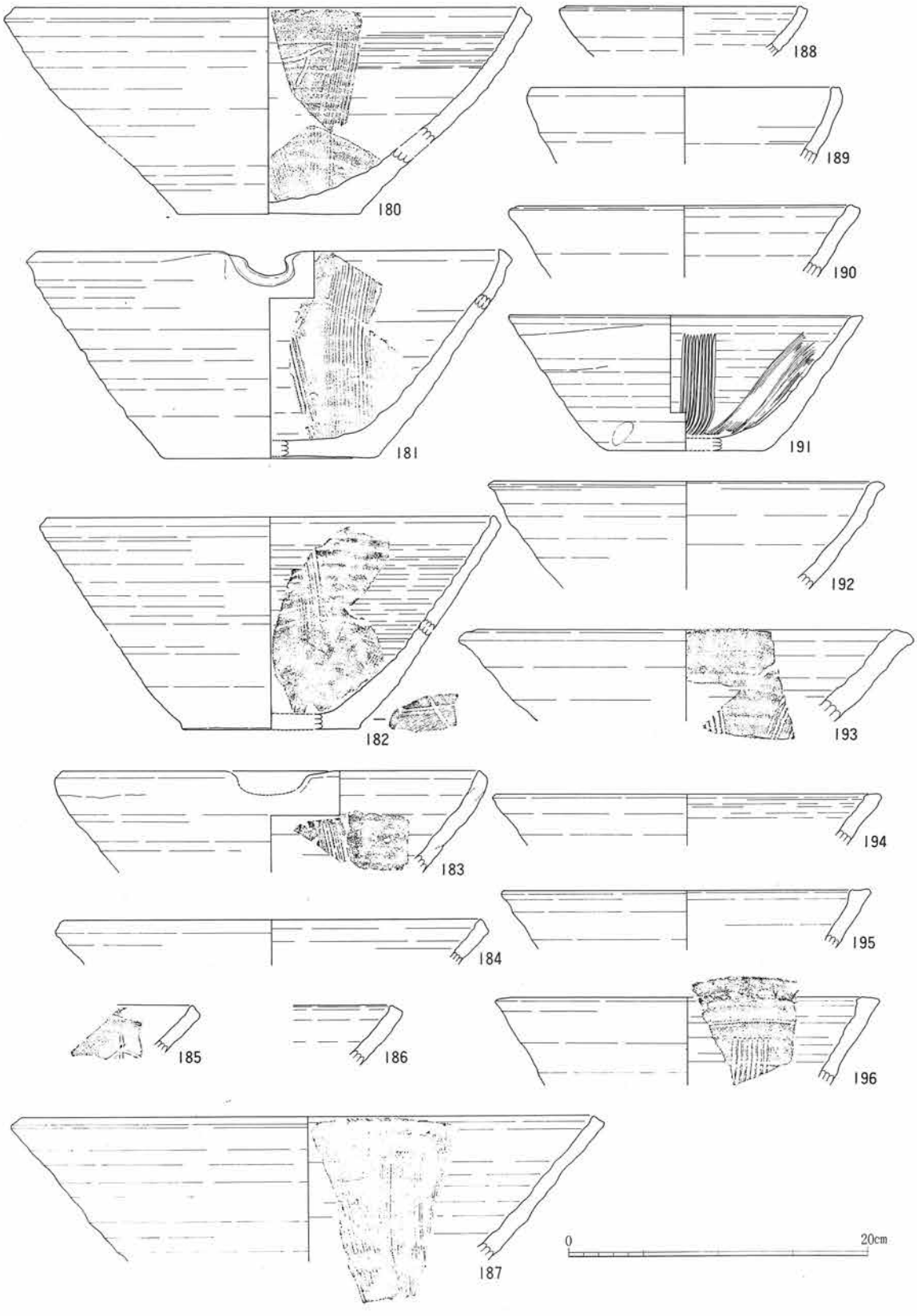
1：3

134～151 瀬戸・美濃焼　天目茶碗(134～136・138)　鉄釉小壺(137)　灰釉平碗(139～141・148)　灰釉おろし皿(142・143)
灰釉小皿(145・146)　鉄釉壺(147)　灰釉四耳壺(149)　灰釉水注(150)　折縁深皿(151)　灰釉丸皿(144)
152～161 土師質土器　小皿(152～154)　大皿(155～161)

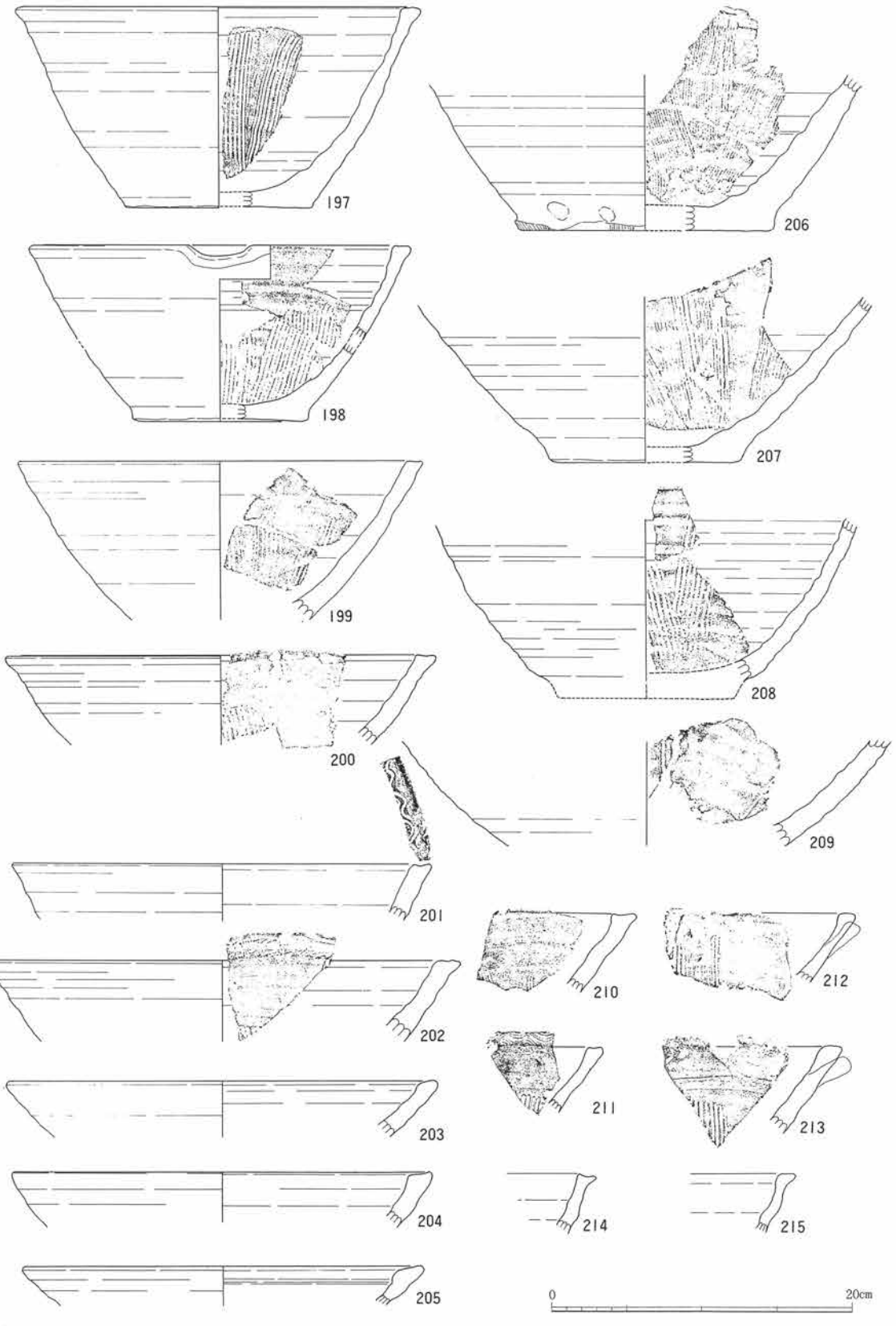


壺(162～164・167～172)．甕(165・166)　片口鉢(173～178)　小壺(179)

1：4

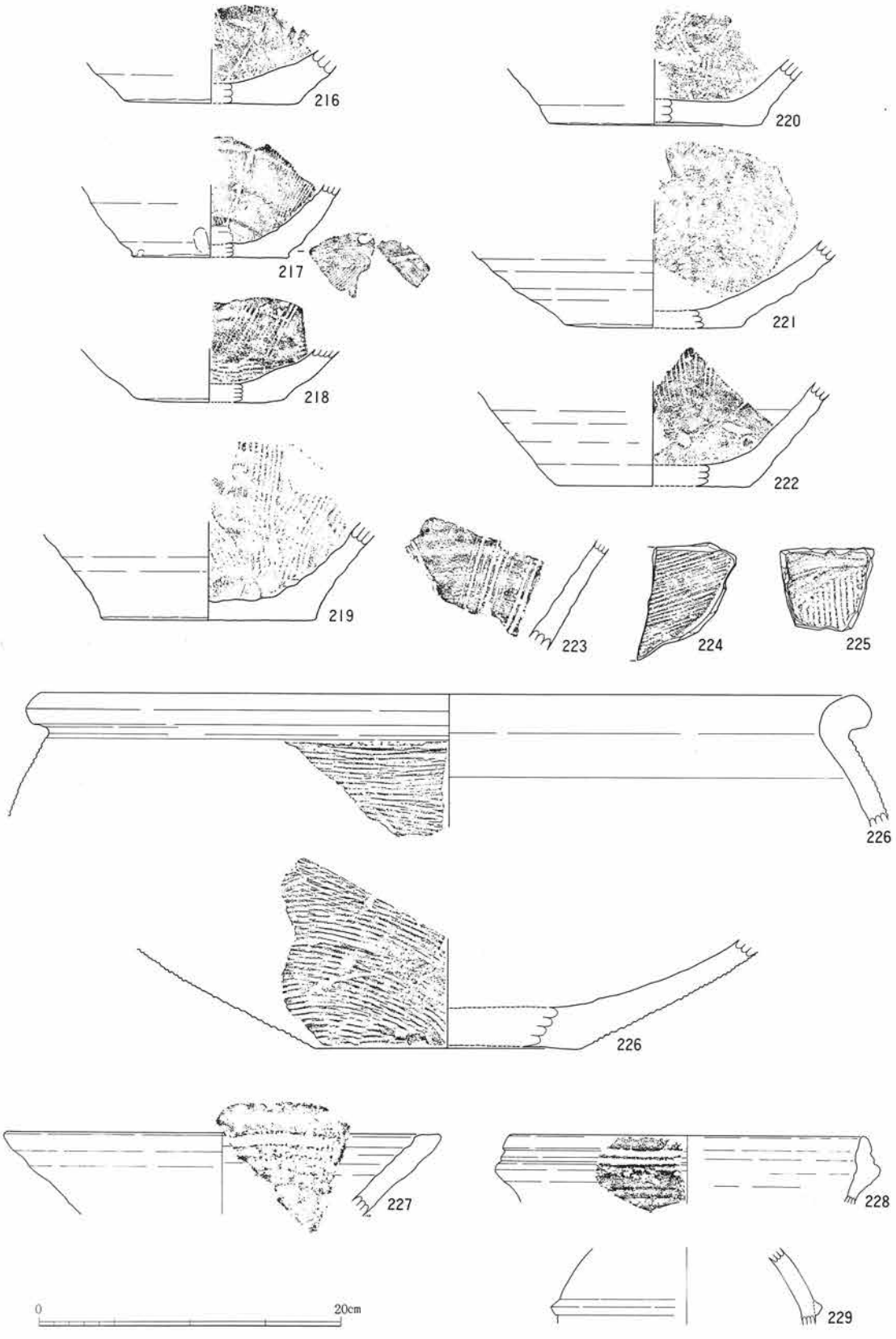


片口鉢(180～196)　　1：4



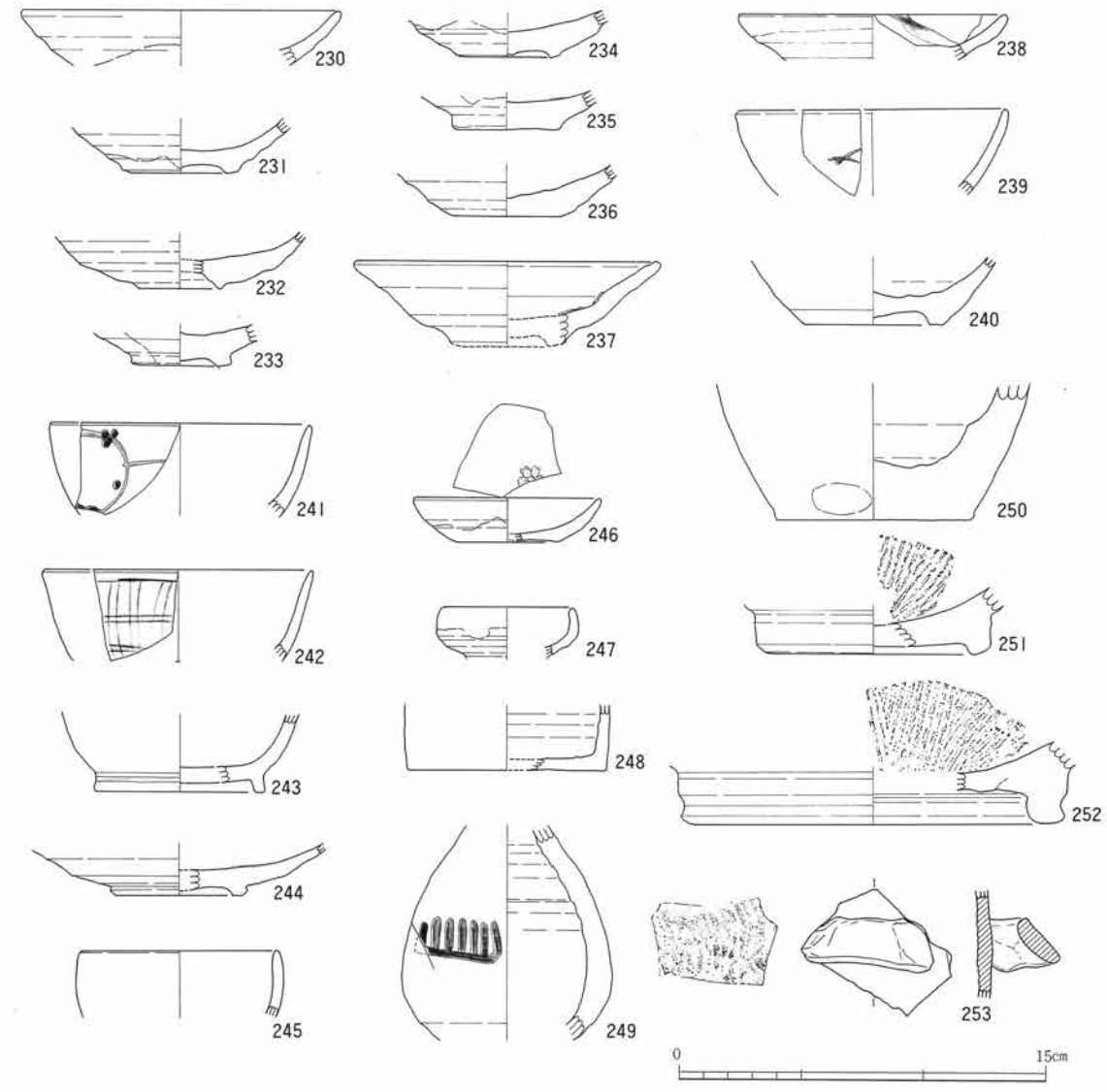
片口鉢(197～215)

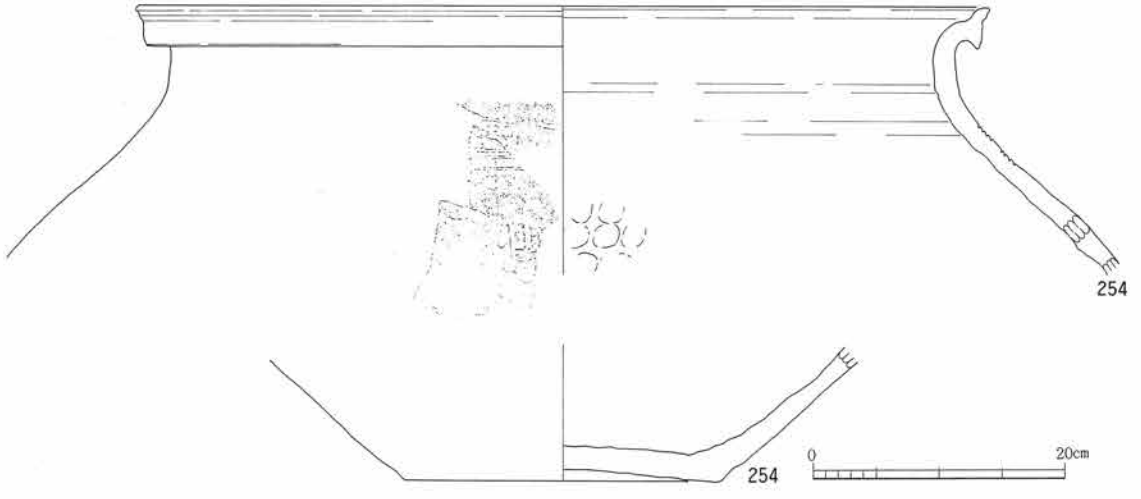
1：4



216～226 珠洲焼　片口鉢(216～223)　甕(226)　研磨具(224・225)
227～229 越前焼　すり鉢(227・228)　壺(229)

1：4

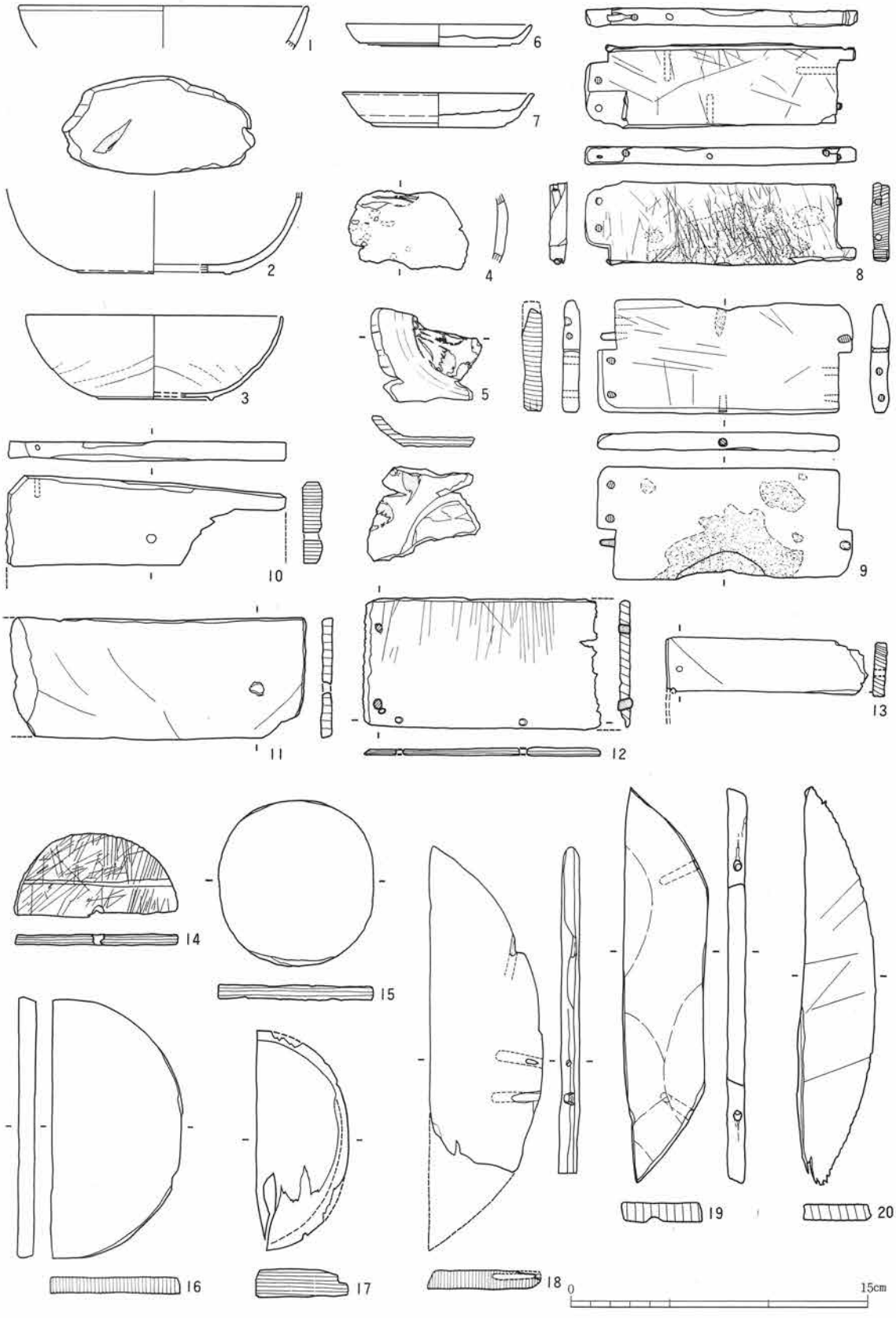




230～253 近世陶磁器　唐津焼(230～240・249・250・252・253)　伊万里焼(241～243)　その他(244～248・251)
254 越前焼　大甕(254)

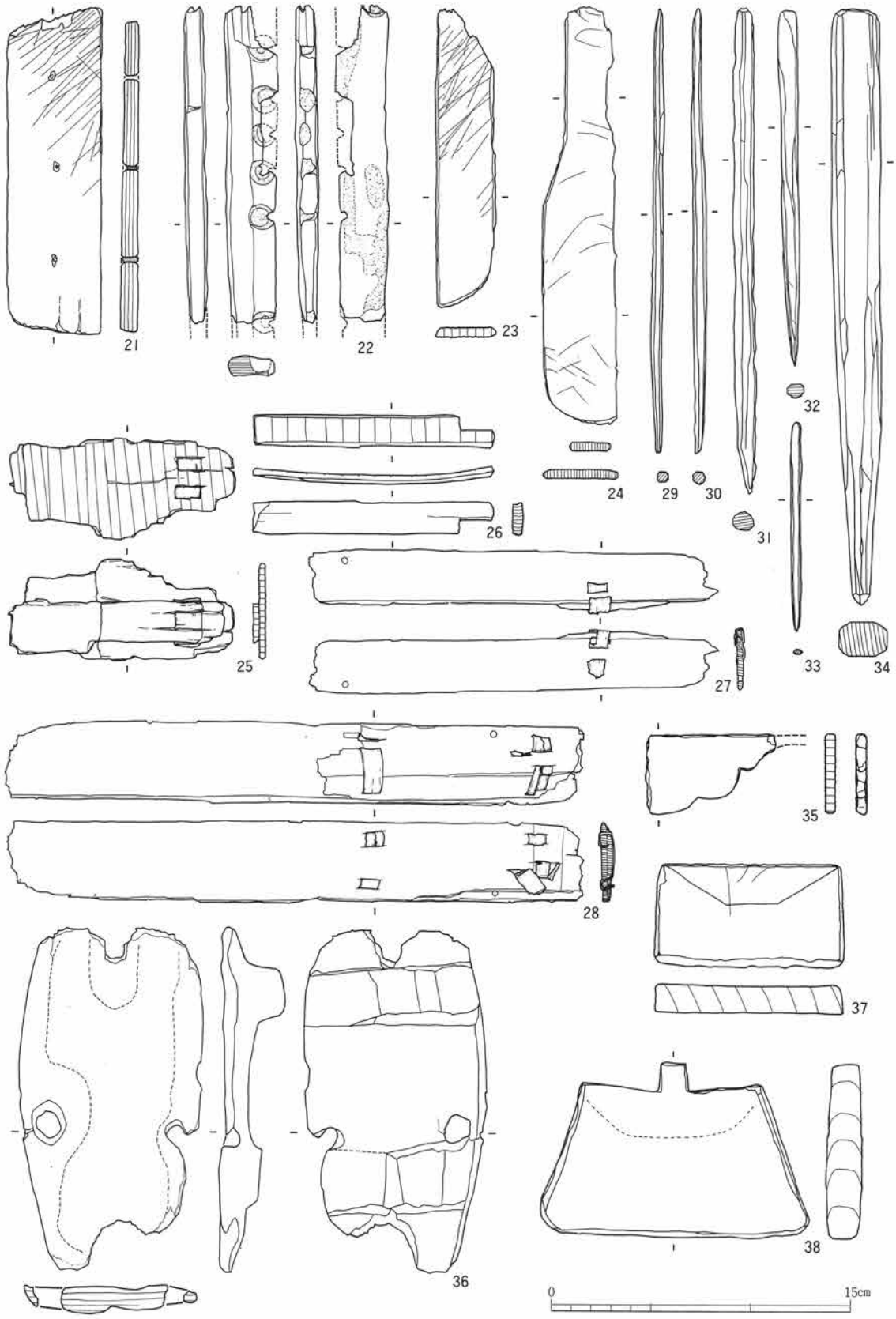
230～253 1：3
254 1：6

出土遺物実測図14　木製品



椀(1～5)　皿(6・7)　箱物(8～13)　曲物(14～20)

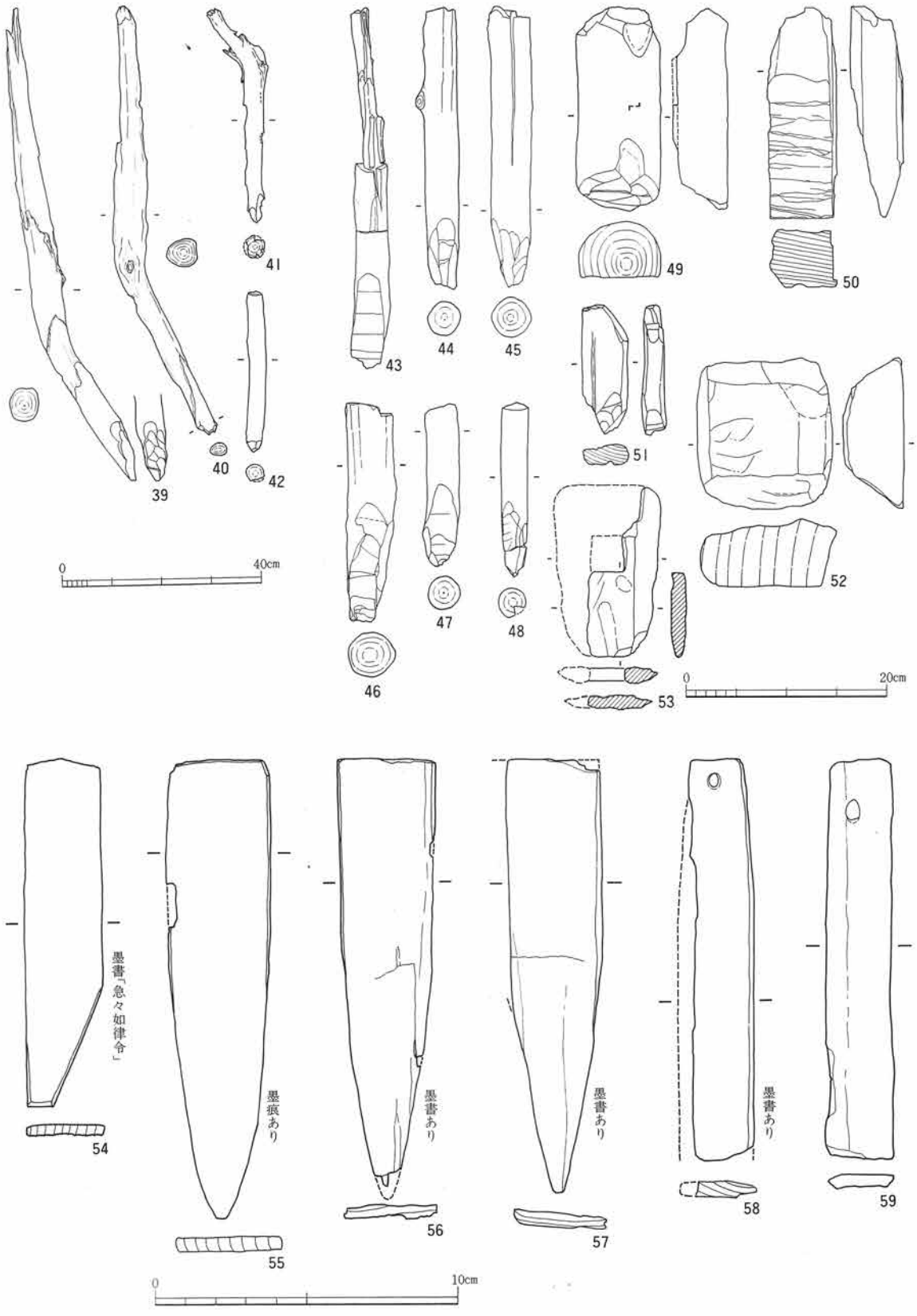
1：3



箱物(21)　曲物(25～28)　火鑽臼(22)　板杓子(23･24)　箸状木製品(29～33)
棒状木製品(34)　漆塗り雲形肘木(35)　下駄(36～38)

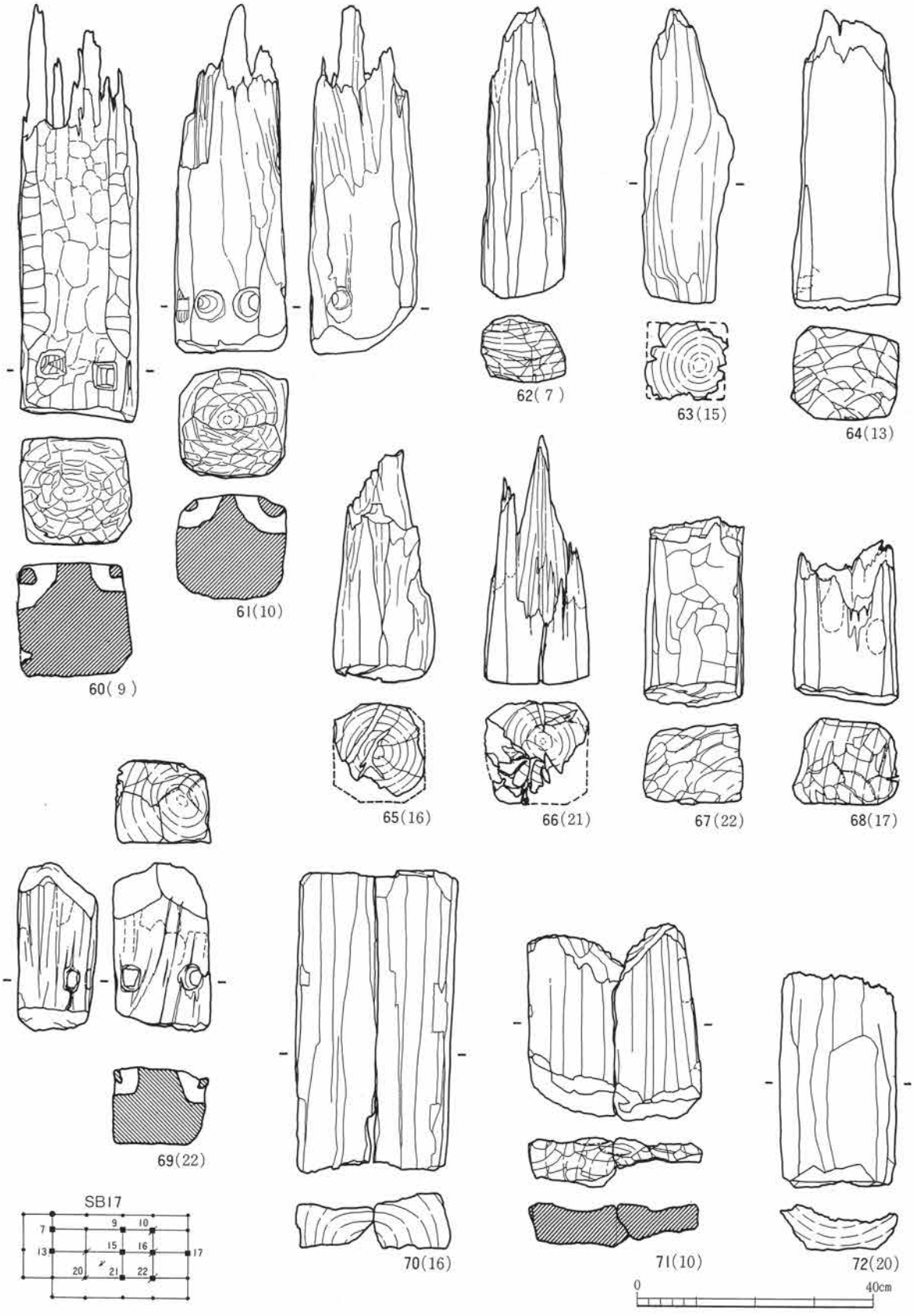
1：3

出土遺物実測図16　木製品



杭(39～48)　用途不明木製品(49～53)　木札・木簡(54～59)

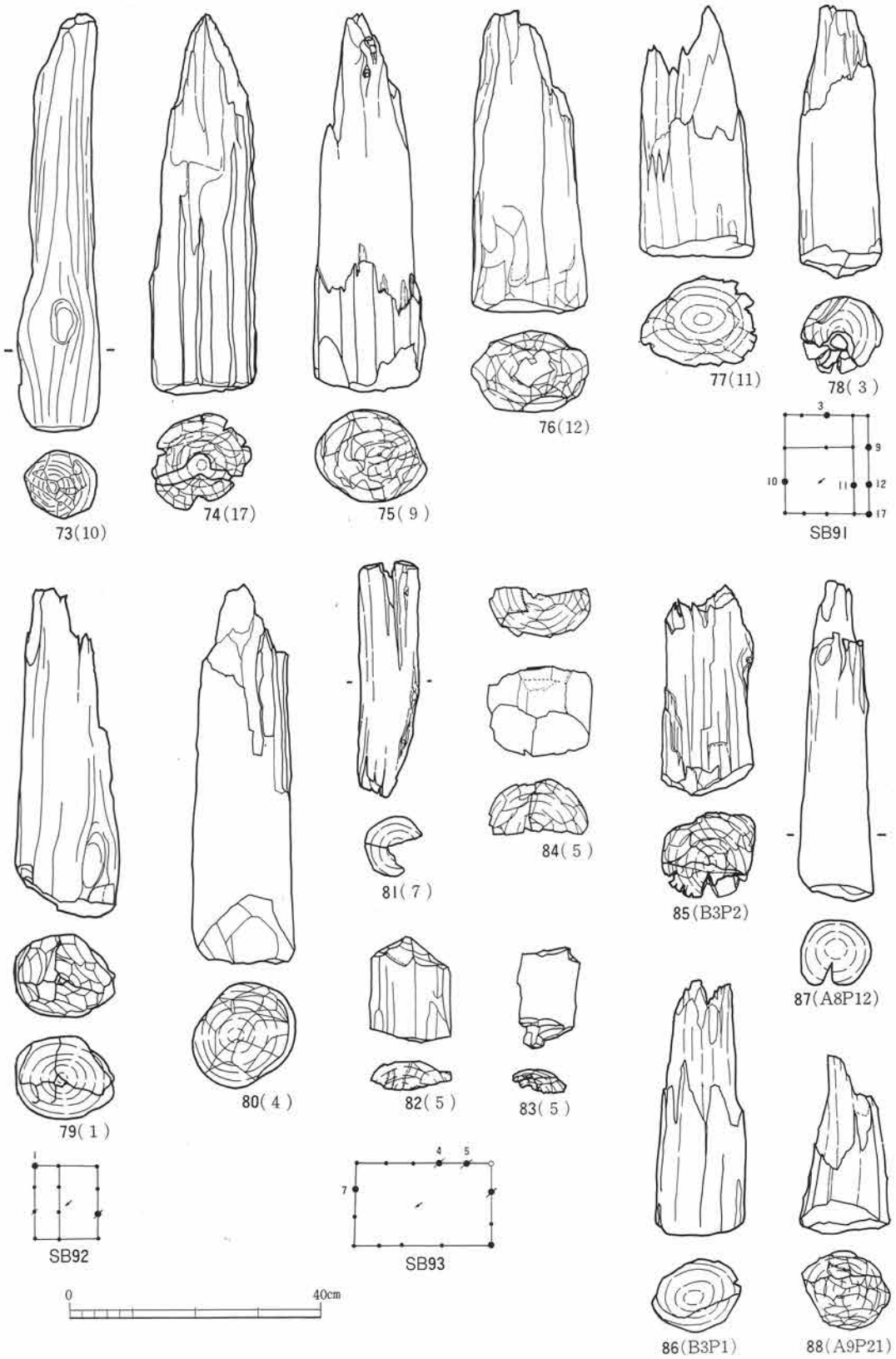
39～42　1：12
43～53　1：6
54～59　1：2



SB17柱根(60～68)　SB17礎板(69～72)

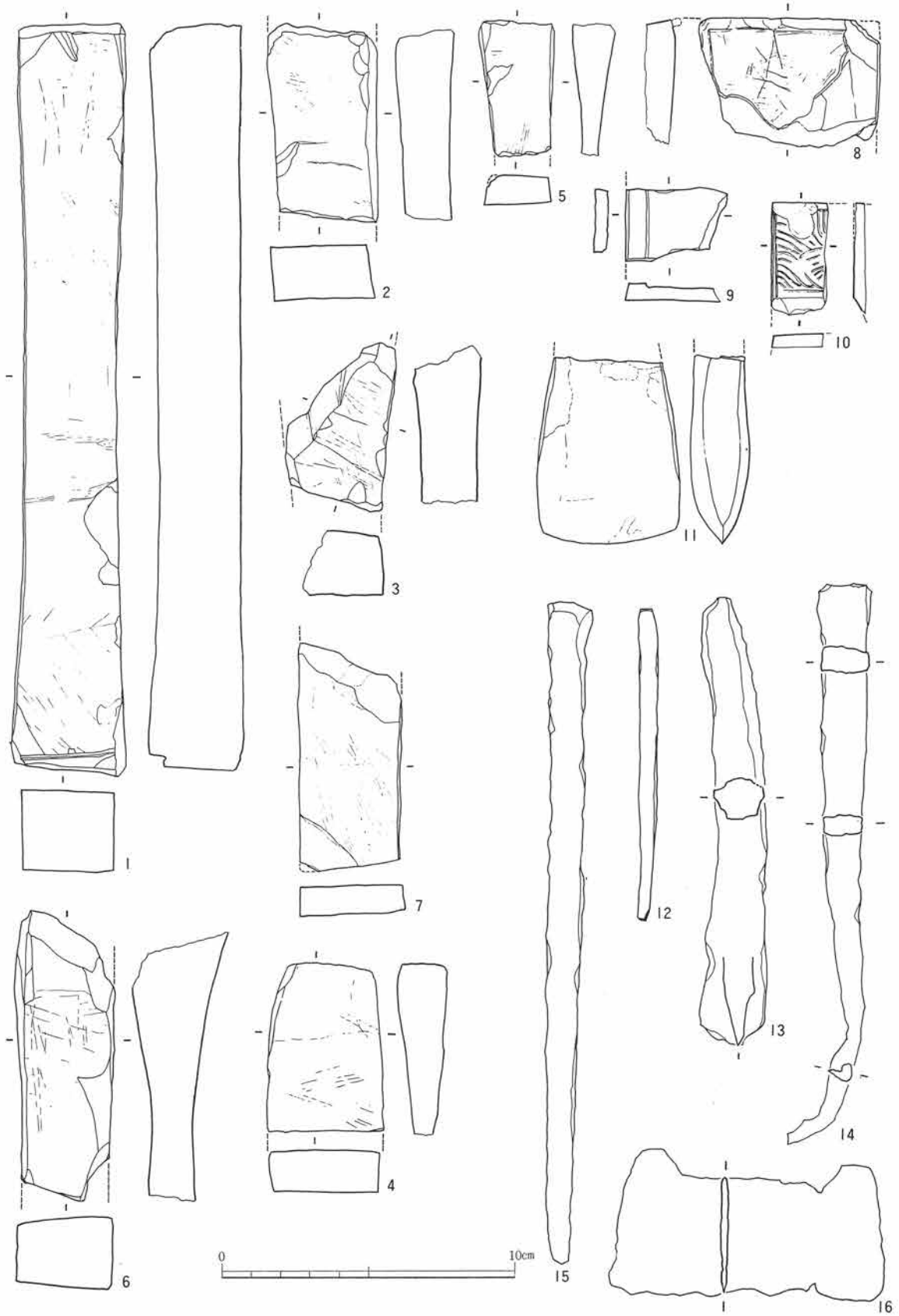
1：10

出土遺物実測図18　木製品



SB91柱根(73～78)　SB92柱根(79)　SB93柱根(80・81)　SB93礎板(82～84)　その他の柱根(85～88)

1：10

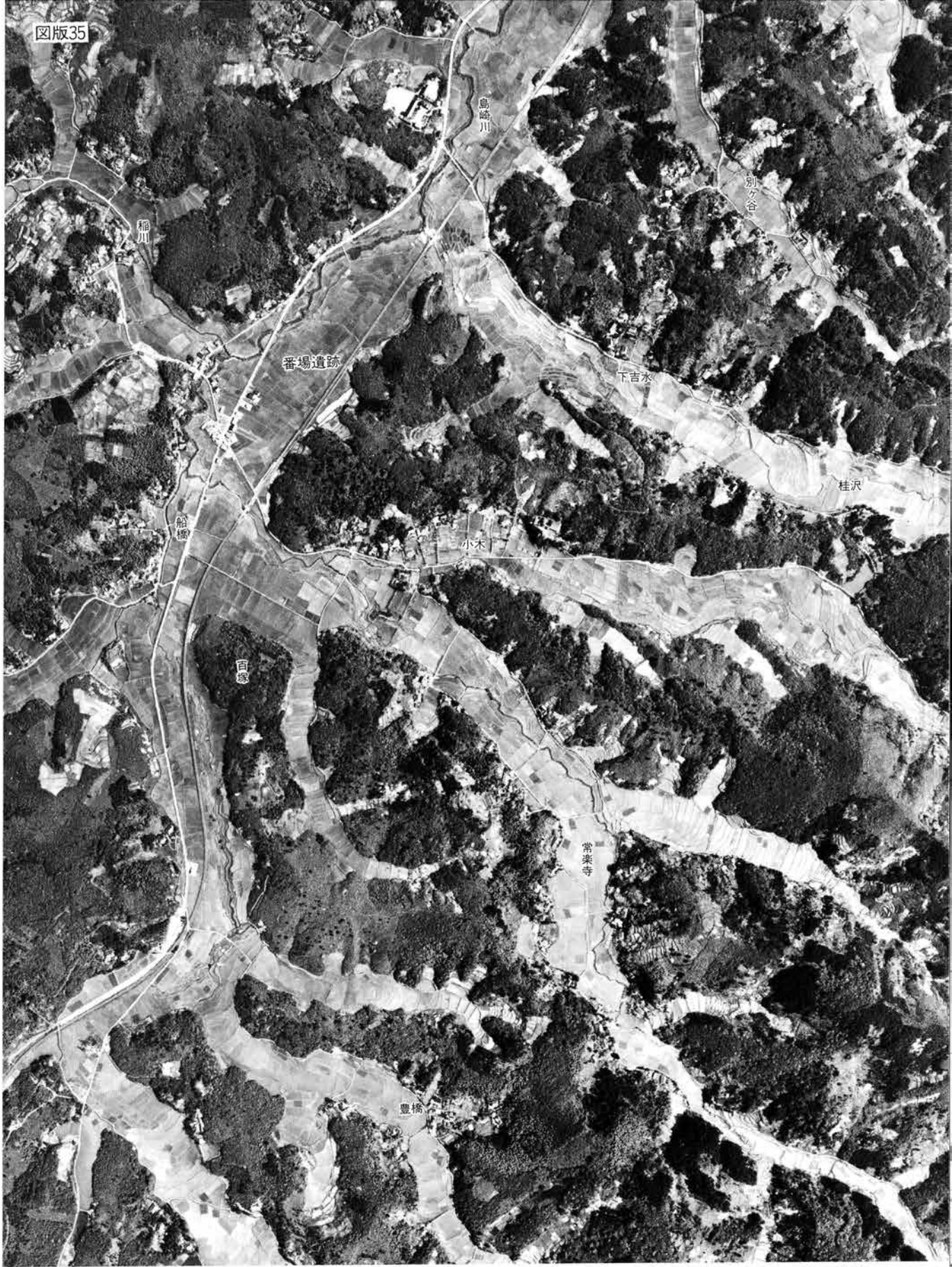


石製品(砥石1～7　硯8～10　磨製石斧11)　鉄製品(15～16)

1：2

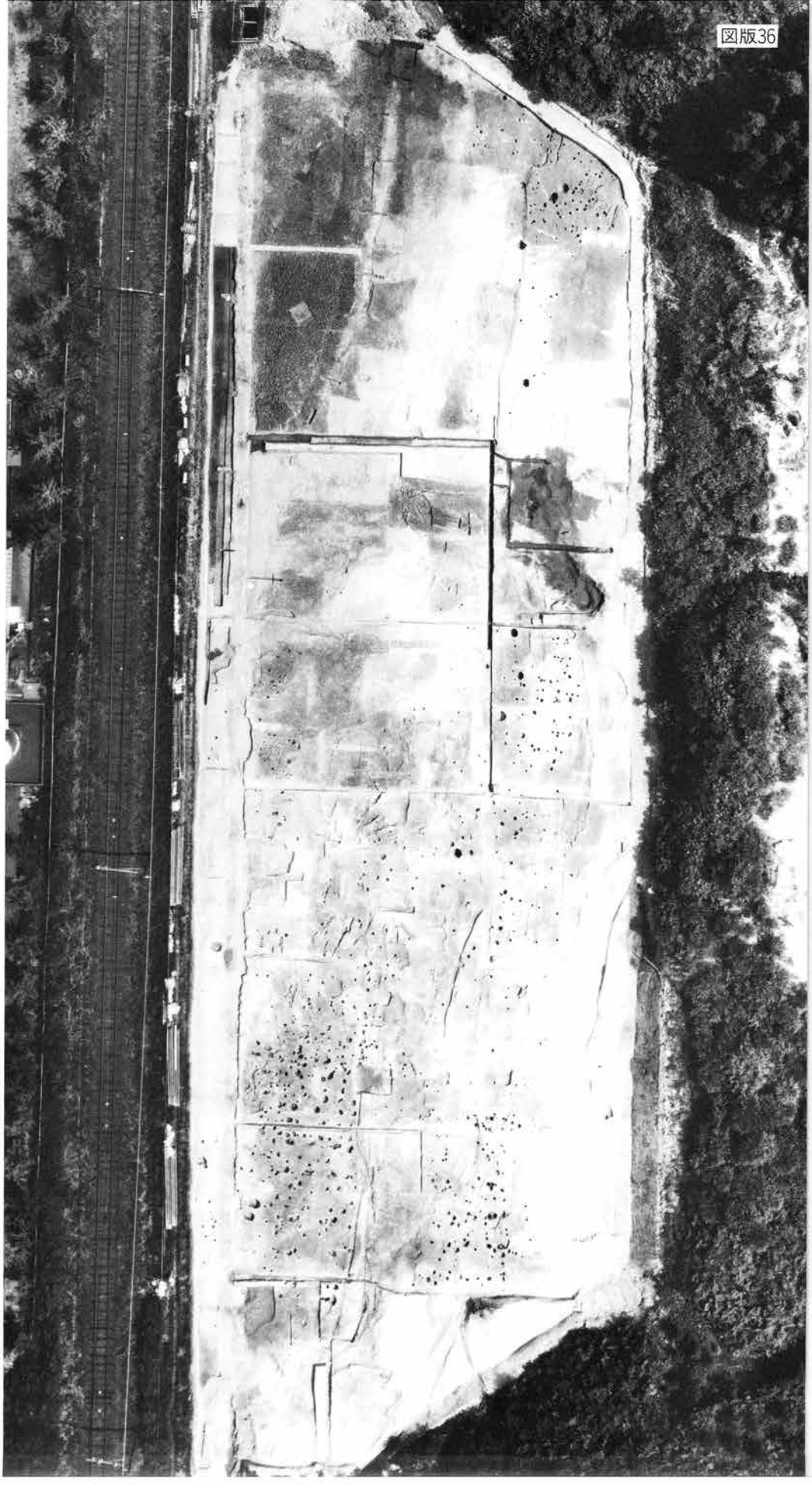
1　遺跡遠景　西より

2　遺跡近景　北より



国土地理院1962年撮影　1：20,000×2

小木周辺空中写真



遺跡全体空中写真

図版37

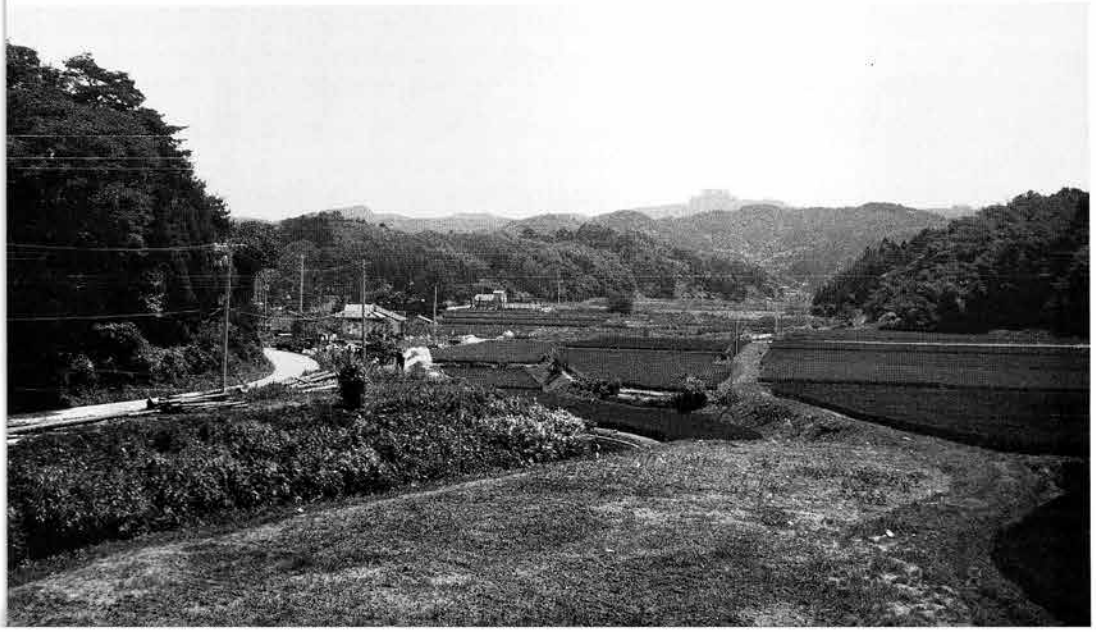
A・B7・8区付近空中写真　1：150

B・C5・6区
空中写真
1：150

図版39

1　遺跡と島崎川の谷
南より

2　試掘調査(59年度)
北より

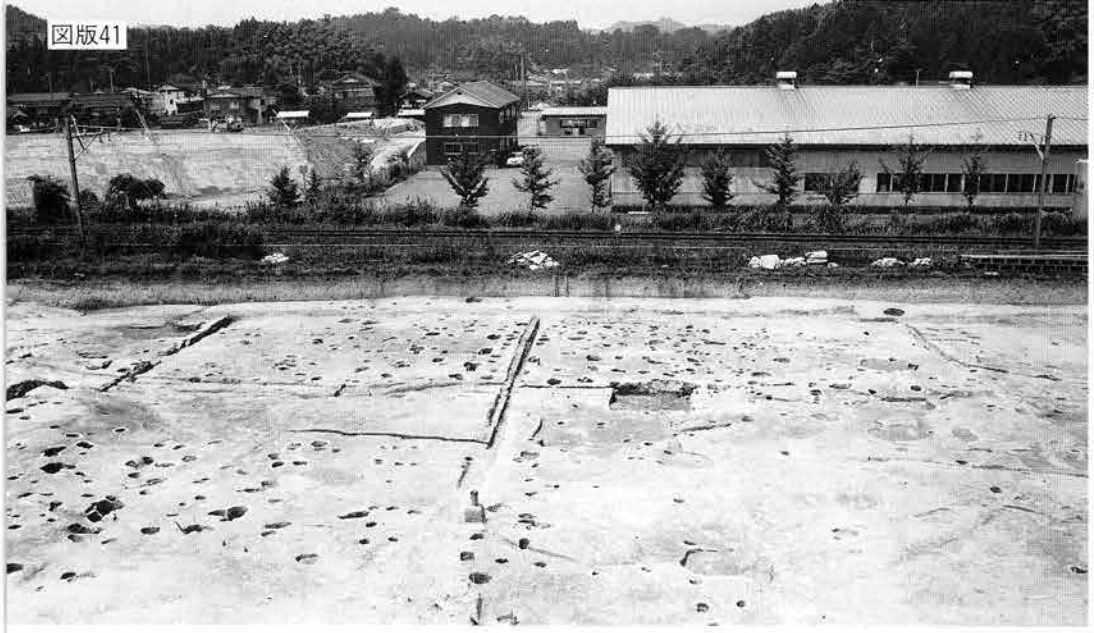


3　小木ノ城遠景
小木ノ城駅付近より望む

1　遺跡南半部
北より

2　遺跡全景
南より

3　C3区付近
北より



1　SB17付近
東より

2　SB17
西より

3　SB17
南より

1　SB46付近
西より

2　A・B8区付近
南西より

3　SB93・SB94
西より

1　SB11・SB14
南より

2　SB88付近
西より

3　B7区付近
北より

1　C5・6区付近
西より

2　SX2
北より

3　SX2土層断面
北より

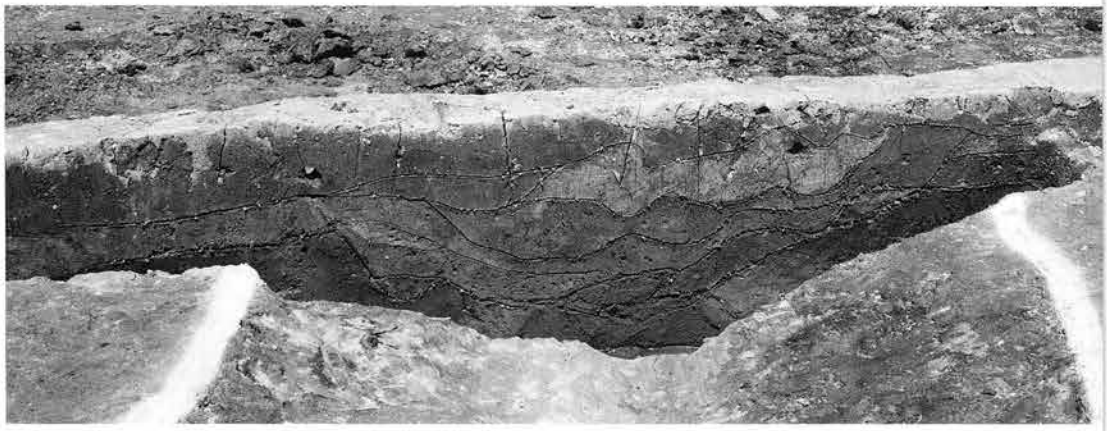
図版45

1　水田跡

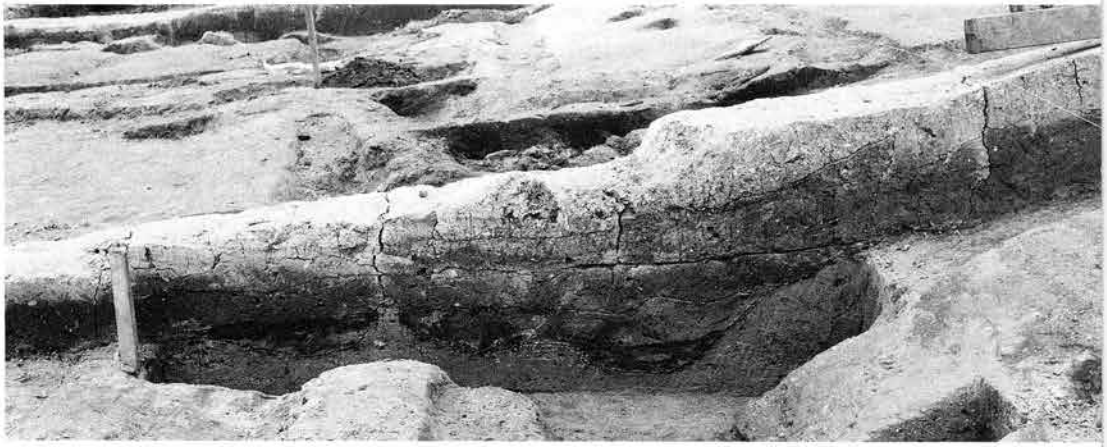
2　水田跡アゼ1
北東より

3　水田跡(A4区付近)
北東より

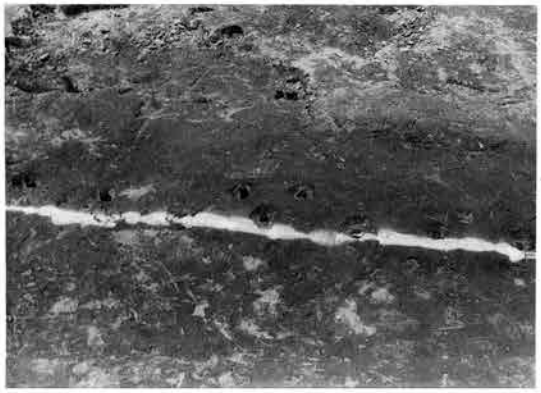
1　SD57
　　北より



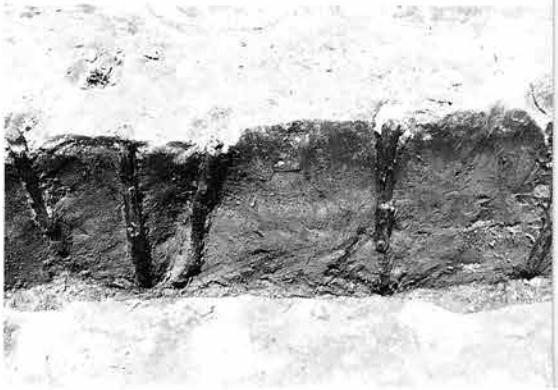
2　SD57土層断面
　　南より



3　SD10・SD12
　　土層断面
　　南より



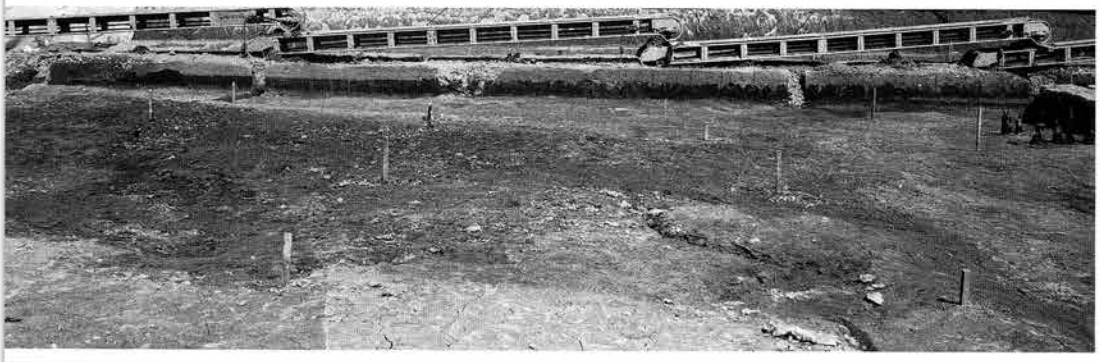
4　SD57杭列
　　東より



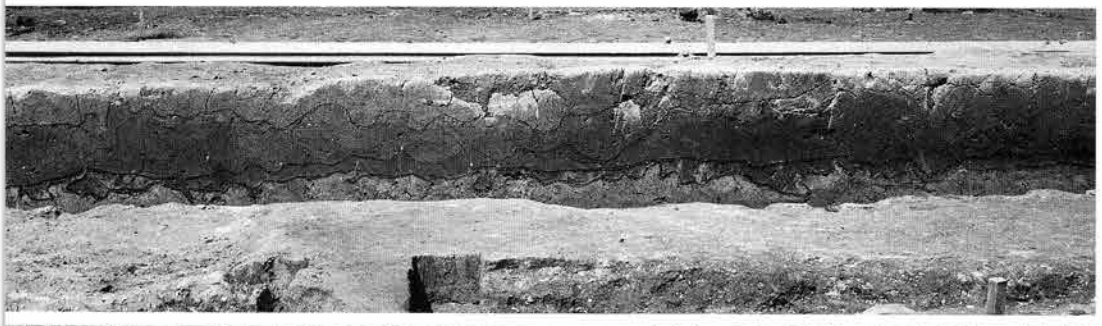
5　SD57杭列断面
　　東より

1　B9・10界線土層断面
北より

2　C9・10界線土層断面
北より



3　A5区南北土層断面
東西より



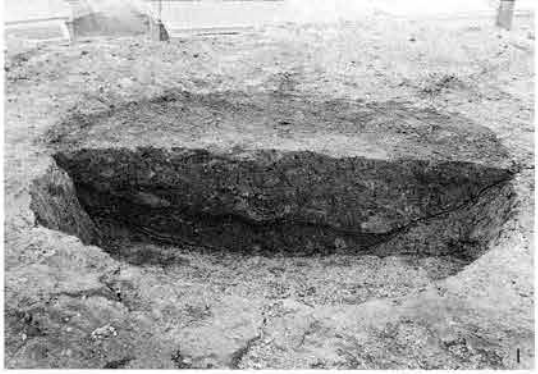
4　A6・7界線土層断面
南より

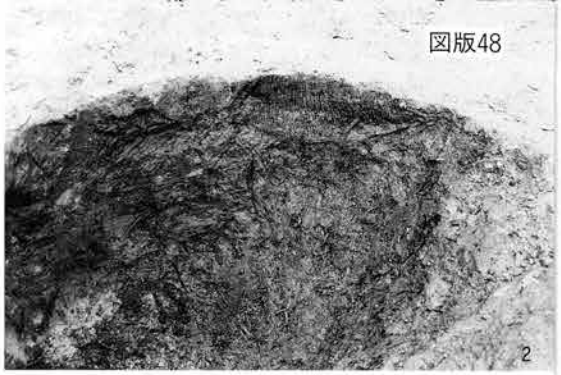
5　SK49・SD52
南より

6　SD54
東より

1 SE3土層断面
北西より

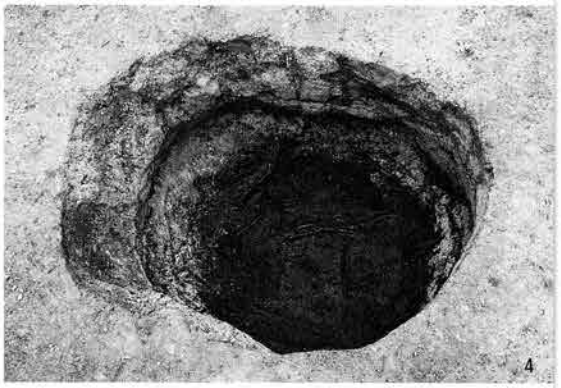
2 SE53編物出土状況
東より





3 SE4完掘
東より

4 SE15腐植層

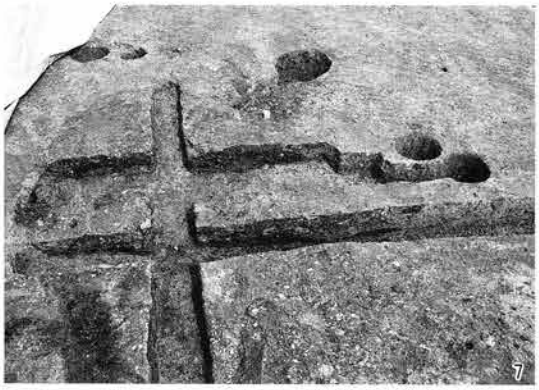


5 SE16土層断面
西より

6 SE18土層断面
東より

7 SK23
東より

8 SK24土層断面
南より

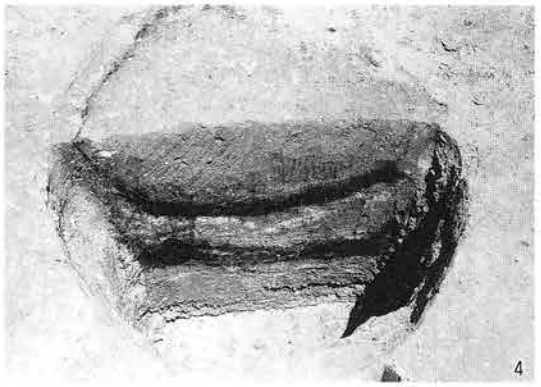


9 SK24鉄滓出土状況

10 SK24完掘

1 SK28土層断面
西より

2 SK29土層断面

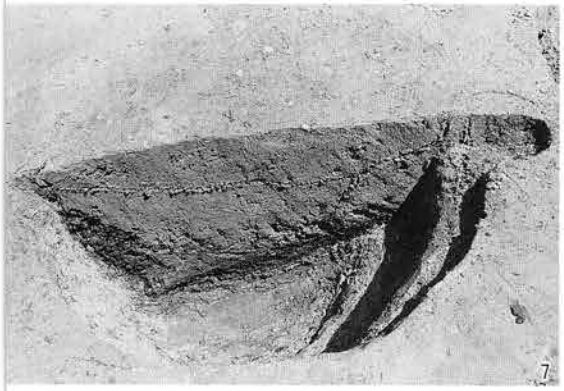


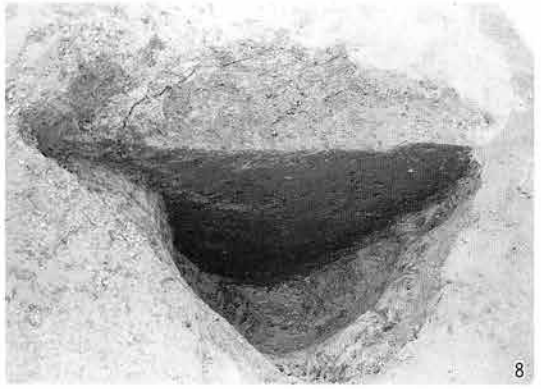
3 SK30炭化物

4 SE33土層断面

5 SE60土層断面

6 SE62土層断面





7 SE63土層断面

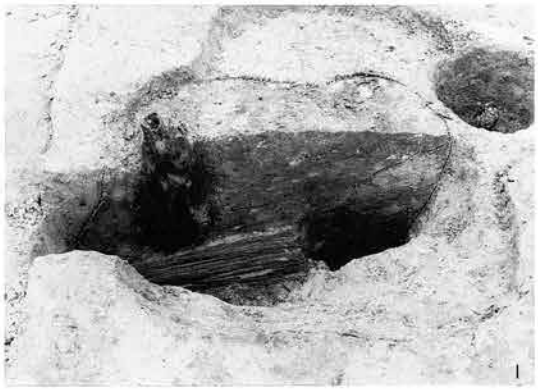
8 SK66土層断面

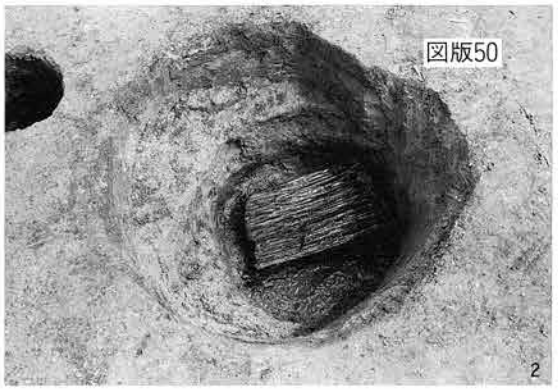
9 SK68土層断面

10 SE69土層断面

1 SB17—16柱根

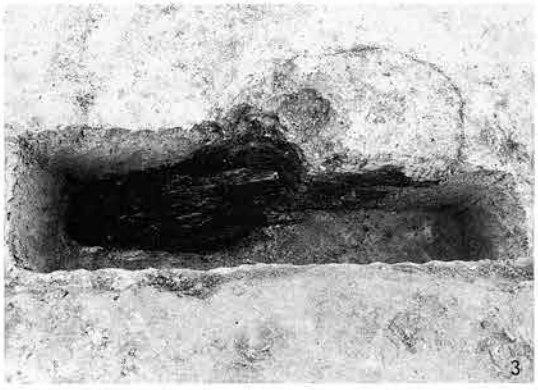
2 SB17—20礎板





3 SB17— 9 柱根

4 SB17— 9 柱根

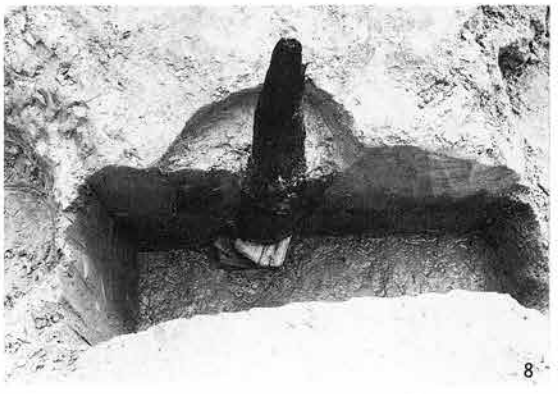


5 SB17—22柱根
礎板

6 SB17—22柱根
礎板

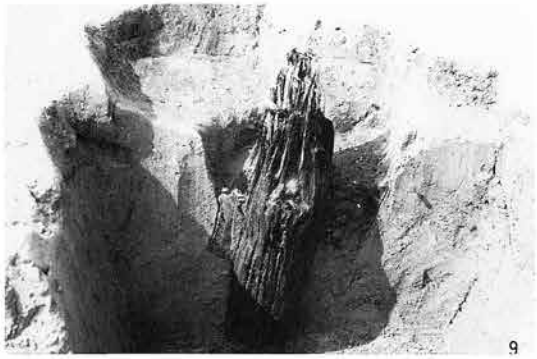
7 SB93— 4 柱根

8 SB93— 8 柱根



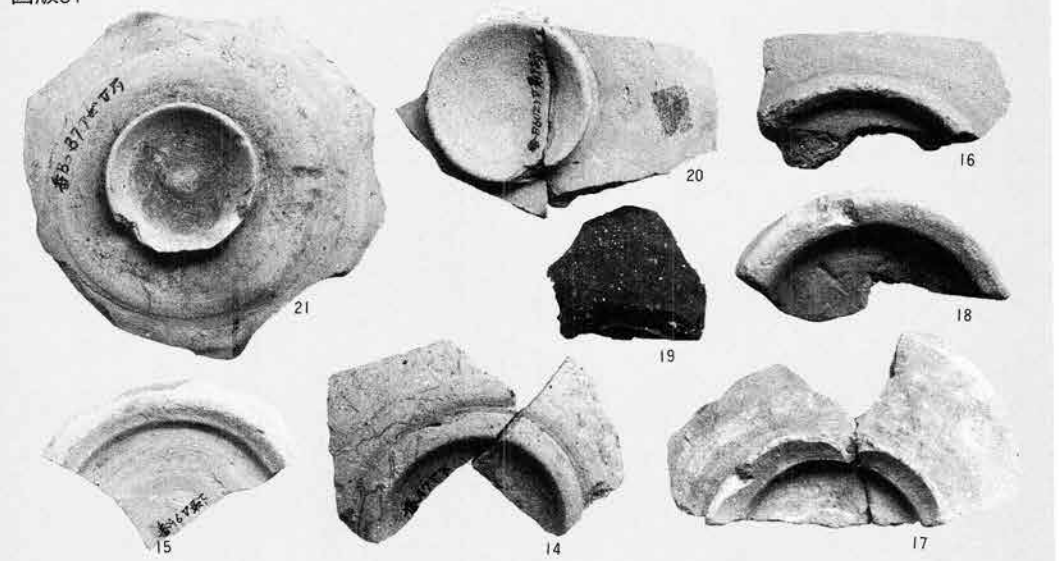
9 SB94— 1 柱根

10 SB91—10柱根

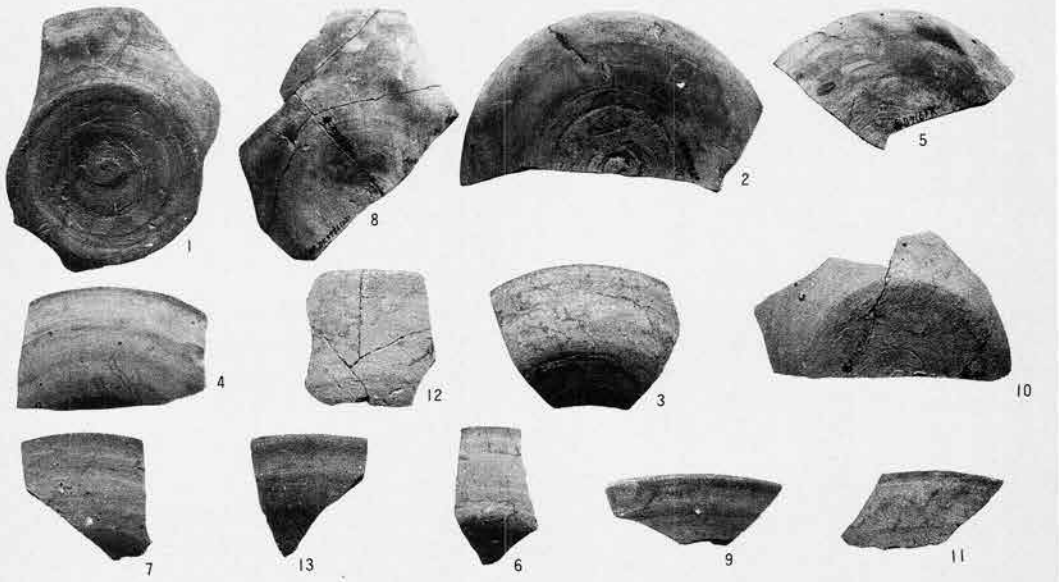


図版51

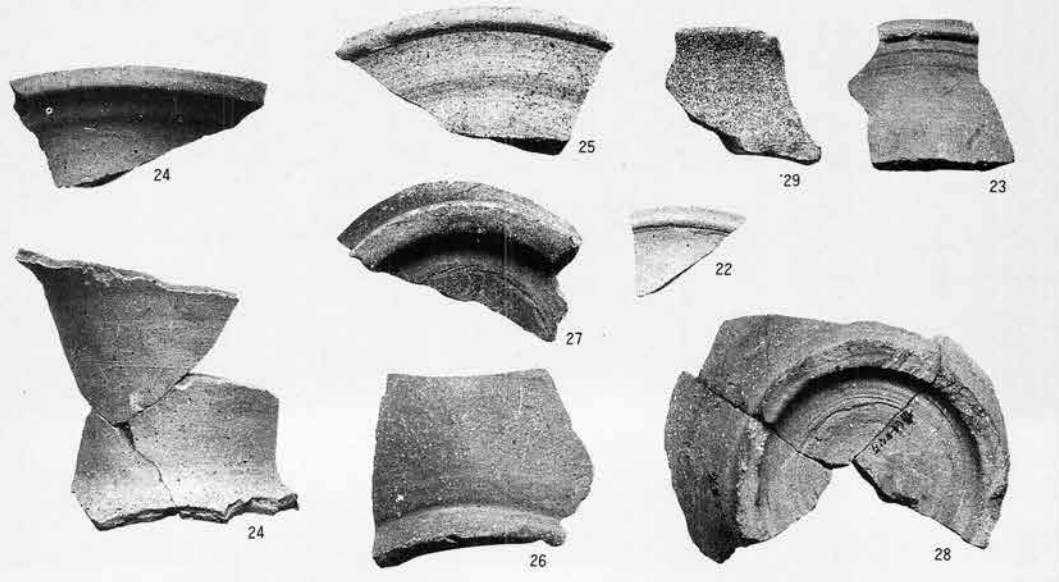
1 1:2
2・3 1:3



1 須恵器
杯蓋(20・21)
有台杯(14～16・19)
有台椀(17・18)



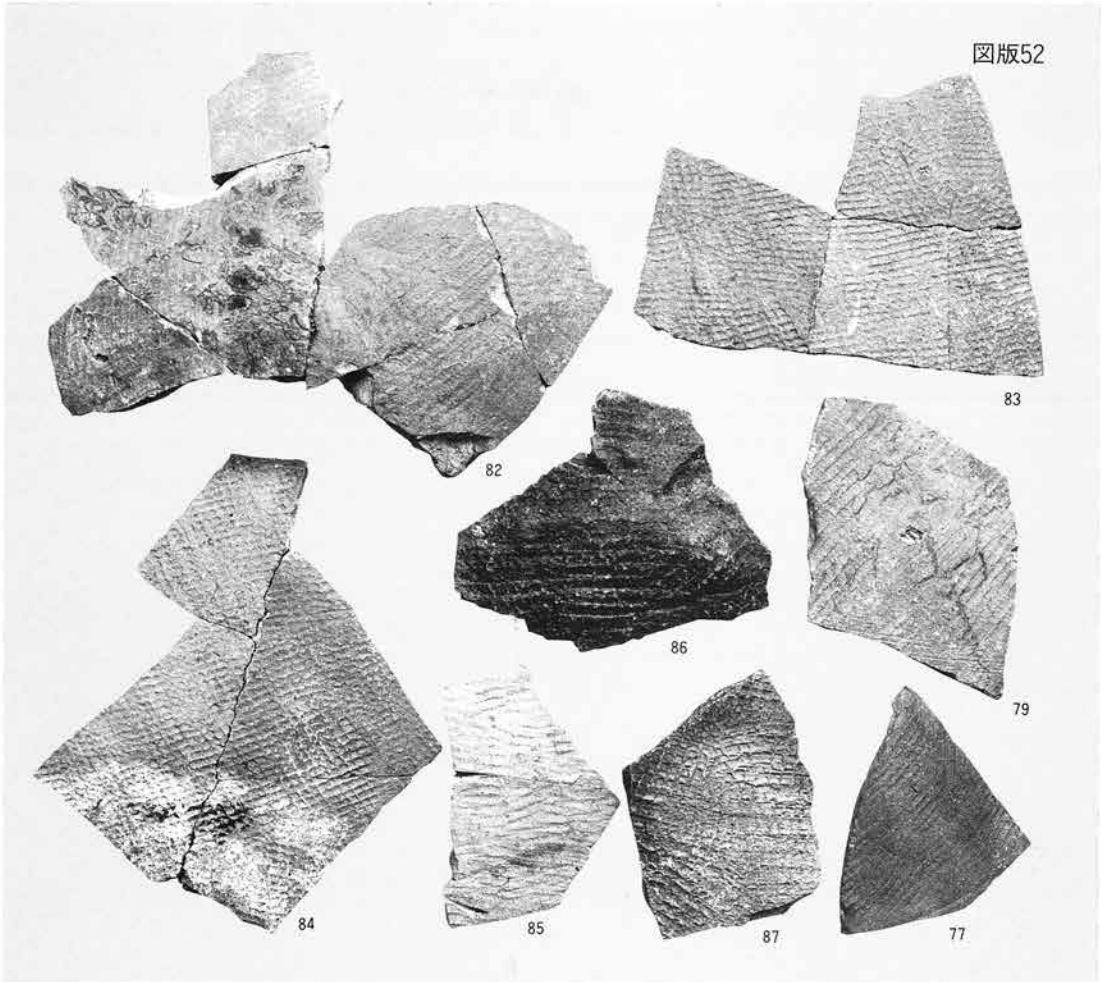
2 須恵器
無台杯(1～10)
有台杯(11・12)
有台椀(13)



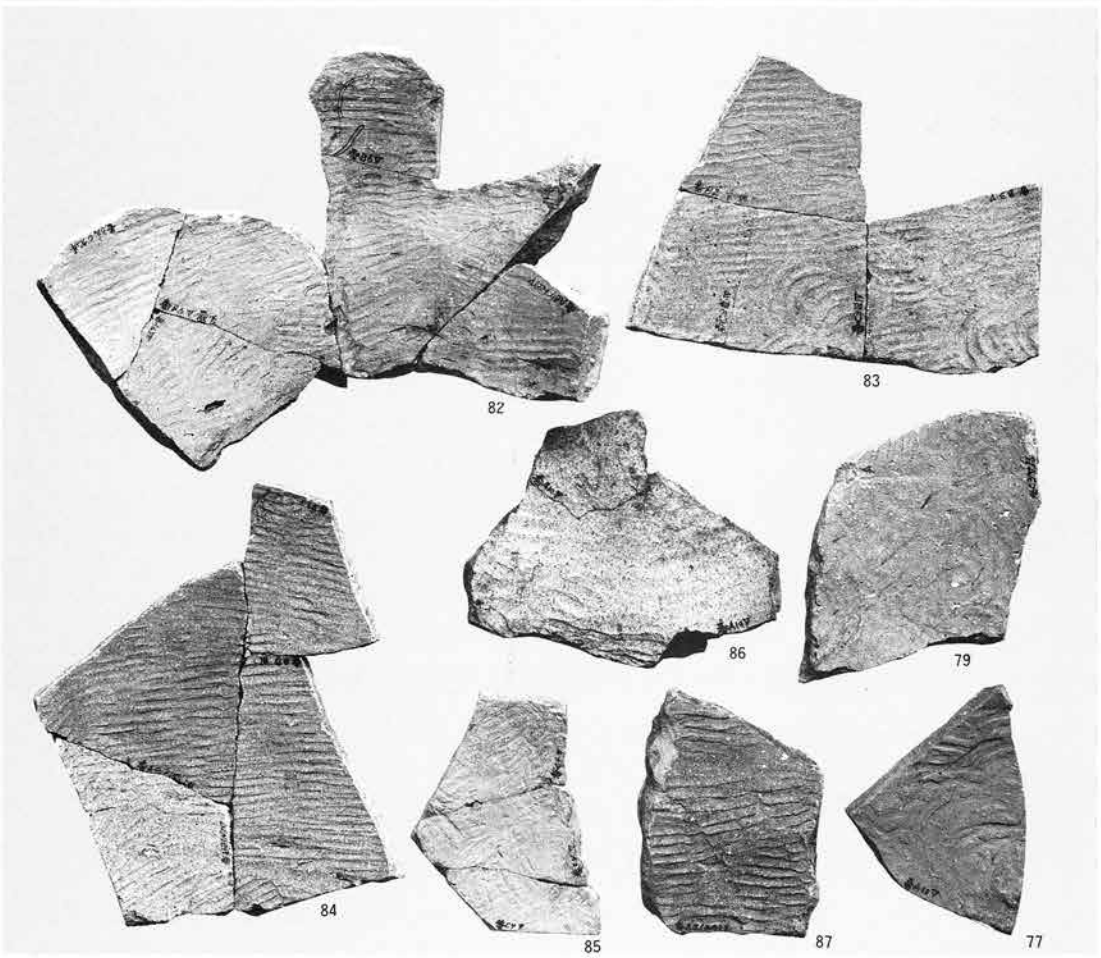
3 須恵器
長頸瓶(22～28)
横瓶(29)

1:3

図版52



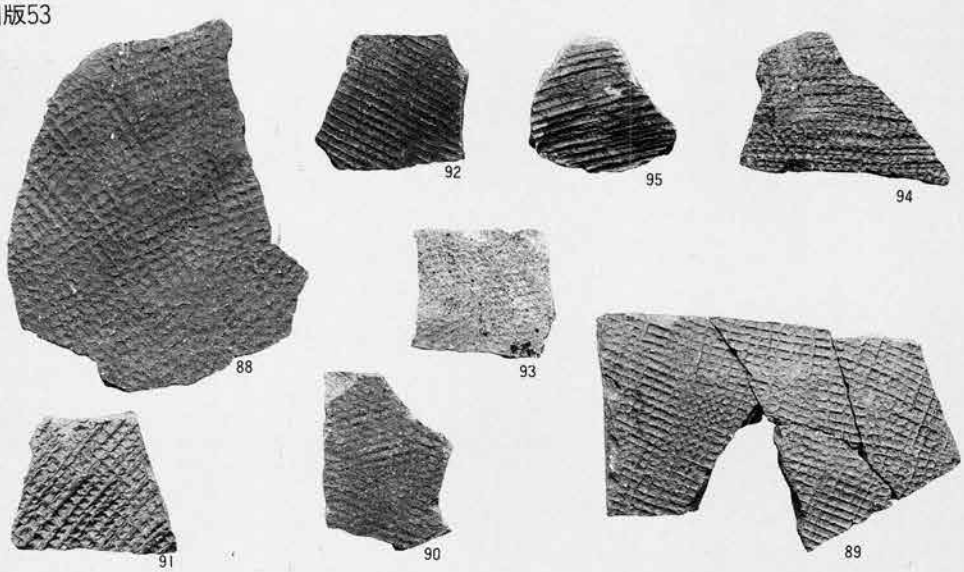
1　須恵器
　　甕体部外面



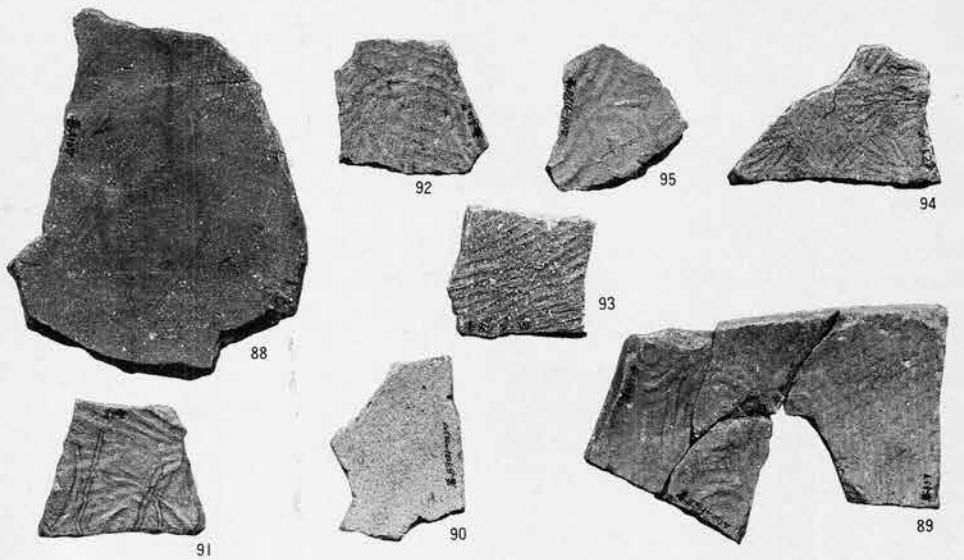
2　同上内面

図版53

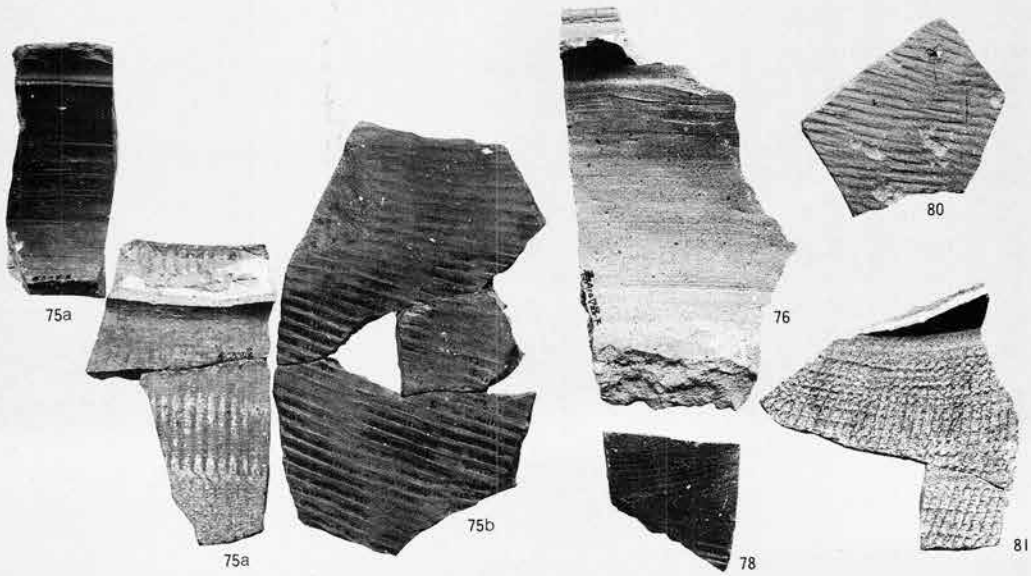
1:3



1　須恵器
甕体部外面



2　同上内面



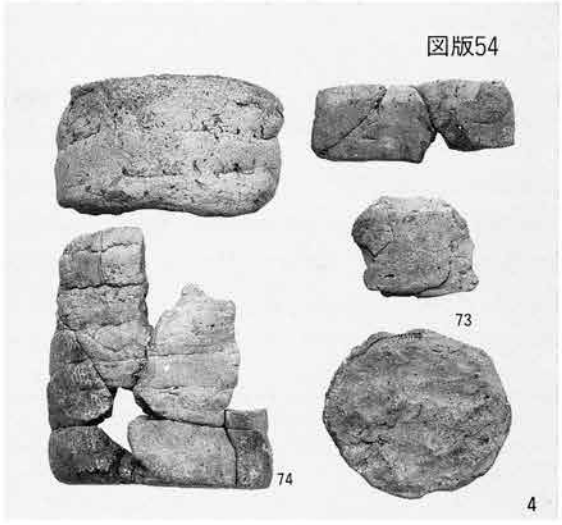
3　須恵器
甕外面

1~3 1:2
4・5 1:4
6 1:3

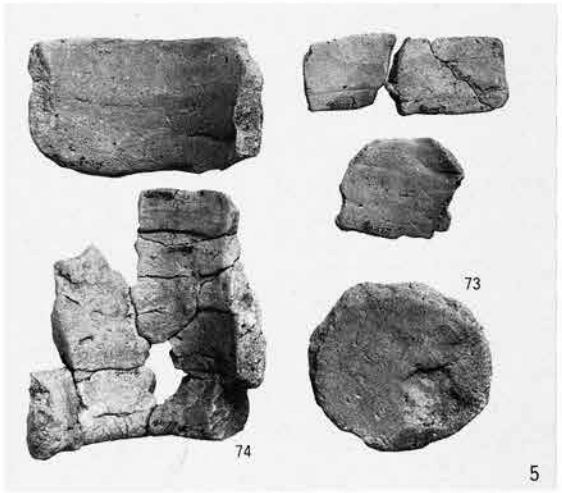
1

2

3

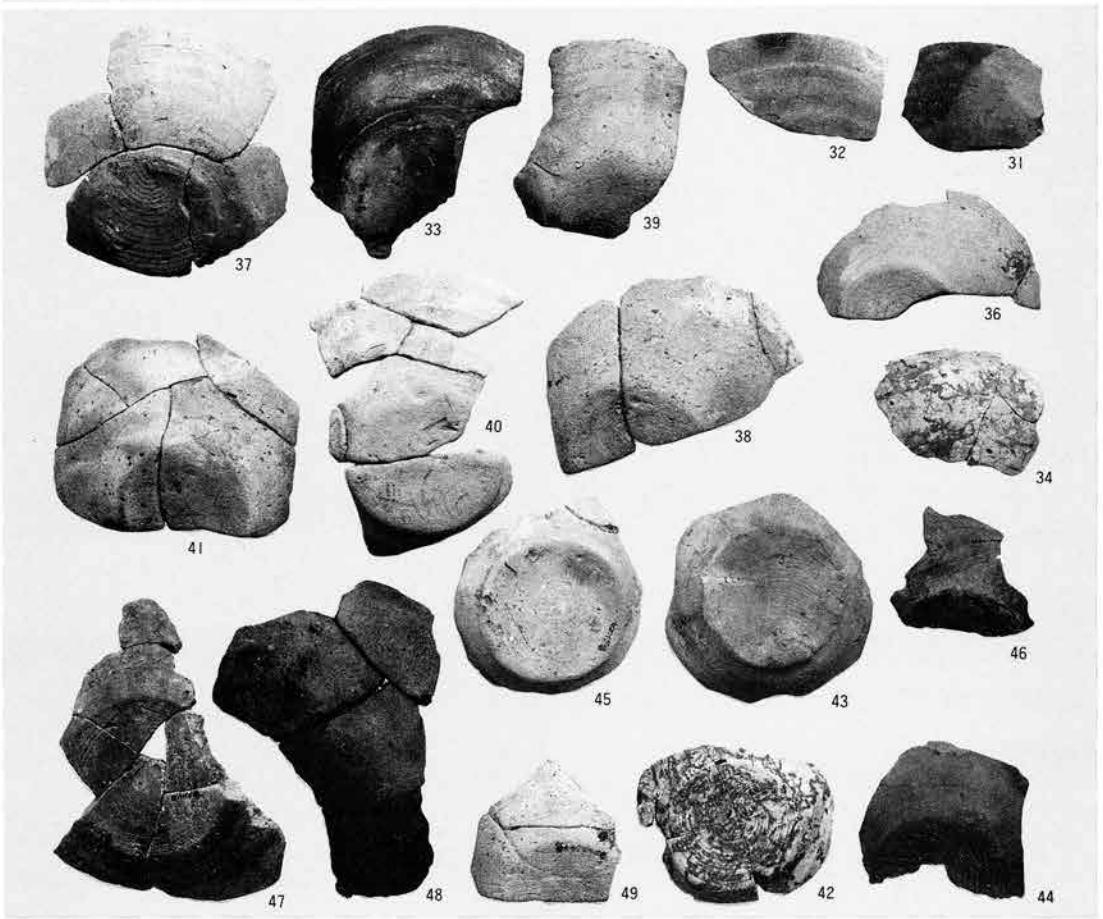


4



5

1 土師器
無台椀(30)
2 土師器
無台椀(35)
3 土師器
無台椀(50)
4 土師器外面
筒形土製品(74)
鉢(73)
5 同上内面

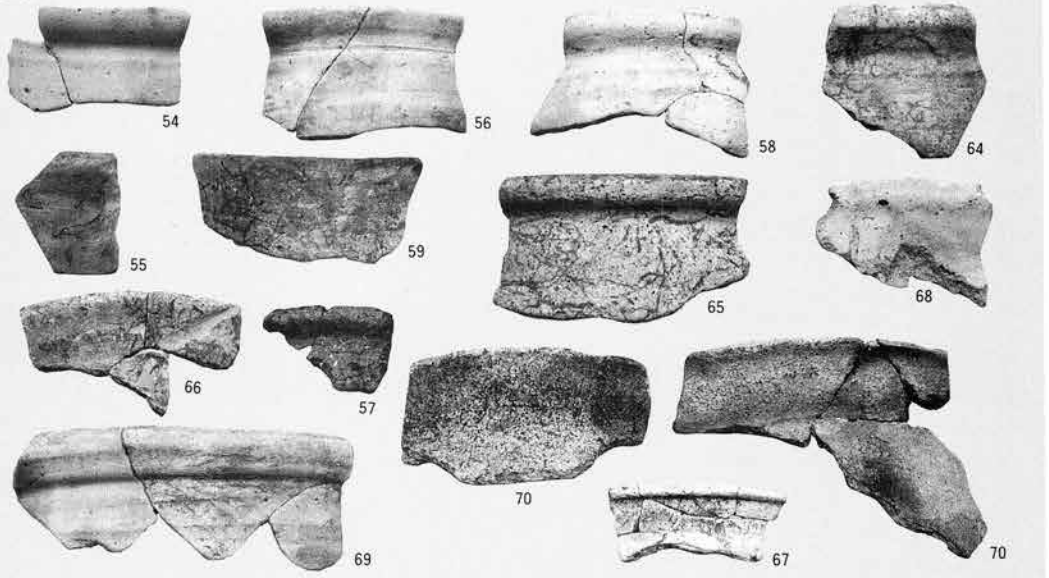


6

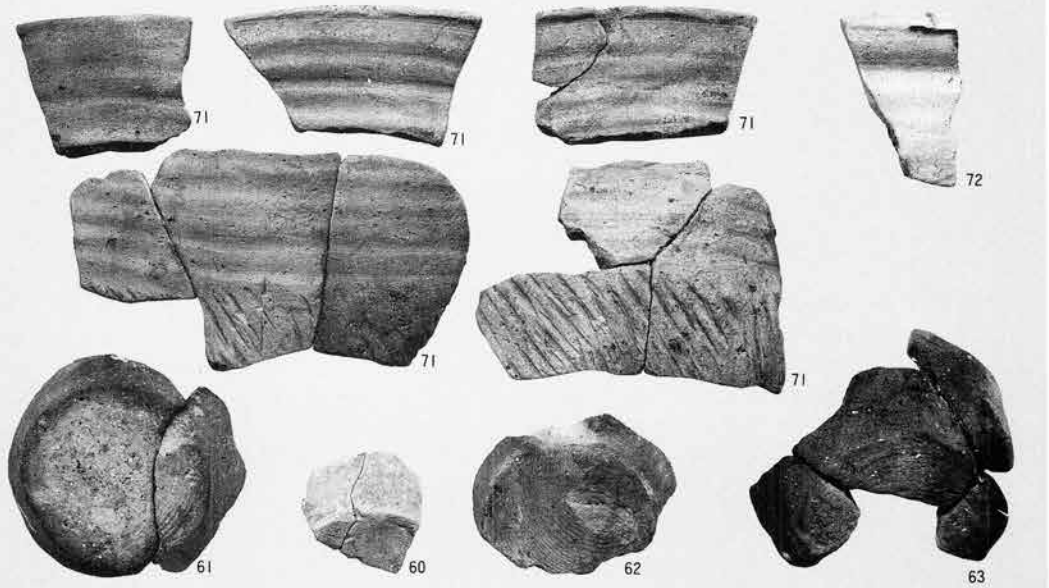
6 土師器
無台椀

図版55

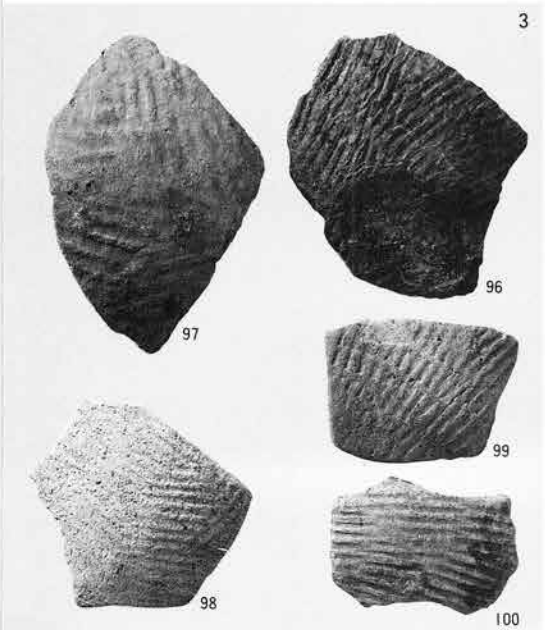
1:3

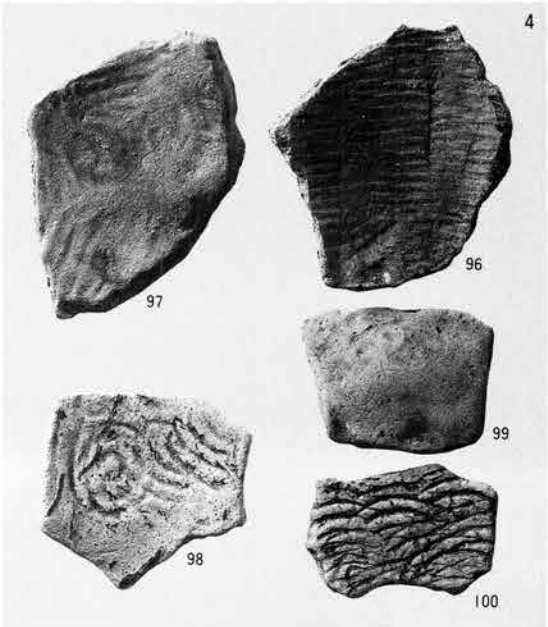


1　土師器
甕



2　土師器
甕・鍋

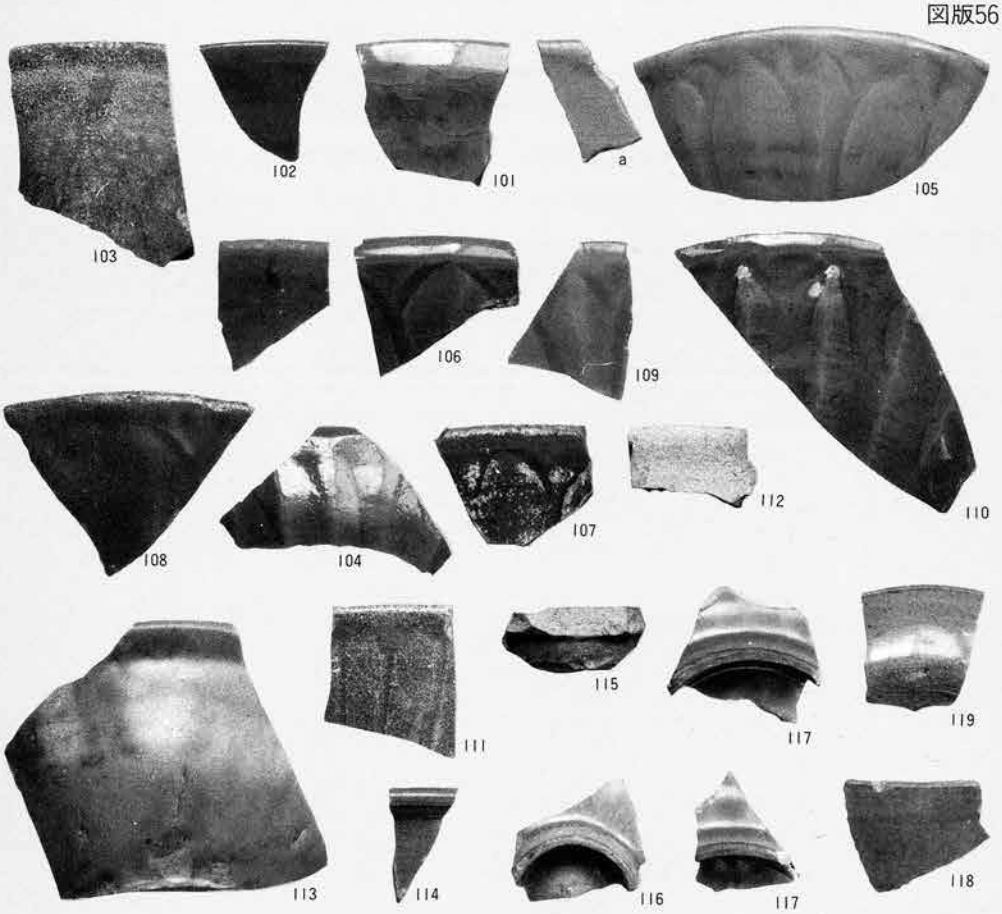




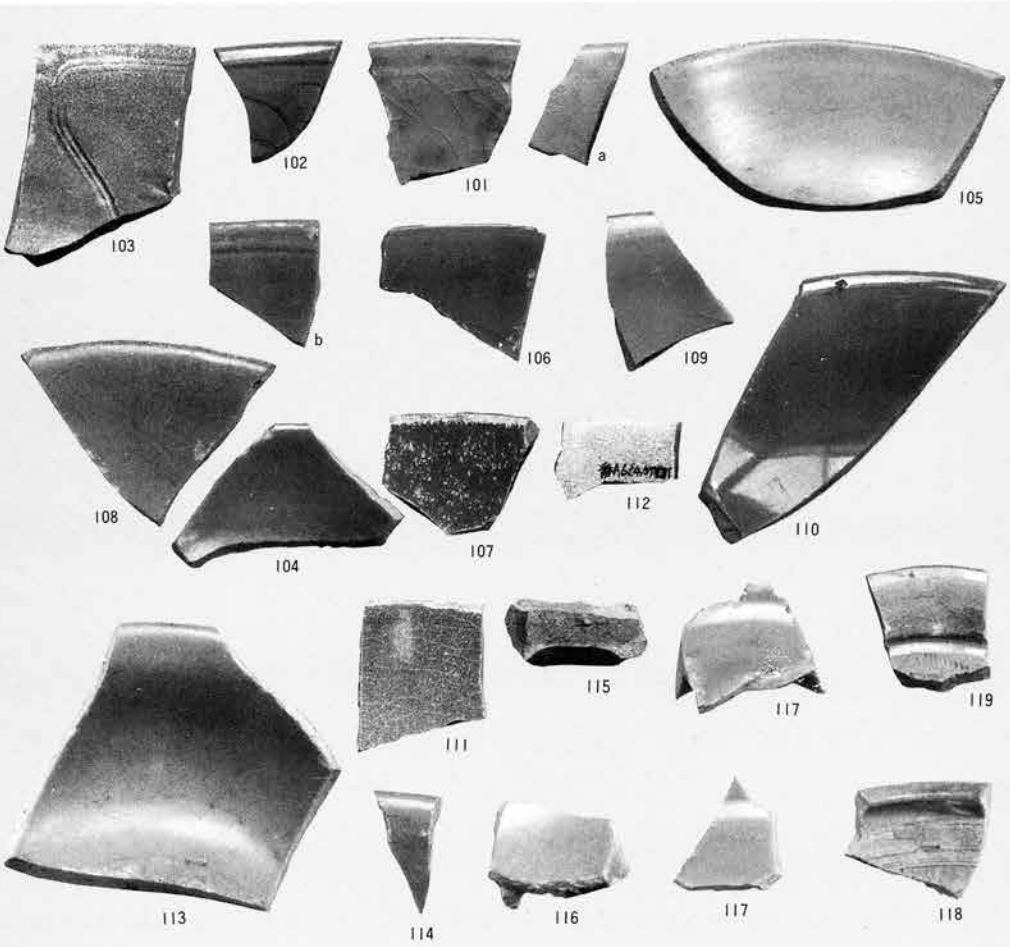
3　土師器
甕体部外面

4　同上内面

1:2



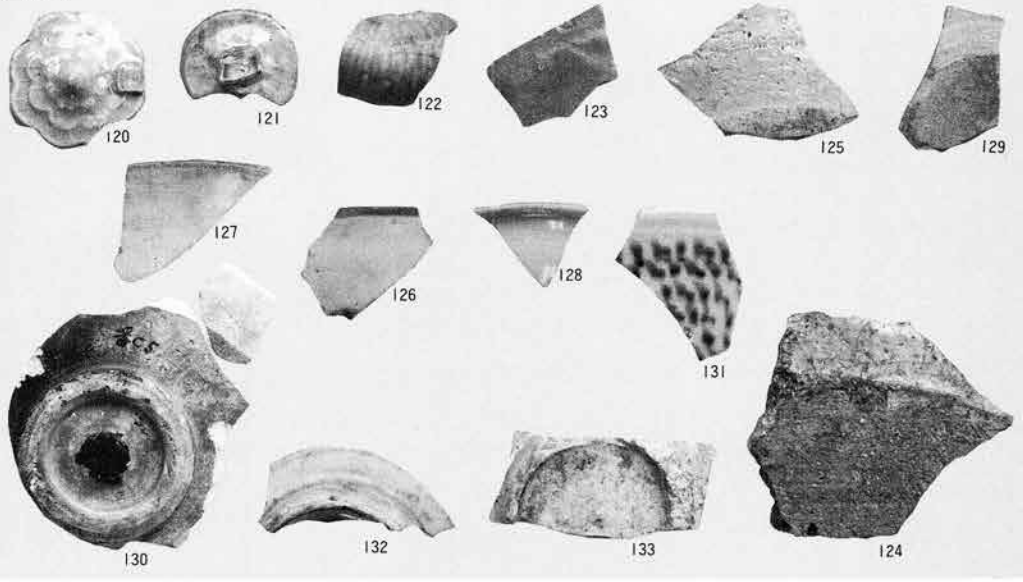
1　中国陶磁器
青磁外面



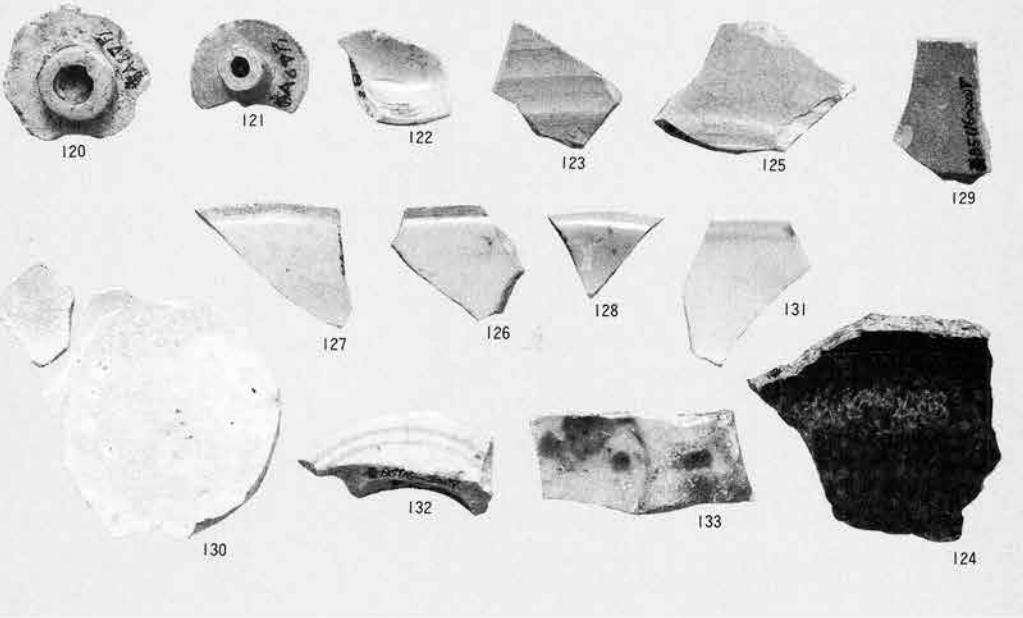
2　同上内面

図版57

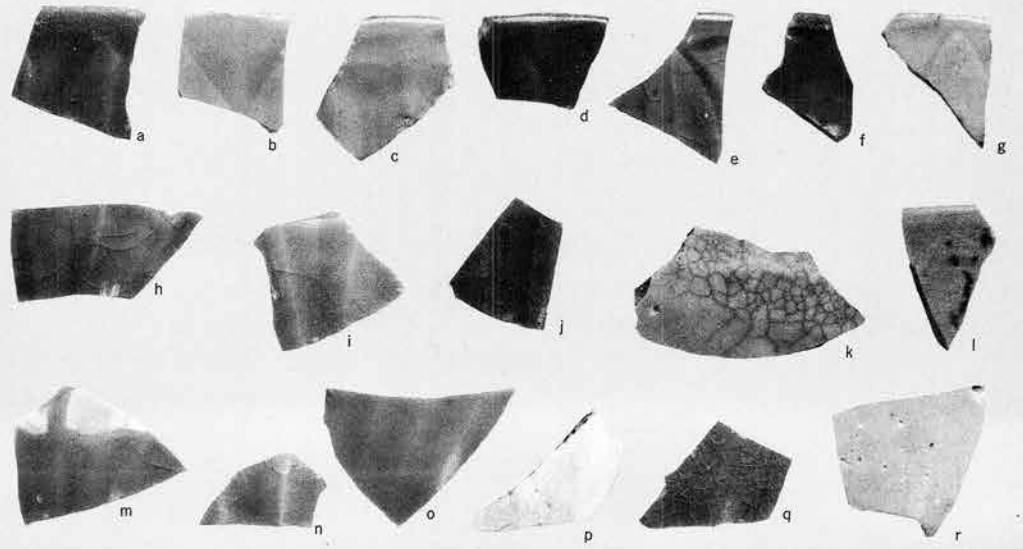
1:2



1　中国陶磁器
青白磁(120～123)
白磁(125～130)
染付(131～133)
緑釉(124)



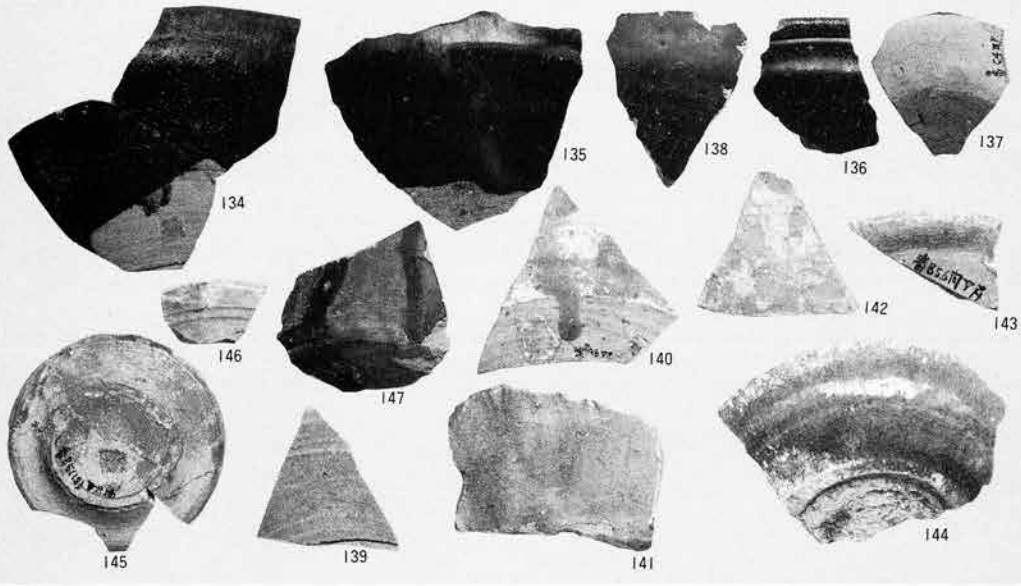
2　同上内面



3　中国陶磁器
青磁

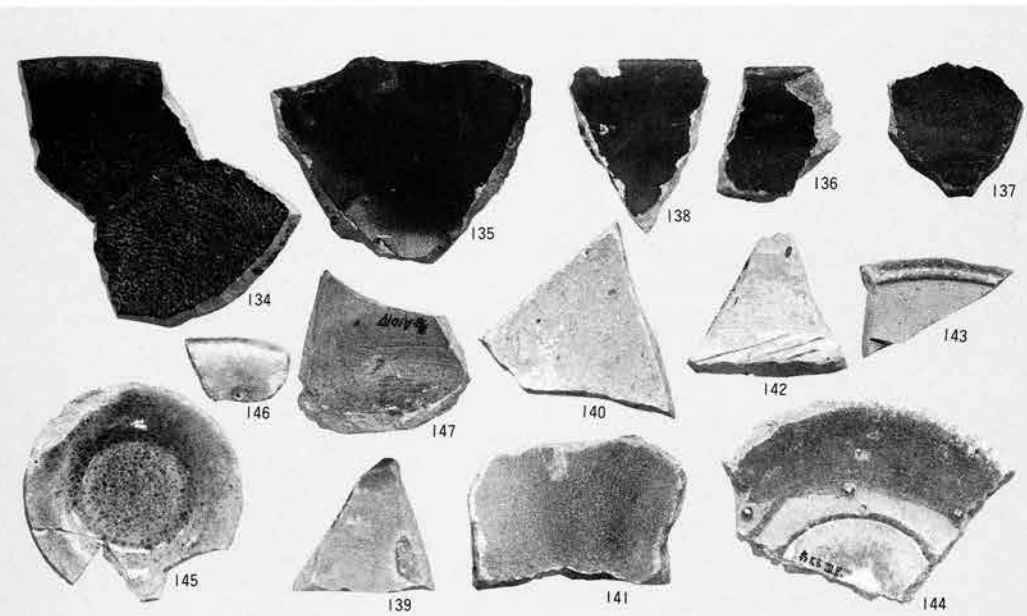
1:2

図版58

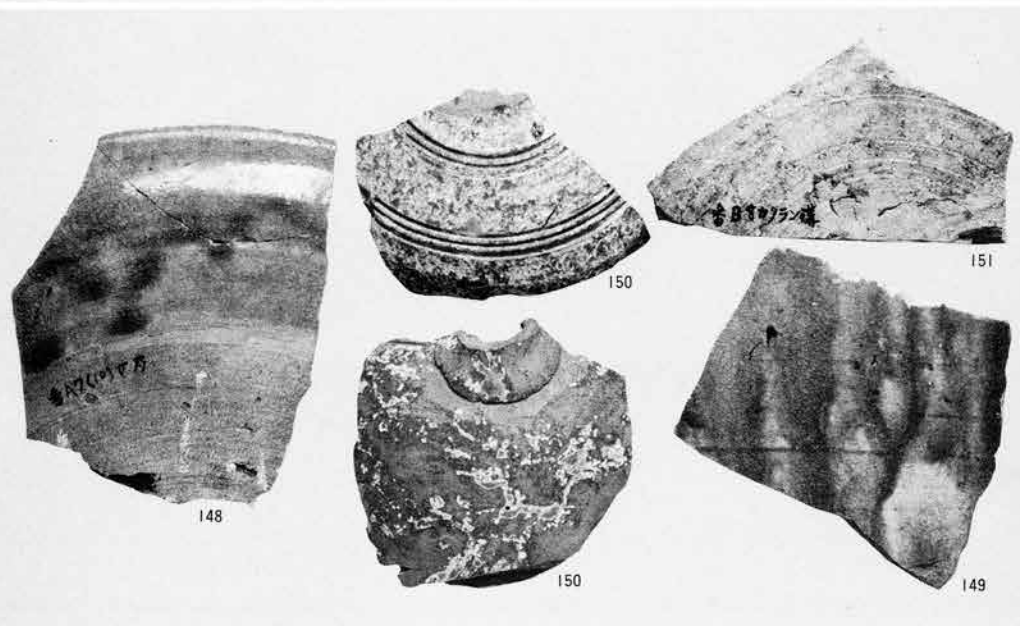


1　瀬戸・美濃焼

天目茶碗
(134～136・138)
鉄釉小壺(137)
灰釉平碗(139～141)
灰釉おろし皿(142・143)
灰釉小皿(145・146)
灰釉丸皿(144)
鉄釉壺(147)



2　同上内面

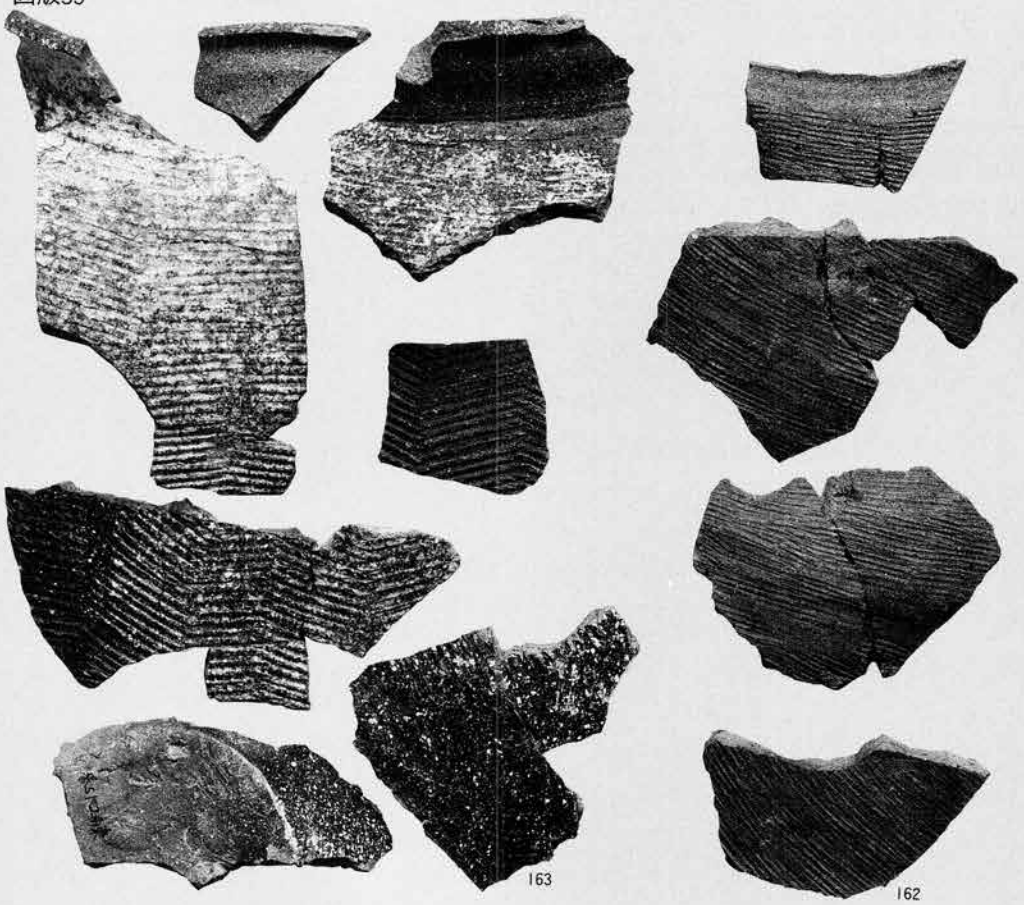


3　瀬戸・美濃焼灰釉

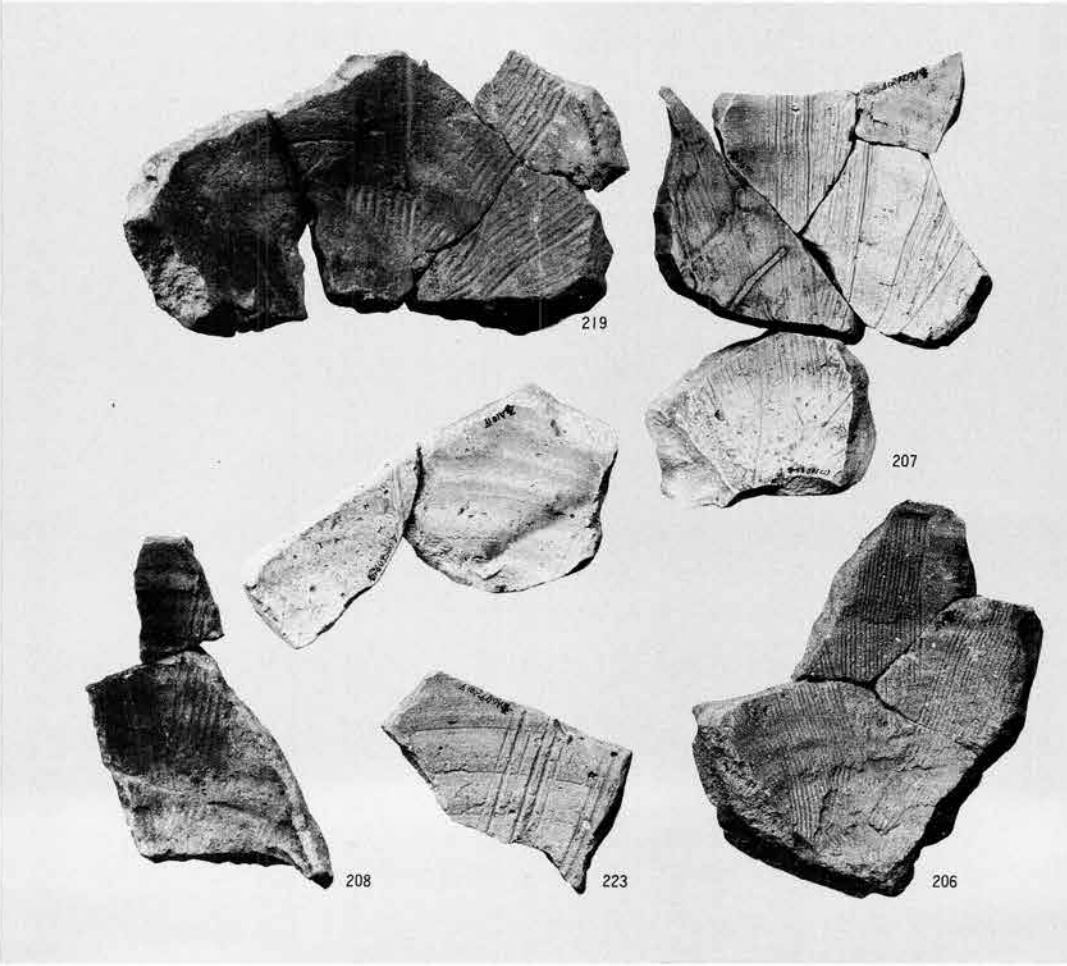
平碗(148)
水注(150)
四耳壺(149)
折縁深皿(151)

図版59

1:3

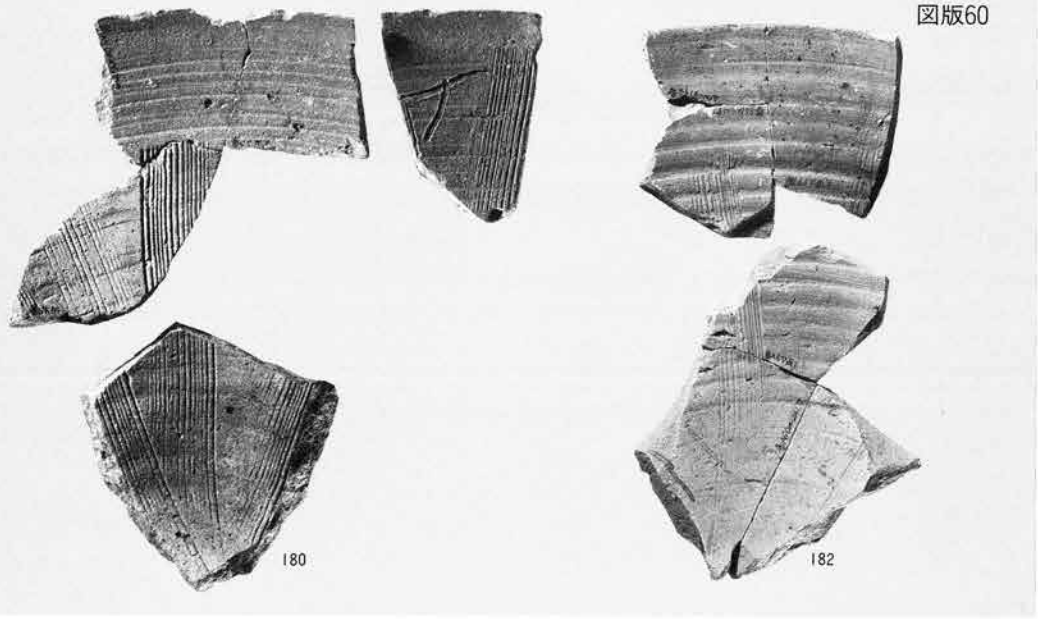


1　珠洲焼
壺

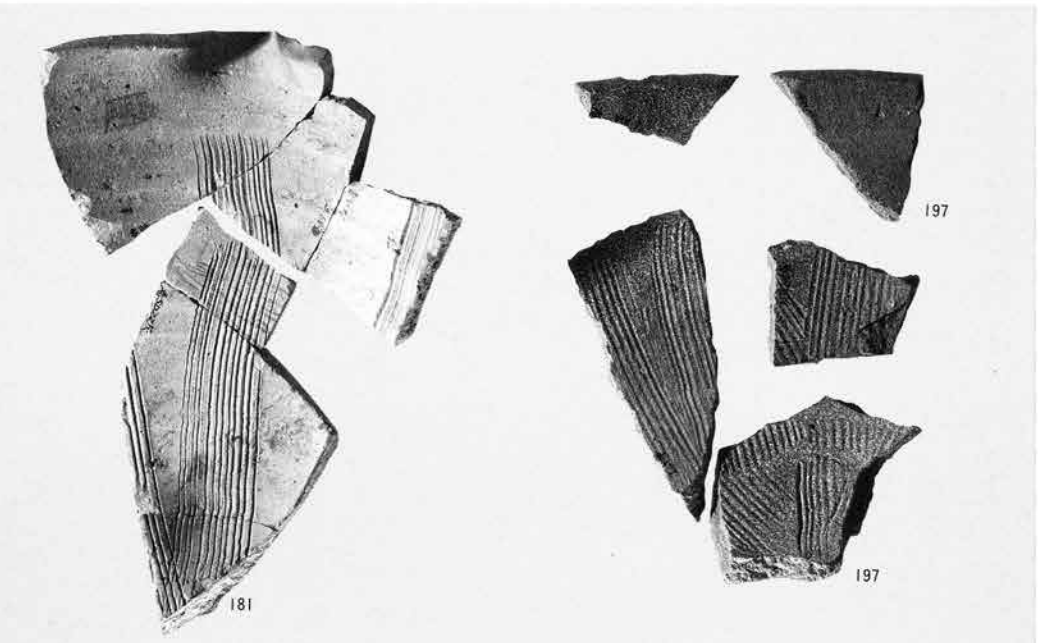


2　珠洲焼
片口鉢

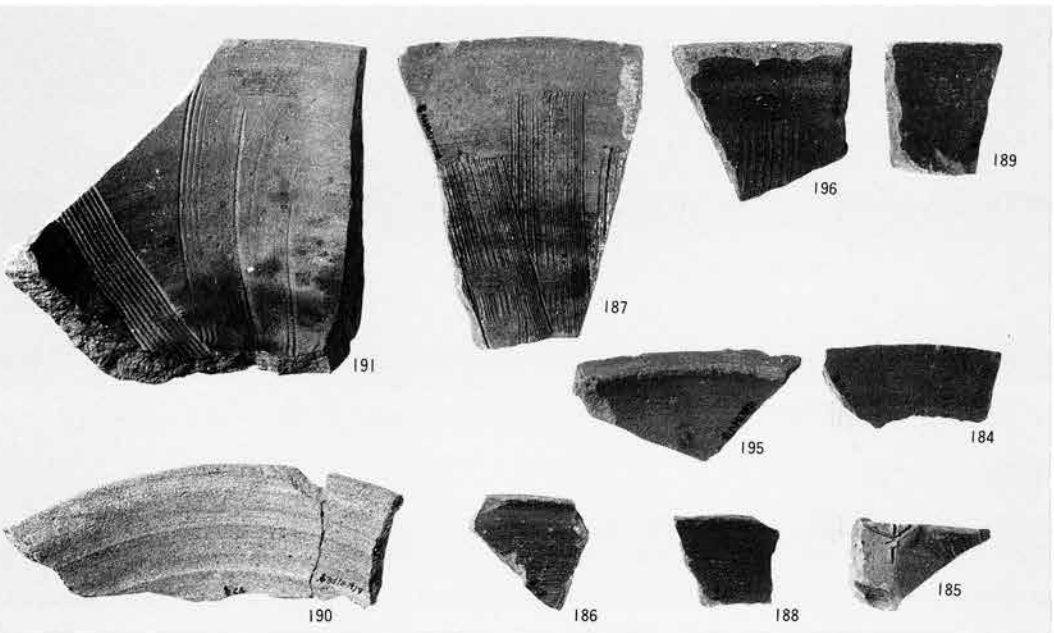
1:3



1 珠洲焼
片口鉢



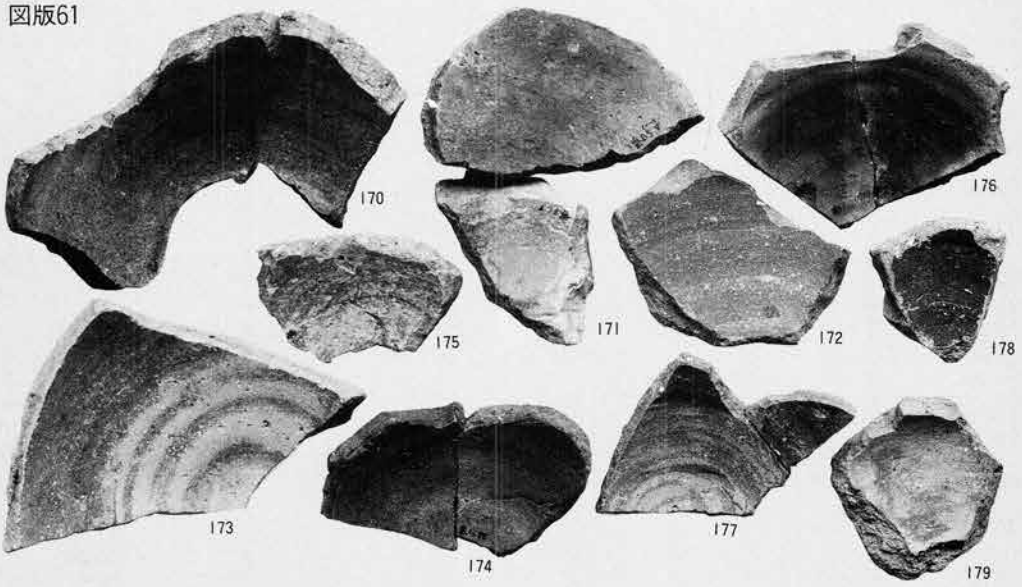
2 珠洲焼
片口鉢



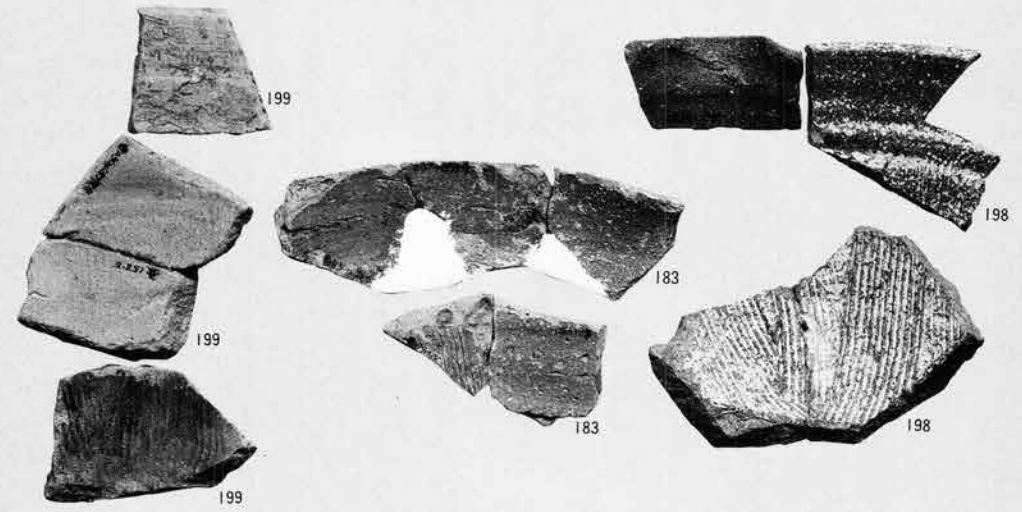
3 珠洲焼
片口鉢

図版61

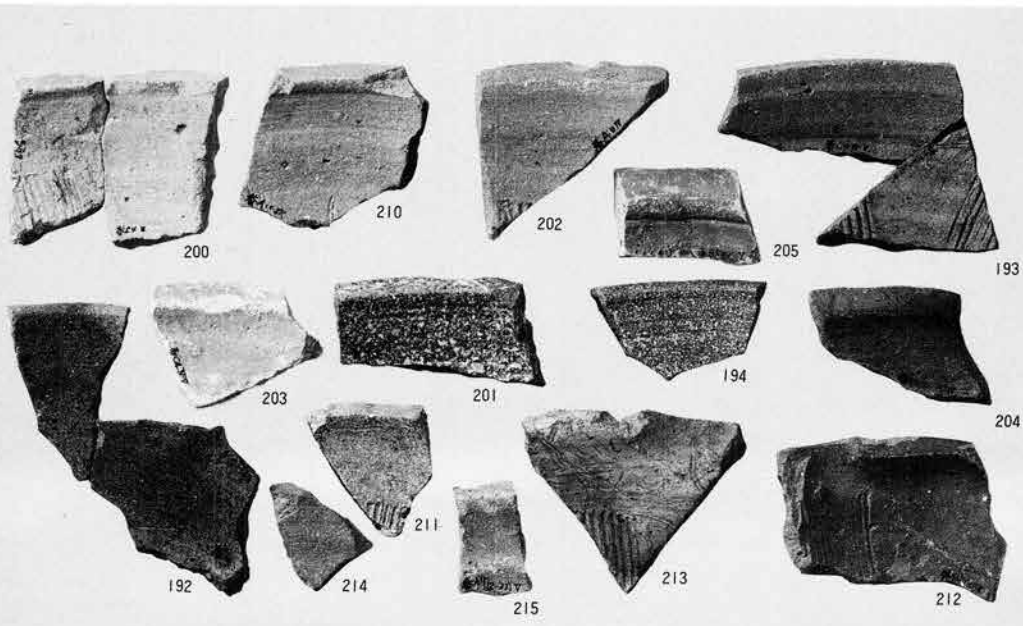
1:3



1　珠洲焼
壺(170・171・179)
こね鉢(172～178)

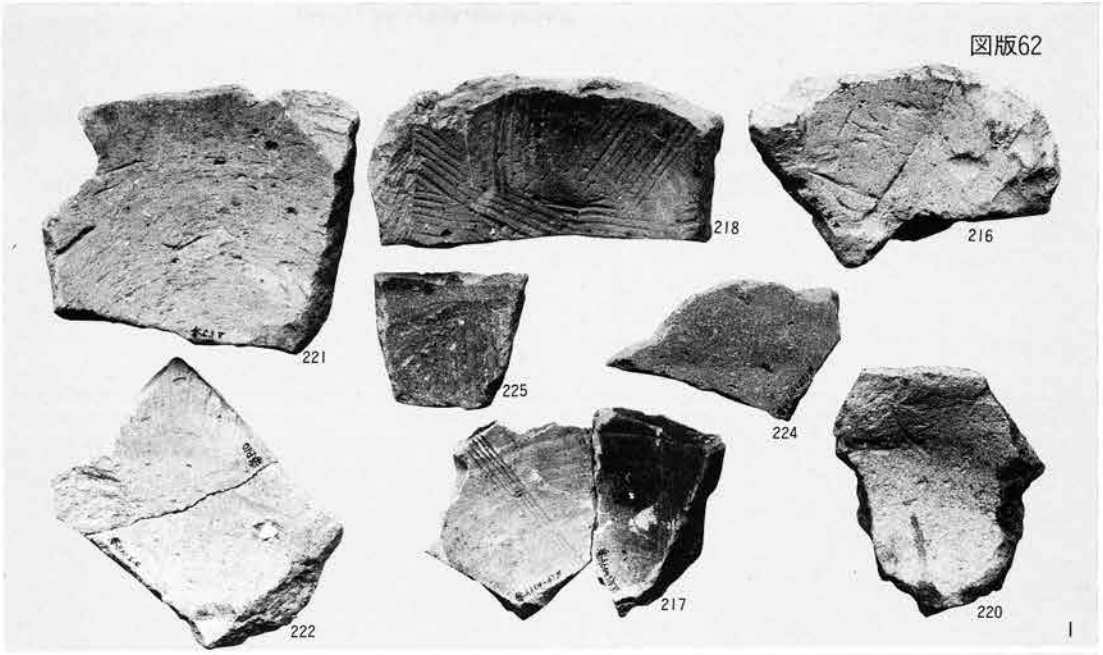


2　珠洲焼
片口鉢

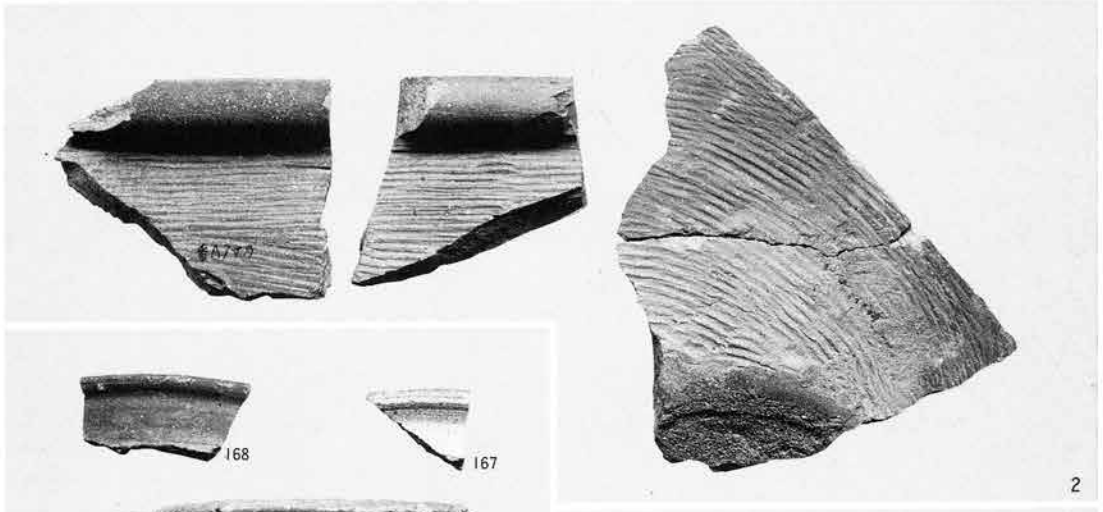


3　珠洲焼
片口鉢

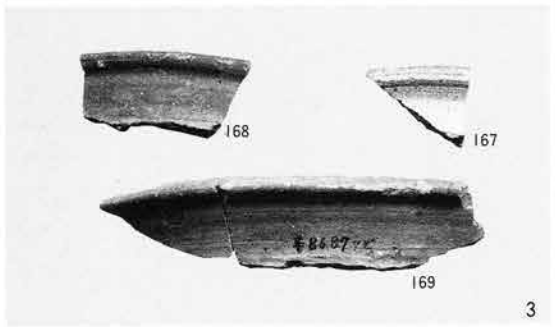
1~3 1:3



1 珠洲焼
片口鉢



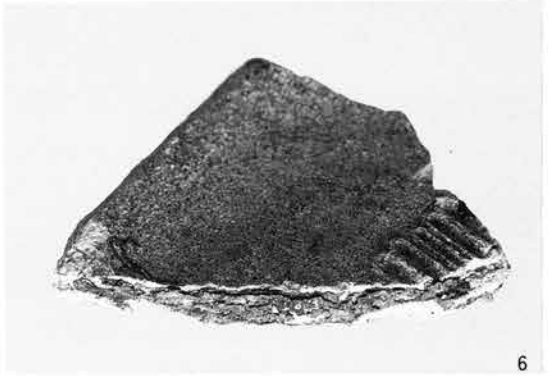
2 珠洲焼
甕(226)



3 珠洲焼
壺

4 珠洲焼
片口鉢(180)刻文

5 珠洲焼
片口鉢(185)刻文



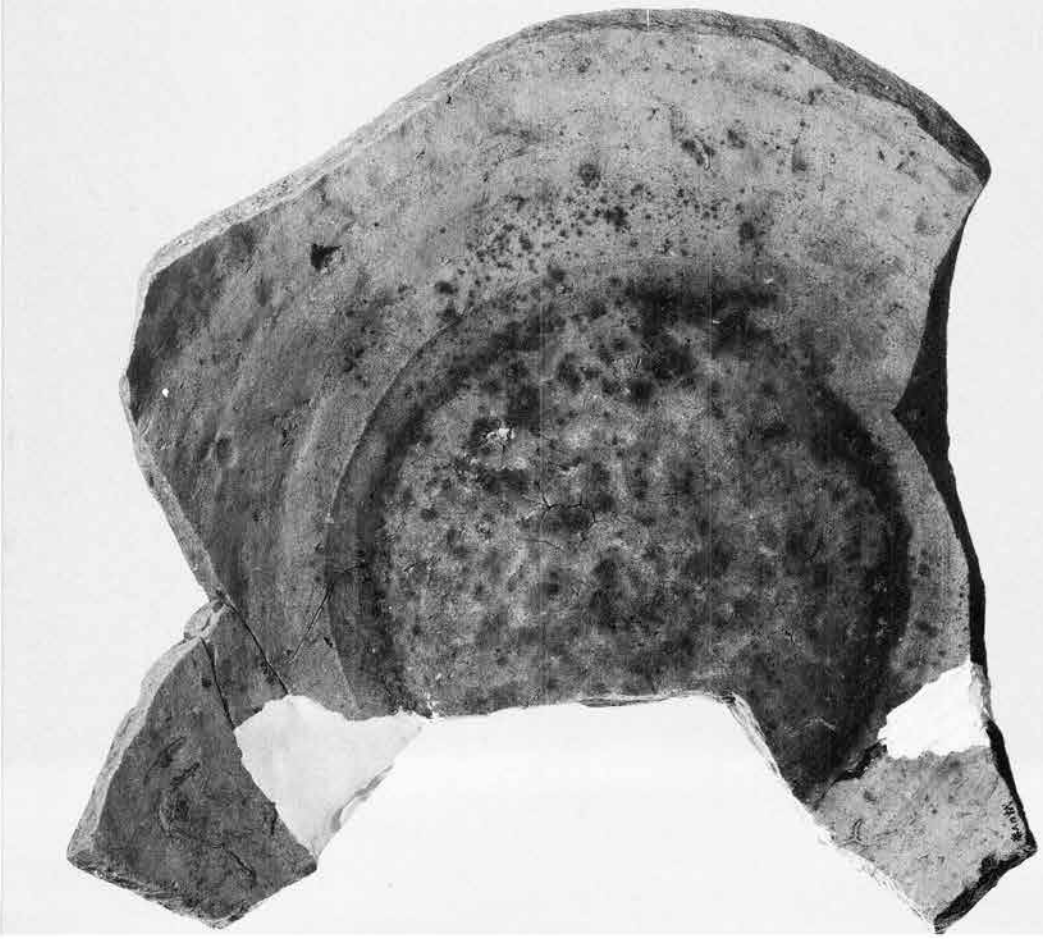
6 珠洲焼
片口鉢(211)
漆つぎ痕跡

1・3 1:3

2

1

1　越前焼
　　大甕(256)
2　同上
　　押印



3

3　同上底部内面

図版64

1 1:2
3 1:2
4 1:1
5 1:2

161

159

157

156

160

153

158

154

155

152

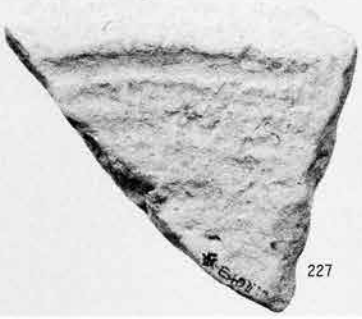
1 土師質土器
皿

228

2

2 土師質土器
皿(158)
タール付着状況

229


227

3

3 越前焼・その他
すり鉢(227・228)
壺(229)

4

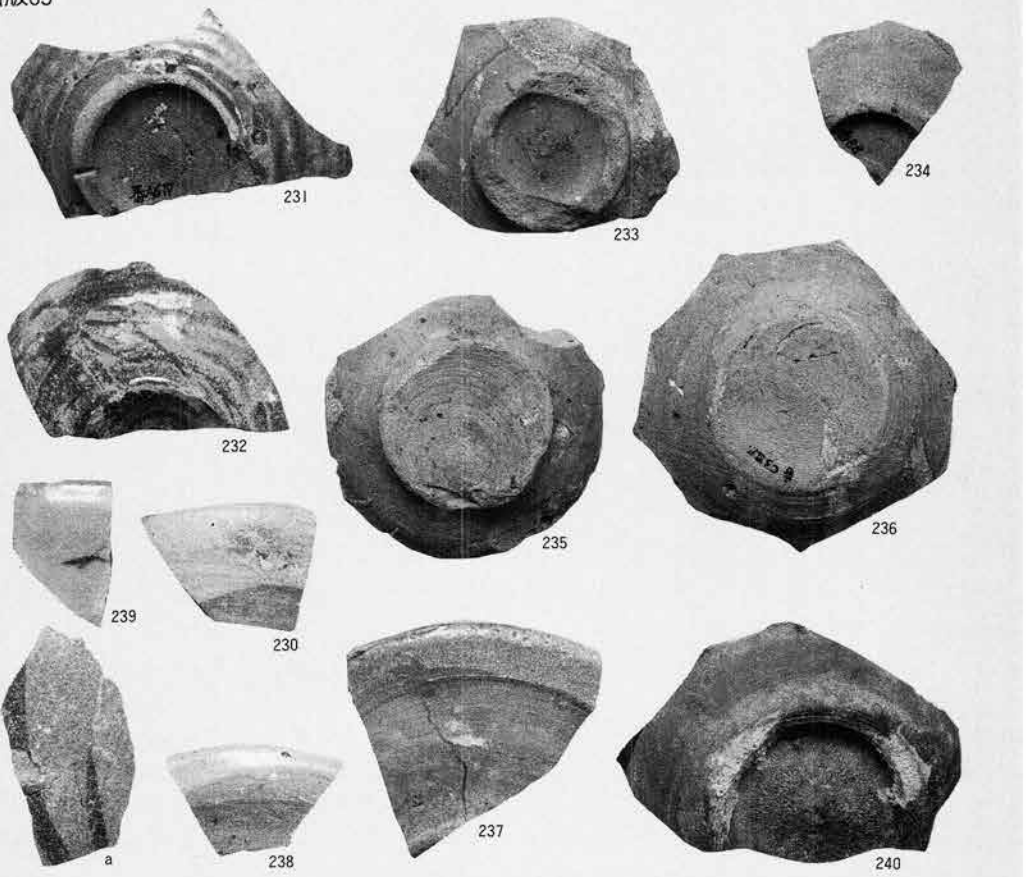
4 銭貨

5

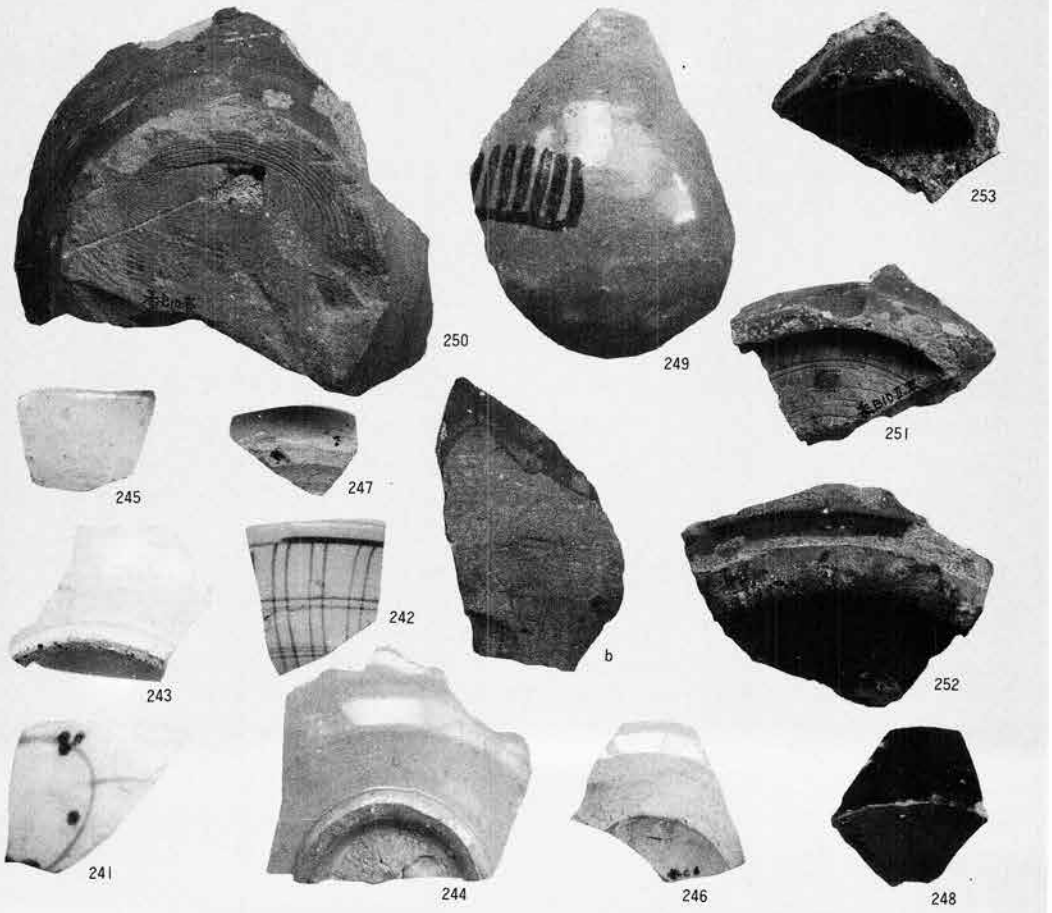
5 越前焼(系)陶器

図版65

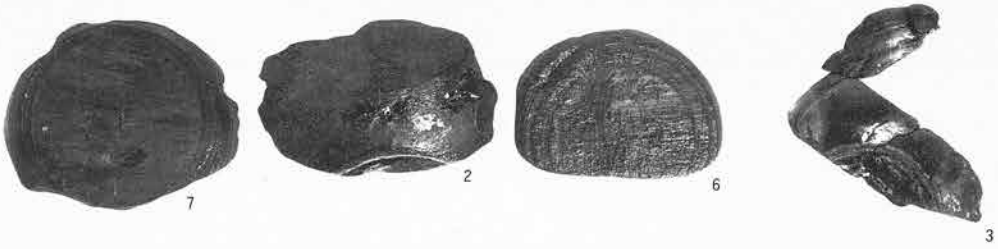
1:2



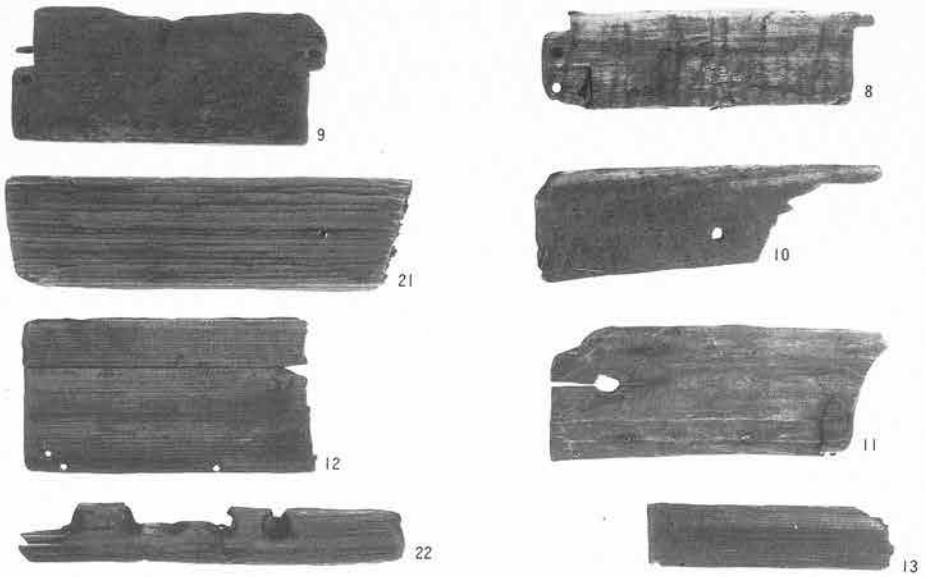
1　唐津焼



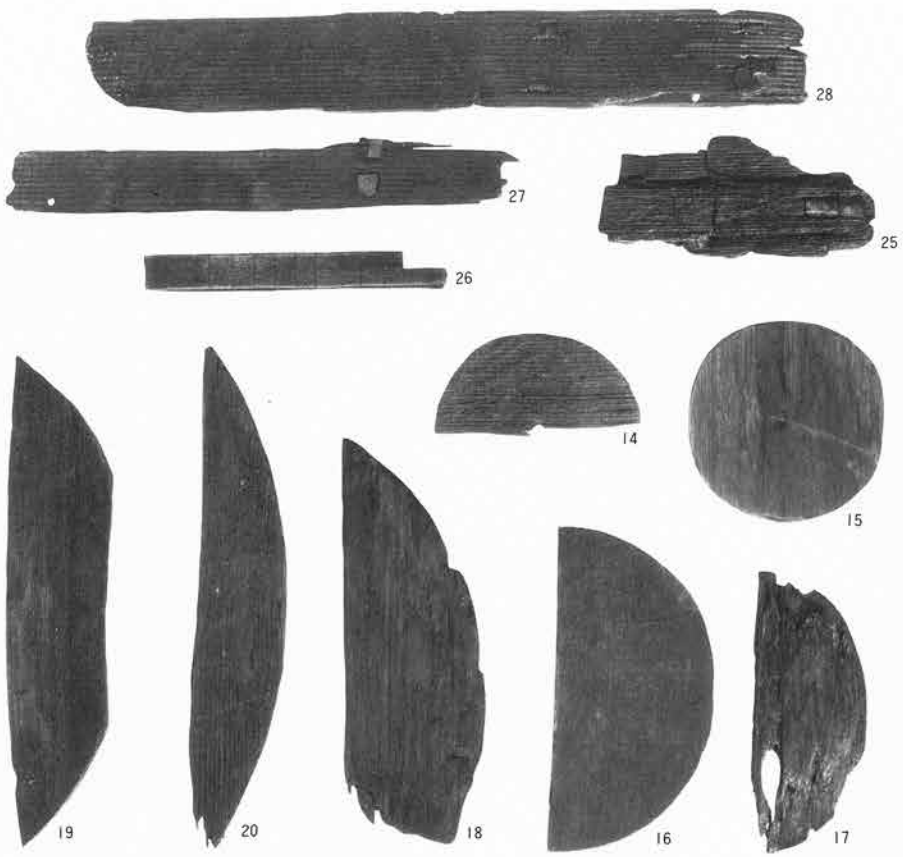
2　近世陶磁器
唐津焼・その他



1　漆器椀



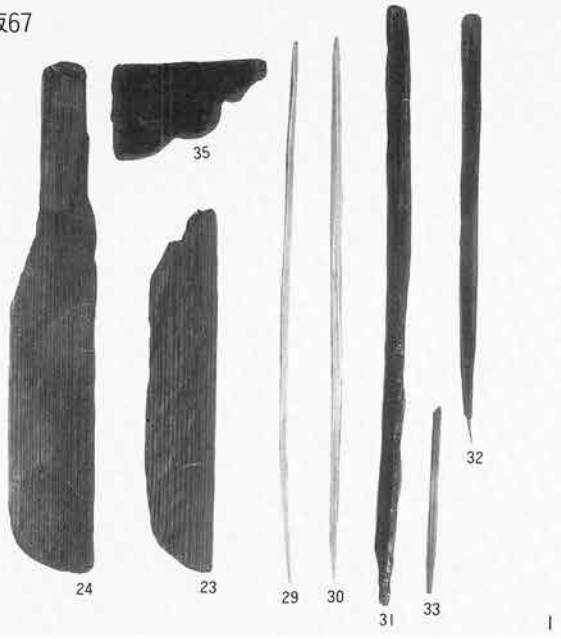
2　箱物・板材



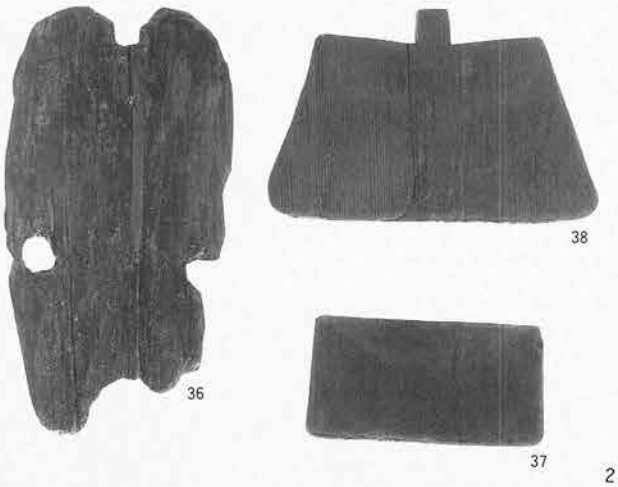
3　曲物・蓋

図版67

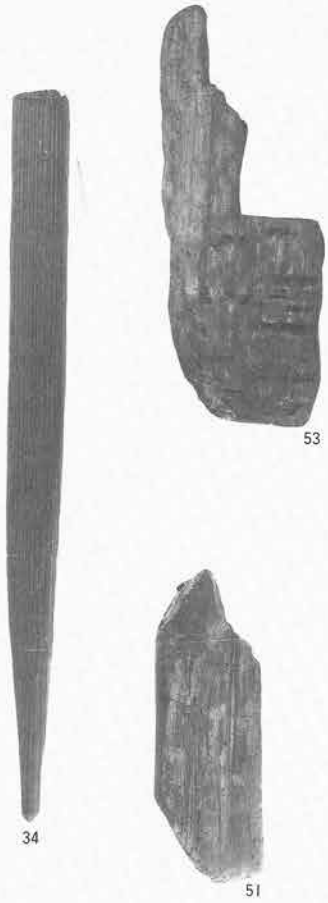
1～3 1:3
4 約1:1.5



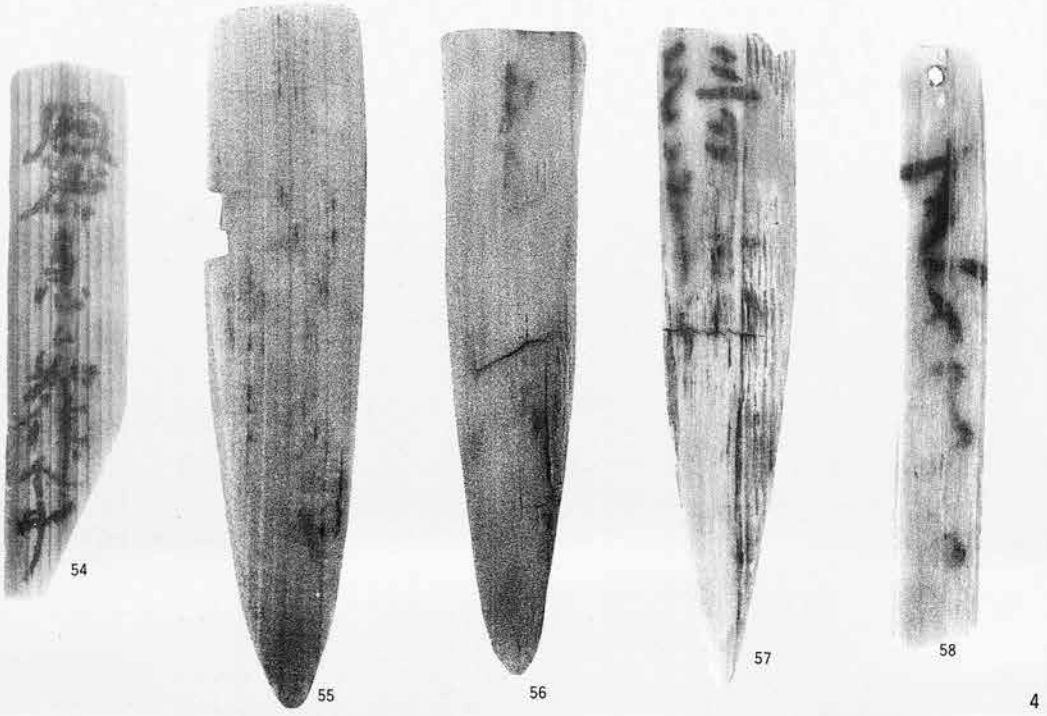
1 板杓子・箸・雲形肘木



2 下駄



3 農工具
用途・不明木製品



4 木簡・木札

1:5

69

67

61

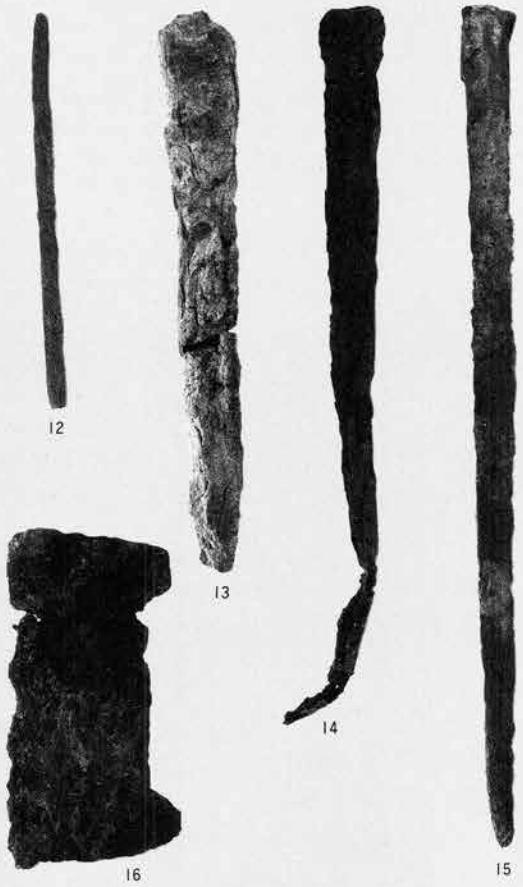
60

70

71

SB17柱根・礎板
柱根(61・60)
礎板(66－71)

図版69



2

1 1:2
2 1:5
3 1:3

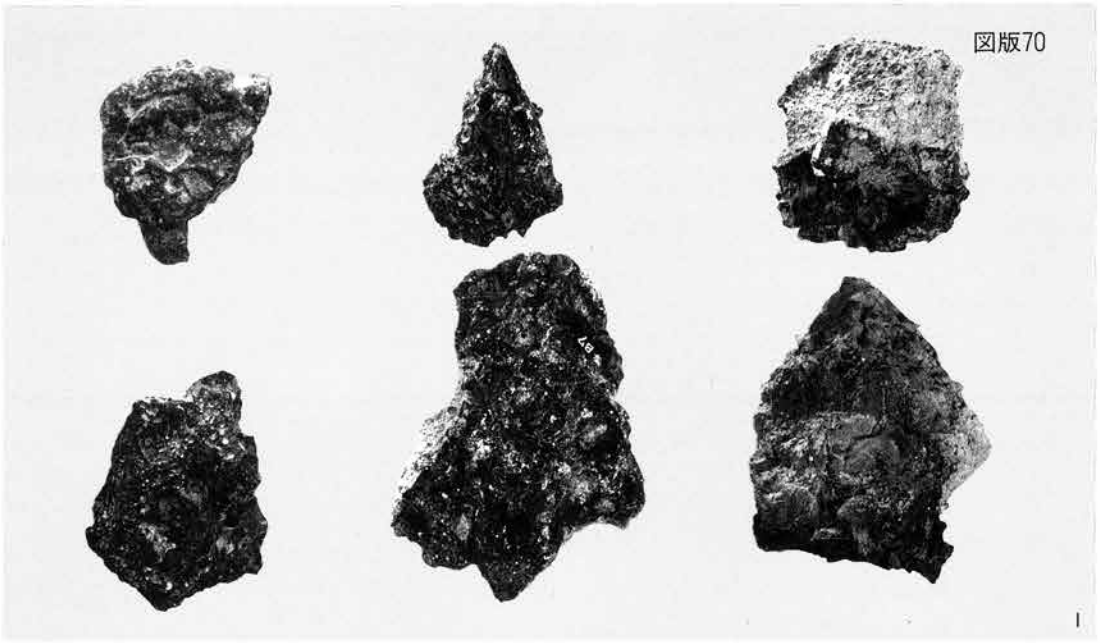
1 鉄製品

2 木杭(SX2)

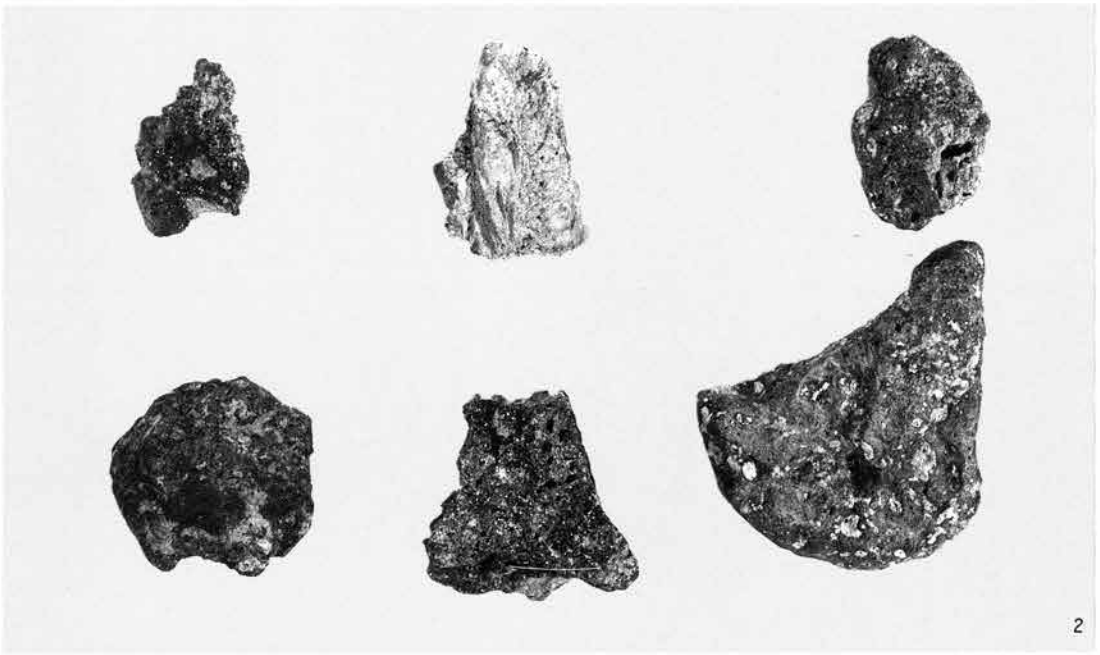
3

3 石製品
砥石(1～7・a～h)
硯(8～10)
磨製石斧(11)

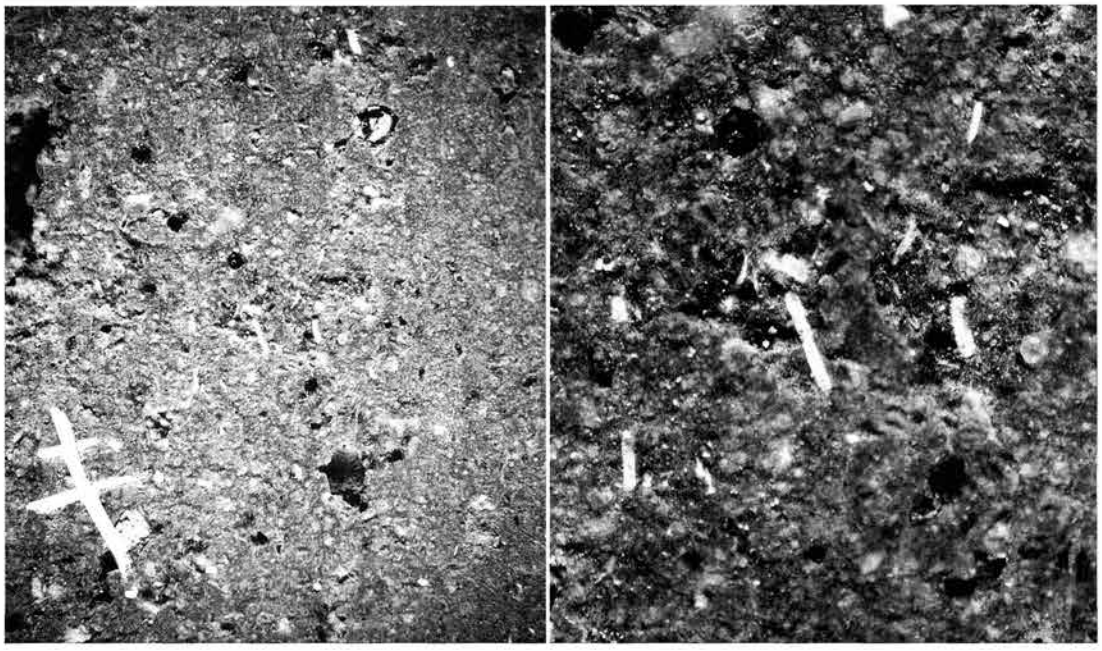
1・2　1:2
3　約×75
4　約×200



1　鉄滓



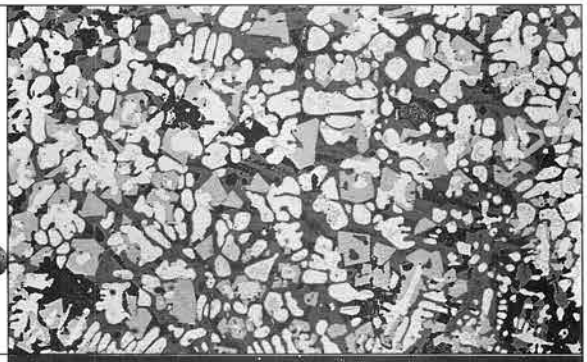
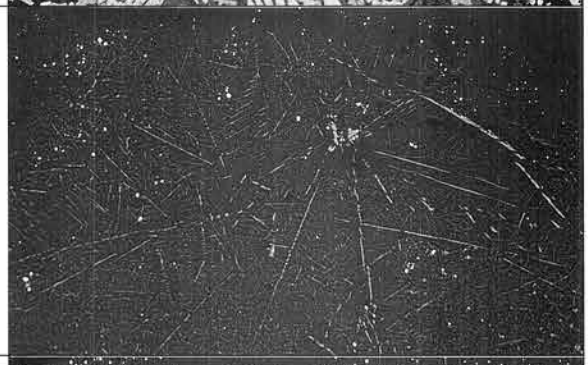
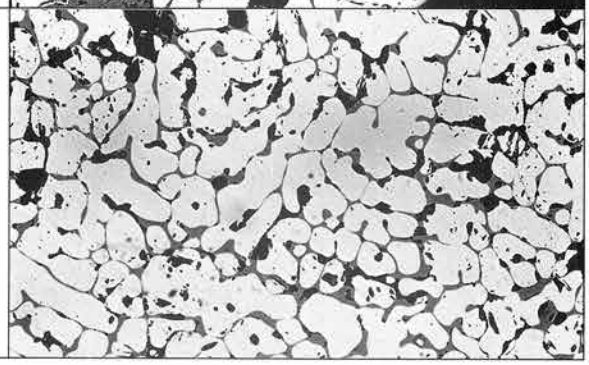
2　鉄滓



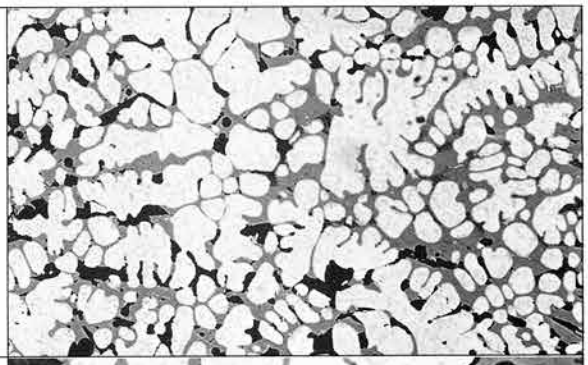
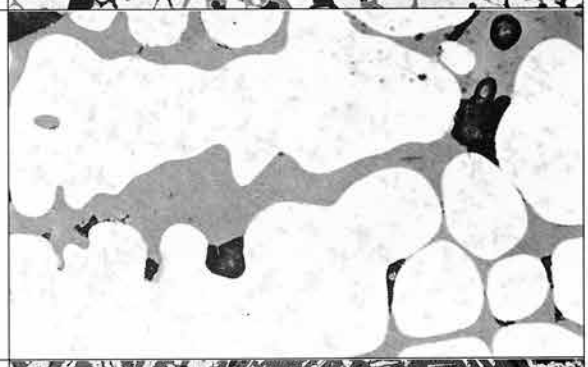
3　珠洲焼
片口鉢(210)
海綿骨針

図版71

鉄滓・ガラス質鉱物の顕微鏡組織

(1) Z—851 番場遺跡 (A9V層出土) 精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) ×100 外観写真 1/2.7		
(2) Z—852 番場遺跡 (B5(16~18)V層下部出土) ガラス質鉱物 ×100 外観写真 1/2.7		
(3) Z—853 番場遺跡 (B5(21)V層下の砂出土) ガラス質鉱物 ×100 外観写真 1/2.7		
(4) Z—854 番場遺跡 (B6(21~25)V層出土) 鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) ×100 外観写真 1/2.7		
(5) Z—855 番場遺跡 (SK24出土) 鍛錬鍛冶滓 (小鍛冶滓) ×100 外観写真 1/2.7		

鉄滓の顕微鏡組織

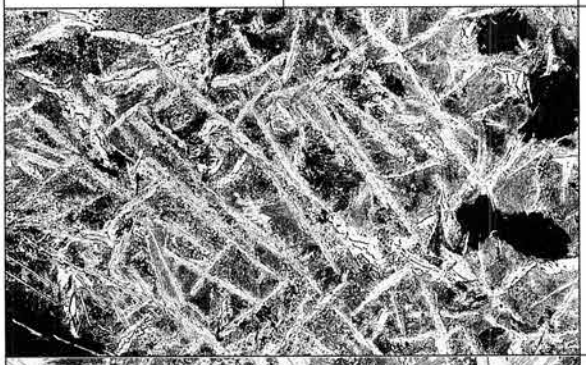
(6) Z —856 番場遺跡 (SK24出土) 精錬鍛冶滓 (大鍛冶滓) ×100 外観写真 1/2.7	 表 側	
同 上 ×400	 裏 側	
(7) Z —857 番場遺跡 (SE60出土) 砂鉄製錬滓 ×100 外観写真 1/2.7		
(8) W —861 内越遺跡 (トレンチSK26西出土) 砂鉄製錬滓 ×100 外観写真 1/3		
(9) W —862 内越遺跡 (トレンチSK26西出土) 砂鉄製錬滓 ×100 外観写真 1/3		

図版73

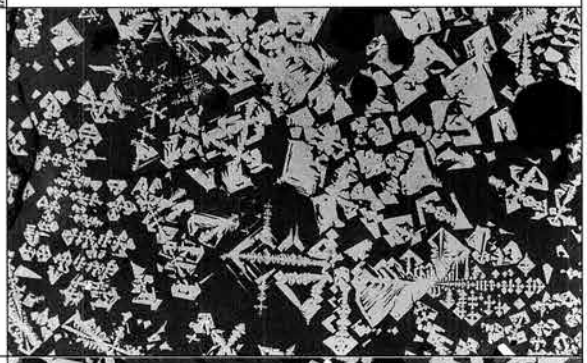
小鉄塊・鉄滓の顕微鏡組織

(10)W—863
内越遺跡
(SK21出土)
小鉄塊
外観写真 1/3

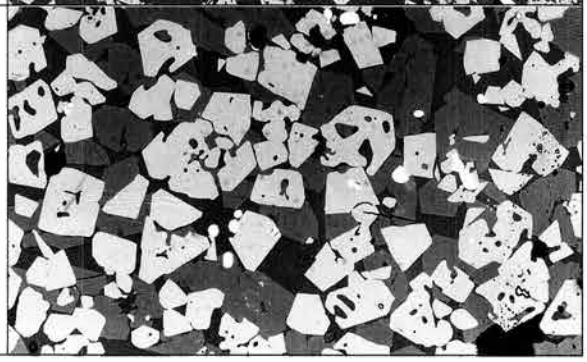
ピクラル腐食 初析セメンタイト・パーライト・フェライト ×100	研磨まま(腐食なし) 非金属介在物 ×400
ピクラル腐食 同 上 浸炭組織 ×400	ビッカース断面硬度 圧痕荷重 1 kg Hv = 265 ×200



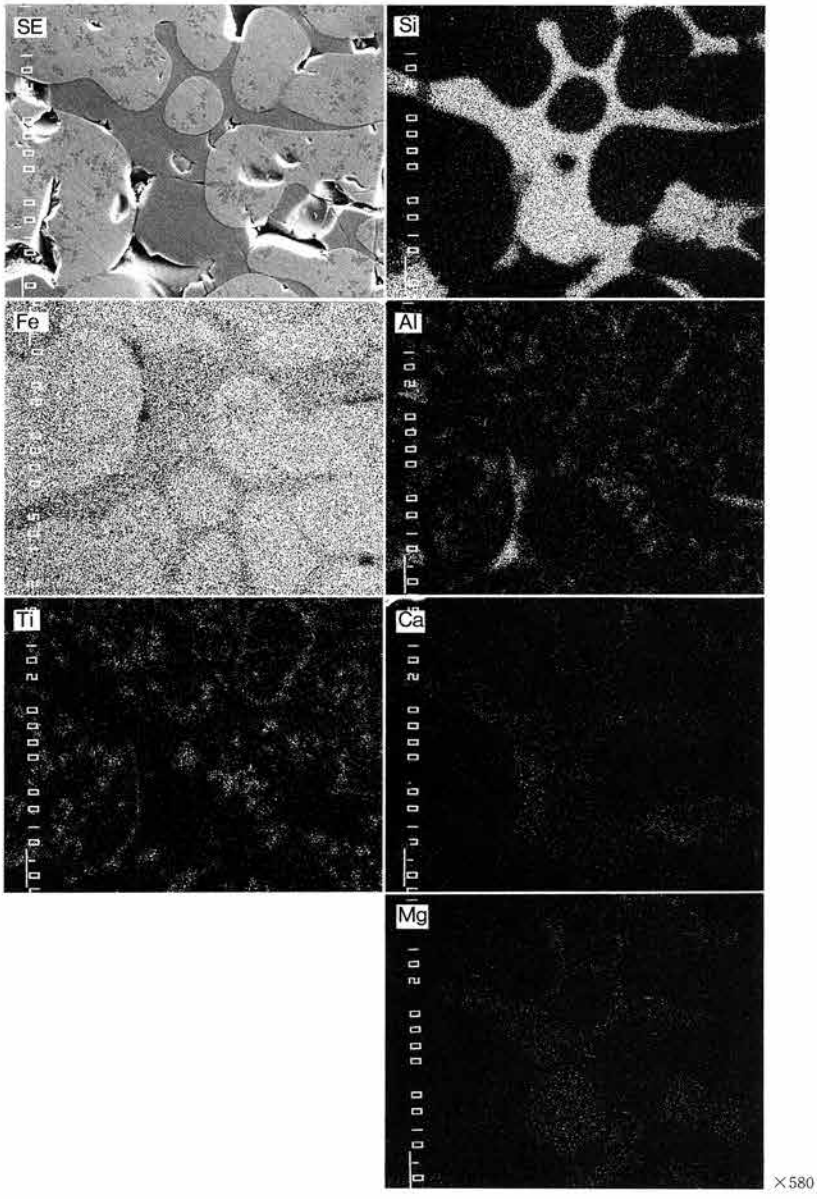
(11)W—864
内越遺跡
(SK21出土)
砂鉄製錬滓
×100
外観写真 1/3



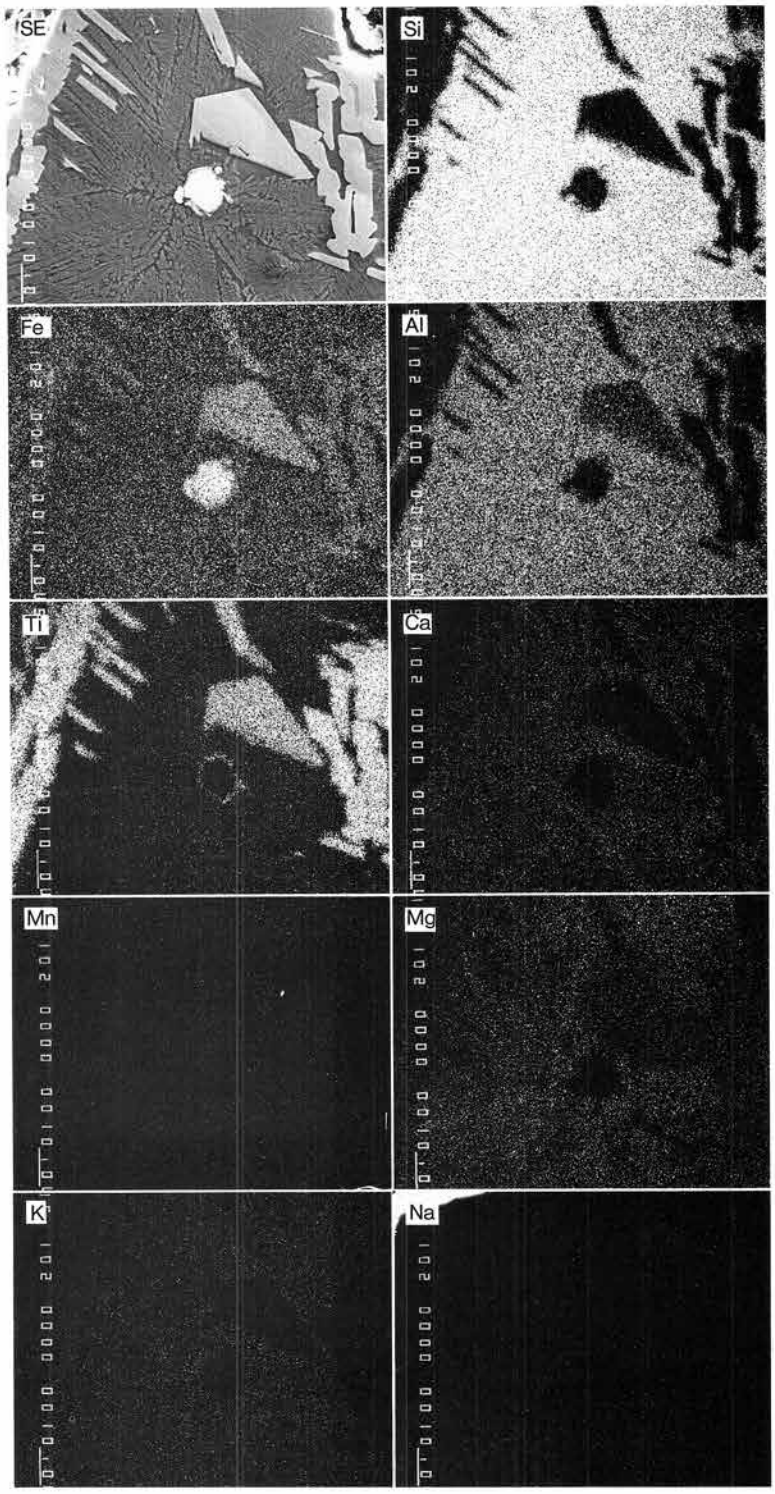
(12)W—865
内越遺跡
(SK21出土)
砂鉄製錬滓
×100
外観写真 1/3



鉄滓(Z—856)精錬鍛冶滓の特性X線像

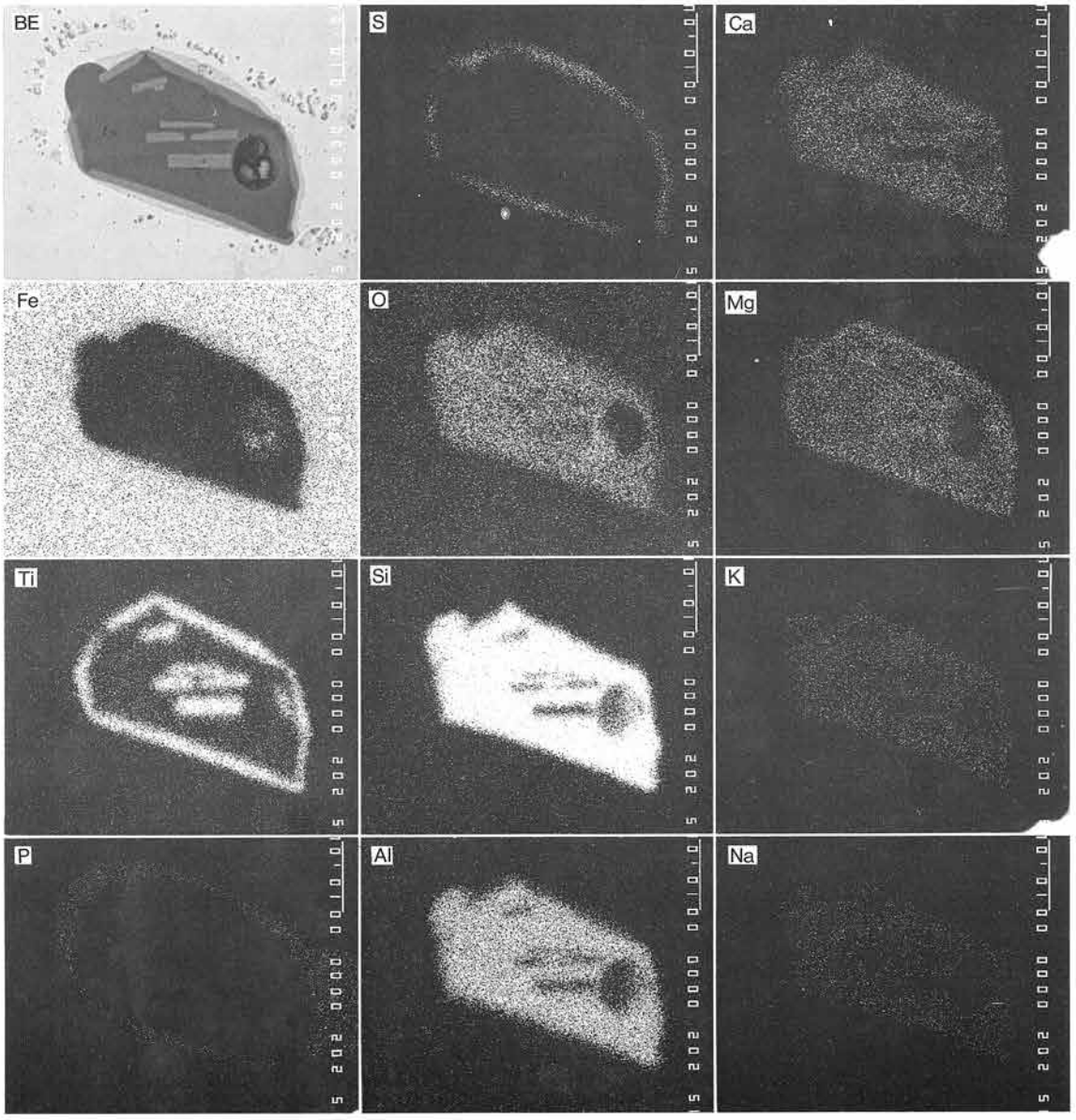


砂鉄製錬滓(Z—857)の特性X線像



×580

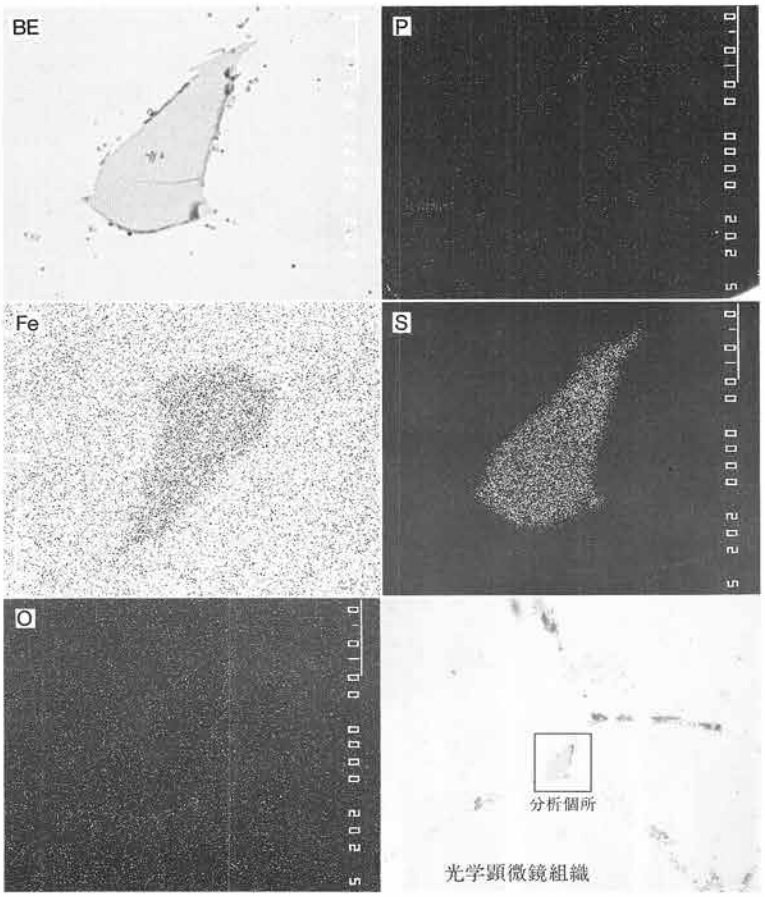
小鉄塊(W—863)中非金属介在物の特性X線像と定量分析結果(その1)チタン系



	SiO_2	CaO	FeO	F	Al_2O_3	K_2O	MnO	MgO	S	TiO_2	Na_2O	ZrO_2	Cr_2O_3	Total
1	56.103	7.745	2.268	0.000	18.681	3.343	0.299	4.286	0.000	3.551	0.000	0.551	0.000	96.82
2	2.078	0.370	2.355	0.000	4.048	0.148	0.188	8.592	0.000	85.714	0.055	0.000	0.000	103.54
3	0.100	0.039	81.177	0.066	0.118	0.073	0.259	0.259	29.779	2.308	0.048	0.000	0.405	114.60

	SiO_2	MnO	P_2O_5	S	Al_2O_3	FeO	CaO	MgO	Na_2O	F	ZrO_2	TiO_2	K_2O	Cr_2O_3	Total
5	0.082	0.000	20.645	0.000	0.000	121.033	0.000	0.002	0.000	0.110	0.919	0.524	0.026	0.008	143.30

小鉄塊(W—863)中非金属介在物の特性X線像と定量分析結果(その2)硫化物系



	SiO_2	CaO	FeO	F	Al_2O_3	K_2O	MnO	MgO	S	TiO_2	Na_2O	ZrO_2	Cr_2O_3	Total
4	0.000	0.000	90.434	0.018	0.000	0.045	0.115	0.000	30.664	0.000	0.000	0.000	0.042	121.33

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第48集

国道１１６号

埋蔵文化財調査報告書

三島郡出雲崎町番場遺跡

昭和62年10月25日印刷　　発行　新潟県教育委員会
昭和62年10月31日発行　　印刷　北越印刷株式会社
長岡市福住1丁目6—27
電話（0258）33—0306

本報告書は、本文・図版とも中性紙を使用しています。